

BETTOHNISI-SITE

# 別当西遺跡

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997

長坂町教育委員会

峠北土地改良事務所

山梨県長坂町

---

# 別当西遺跡

---

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997.3

長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所

# 序

山梨県と長野県にまたがる八ヶ岳の裾野には、縄文時代をはじめとする多くの遺跡があり、私たちの遠い祖先の生活や、今日に至る歴史を明らかにするための重要な史料として位置づけられています。長坂町は八ヶ岳南麓の中央にあり、古くは縄文時代草創期から近世に至るまでの遺跡がおよそ200ヶ所あまり確認されています。この遺跡密度の高さは県内でも有数であり、長坂町の大きな特色の一つとも言えます。

本書は1985年から翌1986年に、県営圃場整備事業にともない発掘調査された別当西遺跡の調査報告書であり、その主な内容は八ヶ岳南麓でも調査例が増加しつつある縄文時代後期の集落遺跡です。当時代に特徴的な敷石住居が良好な状態で出土しました。当遺跡の一部内容については、すでに概報や学術雑誌で報告・紹介されておりますが、本書により調査の全体像が明らかになるものと思います。

調査からすでに十年を過ぎましたが、教育や研究の場で本書を広く活用していただければ幸いです。最後になりましたが、調査から多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様、関係機関に深く感謝いたします。

1997年3月

長坂町教育委員会

教育長 小松清寿



## 例　　言

- 1 本書は山梨県北巨摩郡長坂町大八田字別當に所在する別當西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山梨県営圃場整備事業にともない、山梨県峡北土地改良事務所からの委託を受け、長坂町教育委員会が実施した。
- 3 本書の編集は小宮山隆（町教育委員会埋蔵文化財担当）が行なった。
- 4 遺物実測・図面作成・トレース・図面整理・表作成等に関わる業務については吉田光雄（調査補助員）、石川昭江、井出仁美、長田加代子、清水純代、橋本はるみ、日向登茂子、深沢憲子（整理作業員）が行なった。
- 5 出土石器の図化と報告は村松佳幸（山梨県埋蔵文化財センター）が行なった。
- 6 出土品および図面・写真は長坂町教育委員会が保管している。
- 7 本遺跡名は、1987年度の概報（長坂町教育委員会1987）においては、「別當遺跡」となっているが、遺跡台帳によると正しくは「別當西遺跡」である。

# 別当西遺跡

## Contents

### もくじ

### 本文

序	
例言	
第1章 調査の経過と概要	9
1 第一次調査（I区）に至る経緯	9
2 第二次調査（II区）に至る経緯	9
3 整理作業および報告書作成事業の経緯	10
4 遺跡の概要	10
5 調査組織	10
6 調査の方法と経過	11
第2章 遺跡をとりまく環境	14
1 自然環境	14
2 長坂町内の遺跡分布	14
第3章 I区の調査	16
1 1号住居址	16
2 2号住居址	16
3 3号住居址	17
4 4号住居址	17
5 5号住居址	18
6 6号住居址	18
7 7号住居址	18
8 8号住居址	19
9 1号土坑	19
10 2号土坑	19
11 3号土坑	19
12 4号土坑	19
13 5号土坑	20
14 遺構外出土遺物	20
第4章 II区の調査	67
1 1号住居址	67
2 2号住居址	67
3 1号土坑	68
4 2号土坑	68
5 3号土坑	68
6 4号土坑	68
7 遺構外出土遺物	68
第5章 調査のまとめ	104
1 堀之内式土器について	104
2 I区4号住居址出土の縄文時代後期末葉土器について	107
3 八ヶ岳南麓鳩川流域の縄文時代後期遺跡について	108

表紙写真 八ヶ岳の手前が別当西遺跡



## 挿図・表

図 1 長坂町の遺跡分布図	12	図48 I 区出土土器(9)	61
図 2 別当西遺跡の位置	15	図49 I 区出土土器(10)	62
図 3 基本層序	20	図50 I 区出土土器(11)	63
図 4 別当西遺跡 I 区全体図	21	図51 I 区出土土器(12)	64
図 5 I 区 1 号住居実測図／土器分布図	23	図52 I 区出土土器(13)	65
図 6 I 区 2 号住居実測図／土器分布図	24	図53 I 区出土土器(14)	66
図 7 I 区 3 号住居実測図／土器分布図	25	図54 別当西遺跡 II 区全体図	69
図 8 I 区 4 号住居実測図／土器分布図	26	図55 II 区 1 号住居実測図／土器分布図	71
図 9 I 区 5 号住居実測図	27	図56 II 区 2 号住居実測図／土器分布図	72
図10 I 区 5 号住居土器分布図	28	図57 II 区土坑実測図	73
図11 I 区 6 号住居実測図／土器分布図	29	図58 II 区 1 号住出土土器(1)	74
図12 I 区 7・8 号住居実測図	30	図59 II 区 1 号住出土土器(2)	75
図13 I 区土坑実測図	31	図60 II 区 2 号住出土土器(1)	75
図14 I 区 1 号住出土土器(1)	32	図61 II 区 2 号住出土土器(2)	76
図15 I 区 1 号住出土土器(2)	33	図62 II 区出土土器(1)	77
図16 I 区 2 号住出土土器(1)	34	図63 II 区出土土器(2)	78
図17 I 区 2 号住出土土器(2)	35	図64 II 区出土土器(3)	79
図18 I 区 3 号住出土土器(1)	35	図65 II 区出土土器(4)	80
図19 I 区 3 号住出土土器(2)	36	図66 II 区出土土器(5)	81
図20 I 区 3 号住出土土器(3)	37	図67 II 区出土土器(6)	82
図21 I 区 3 号住出土土器(4)	38	図68 II 区出土土器(7)	83
図22 I 区 3 号住出土土器(5)	39	図69 II 区出土土器(8)	84
図23 I 区 3 号住出土土器(6)	40	図70 II 区出土土器(9)	85
図24 I 区 3 号住出土土器(7)	41	図71 II 区出土土器(10)	86
図25 I 区 3 号住出土土器(8)	42	図72 II 区出土土器(11)	87
図26 I 区 4 号住出土土器(1)	42	図73 II 区出土土器(12)	88
図27 I 区 4 号住出土土器(2)	43	図74 II 区出土土器(13)	89
図28 I 区 5 号住出土土器(1)	44	図75 II 区出土土器(14)	90
図29 I 区 5 号住出土土器(2)	45	図76 II 区出土土器(15)	91
図30 I 区 5 号住出土土器(3)	46	図77 II 区出土土器(16)	92
図31 I 区 5 号住出土土器(4)	47	図78 II 区出土土器(17)	93
図32 I 区 5 号住出土土器(5)	48	図79 II 区出土土器(18)	94
図33 I 区 6 号住出土土器(1)	48	図80 II 区出土土器(19)	95
図34 I 区 6 号住出土土器(2)	49	図81 II 区出土土器(20)	96
図35 I 区 6 号住出土土器(3)	50	図82 II 区出土土器(21)	97
図36 I 区 6 号住出土土器(4)	51	図83 II 区出土土器(22)	98
図37 I 区 7 号住出土土器	51	図84 II 区出土土器(23)	99
図38 I 区 8 号住出土土器	52	図85 II 区出土土器(24)	100
図39 I 区土坑内出土土器	53	図86 II 区出土土器(25)	101
図40 I 区出土土器(1)	53	図87 I・II 区土製品	101
図41 I 区出土土器(2)	54	図88 I・II 区出土石器	102
図42 I 区出土土器(3)	55	図89 山梨県北西部北巨摩地域の堀之内式土器	105
図43 I 区出土土器(4)	56	図90 八ヶ岳南麓の後期末葉羽状沈線文土器	109
図44 I 区出土土器(5)	57	図91 主な遺跡調査区の位置と遺跡の継続	111
図45 I 区出土土器(6)	58		
図46 I 区出土土器(7)	59		
図47 I 区出土土器(8)	60		
表 1 長坂町の遺跡分布一覧		13	
表 2 別当西遺跡石器観察表			103

## 写真図版

図版 1	I 区 1 号住居址	113	図版23	II 区全景	118
図版 2	I 区 1 号住居址遺物出土状況	113	図版24	II 区 1 号住居址	118
図版 3	I 区 2 号住居址	113	図版25	II 区 1 号住居址(完掘)	118
図版 4	I 区 2 号住居址 炉	113	図版26	II 区 1 号住居址 炉	119
図版 5	I 区 3 号住居址	114	図版27	II 区 1 号住居址 炉	119
図版 6	I 区 3 号住居址 炉	114	図版28	II 区 2 号住居址	119
図版 7	I 区 4 号住居址 炉	114	図版29	II 区 2 号住居址(完掘)	119
図版 8	I 区 4 号住居址	114	図版30	II 区 2 号住居址 炉	120
図版 9	I 区 5 号住居址	115	図版31	II 区 2 号住居址 炉	120
図版10	I 区 5 号住居址遺物出土状況	115	図版32	II 区 4 号土坑	120
図版11	I 区 7・8 号住居址	115	図版33	II 区 1 号住炉体土器	120
図版12	I 区 1 号住出土土器	116	図版34	II 区 1 号住出土土器	121
図版13	I 区 1 号住出土土器	116	図版35	II 区 2 号住炉体土器	121
図版14	I 区 2 号住炉体土器	116	図版36	II 区 C 8 グリッド出土土器	121
図版15	I 区 2 号住出土土器	116	図版37	II 区一括土器	121
図版16	I 区 2 号住出土土器	116	図版38	I・II 区出土土製円盤 他	121
図版17	I 区 3 号住炉体土器	117	図版39	I・II 区出土石器	122
図版18	I 区 3 号住出土土器	117	図版40	I 区出土石器	122
図版19	I 区 4 号住出土土器	117	図版41	I 区出土石器	122
図版20	I 区 4 号住出土土器	117	図版42	I 区出土石器	122
図版21	I 区 5 号住出土土器	117	図版43	I 区出土石器	122
図版22	I 区 8 号住出土土器	117			

# 第1章 調査の経過と概要

## 1 第一次調査（I 区）に至る経緯

1979（昭和54）年度から始まった圃場整備事業は、水田利用再編対策の推進、作物体系の確立、農地の集積による機械化と省力化等、農業生産基盤の確立をもって農業振興を図ることを目的とした。県営圃場整備事業は1983（昭和58）年度から実施され、長坂町地内では1994（平成6）年度にはほぼ完了している。

1985（昭和60）年度は大和田地区の36,000m<sup>2</sup>が計画され、1984（昭和59）年12月、長坂町教育委員会が現地踏査ならびに試掘調査を実施した。その結果、縄文時代後期を中心とする時代の土器片と住居址などの遺構が確認された。この結果により山梨県教育庁文化課（現、学術文化財課）、峡北土地改良事務所と協議を行ない、本調査を実施することになった。調査対象面積は3,951m<sup>2</sup>、調査主体は長坂町教育委員会があつた。

1985（昭和60）年1月17日、文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、同年4月18日交付の決定を受ける。同年7月24日、文化庁長官に文化財保存事業費補助金交付申請書を提出する。また、同年6月14日峡北土地改良事務所と長坂町の間で、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定書を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、1985（昭和60）年10月21日から着手し、12月13日に終了した。

本報告書ではこの第一次調査区をI区とする。

## 2 第二次調査（II 区）に至る経緯

第二次調査についてはすでに調査の概要が刊行されているので（長坂町教育委員会1987『深草遺跡 別当十三塚遺跡 別当遺跡(第2次) 粧屋敷遺跡』）、ここから調査に至るまでの経緯について引用しておく。

1986（昭和61）年度県営圃場整備事業は、第1工区（白井沢地区）2.1ha、第2工区（大和田地区）2.0ha、第6工区（夏秋地区）4.0haが計画され、1980（昭和60）年12月、長坂町教育委員会が現地踏査を行った結果、第1工区粧屋敷遺跡で縄文後期の土器片を中心とした散布が認められた。第2工区では、前年度調査された小和田北遺跡の北側に深草遺跡が隣接し、別当西遺跡は同一尾根上の南側へと集落がのびている可能性から、別当西遺跡2区（本書ではII区）として継続的な調査を必要とした。この後、第2工区に所在する原田山が埋土として使用されることになり、計画上全山が削平されることになった。この原田山には、別当十三塚遺跡があり、南北に連なる11基の塚を確認した。

以上の結果より、県教育庁文化課（現、学術文化財課）、峡北土地改良事務所と協議を行い、本調査を実施する運びとなり、4ヶ所全ての調査対象面積は14,300m<sup>2</sup>、調査主体は長坂町教育委員会があつた。

1986（昭和61）年1月7日、文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、同年4月18日交付内定を受ける。同年7月10日補助金交付申請書を提出する。また、同年6月2日峡北土地改良事務所と長坂町との間で、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、1986（昭和61）年7月1日に開始し、10月18日に終了した。別当西遺跡の調査は対象面積4,118m<sup>2</sup>で同年10月2日に終了した。

本報告書ではこの第二次調査区をⅡ区とする。

### 3 整理作業および報告書作成事業の経緯

別当西遺跡は本調査からすでに10年が経過するが、第二次調査分の一部概要が報告されているのみであった。本調査以後、町教育委員会では整理作業に取り組みつつも、県営圃場整備事業など大規模開発に伴う発掘調査が毎年度実施されたため、整理作業は一向に進まなかった。また1992（平成4）年からの二年間、町教育委員会に埋蔵文化財専門職員が未設置であったこともあり、今日に至るまで別当遺跡の図面と遺物の整理作業は、土器片への注記作業をもって中断していた。

1995（平成7）年、県学術文化課（現、学術文化財課）は、別当西遺跡のような未報告遺跡を抱える市町村に対して、早急な報告書刊行を促す通知を行った。これにより、町教育委員会では開発事業主体の峡北土地改良事務所と協議を行ない、1996（平成8）年に県営圃場整備事業に関わる別当西遺跡ほか未報告遺跡の整理作業および報告書作成事業について負担協定を締結した。同年4月から翌1997（平成9）年3月にかけてこれら事業を実施し、別当西遺跡分についてここに報告を行う運びになった。

### 4 遺跡の概要

別当西遺跡の調査はⅠ区3,951m<sup>2</sup>、Ⅱ区4,118m<sup>2</sup>からなり、鳩川左岸にそった南北にのびる低尾根を調査区とした。

主な遺構を列挙すると、Ⅰ区では8件の住居址と5基の土坑がある。このうち住居址は縄文時代後期末葉の4号住居址を除いて、他の7件は後期前葉堀之内式期のものである。Ⅱ区では後期前葉堀之内式期の住居址2件と、土坑4基が検出された。土坑の1基は中近世と思われる墓で人骨が出土した。

出土遺物は縄文時代中期前葉から後期末葉にかけての土器・石器類がある。土器は主に縄文時代中期終末から後期前葉のものが多い。

### 5 調査組織

第1次調査（Ⅰ区）

調査主体 長坂町教育委員会

調査担当 鈴木 治彦

事務局員 坂本 正輝

## 第2次調査（Ⅱ区）

調査主体 長坂町教育委員会

調査担当 小田澤佳之

調査員 桜井 真貴

事務局員 坂本 正輝

平島 長生

### 報告書刊行事業

事業主体 長坂町教育委員会

調査担当 小宮山 隆（長坂町教育委員会主事）

事務局 小松 清寿（長坂町教育委員会教育長）

植松 忠（長坂町教育委員会教育課長）

輿石 君夫（長坂町教育委員会生涯学習係長）

## 6 調査の方法と経過

調査方法は重機による表土剥ぎの後、磁北を基準とした10×10mのグリッドを設定し、ジョレンによる精査を行い遺構を検出した。なお、国家座標等に基づく基準点設置はなされていない。

第一次現場調査日誌抄録 1985(昭和60)年

10月21日	土層確認
10月22日	重機による表土剥ぎ開始
11月4日	作業員による表土剥ぎ、遺構確認調査開始
11月13日	1号土坑調査
11月14日	2号土坑調査
11月15日	3号土坑調査
11月18日	1号住居址調査
11月20日	2号住居址調査
11月22日	3号住居址調査
11月25日	4号住居址調査
11月29日	5・6・7・8号各住居址、土坑等調査
12月9日	調査終了
12月13日	現場機材撤収完了

第二次現場調査日誌抄録 1986(昭和61)年

7月18日	重機による表土剥ぎ開始
7月19日	作業員による表土剥ぎ、遺構確認調査開始
8月25日	2号住居址調査
9月1日	1号土坑調査
9月2日	1号住居址調査
9月4日	2号土坑調査
9月10日	1・2号各住居址レベリング、写真撮影
9月12日	1・2号各住居址炉体土器調査
9月20日	1・2号各住居址敷石下の堀り方調査
9月21日	調査区全測図作成
9月28日	4号土坑内で人骨確認。人骨下から古銭出土
9月30日	4号土坑人骨取り上げ
10月2日	調査終了。現場機材撤収



図1 長坂町の遺跡分布図

表1 長坂町の遺跡分布一覧

(縄=縄文時代 弥=弥生時代 古=古墳時代 平=平安時代 中=中世)

001 耳塚 中	070 石原田南遺跡 縄 平 中	139 新居遺跡 縄
002 法性寺前遺跡 縄 中	071 塚原遺跡 縄 平	140 相吉氏屋敷跡 中
003 信玄原遺跡 縄	072 越中久保遺跡 縄 平	141 相吉遺跡 中
004 小荒間古戦場跡	073 久保遺跡 縄	142 上松氏屋敷跡 平
005 桜畠遺跡 近	074 房屋敷遺跡 縄	143 下屋敷遺跡 縄
006 小泉遺跡 近	075 池の平遺跡 縄	144 清水頭遺跡 縄 古 平
007 菅間遺跡 縄	076 東蕪遺跡 3 平	145 向原遺跡 平
008 桜畠南遺跡 縄	077 東蕪遺跡 2 平	146 三つ墓古墳 2 消滅
009 粂屋敷東遺跡 縄	078 東蕪遺跡 4 縄 平	147 原町農業高校前遺跡 縄
010 粂屋敷北遺跡 縄	079 東蕪遺跡 1 縄 平	148 三つ墓古墳 3 消滅
011 粀屋敷遺跡 縄	080 和手山東遺跡 中	149 三つ墓古墳 1 古
012 牛久保遺跡 縄 弥	081 小尾平遺跡 旧石 縄	150 池之平昭和堤北遺跡 縄
013 牛久保南遺跡 縄	082 間の原遺跡 縄	151 池之平 A 遺跡 縄 平
014 沢入遺跡 縄 中	083 西蕪東遺跡 平	152 向井丹下屋敷跡 中
015 宇干平遺跡 縄 中	084 西蕪遺跡 縄	153 池之平 B 遺跡 縄
016 東下屋敷遺跡 縄	085 西蕪南遺跡 縄 平	154 上日野遺跡 縄 平
017 西下屋敷遺跡 縄	086 和手遺跡 縄 平	155 田中氏屋敷跡 中
018 新田森遺跡 縄	087 腰巻遺跡 縄	156 上日野 A 遺跡 縄 平
019 西下屋敷南遺跡 縄	088 城山上北遺跡 縄 平	157 上日野 B 遺跡 縄 平
020 横手遺跡 縄 中	089 城山上遺跡 縄	158 上日野 C 遺跡 縄 平
021 神之原遺跡 縄	090 中丸城跡 中	159 姥久保遺跡 平 中
022 屋敷附遺跡 縄 中	091 居久保遺跡 縄 平	160 日野原遺跡 平
023 内城遺跡 中	092 清春白樺美術館南遺跡 縄	161 上日野原遺跡 縄 平
024 十郎林遺跡 縄	093 細久保遺跡 縄	162 富岡遺跡 近
025 阿原遺跡 平	094 後平遺跡 縄 平	163 橫針遺跡 弥 古
026 中尾根遺跡 縄	095 狐平北遺跡 縄 平	164 大林遺跡 縄
027 手白尾遺跡 縄	096 狐平遺跡 縄 平	165 中込遺跡 縄
028 夫婦石遺跡 縄	097 大平遺跡 縄 平	166 手白尾東遺跡 縄
029 横山 1 遺跡 縄	098 下鳥久保遺跡 縄	167 西屋敷遺跡 古
030 横山 2 遺跡 縄	099 鳥久保遺跡 縄	168 上町南遺跡 縄
031 横山平南遺跡 縄 平	100 高松遺跡 縄	169 龍角西遺跡 縄 古 平
032 葛原北遺跡 縄 平	101 上町遺跡 縄 平	170 龍角遺跡 古 平
033 上フノリ平北遺跡 縄	102 酒呑場遺跡 縄 古 平	171 長坂上条遺跡 縄 平
034 上フノリ平遺跡 縄	103 東村 A 遺跡 縄 平	172 西久保遺跡 縄
035 上フノリ平西遺跡 縄	104 東村 B 遺跡 古 平	173 新宿区健康村遺跡 縄 平
036 下フノリ平北遺跡 縄	105 中村遺跡 古 平	174 長坂下条・藤塚
037 葛原遺跡 縄 弥	106 錆田遺跡 平	175 和田遺跡 弥 平
038 下フノリ平遺跡 縄 中	107 西村遺跡 古 平	176 古屋敷遺跡 縄
039 下フノリ平南遺跡 平	108 中反遺跡 縄 平	177 泥里遺跡 縄
040 別当遺跡 縄	109 中丸・藤塚	178 中込北遺跡 縄
041 別当西遺跡 縄	110 長坂氏屋敷 中	179 渋沢 上町遺跡 縄
042 別当十三塚	111 白山神社前遺跡 平	180 下屋敷北遺跡 縄 平
043 南新居北遺跡 中	112 上ノ屋敷遺跡 縄 平	181 柳坪南遺跡 平
044 深草城址	113 大々神十三塚 中	182 柳坪北遺跡 縄 弥 平
045 小和田遺跡 縄 平	114 大々神 A 遺跡 平	183 境原遺跡 弥 平
046 南新居屋敷	115 大々神 B 遺跡 古 平	184 北村北遺跡 縄 弥 平
047 南新居遺跡 平	116 治郎田遺跡 古 平	185 酒呑場東遺跡 縄 弥 平
048 南新居西遺跡 平	117 頭無 A 遺跡 平	186 山本遺跡 縄
049 小和田館跡	118 横木遺跡 弥 古	187 北村東遺跡 縄 古
050 米山遺跡 縄	119 塚川・柳坪遺跡 縄	188 大久保北遺跡 縄 中
051 米山東遺跡 平	120 頭無遺跡(二本木遺跡) 縄 古	189 天王塚古墳 古墳
052 塚田遺跡 平	121 新田遺跡 縄	190 池之平北遺跡 縄 平
053 窪田遺跡 縄 古 平	122 塚之越遺跡 中	191 清水頭北遺跡 縄 平
054 弥右衛門塚 1	123 原町北遺跡 平 中	192 宇干平の土壙
055 弥右衛門塚 2	124 原町遺跡 平	193 成岡 藤塚
056 渋田北遺跡 平	125 上久通北遺跡 縄 平	194 馬越場遺跡
057 渋田遺跡 平	126 塚川の土壙 中	195 紺屋遺跡 平
058 東原の土壙	127 下村遺跡	196 治郎田北遺跡 縄
059 東原遺跡 中	128 塚川十三塚群	197 竹原遺跡 縄
060 柳新居遺跡 縄 古 平	129 宮久保遺跡 縄	
061 原田遺跡 縄 平	130 下村南遺跡 縄	
062 柳坪 A 遺跡 縄 古 平	131 泥里西遺跡 縄 平	
063 柳坪 B 遺跡 縄 古 平	132 勝見遺跡 縄 平	
064 小屋敷遺跡 縄 平	133 競馬場遺跡 縄 平	
065 久保地遺跡 縄	134 寺前遺跡 縄 平 中	
066 成岡遺跡 縄 弥 平	135 上久通遺跡 縄	
067 成岡新田遺跡 弥 平	136 反田遺跡 縄 平 中	
068 曲田遺跡 平	137 三井氏屋敷跡 中	
069 石原田北遺跡 縄 平	138 北村遺跡 弥 古	

# 第2章 遺跡をとりまく環境

## 1 自然環境

別当西遺跡は、ほぼ中心が北緯35度50分41秒、東経138度22分58秒の、北巨摩郡長坂町大八田字別當に位置する。八ヶ岳連峰南部の権現岳（2,699m）南麓の標高770m付近にあり、韋崎泥流によって形成された広大な裾野台地南斜面のほぼ中央に立地する。この韋崎泥流は洪積世末期に古権現岳の山体崩壊によって発生したもので、甲府盆地にまで流れ込んだ大規模な泥流である。現在は東西の塩川と釜無川に浸食され、韋崎市中心部を南側の頂点とする平面逆三角形の台地となり、その段丘崖は数十メートルから、ところによつては百メートルを越える比高がある。

八ヶ岳南麓には豊富な湧出量をもつ湧水が点在し、これを水源地とする多くの小河川が南流している。小河川は合流するにしたがってその浸食力を増し、長坂町域においては標高800～750m付近で小谷と低尾根を東西に連続的に形成するようになる。別当西遺跡はこのような低尾根上から遺跡のすぐ西側を流れる鳩川に挟まれた緩斜面に立地する。遺構・遺物の広がりからみて、遺跡の西側は鳩川により浸食され消滅した可能性が高い。標高750～650m付近に下るとさらに河川浸食力は増大し、尾根と谷が明瞭に区分けできるようになり、尾根部分は高燥な台地へ、谷部分は日当たりの悪い急傾斜地へと変貌しながら、釜無川や塩川へと合流する。遺跡付近の気候は典型的な内陸型気候で、気温の日較差・年較差が大きく、年間降水量はおよそ1,100mmと少ない。高海拔の割に冬季の積雪量は少ないが、多い年では年に数回、30～40cmの積雪量が観測される。

## 2 長坂町内の遺跡分布

別当西遺跡の周囲には非常に多くの遺跡が分布する。縄文時代では柳新居遺跡で中期前半の集落跡が、柳坪A・B両遺跡では中期後半の集落跡がそれぞれ確認されている。小屋敷遺跡では中期終末を主とした土坑群が確認され、加曾利E式後半土器が多数出土した。大八田原田遺跡では別当西遺跡とほぼ同時期の後期前半の住居址が検出されている。北接の大泉村では、前期後半の天神遺跡、中期後半から後期中葉の姥神遺跡、後期から晩期の国史跡の金生遺跡などがあり、東接の高根町では、中期から後期前半の社口遺跡、後期の青木遺跡、後期から晩期の石堂B遺跡などがあり、八ヶ岳南麓さらに山梨県域を代表する縄文時代の遺跡群が分布している。

弥生時代から古墳時代の遺跡は少ないものの、柳坪A遺跡で弥生中期初頭の住居址と古墳時代前期の集落、境原遺跡で弥生時代後半土器の出土例があり、今後に遺跡数の増加が予想される。平安時代になると遺跡数は急増し、大八田地区の集落遺跡調査事例だけでも南新居西遺跡・小和田館跡・原田遺跡・柳坪A・B遺跡・柳坪南遺跡・境原遺跡が挙げられる。中世・戦国時代では国人領主層の館とそれをとりまく集落が確認された小和田館跡や、堀と土塁が良好に遺存する長坂町指定文化財深草城址がある。

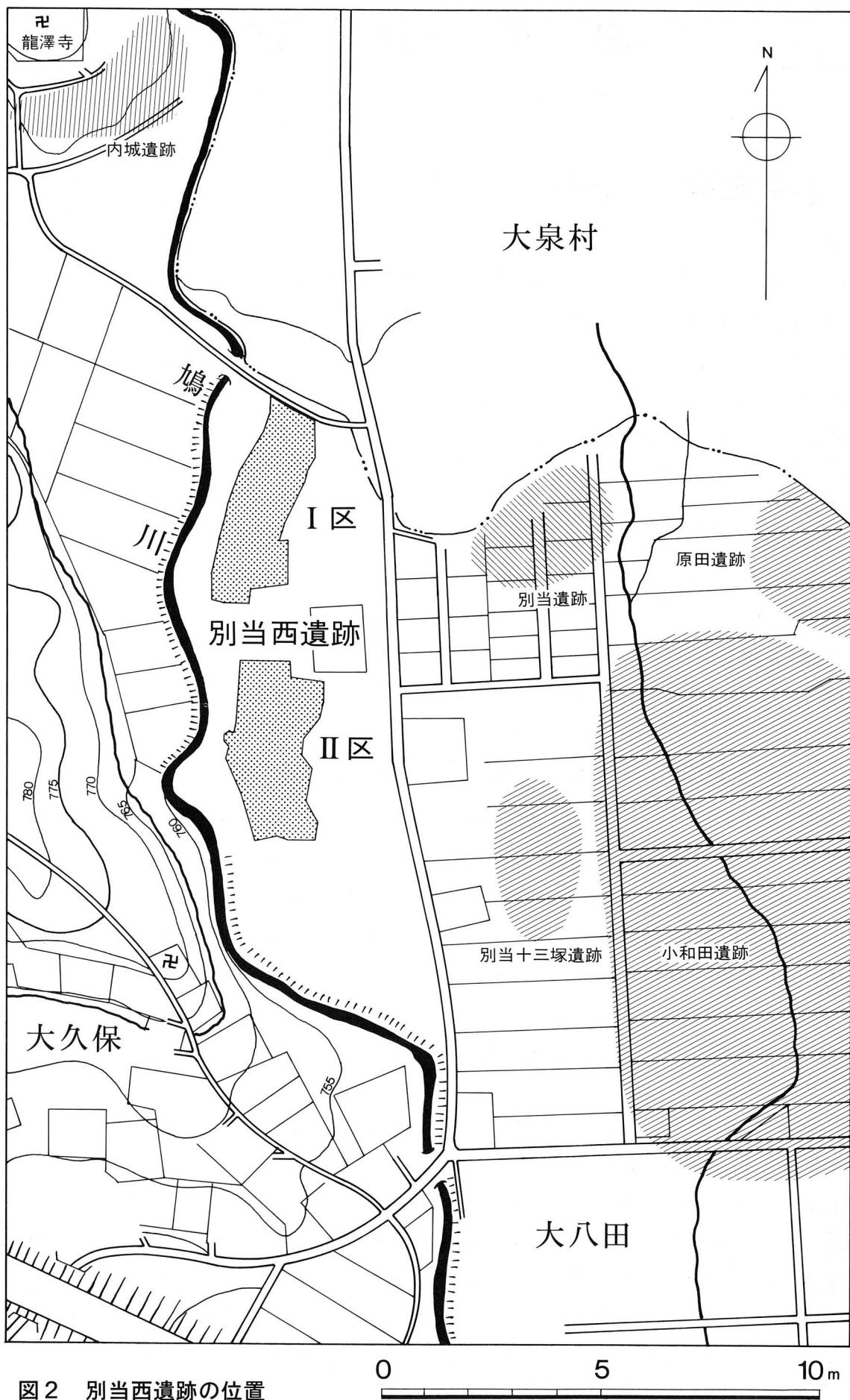


図2 別当西遺跡の位置

## 第3章 I 区の調査

### 1 1号住居址（図5、14、15 図版1、2、12、13）

位置 B4・B5グリッド。調査区北東端の南斜面。

形状・規模 円形竪穴住居。長軸5.3m、短軸（推定）5.0m。

覆土 30～40cmほどの厚さで堆積。少量のカーボンを含む。

炉 なし。

柱穴 不明。

遺物出土状況 住居北西部を中心に床面からやや浮いた深さでの出土量が多い。住居西側から口縁を除きほぼ完形の堀之内式の鉢形土器が出土。また覆土中から口縁部と胴部上半を中心とした曾利式新段階の深鉢などがある。

遺物：土器 図14-1は口縁部に楕円文、胴部にハの字文とともに沈線で施した曾利式の深鉢である。口縁の一部は3号住居址覆土中から出土した。図14-2は胴部文様に下端開放の懸垂沈線文を施した鉢形土器である。その他に中期後半から後期前半にかけての土器片がある。

遺物：石器 石鏃1点（詳細不明）、黒曜石2点（詳細不明）。

推定時期 図14-2から堀之内1式新段階から同2式古段階とするが確定できない。

### 2 2号住居址（図6、16、17 図版3、4、14、15、16）

位置 E8・F8グリッド。調査区ほぼ中央の西寄り南斜面。

形状・規模 （柄鏡形）敷石住居。主軸7.5m、短軸（推定）7.0m。主軸の方向はN-43°-E。炉をほぼ中心にして4.1m×3.8mの円形敷石と、その外側を取り囲む形で、一辺5.5mの方形配石からなる二重構造。内側の円形配石と炉から出入口部の南西方向にのびる配石との組み合わせが柄鏡形になる。住居西側は鳩川の浸食により破壊されている。

覆土 20～30cmほど堆積している。

炉 60cm×70cmの方形石囲い炉。炉体土器を伴う。被熱あり。

柱穴 不明。

遺物出土状況 敷石床面上、およびやや浮いた深さから出土した。堀之内2式の炉体土器の他に、中期後半の深鉢、曾利式古段階の土器片などがある。

遺物：土器 図16-1は炉体土器で、胴部に充填縄文と沈線による菱形文が施される堀之内2式古段階の深鉢である。図16-2は縄文地文で沈線垂下文のなかに斜行沈線や蛇行文が施された深鉢である。図16-3はR L縄文を地文として口縁部に横位隆帶文、胴部に沈線による枠状文を施した曾利式に類する深鉢である。

図16-13・14などともに覆土への混入品と考えられるが、中期後半の住居址が付近に存在した可能性もある。

遺物：石器 石鏃1点（詳細不明）、石皿1点（安山岩13.0kg）、黒曜石28点（詳細不明）。

推定時期 炉体土器から堀之内2式古段階。

### 3 3号住居址（図7、18~25 図版5、6、17、18）

位置 E10・F10グリッド。調査区ほぼ中央の南斜面。

形状・規模 敷石住居。長軸7.0m、短軸5.8m。炉を中心に敷石があるが、敷石のレベルは一様でない。

西側に若干の張り出しが認められる。炉の中心からこの張り出しを主軸とするならばN-84°-Eになる。

覆土 20~30cmほど堆積している。全体にローム粒子とカーボンを少量含んでいる。

炉 80cm×40cmの方形石囲炉。炉体土器を伴う。焼土や炭化物は認められず、被熱を受けていない。

柱穴 不明。

遺物出土状況 住居全面から土器片が多数出土。炉体土器の他に、後期前葉の大型深鉢などがある。

遺物：土器 図18-1は炉体土器で、無文で胴部から口縁部に向かって朝顔形に開く深鉢である。この器形から判断するならば堀之内2式に位置づけられる。図18-2は胴部文様に下端開放の懸垂弧線文を施した大型の深鉢である。ただし図上復元よりも頸部は短いかもしれない。その他、堀之内式土器片とともに称名寺式や加曾利E3~4式、曾利式土器片が出土しているが混入品であろう。

遺物：石器 丸石3点（詳細不明）、磨石2点（詳細不明）、磨製石斧1点（詳細不明）、黒曜石25点（詳細不明）、チャート2点（詳細不明）。

推定時期 炉体土器から堀之内2式古段階。

### 4 4号住居址（図8、26、27 図版7、8、19、20）

位置 C4・D4グリッド。調査区北端の南南西斜面。

形状・規模 やや歪んだ円形竪穴住居。長軸5.6m、短軸5.5m。炉側を奥壁とするならば主軸はN-32°-W。ただしプラン北東側は完掘されていない。

覆土 約15cm堆積している。ローム粒子とカーボンが少量含まれる。床面および覆土下層に礫が多く、部分的な敷石床面があった可能性も否定できない。住居北西側の集石は粉碎された平らな面をもつ角柱状の礫で、これも床面敷石材の一部であったかもしれない。

炉 70cm×50cmの方形石囲炉。炉内にはローム粒子、焼土、カーボンを少量含む。

柱穴 1~3号および5~7号ピットの6本は主柱穴の可能性がある。

遺物出土状況 本調査区のなかでは遺物出土量が少ない。7号ピット覆土中から後期末葉の深鉢1個体が出土した他、ほぼ床面上から同じく後期末葉の深鉢上半部が出土した。

遺物：土器 図26-1は7号ピット覆土中から出土した深鉢である。口縁に4単位の瘤状の突起をもち、3本の平行沈線が施される。胴部中央の括れ部分にも2本の平行沈線があり、これと口縁部平行沈線の間に横位の羽状沈線文が充填される。図26-2もほぼ同様の深鉢であるが、口縁の突起に縦の刻み、口縁屈曲部に列点が施される。これは図26-12と同一個体である。これらは曾谷式・高井東式または安行式に併行し、当地域では後期終末段階に位置づけられる。

遺物：石器 石皿2点（安山岩3.5kg、安山岩3.6kg）、黒曜石5点（詳細不明）。

推定時期 図26-1・2から後期末葉。

## 5 5号住居址（図9、10、28～32 図版9、10、21）

位置 F10・F11グリッド。調査区ほぼ中央、3号住居址南側の南斜面。

形状・規模 円形竪穴住居。長軸6.9m、短軸5.9m。

覆土 15cmほど堆積。ローム粒子とカーボンを少量含む。

炉 なし。

柱穴 1・3・5・6号の各ピットは柱穴と思われる。

遺物出土状況 住居北側の床面上から堀之内1式の鉢上半部が押しつぶされた状態で出土した。

遺物：土器 図28-1は住居北側から出土した堀之内1式の深鉢である。口縁部文様体をもち、頸部に列点帶を横位に施す。胴部は沈線による縦位区画の枠状内に蛇行懸垂文が施される。図28-2・3も堀之内1式であろう。図28-7は加曾利B1式、図29-87など加曾利E3～同4式も含まれる。

遺物：石器 打製石斧1点（ホルンフェルス）、大型粗製石匙1点（ホルンフェルス）、黒曜石2点（詳細不明）。他に土製円盤1点。

推定時期 図28-1より堀之内1式新段階とするが確定できない。

## 6 6号住居址（図11、33～36）

位置 E9グリッド。調査区ほぼ中央の南斜面。

形状・規模 円形竪穴住居。長軸7.2m、短軸6.5m。

覆土 20～30cmほど堆積。ローム粒子とカーボンを少量含む。

炉 なし。

柱穴 ピットの配置から5ないし6本の主柱穴と思われる。

遺物出土状況 後期前葉の土器片を主体にして、曾利式新段階の土器なども出土している。

遺物：土器 図33-1は住居東側から出土し、口縁下に刻み目隆帯を、胴部に充填繩文と沈線による菱形文を施し、朝顔形に口縁が開く堀之内2式の深鉢である。

遺物：石器 石2点（黒曜石）、磨製石斧1点（ホルンフェルス）、石皿1点（輝石安山岩1.25kg）。黒曜石19点（詳細不明）。

推定時期 後期前葉か。

## 7 7号住居址（図12、37 図版11）

位置 D5・D6グリッド。調査区北寄りの南南西斜面。8号住居址に切られる。

形状・規模 円形竪穴住居。長軸（推定）4.0m、短軸3.5m。

覆土 20cmほど堆積。ローム粒子、カーボンを少量含む。

炉 なし。

柱穴 1～4号ピットおよび5または6号ピットが主柱穴と思われる。

遺物出土状況 土器片が20点弱と極めて少ない。

遺物：土器 後期前葉と思われる無文土器片を主体にするが、曾利式胴部片もある。

遺物：石器 なし。

推定時期 8号住居址に切られることから後期前葉以前。

## 8 8号住居址（図12、38 図版11、22）

位置 D 6 グリッド。調査区北寄りの南南西斜面。7号住居址を切る。

形状・規模 円形堅穴住居。長軸5.0m、短軸4.1m。

覆土 40cmほど堆積。ローム粒子、カーボン、焼土を少量含む。

炉 なし。

柱穴 不明。

遺物出土状況 住居中央やや南側から深鉢1個体が口縁部以外ほぼ完形で出土した。

遺物：土器 図38-1は住居中央やや南側の床面上から出土し、沈線による2対の渦巻文を不規則な沈線で横位に連結する文様構成をとる。堀之内1式に位置づけられようか。神奈川県平塚市王子ノ台遺跡M-18グリッド埋甕（東海大学校地内遺跡調査団1991『東海大学校地内遺跡調査団報告』2 29頁）に近いが、本住居出土の方が文様の割り付け方は粗雑である。図38-11・12は胎土、焼成とともに良好につくられた精製品で、注口土器の胴部と思われる。

遺物：石器 なし。

推定時期 図38-1から堀之内1式段階。

## 9 1号土坑（図13）

（位置）E 14 グリッド。（形状・規模）円形すり鉢状。長径70cm、短径60cm、確認面からの深さ40cm。（覆土）ローム粒子、カーボンを少量含む。（遺物）なし。（推定時期）不明。

## 10 2号土坑（図13、39）

（位置）E 13・E 14 グリッド。（形状・規模）ゆがんだ楕円形、たらい状。長径140cm、短径60cm、確認面からの深さ60cm。（覆土）ローム粒子、カーボンを少量含む。（遺物）縄文中期末、後期前葉などの土器片5点が覆土中から出土。（推定時期）縄文後期前葉か。

## 11 3号土坑（図13、39）

（位置）E 14・F 14 グリッド。（形状・規模）楕円形、たらい状。長径160cm、短径110cm、確認面からの深さ25cm。（覆土）ローム粒子、カーボンを少量含む。（遺物）なし。（推定時期）不明。

## 12 4号土坑（図13、39）

（位置）G 12 グリッド。（形状・規模）楕円形、たらい状。長径130cm、短径90cm、確認面からの深さ30cm。（覆土）ローム粒子、カーボンを少量含む。（遺物）無文の土器片など9点。（推定時期）縄文後期前葉か。

## 13 5号土坑（図13、39）

（位置）D10グリッド。（形状・規模）円形、たらい状。長径90cm、短径75cm、確認面からの深さ15cm。

（覆土）ローム粒子、灰、カーボンを少量含む。（遺物）縄文時代土器片2点。（推定時期）不明。

## 14 遺構外出土遺物（図40～53）

本報告において土器片全てを図示することはできず、口縁部および有文のものを主に抽出した。無文の胴部片についてはおよそ半数を図示した。

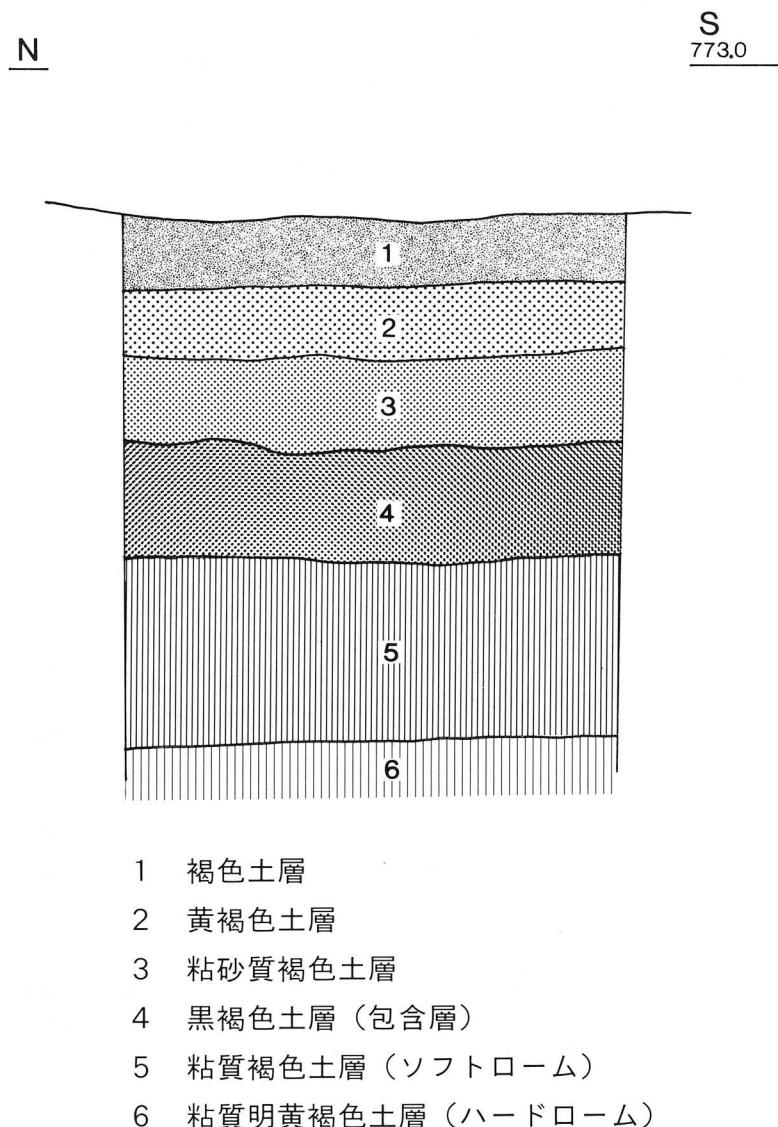


図3 基本層序

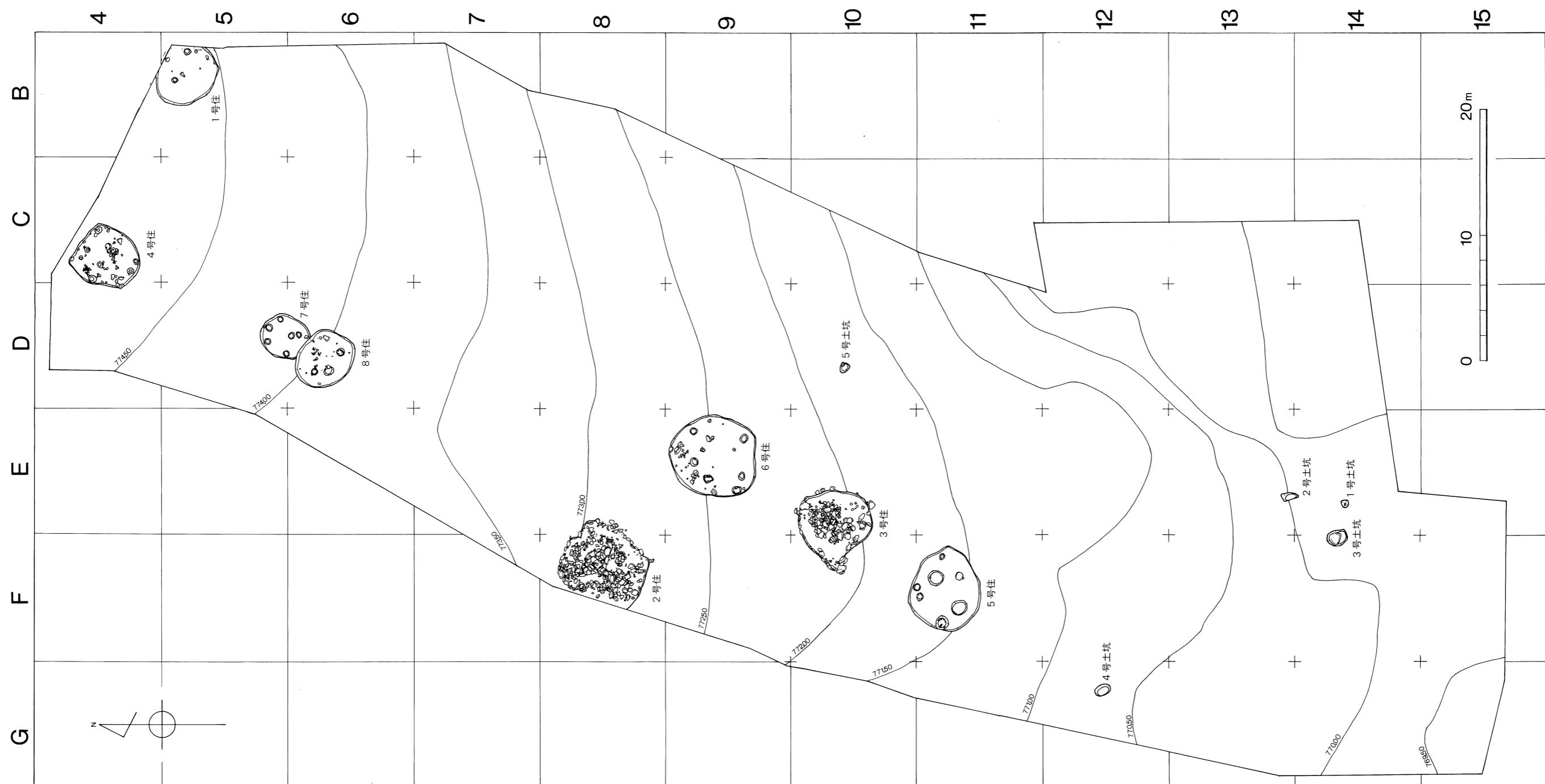


図4 別当西遺跡I区全体図

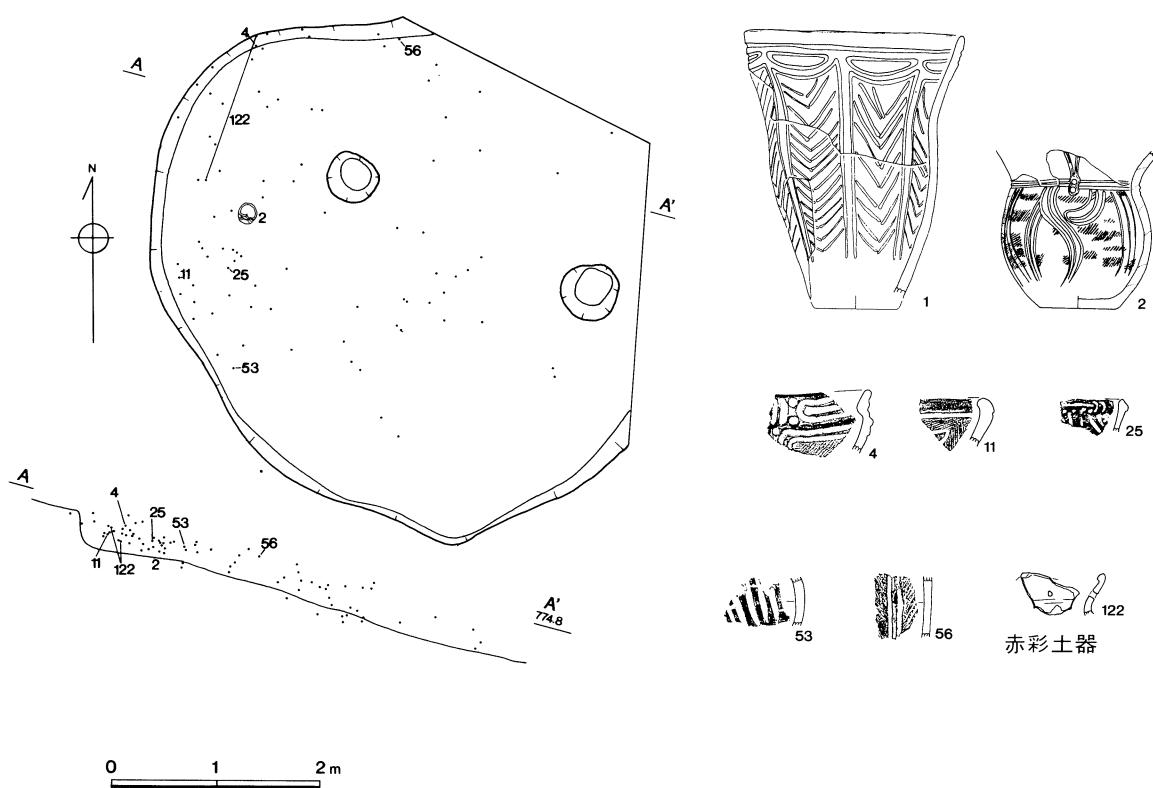
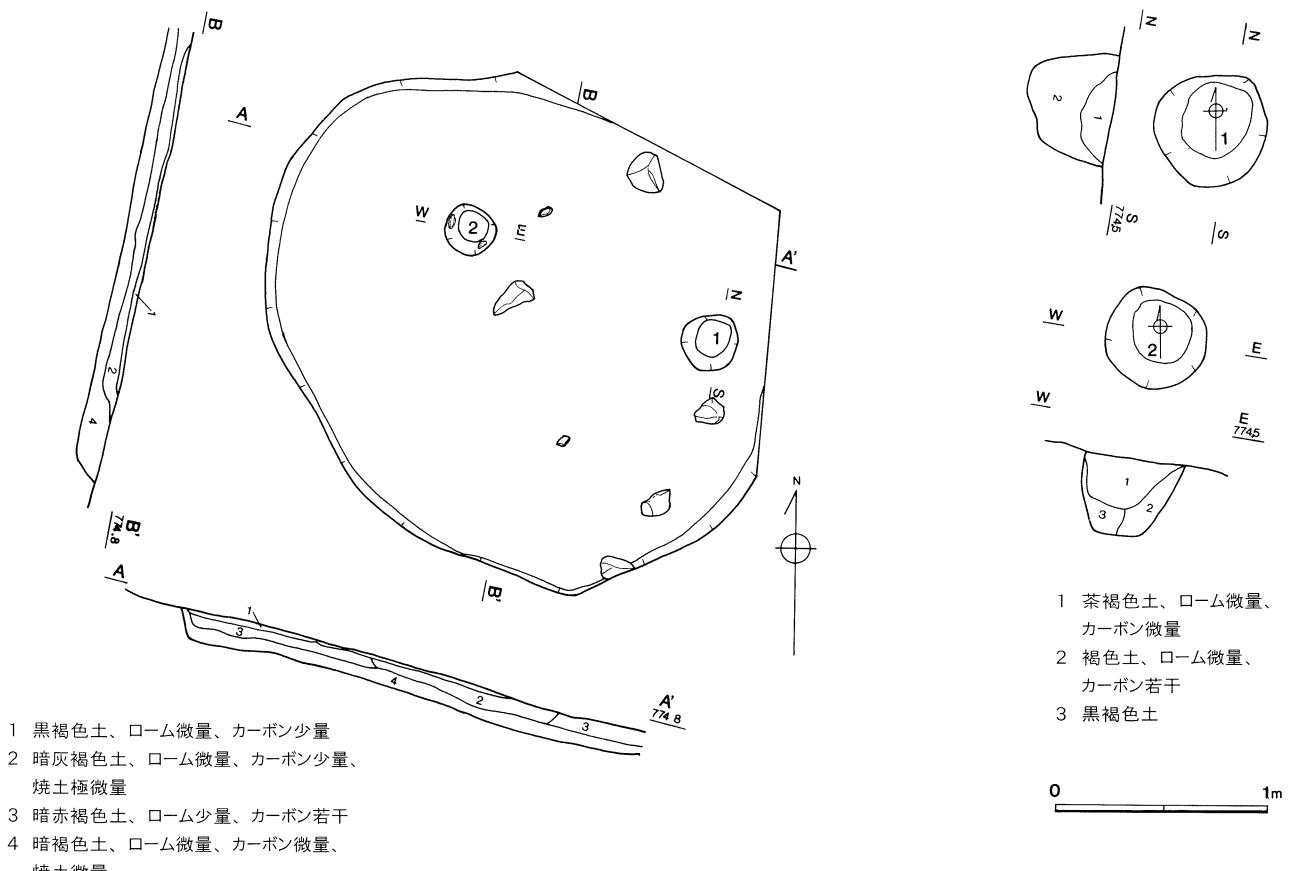


図5 I区1号住居実測図／土器分布図



図6 I区2号住居実測図／土器分布図

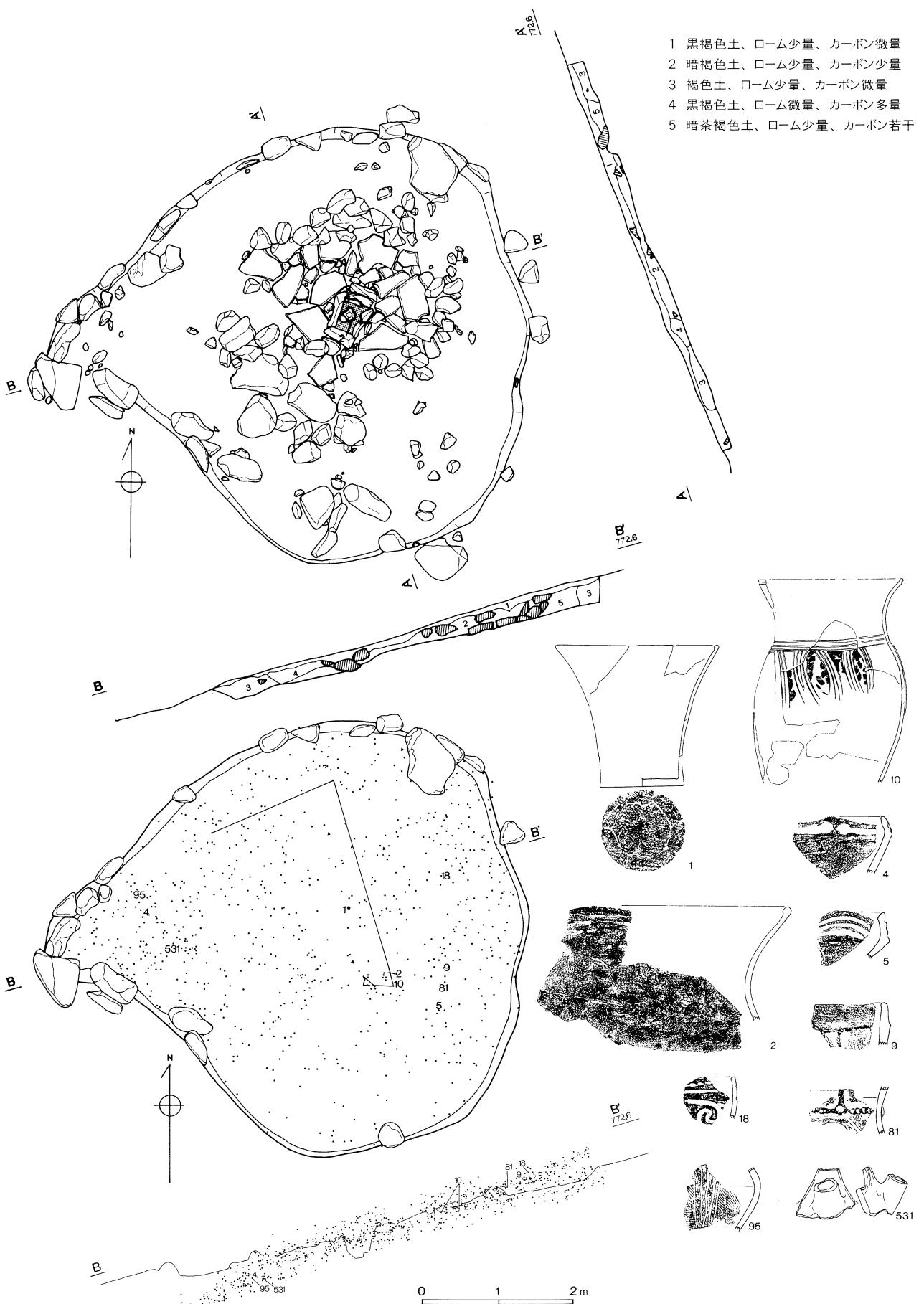
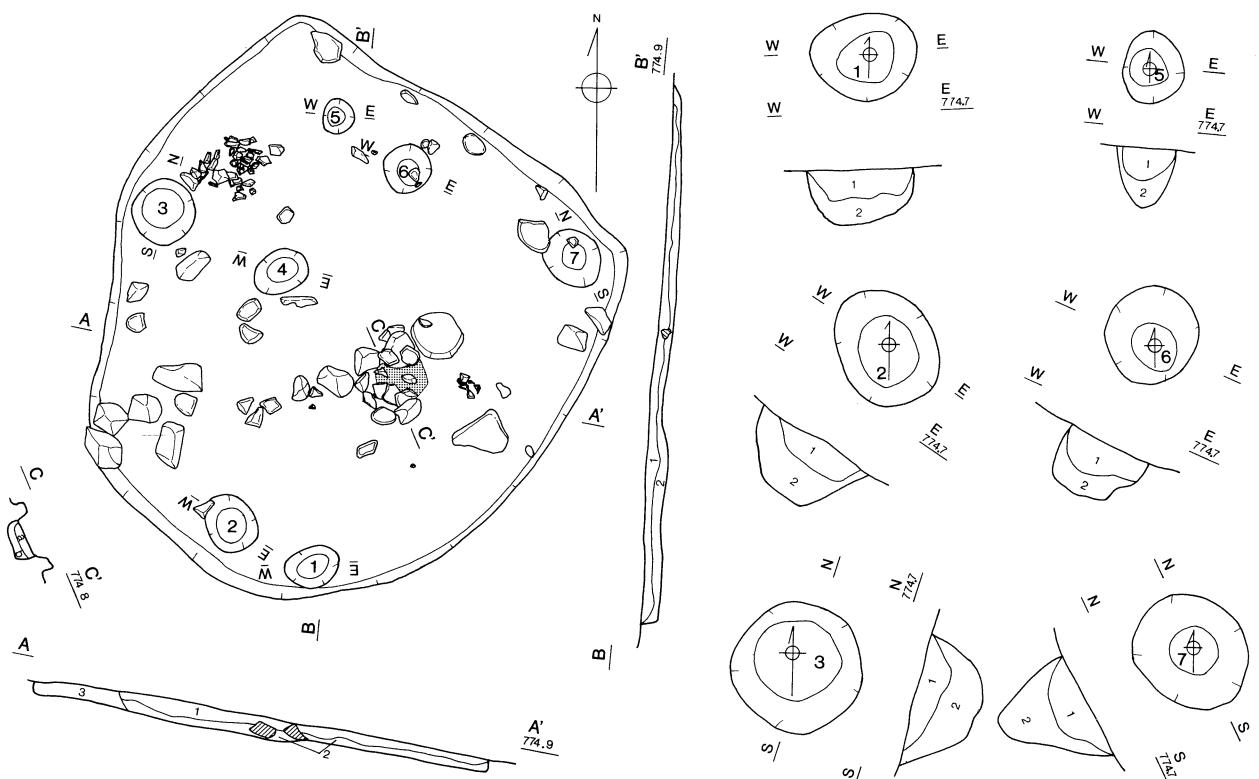


図7 I区3号住居実測図／土器分布図



- 1 黒褐色土、ローム少量、カーボン少量  
 2 暗褐色土、ローム少量、カーボン少量  
 3 褐色土、ローム少量、カーボン少量  
 a 暗褐色土、ローム微量、  
 焼土微量  
 b 褐色土、ローム微量、カーボン少量、  
 焼土微量

- 1 黒褐色土、ローム微量、  
 焼土カーボン微量  
 2 暗褐色土、ローム少量、  
 カーボン微量

0 1m

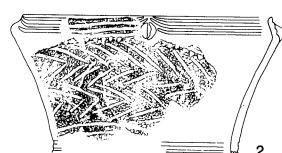
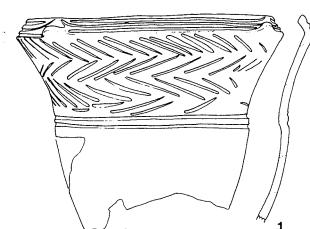
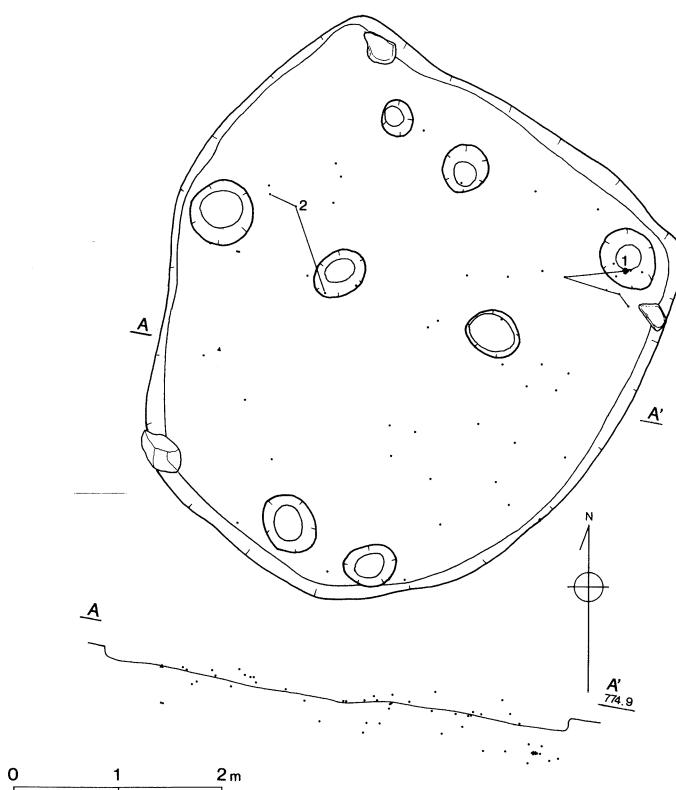


図8 I区4号住居実測図／土器分布図

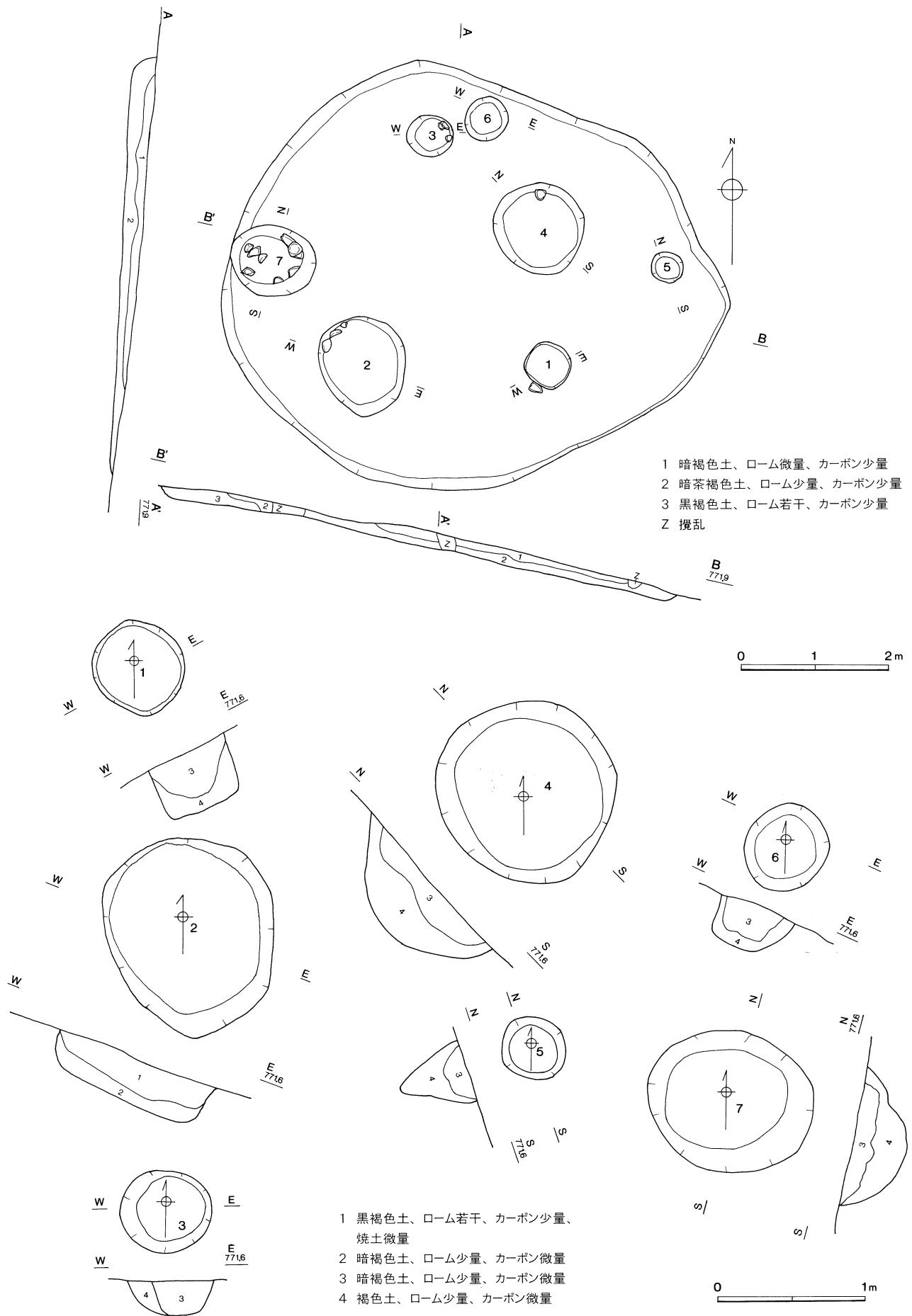


図9 I区5号住居実測図

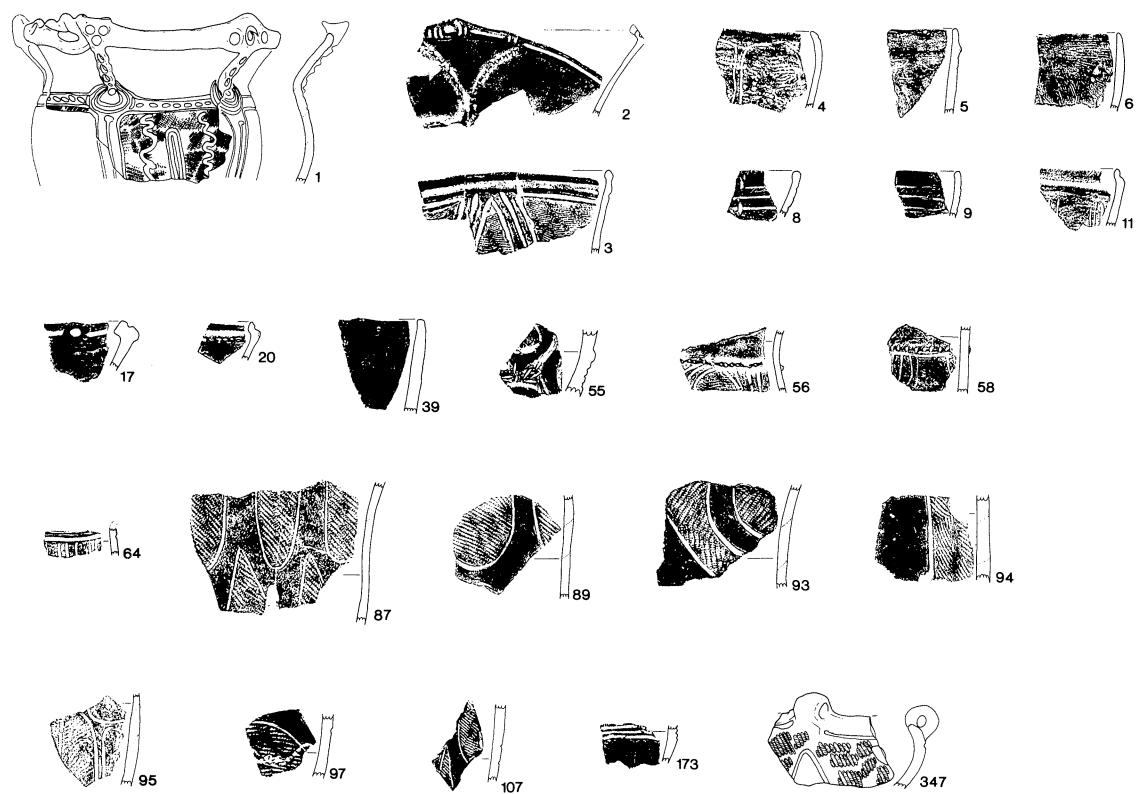
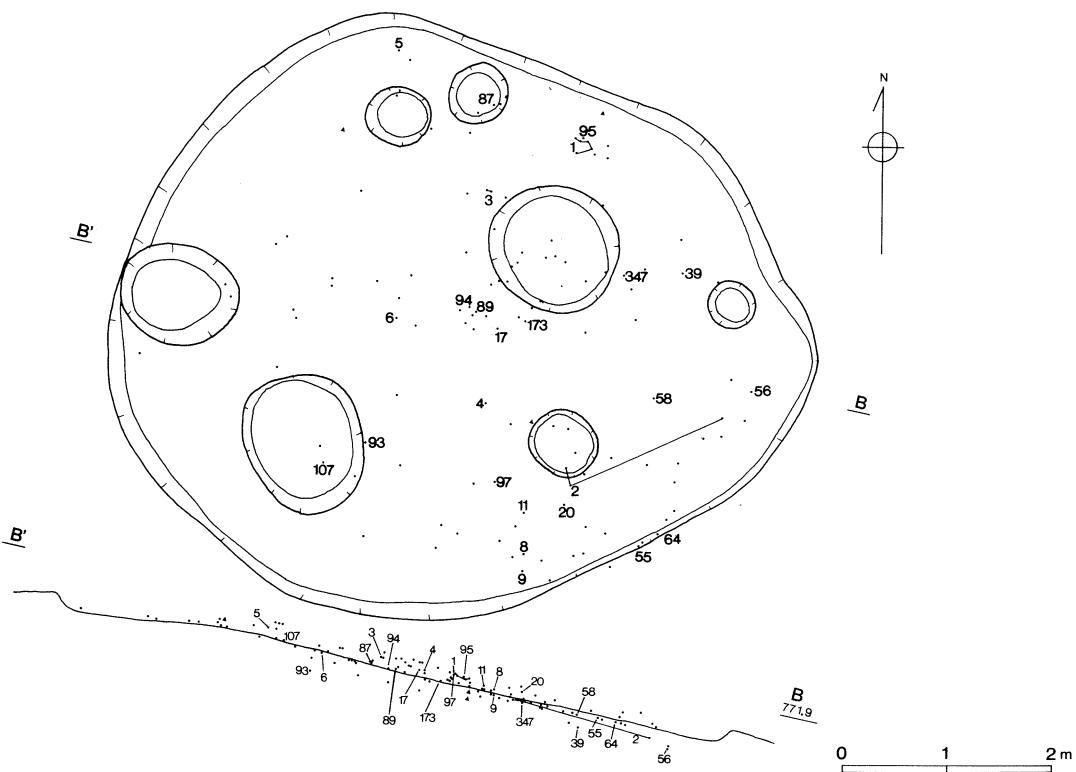


図10 I区5号住居土器分布図

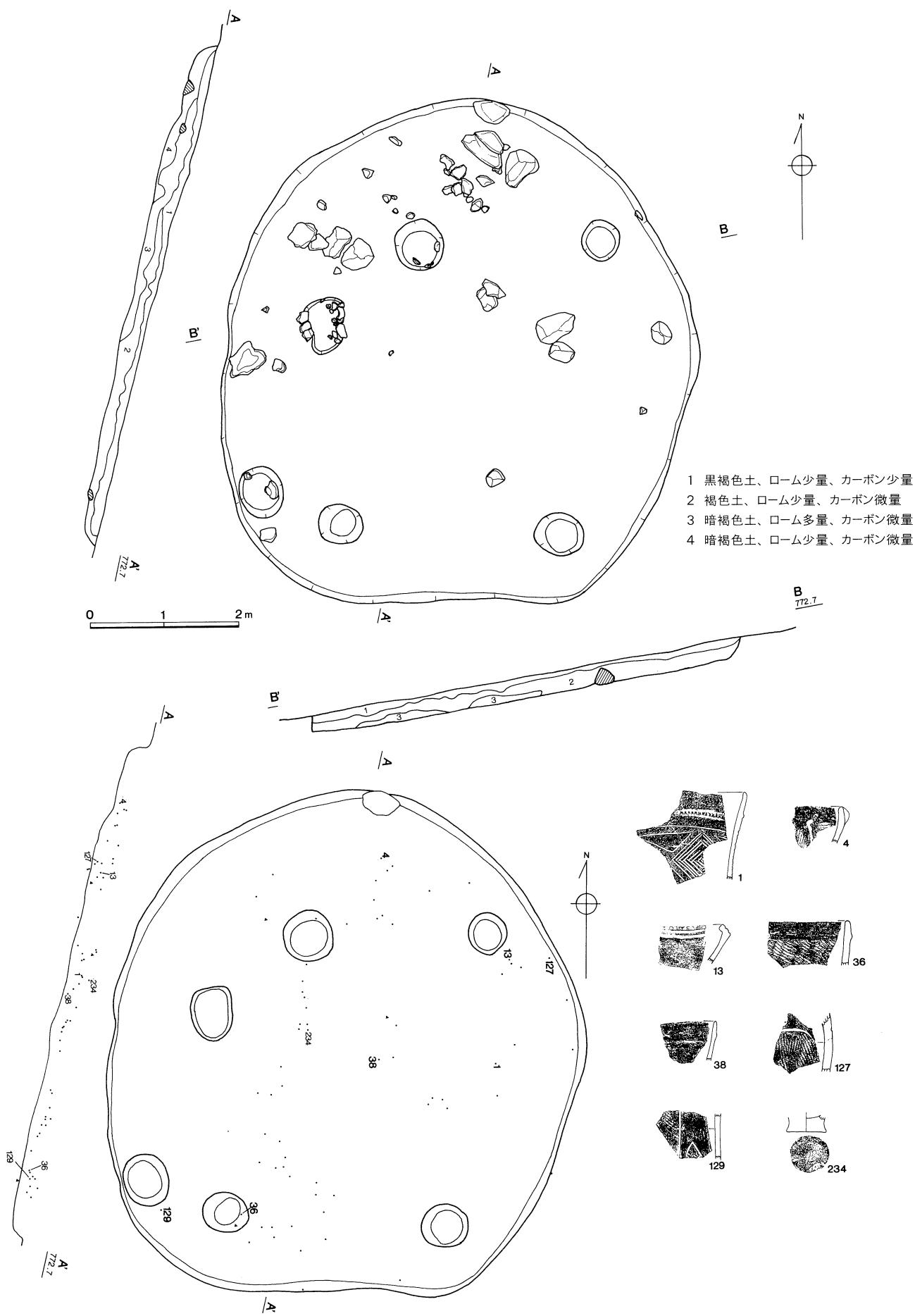
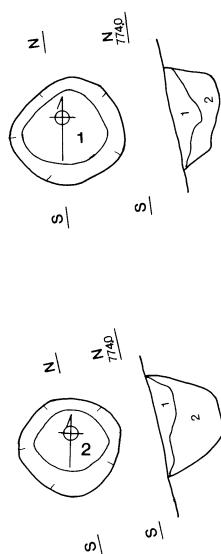
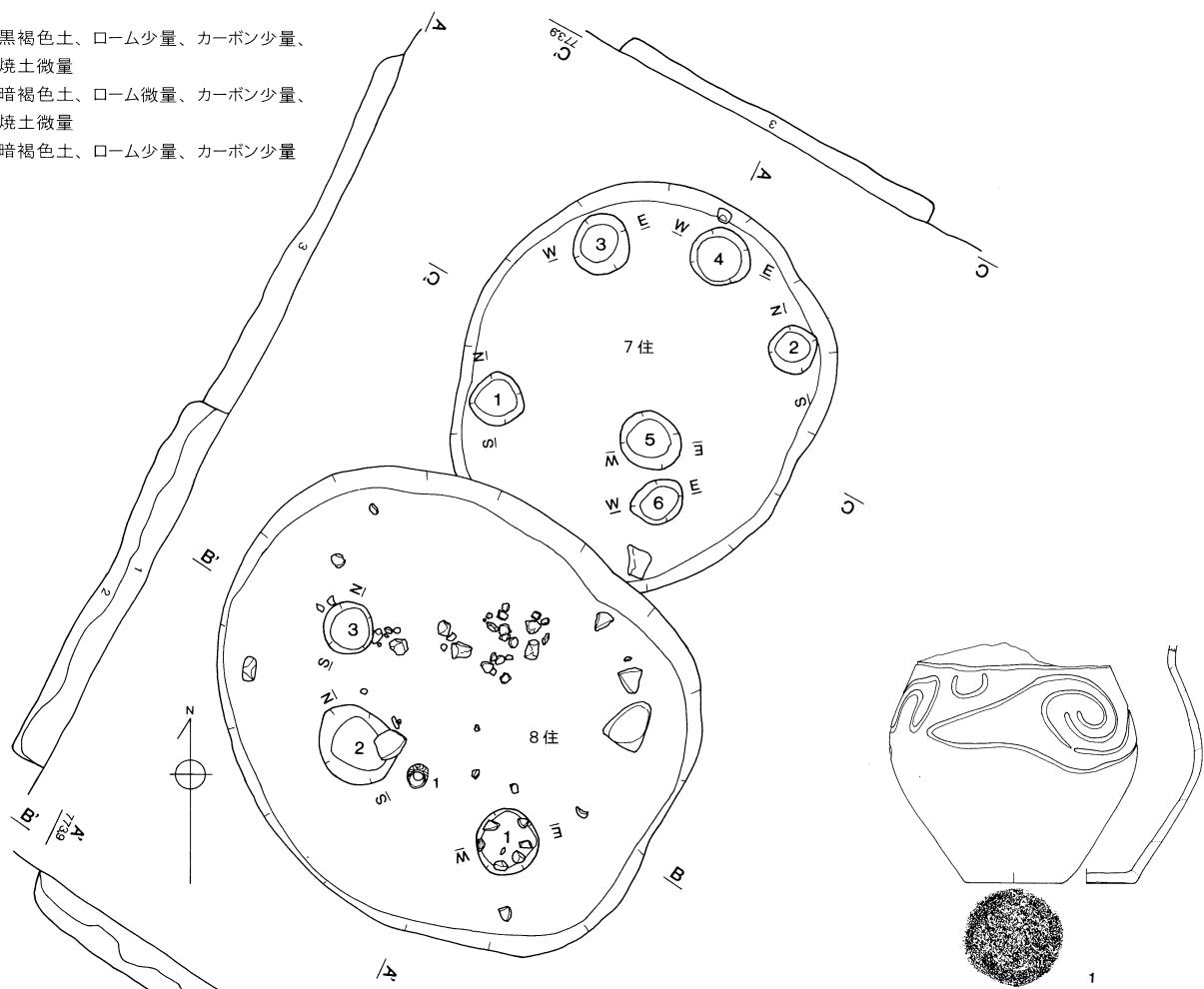
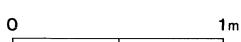


図11 I区6号住居実測図／土器分布図

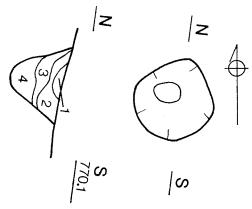
- 1 黒褐色土、ローム少量、カーボン少量、焼土微量  
 2 暗褐色土、ローム微量、カーボン少量、焼土微量  
 3 暗褐色土、ローム少量、カーボン少量



7住内土坑

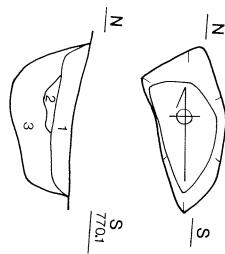


- 1 暗褐色土、ローム若干、カーボン少量  
 2 暗茶褐色土、ローム少量、カーボン少量



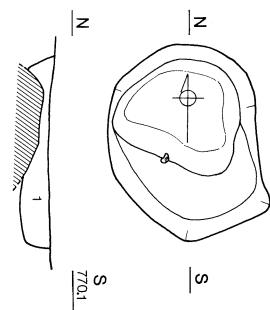
### 1号土坑

- 1 暗褐色土 ローム含む。カーボン微量、粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 ローム微量、カーボン少量含む。
- 3 褐色土 ローム微量、カーボン少量含む。  
砂質。
- 4 暗茶褐色土 ローム少量、カーボン若干含む。



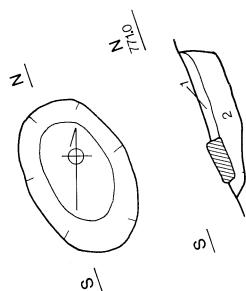
### 2号土坑

- 1 褐色土 ローム少量、カーボン若干含む。
- 2 黒褐色土 ローム微量、カーボン少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム微量含む。砂質。



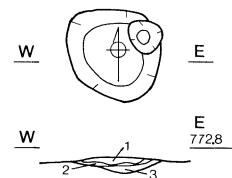
### 3号土坑

- 1 黑褐色土 ローム微量、カーボン少量。



### 4号土坑

- 1 茶褐色土 ローム少量含む。
- 2 褐色土 ローム微量、カーボン微量含む。



### 5号土坑

- 1 燃土 カーボン少量含む。
- 2 暗黄褐色土 カーボン少量、灰を含む。
- 2 明褐色土 ローム微量、カーボン少量含む。

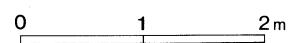


図13 I区土坑実測図

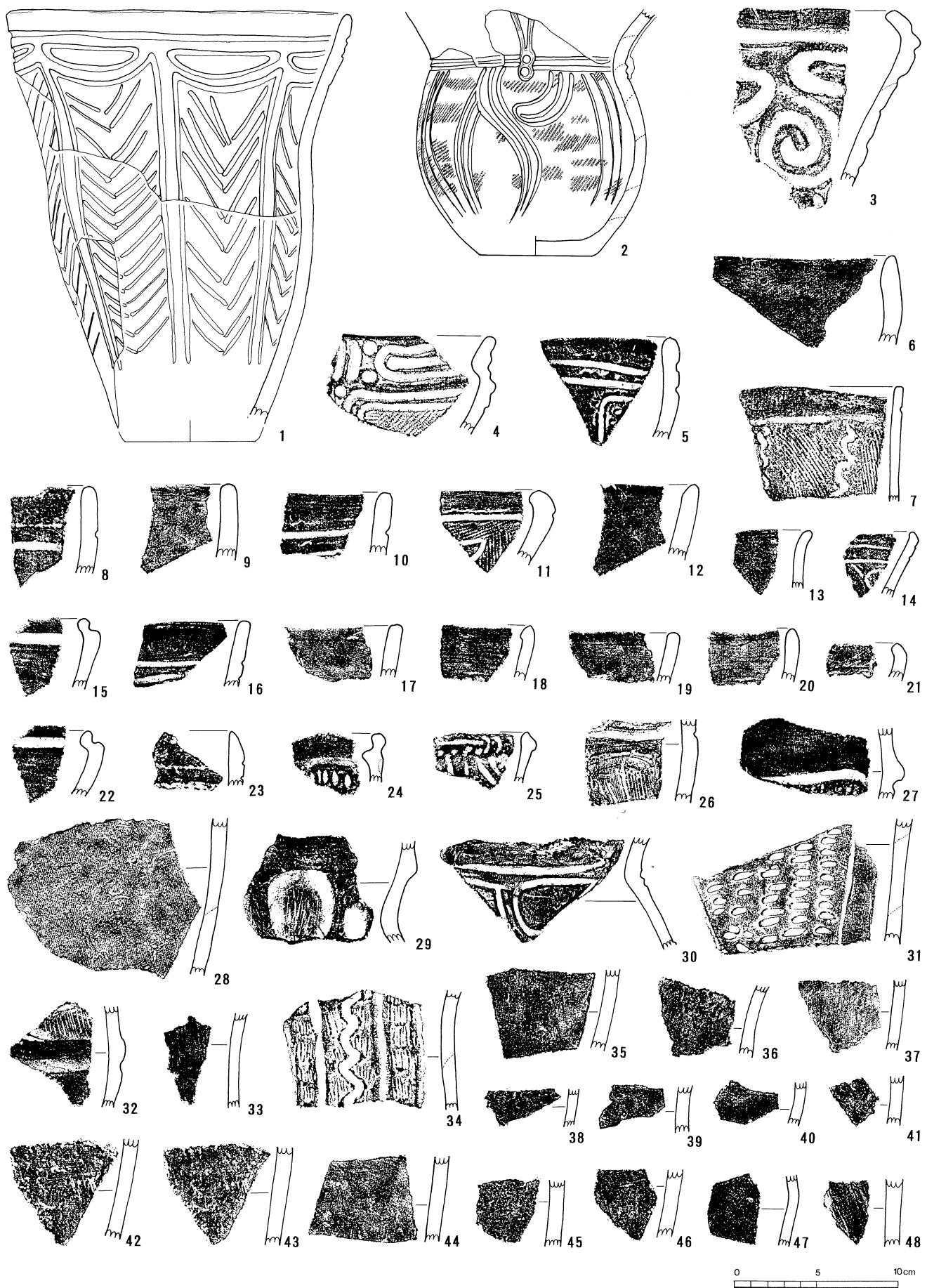


図14 I区1号住出土土器(1)

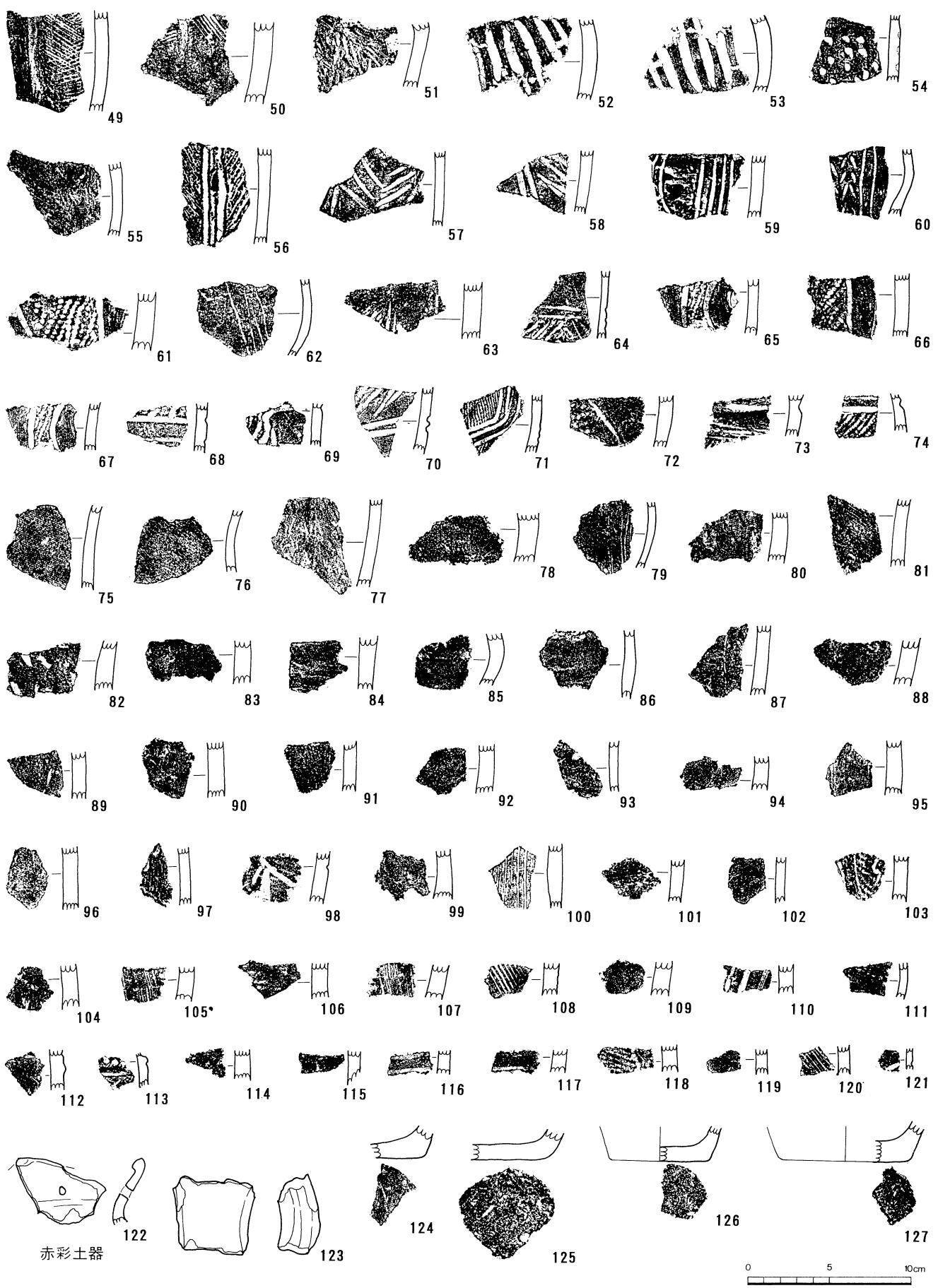


図15 I区1号住出土土器(2)

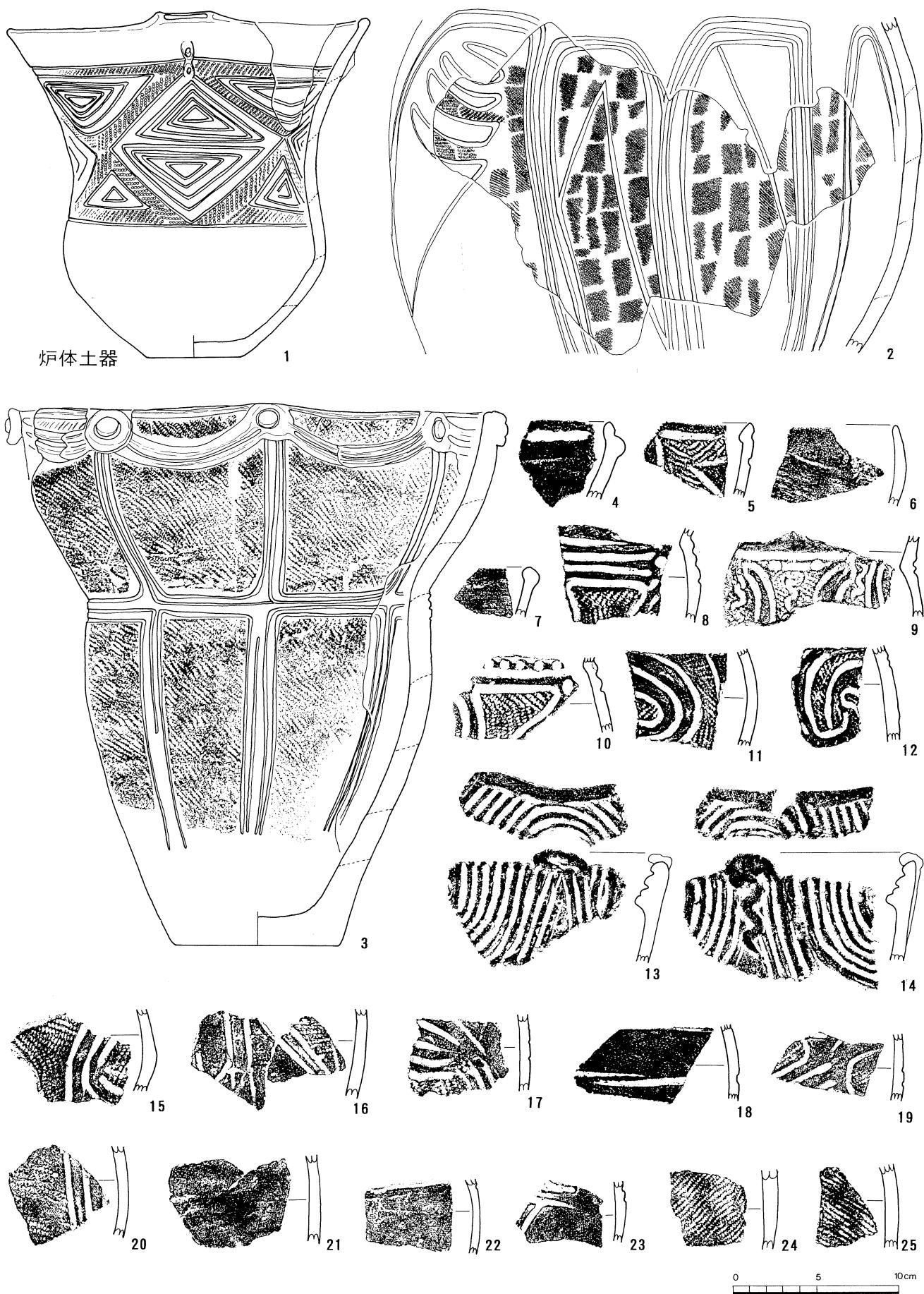


図16 I区2号住出土土器(1)

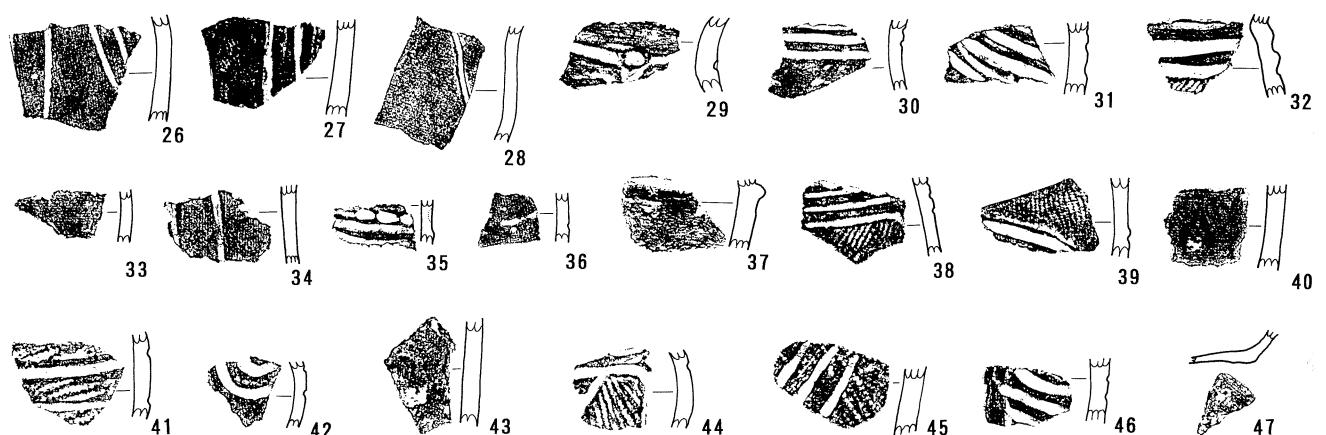


図17 I区2号住出土土器(2)

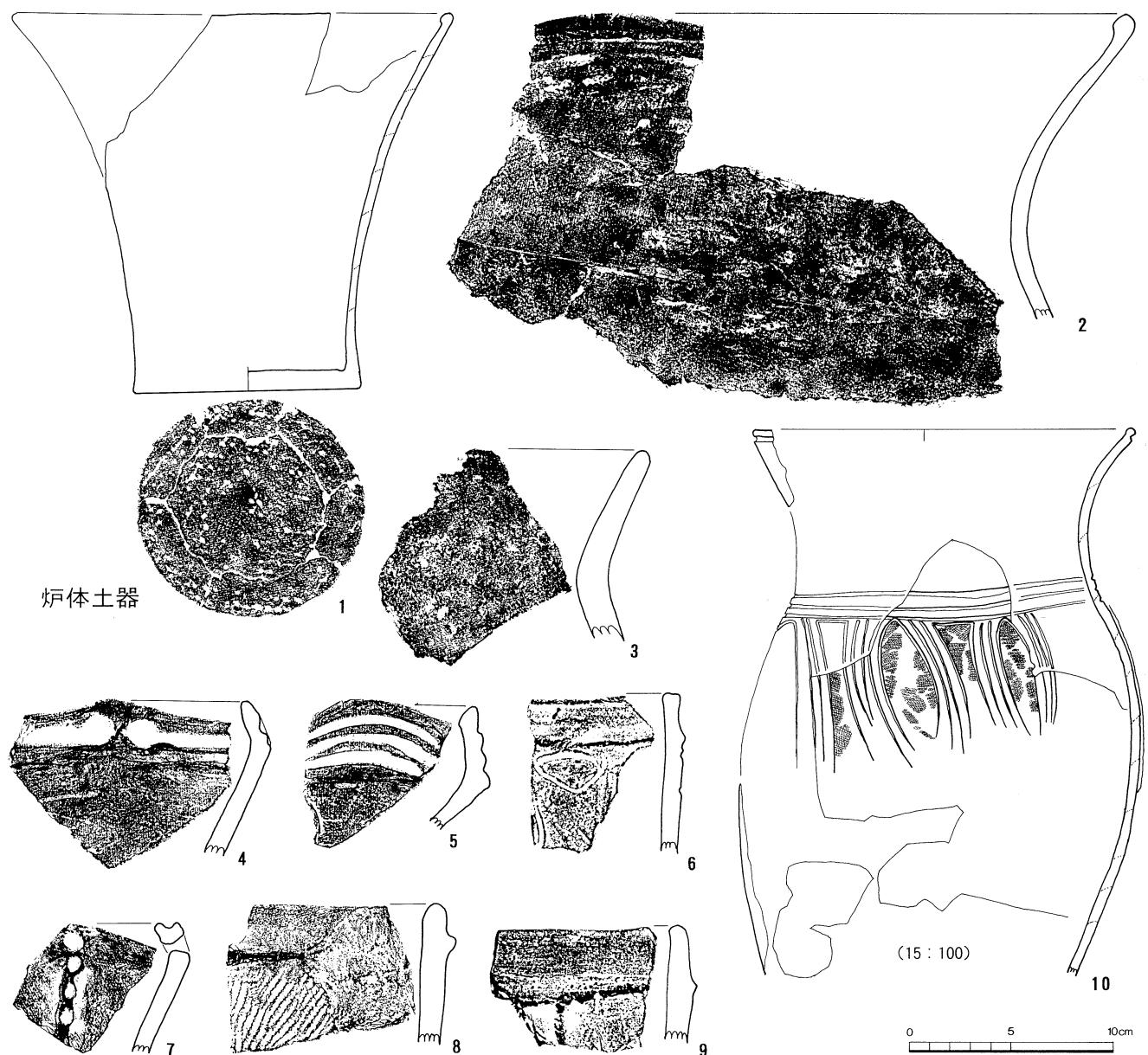


図18 I区3号住出土土器(1)

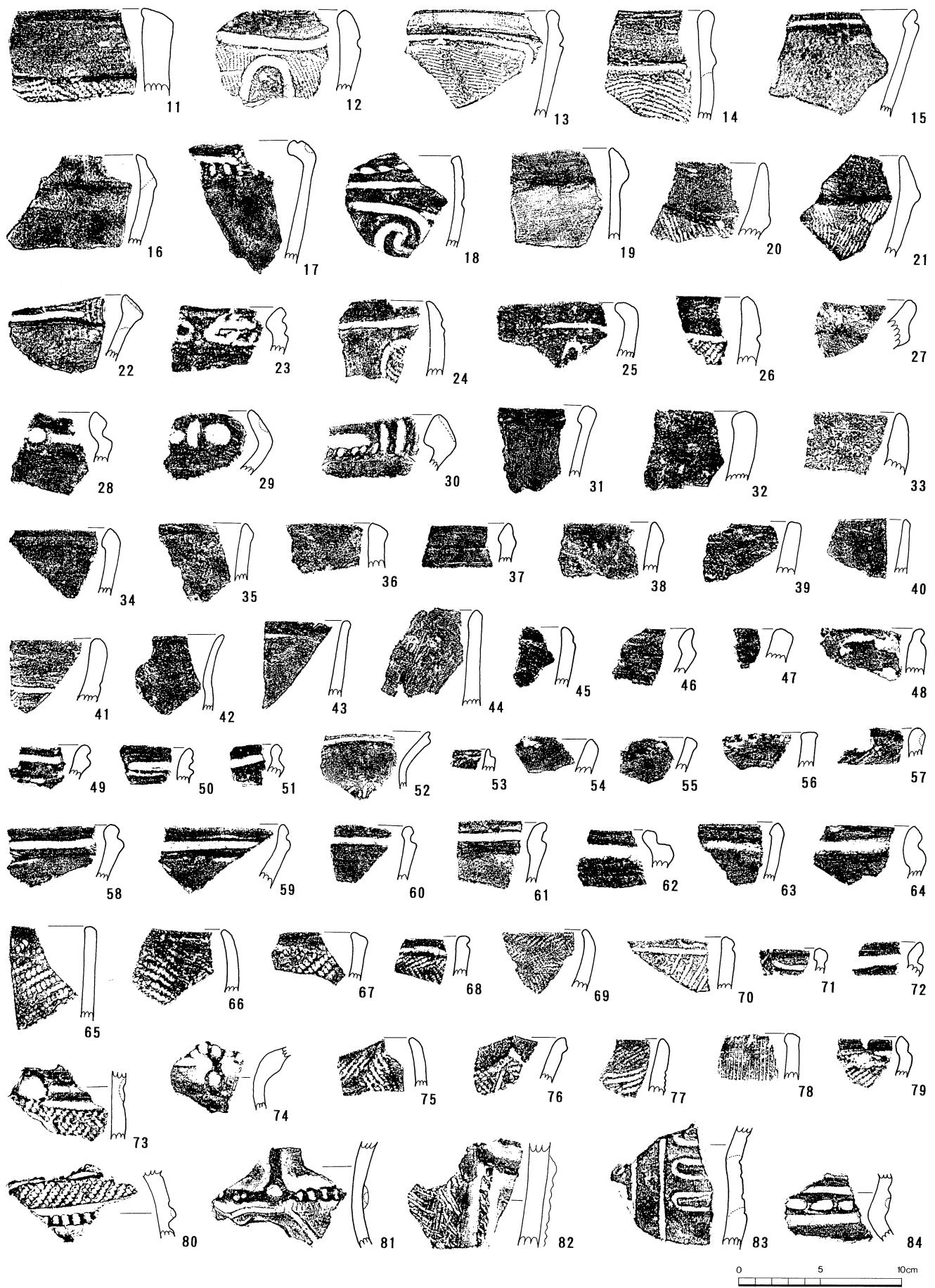


図19 I区3号住出土土器(2)

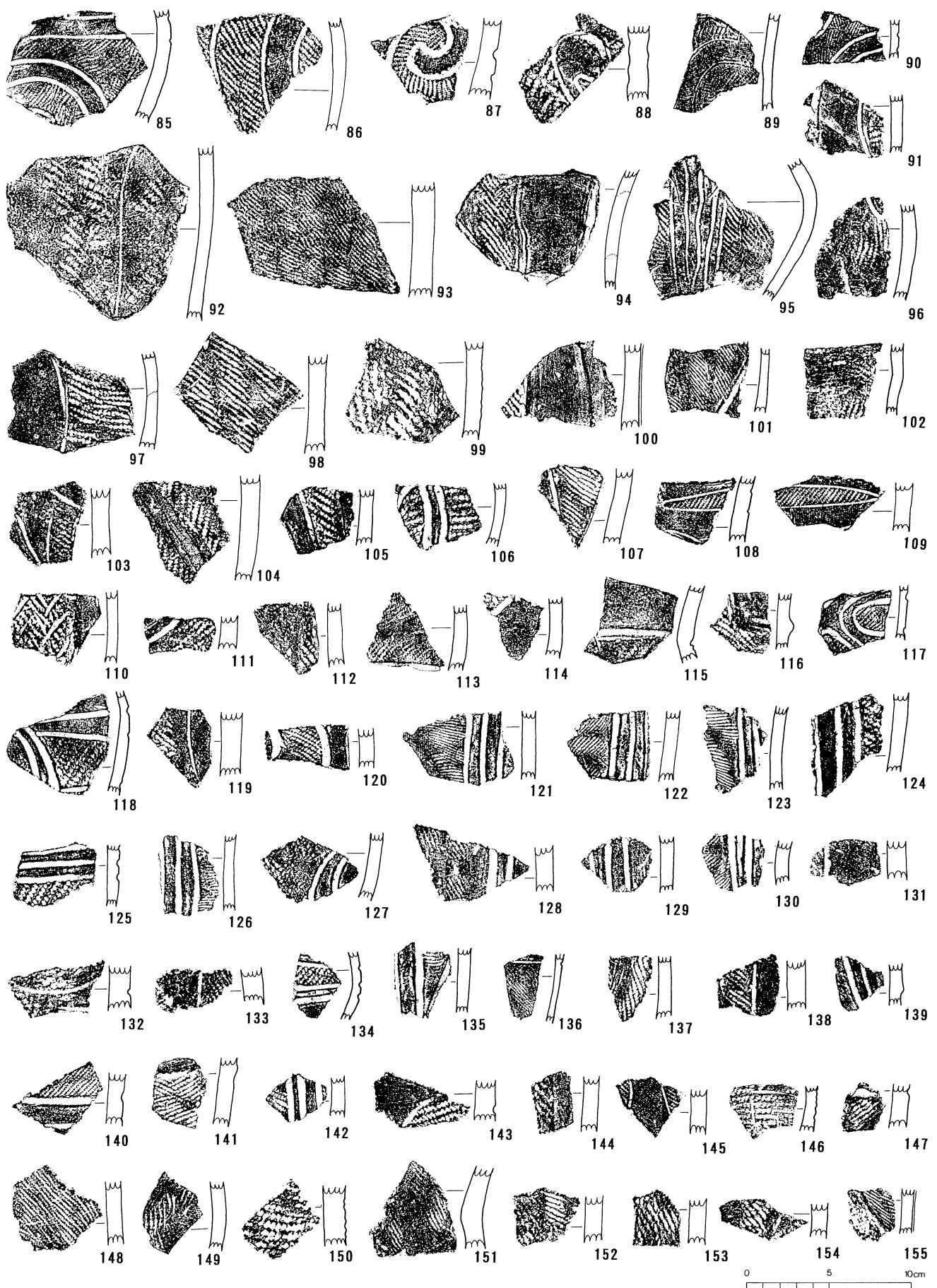


図20 I区3号住出土土器(3)

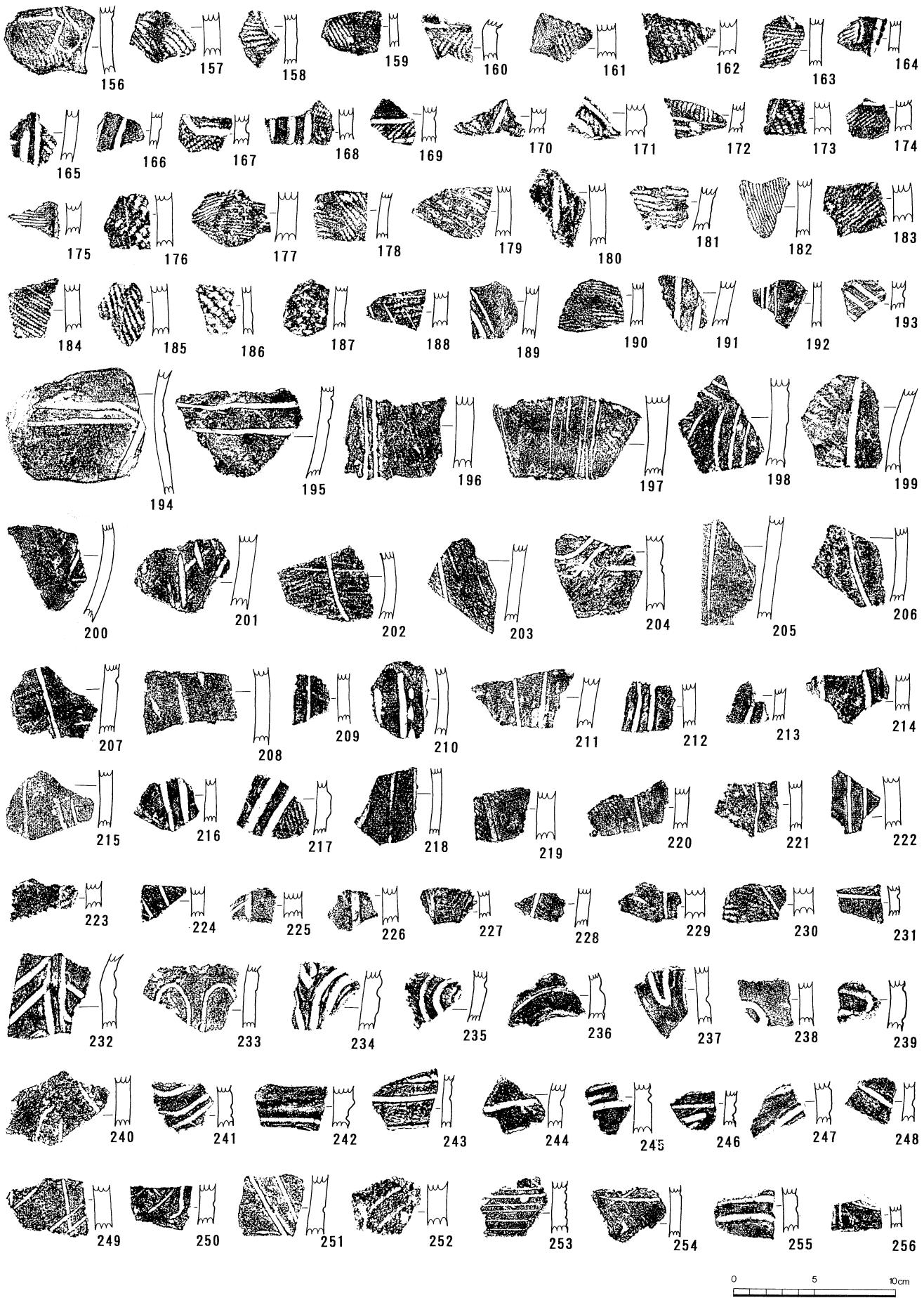


図21 I区3号住出土土器(4)

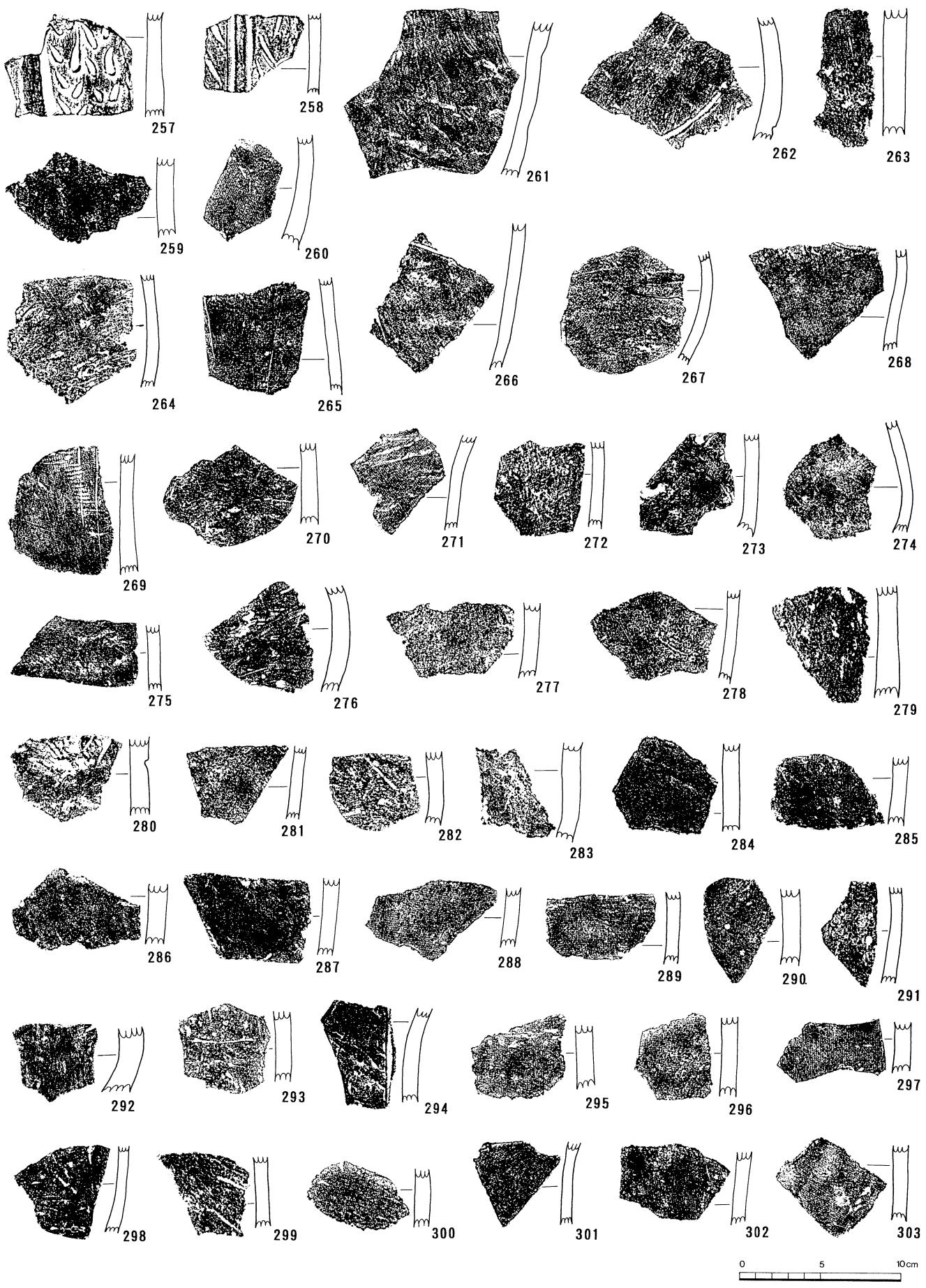


図22 I区3号住出土土器(5)

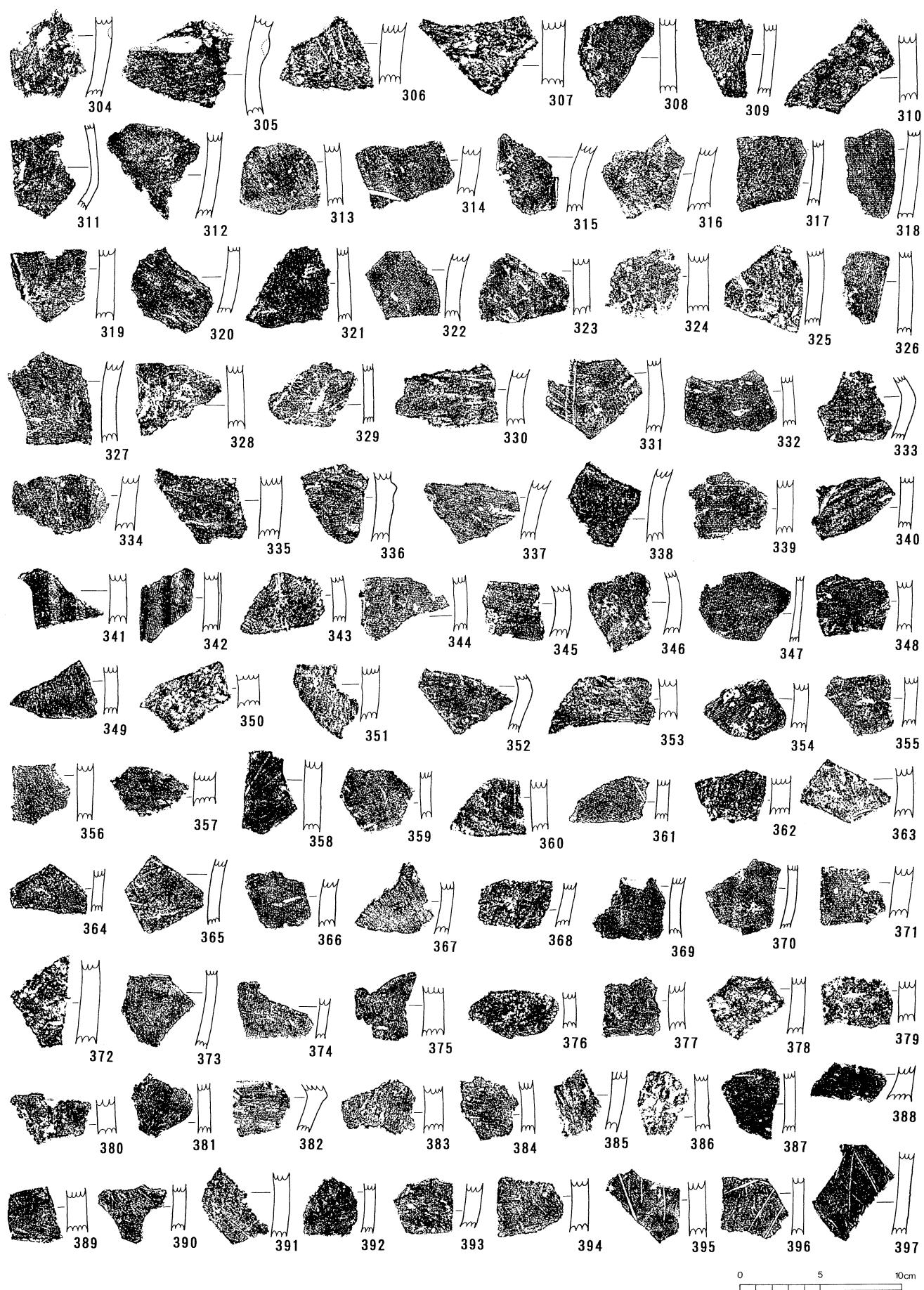


図23 I 区 3号住出土土器(6)

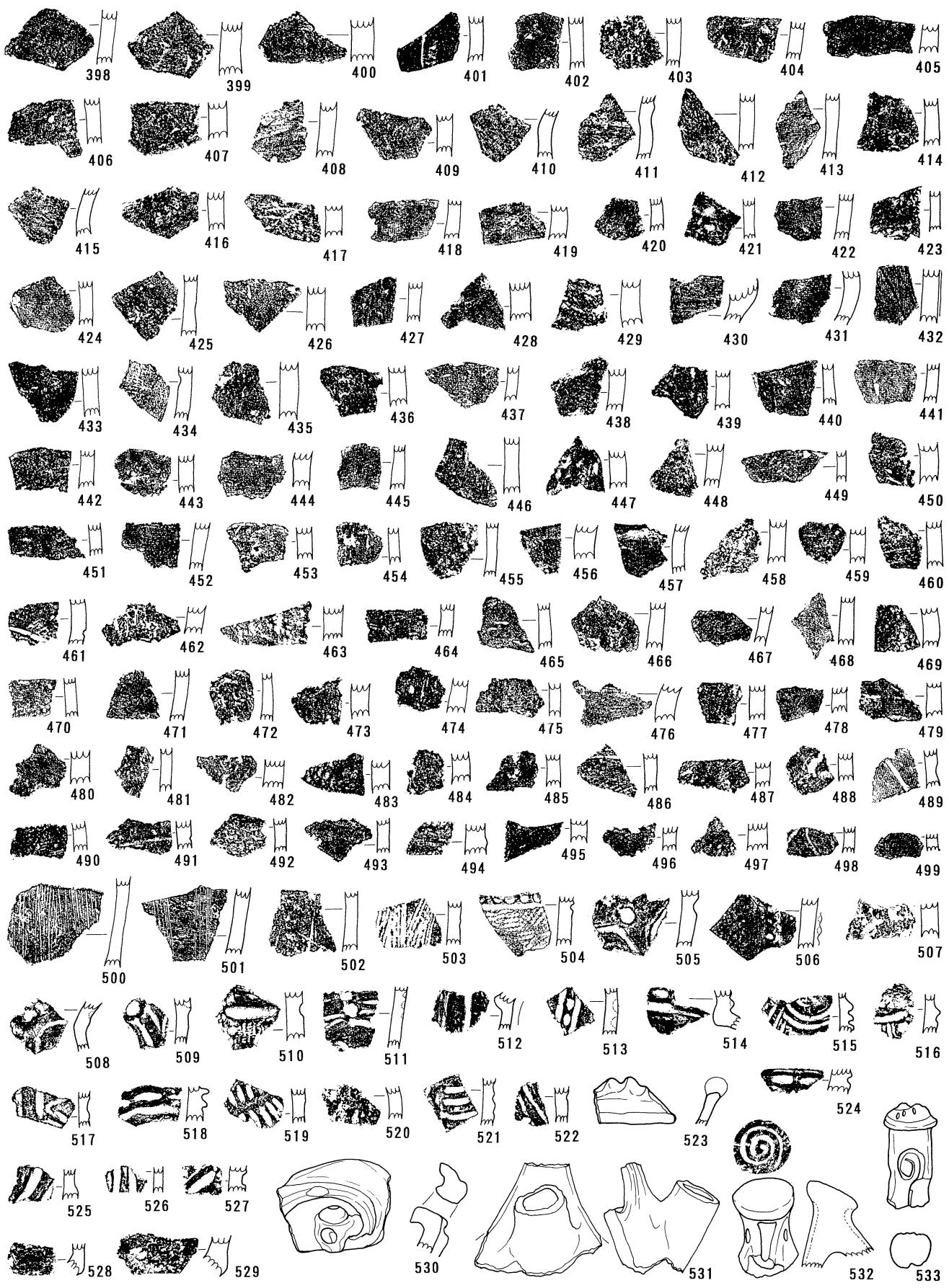


図24 I区3号住出土土器(7)

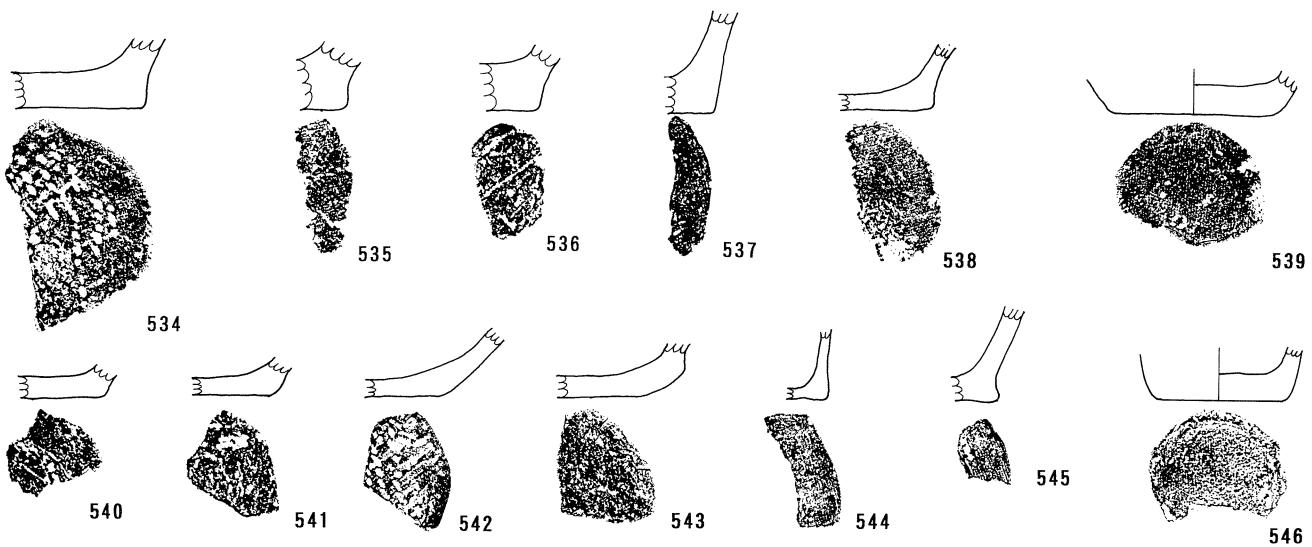


図25 I 区 3号住出土土器(8)

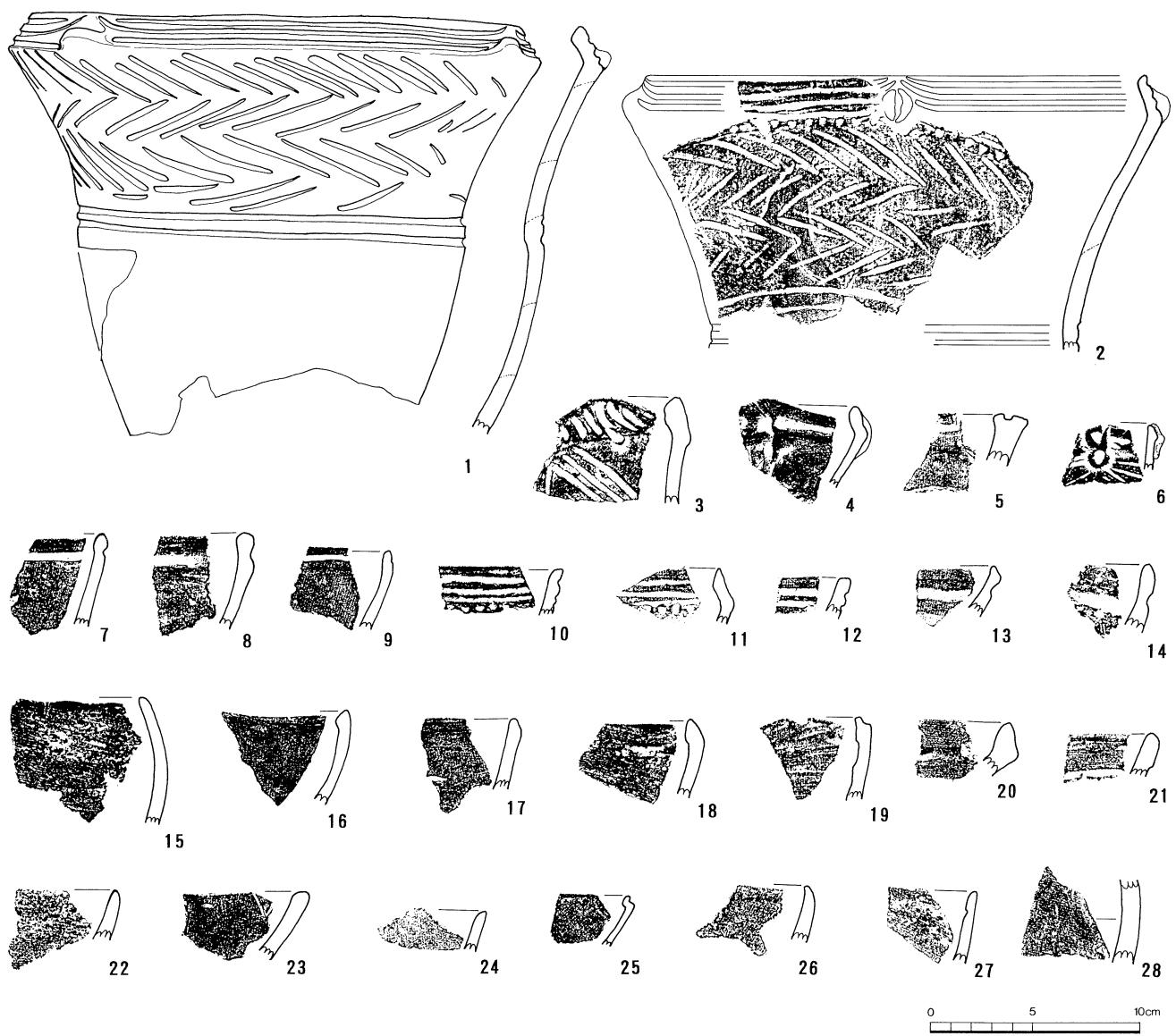


図26 I 区 4号住出土土器(1)

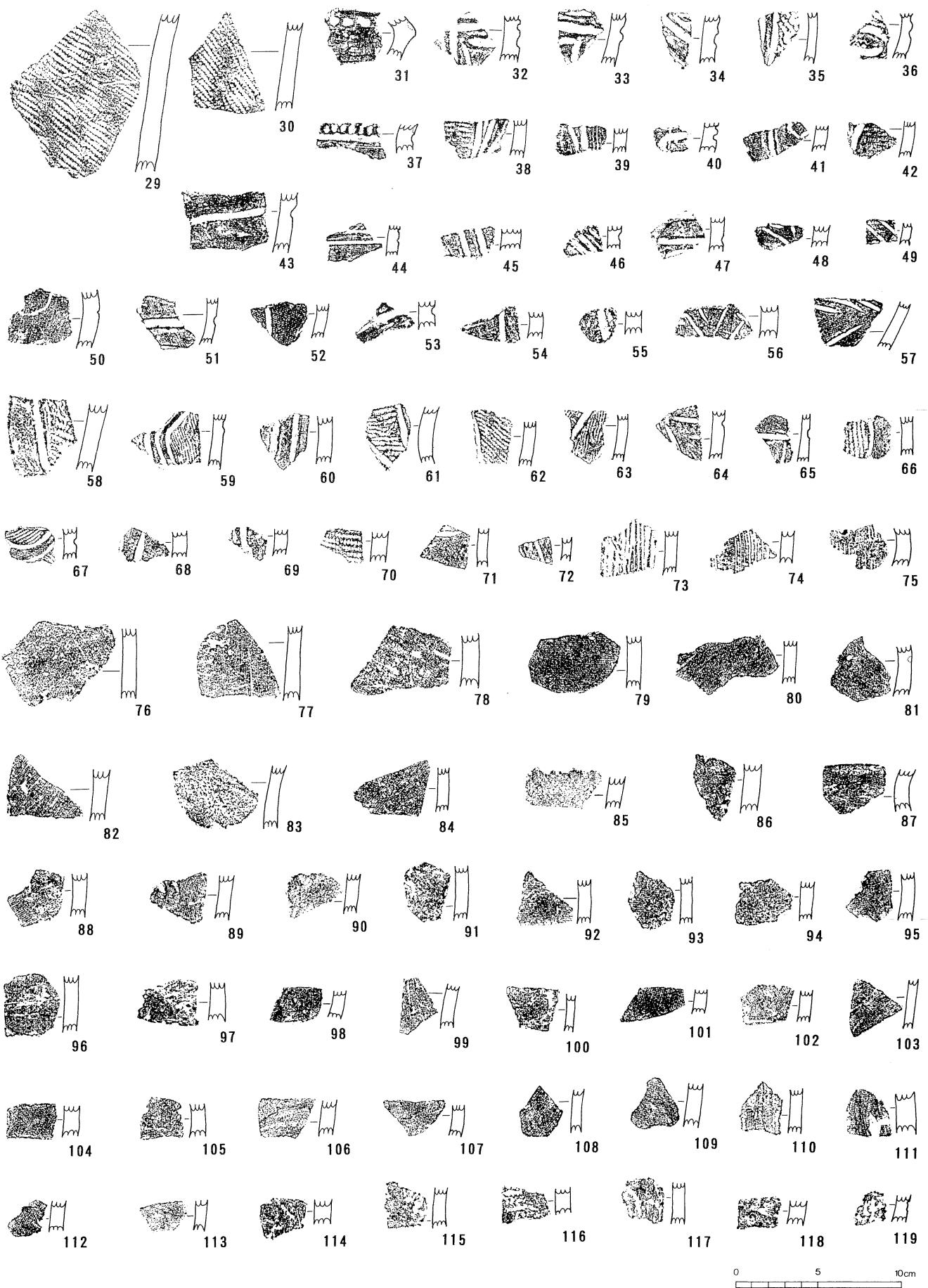


図27 I区4号住出土土器(2)

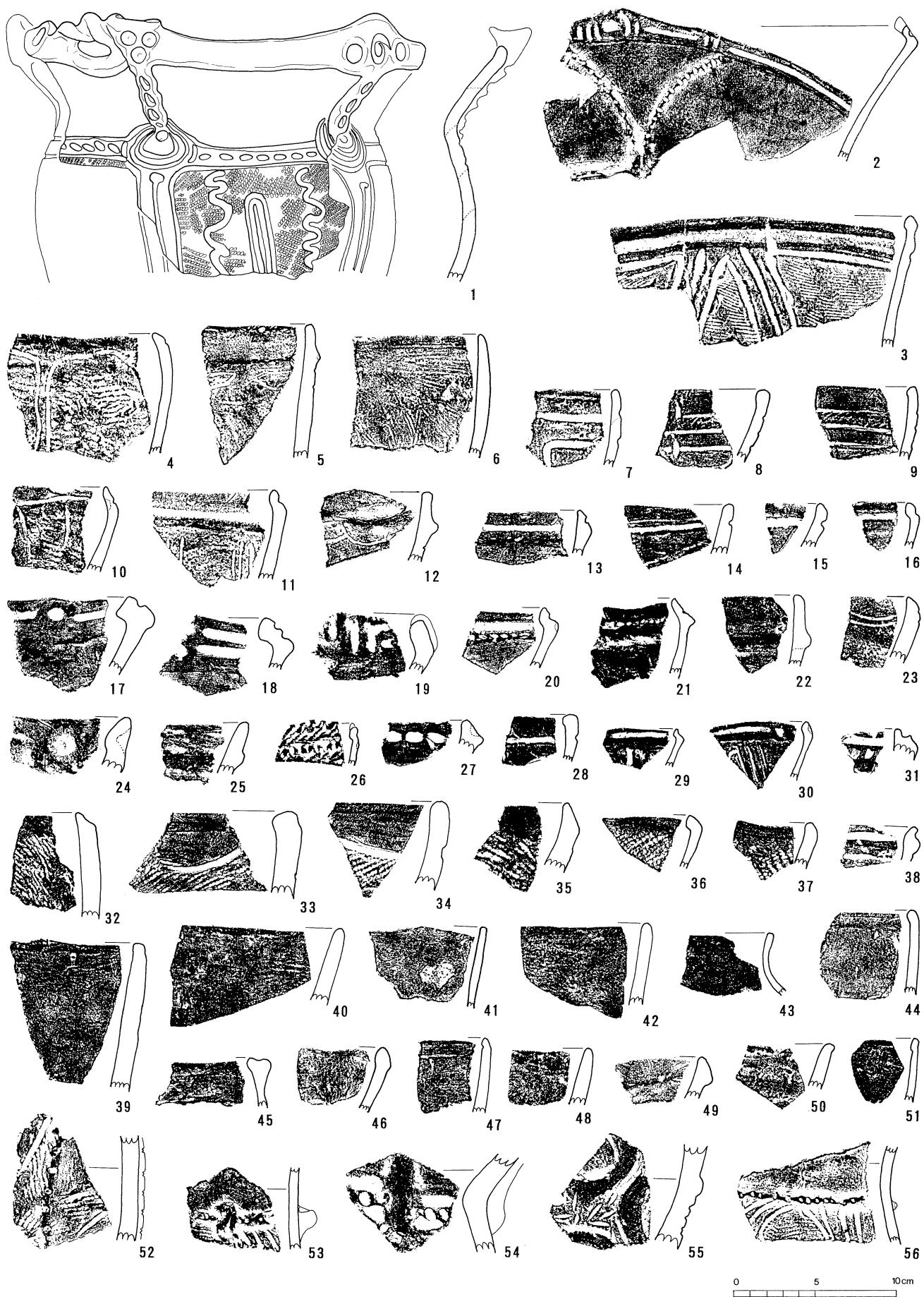


図28 I区5号住出土土器(1)

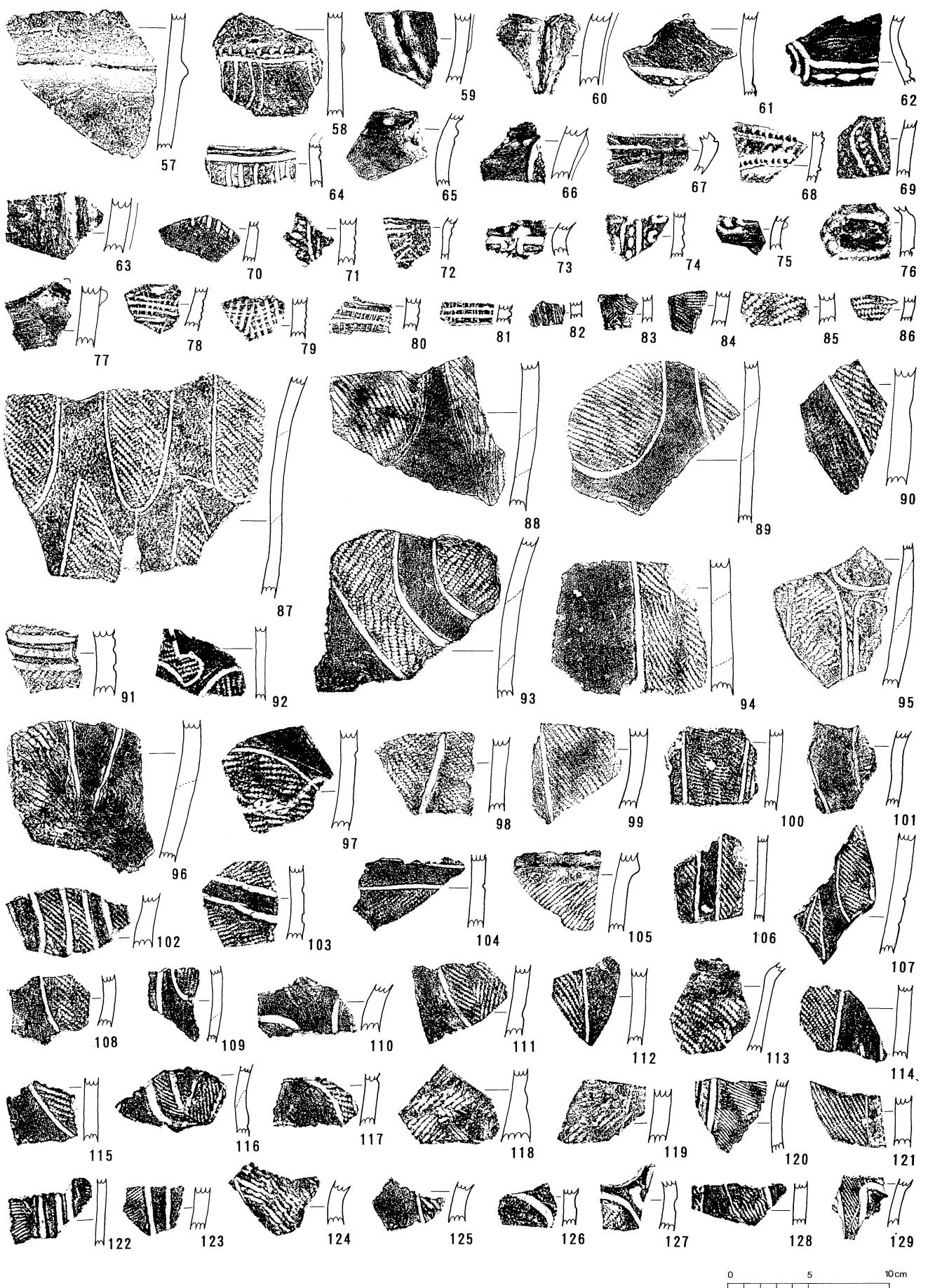


図29 I 区 5号住出土土器(2)

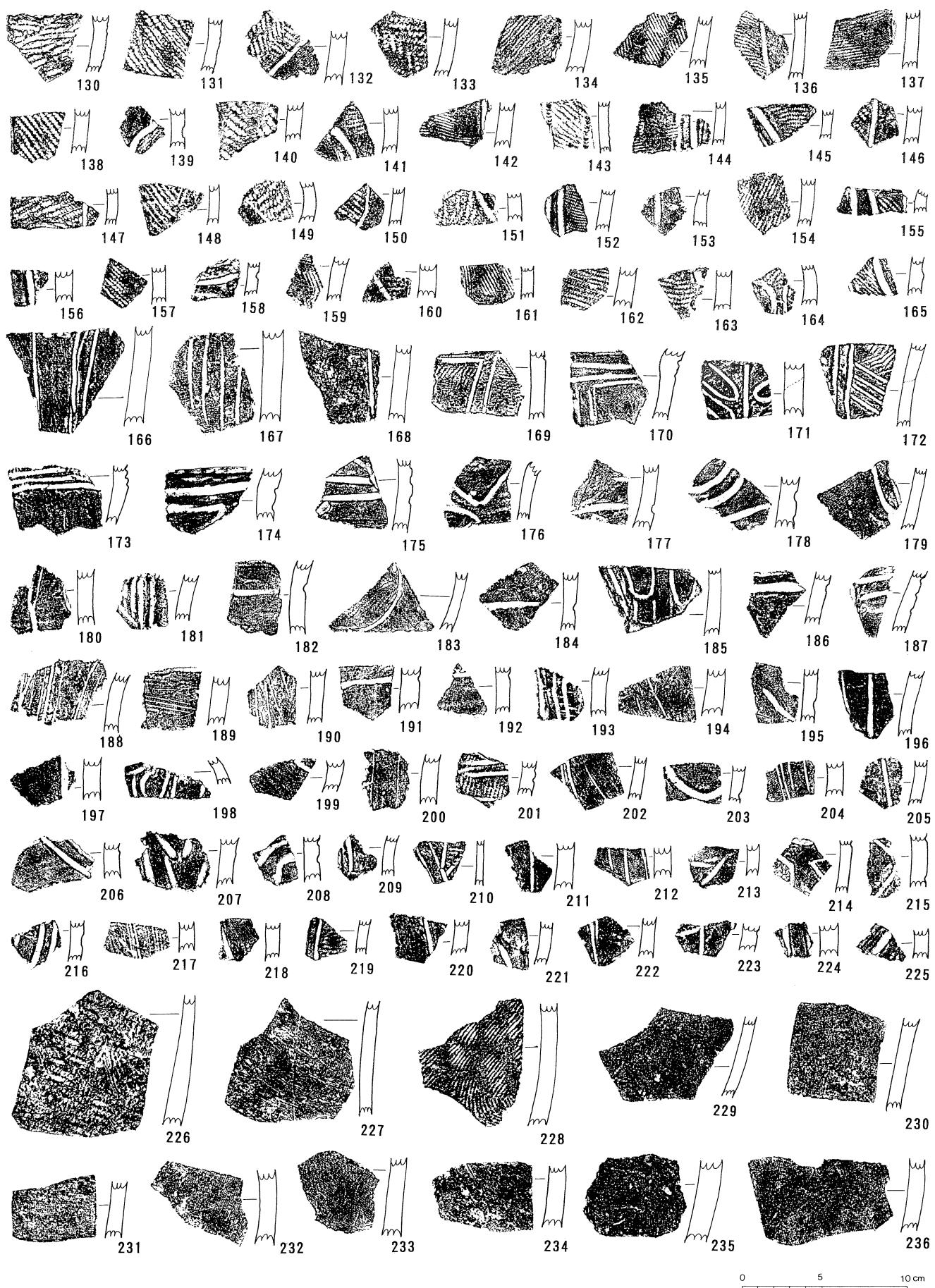


図30 I区5号住出土土器(3)

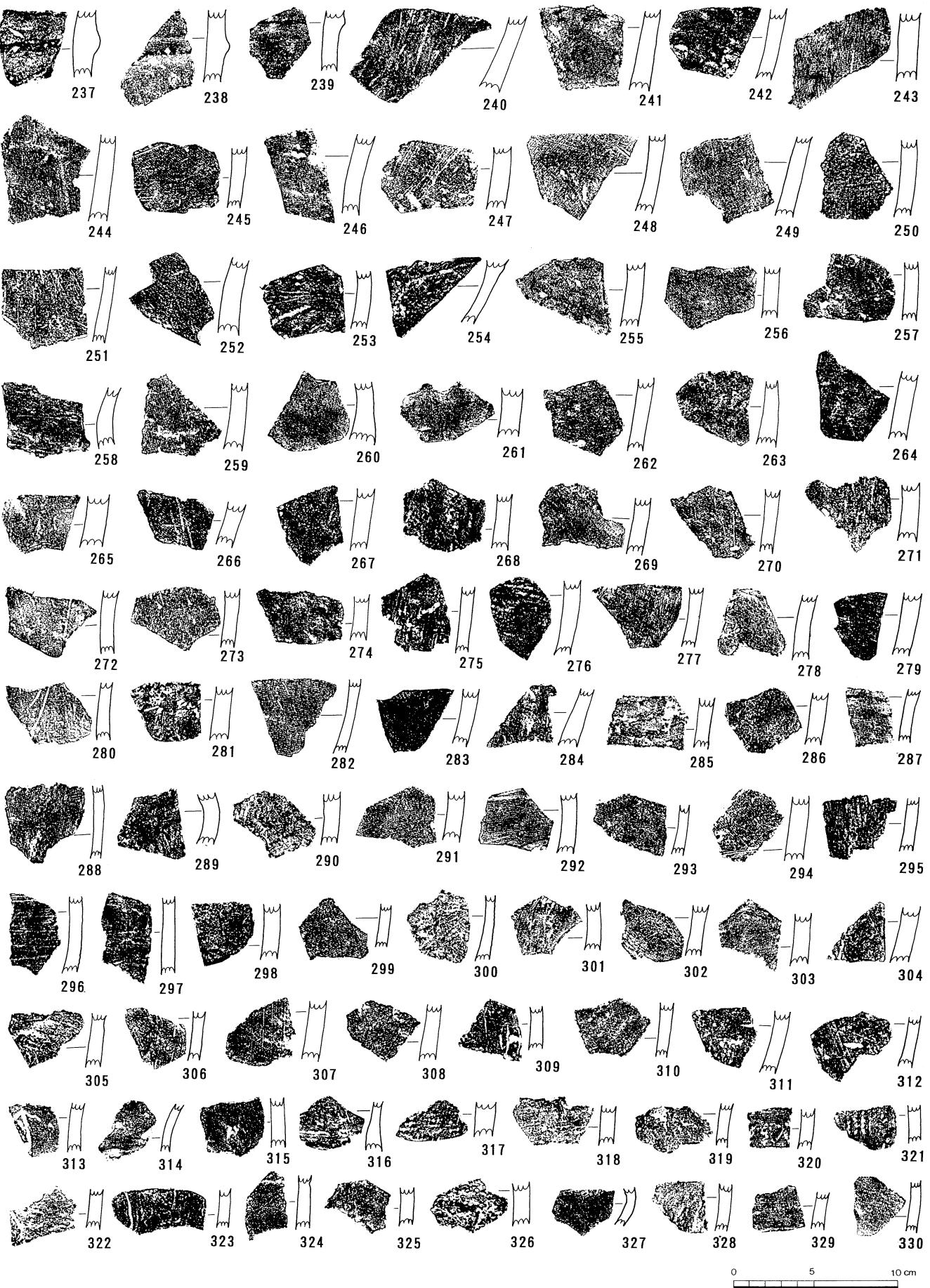


図31 I区5号住出土土器(4)

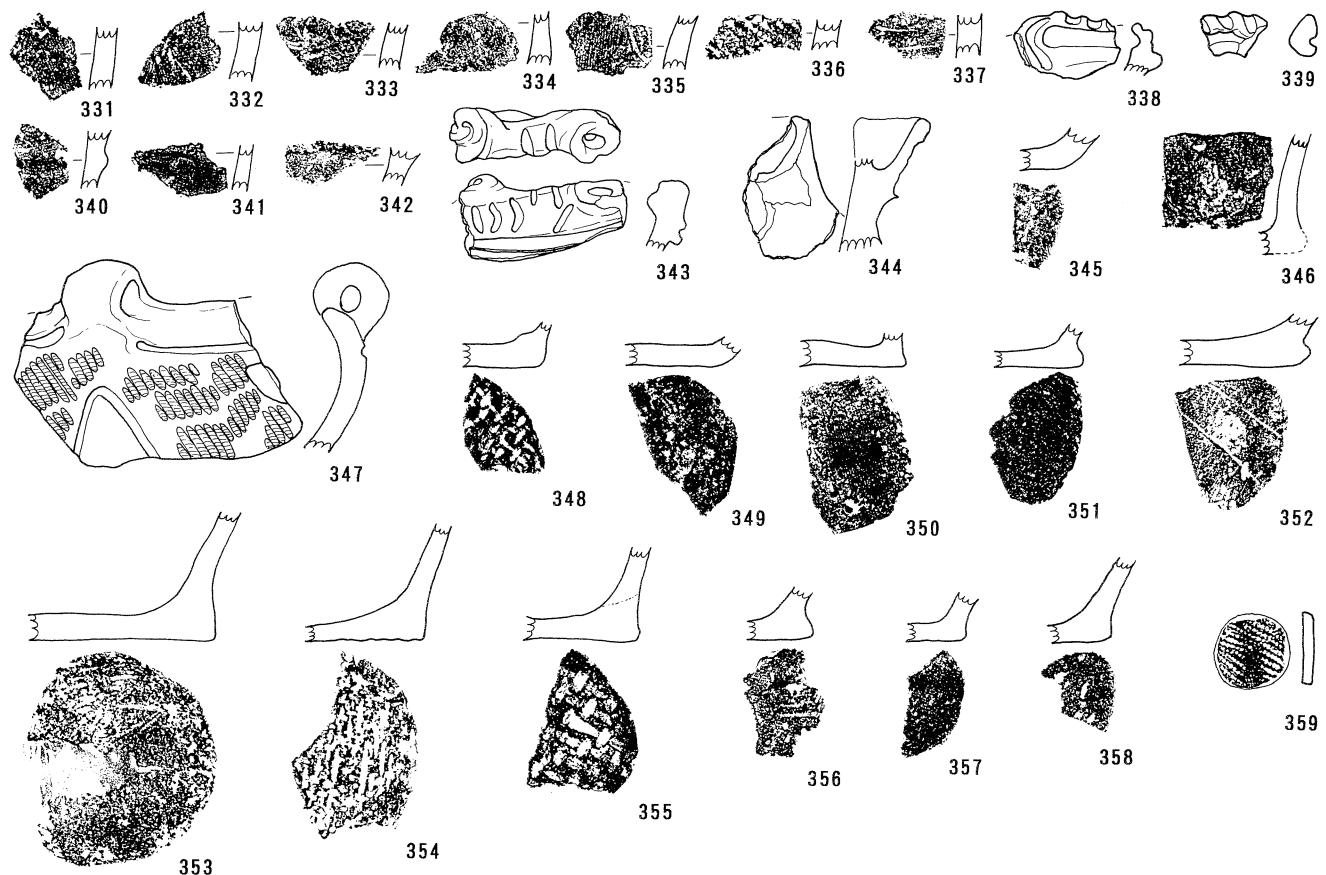


図32 I区5号住出土土器(5)

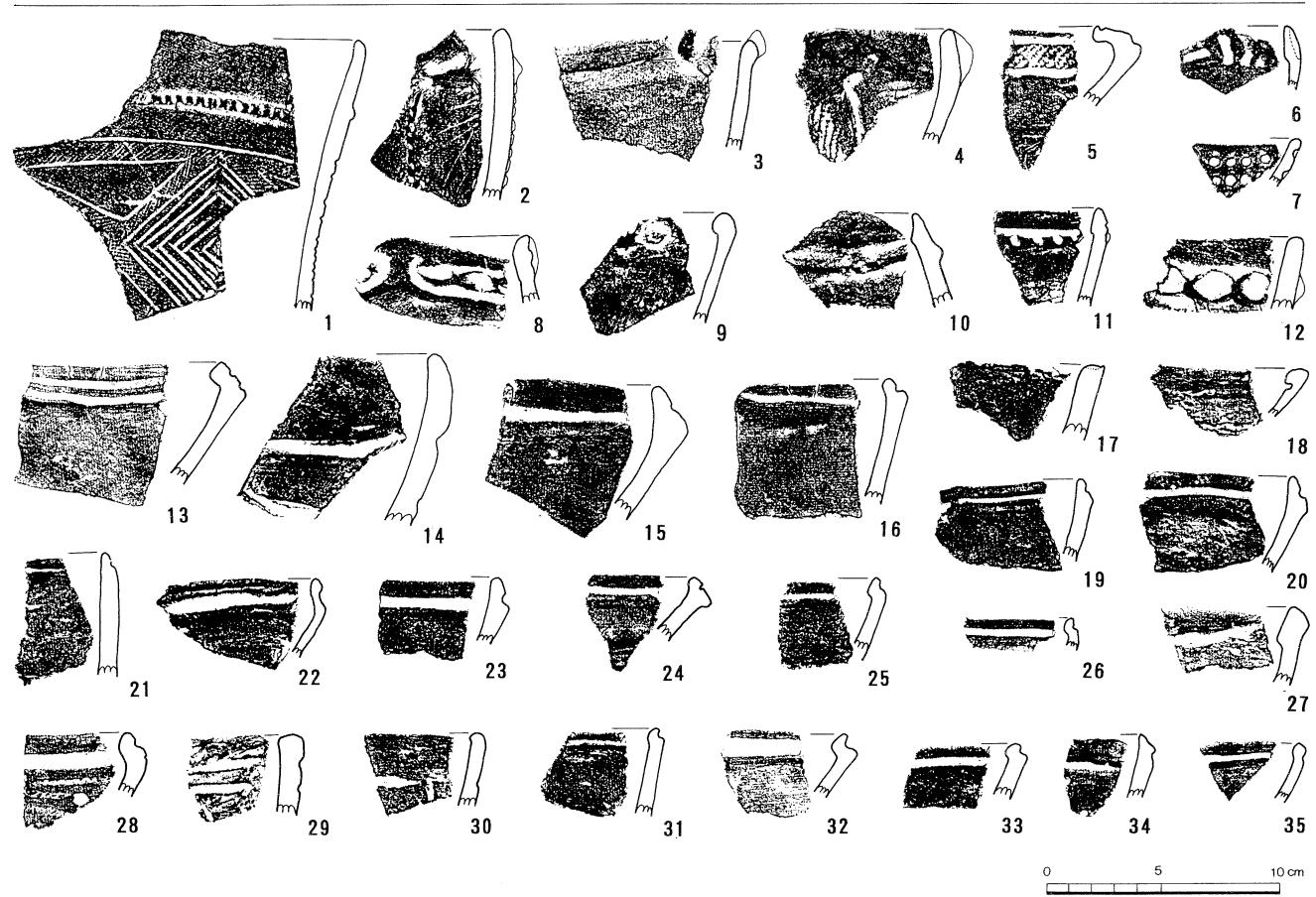


図33 I区6号住出土土器(1)

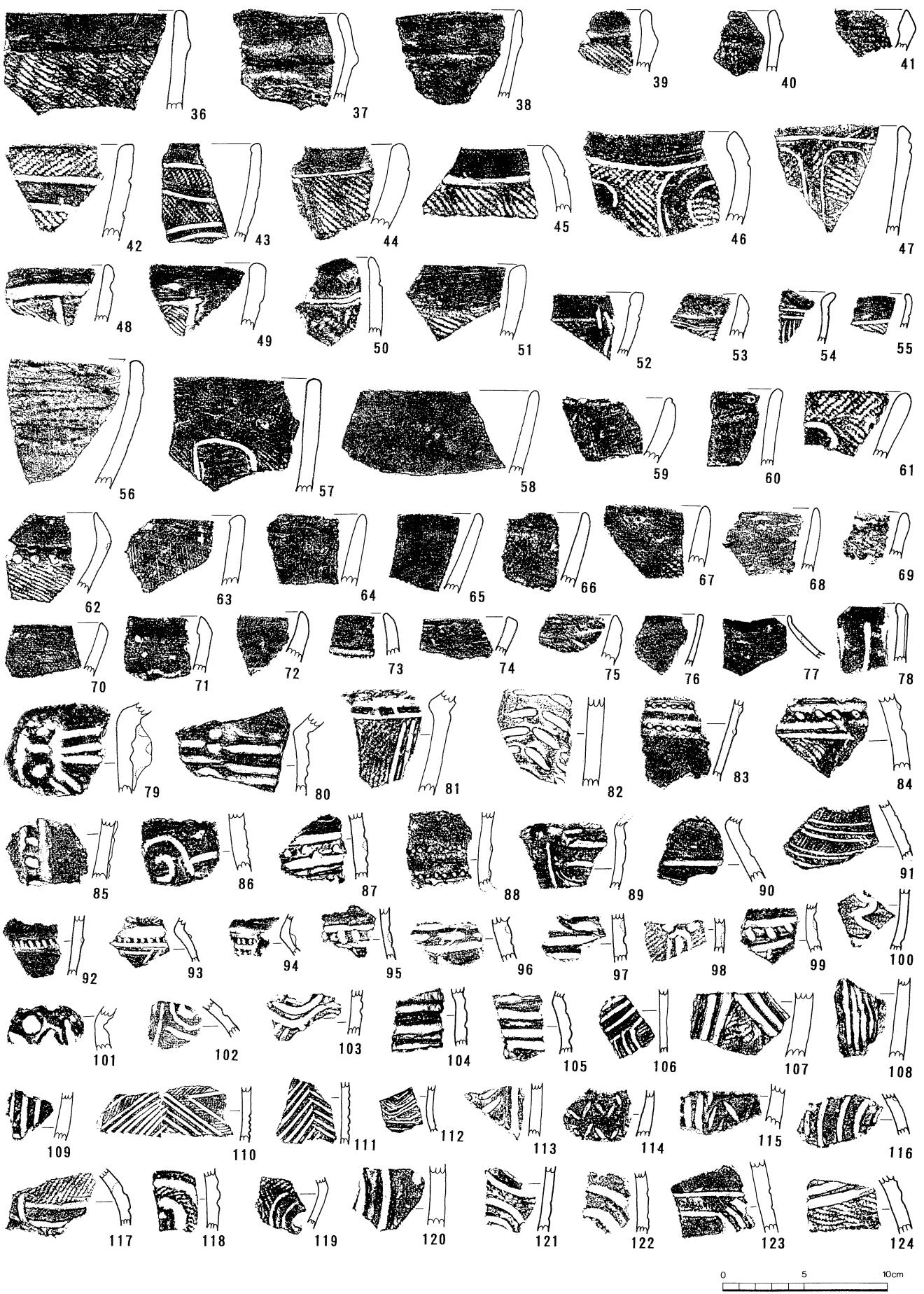
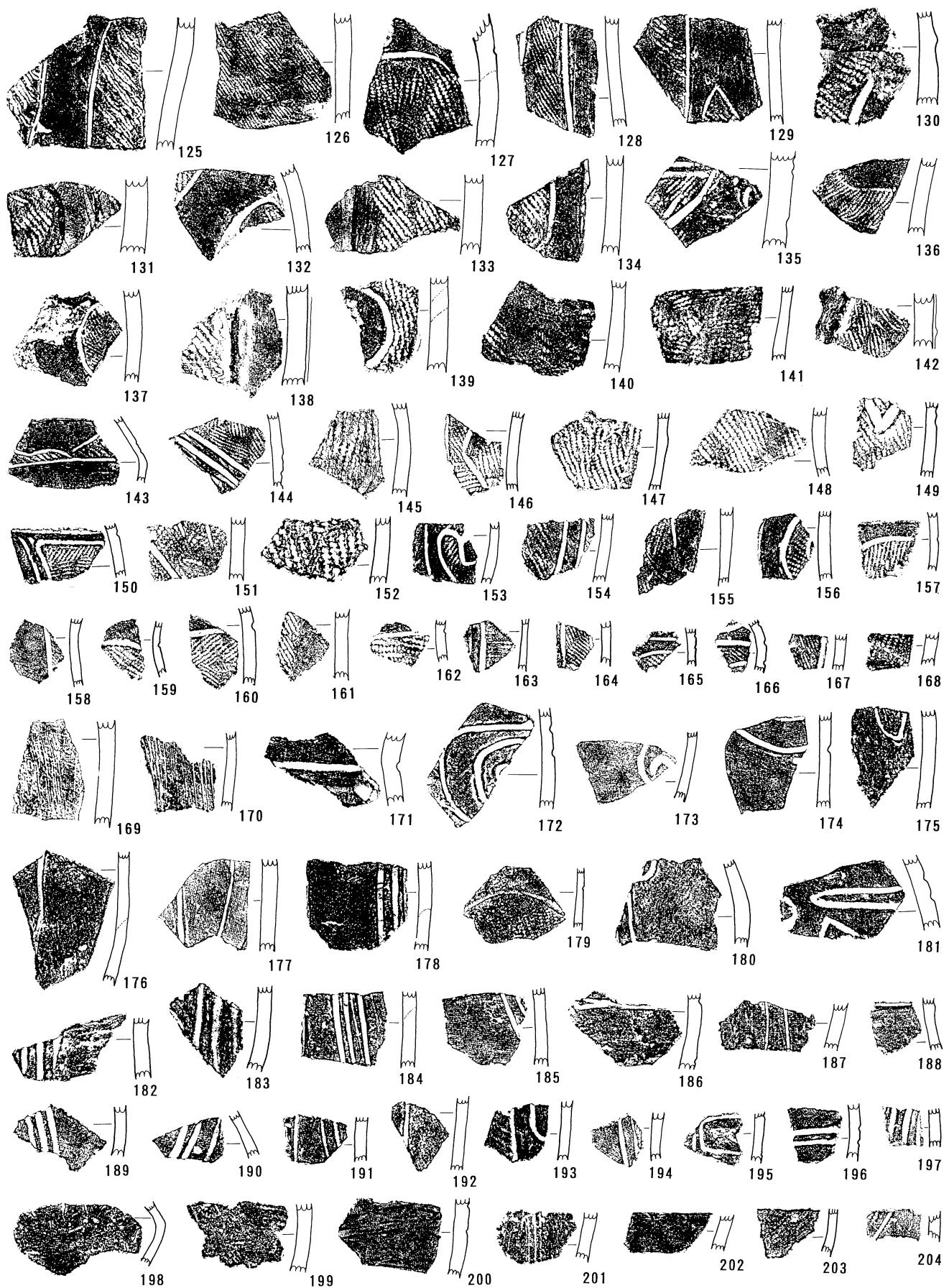


図34 I区6号住出土土器(2)



0 5 10 cm

図35 I区6号住出土土器(3)

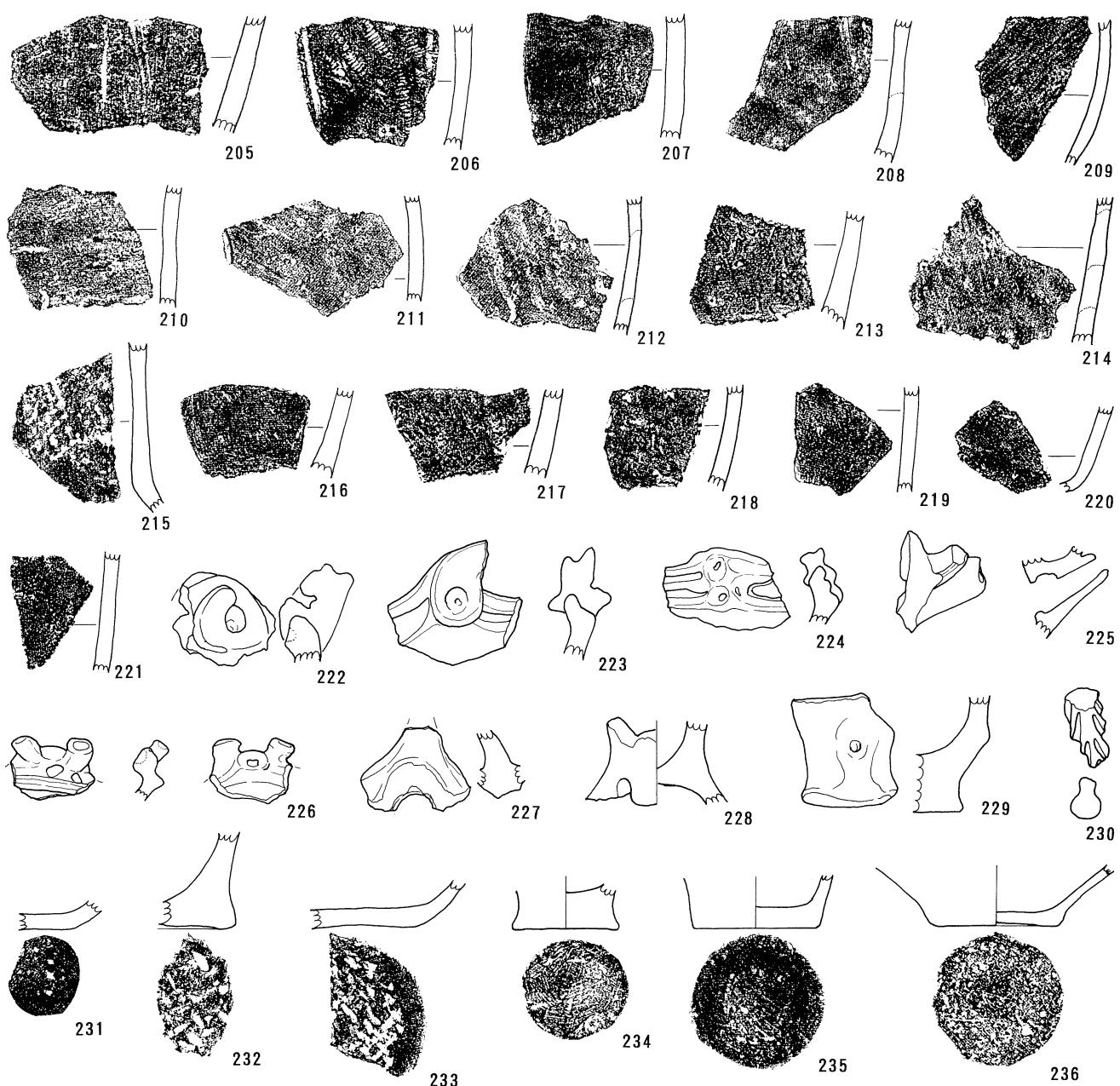


図36 I区6号住出土土器(4)

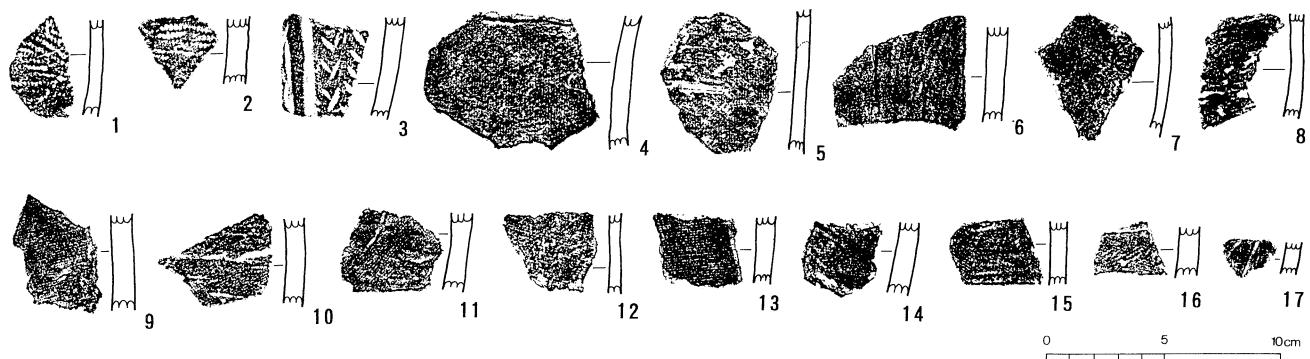


図37 I区7号住出土土器



図38 I区8号住出土土器

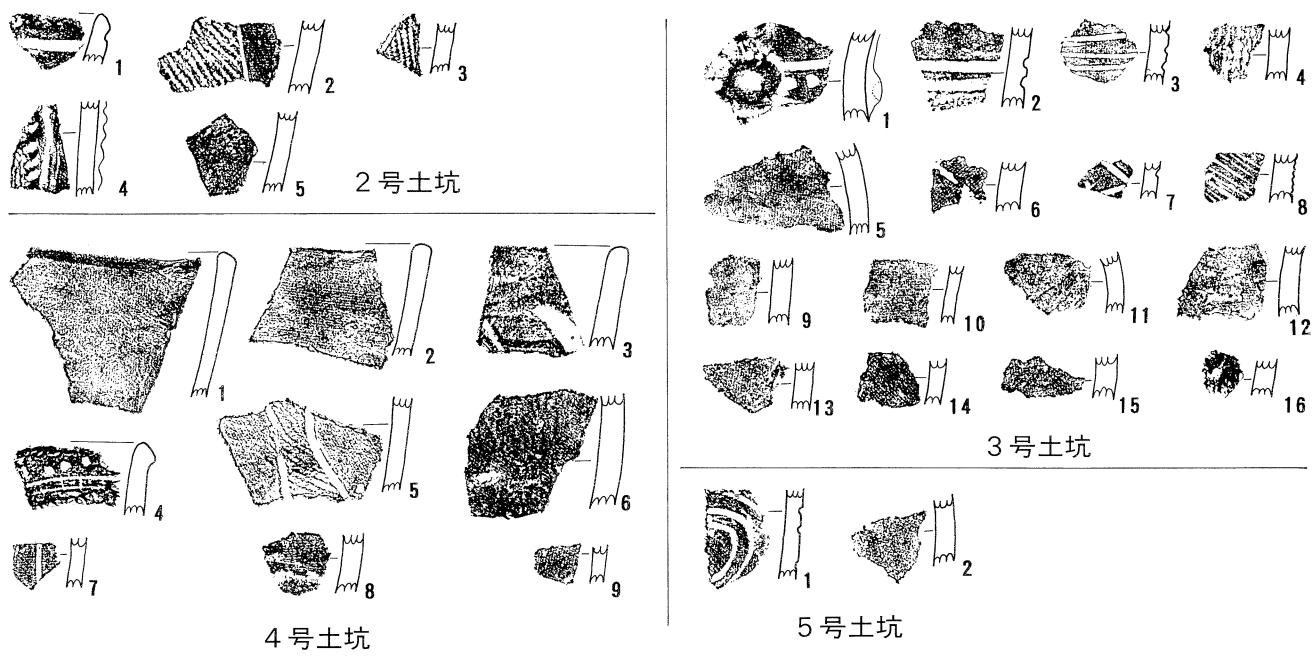


図39 I区土坑内出土土器

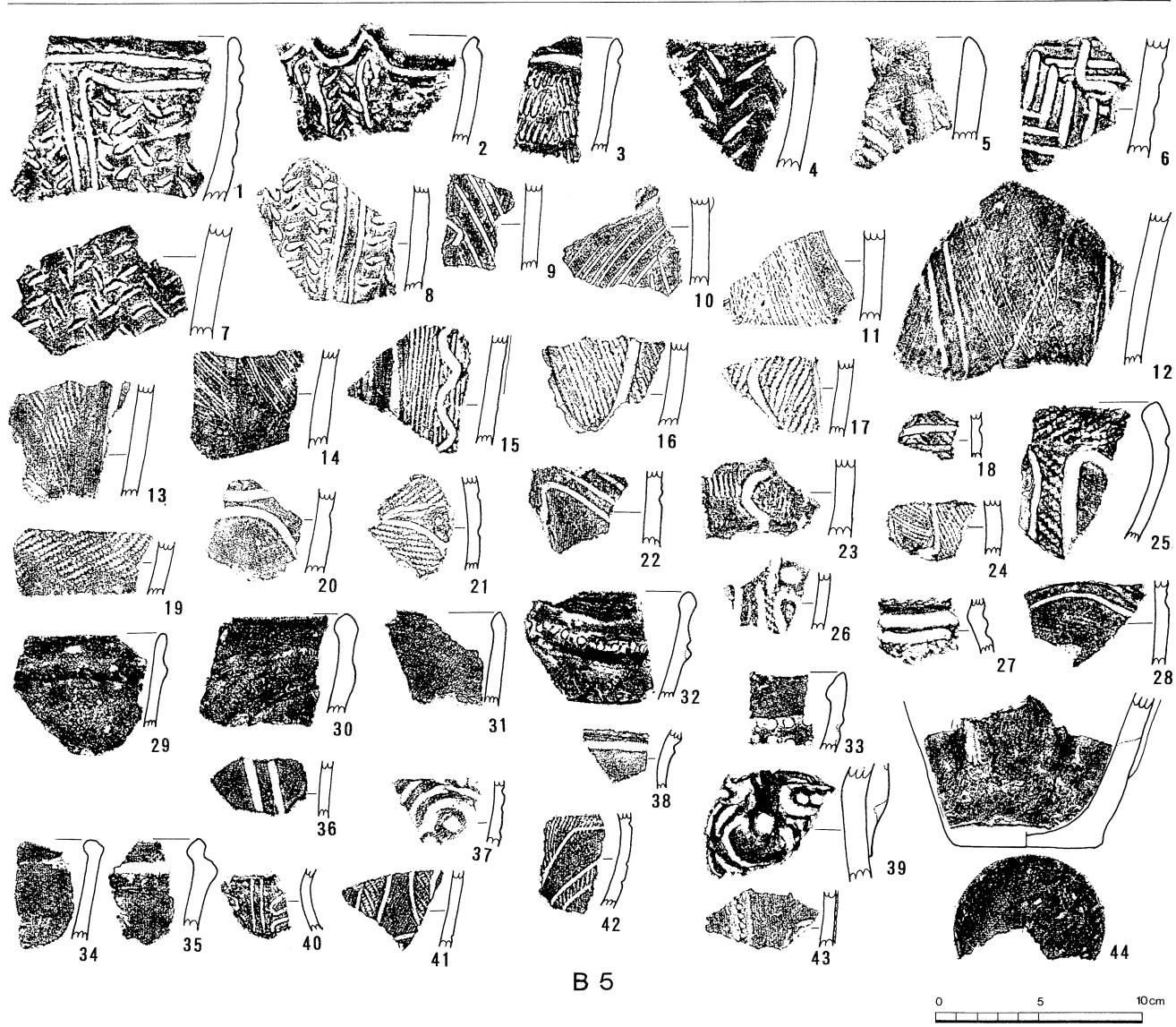


図40 I区出土土器(1)

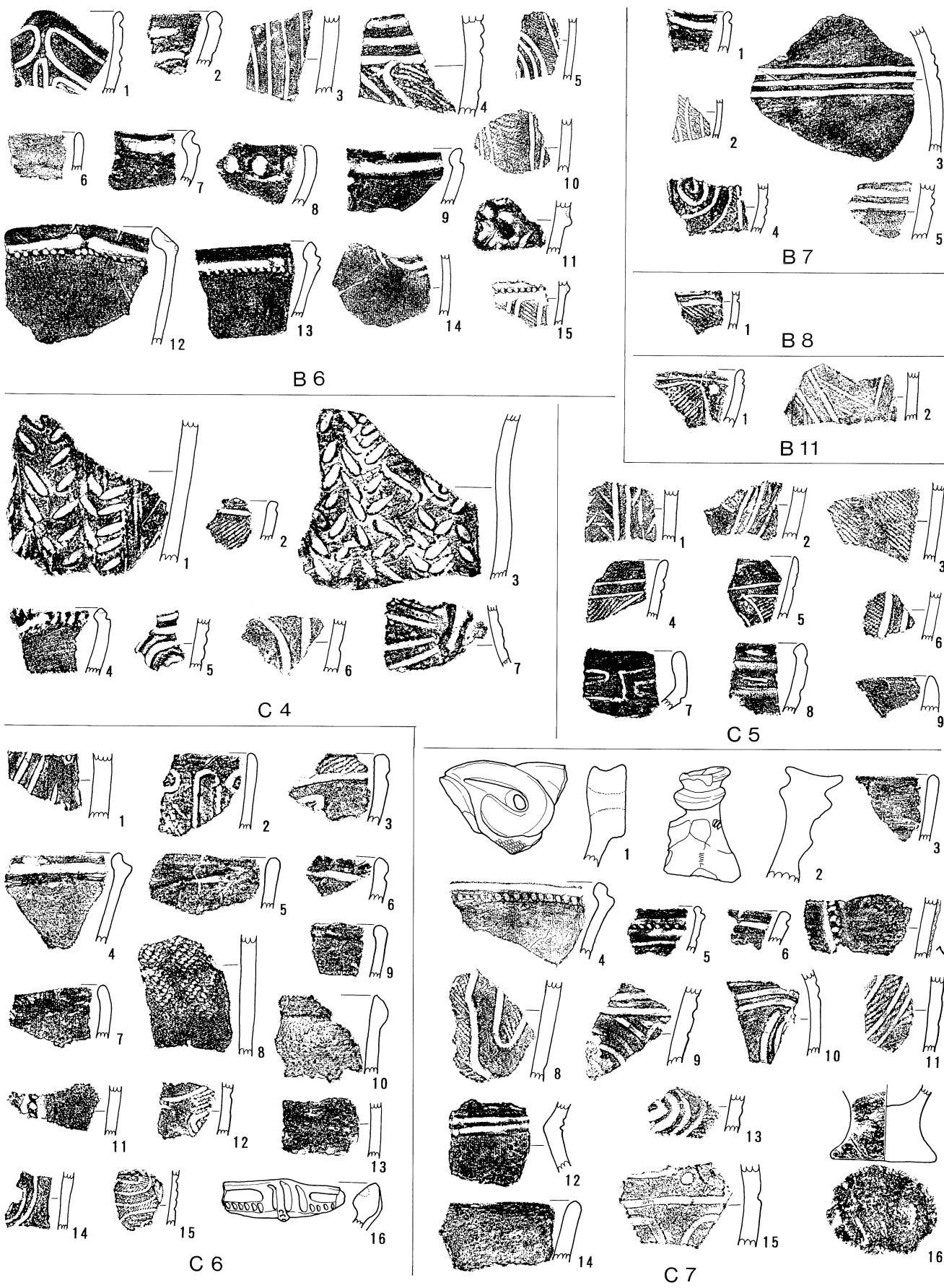


図41 I 区出土土器(2)

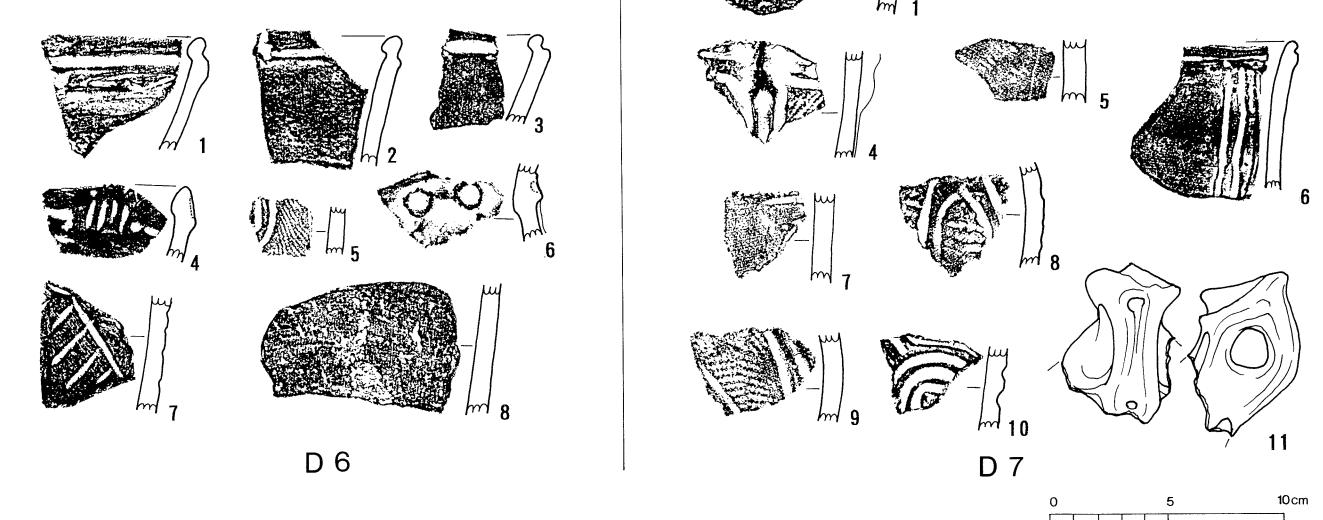
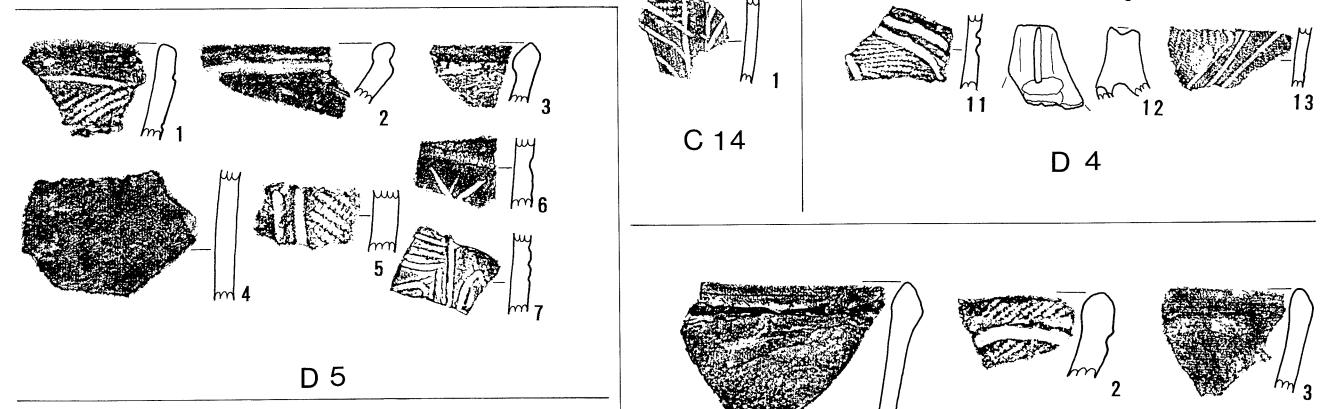
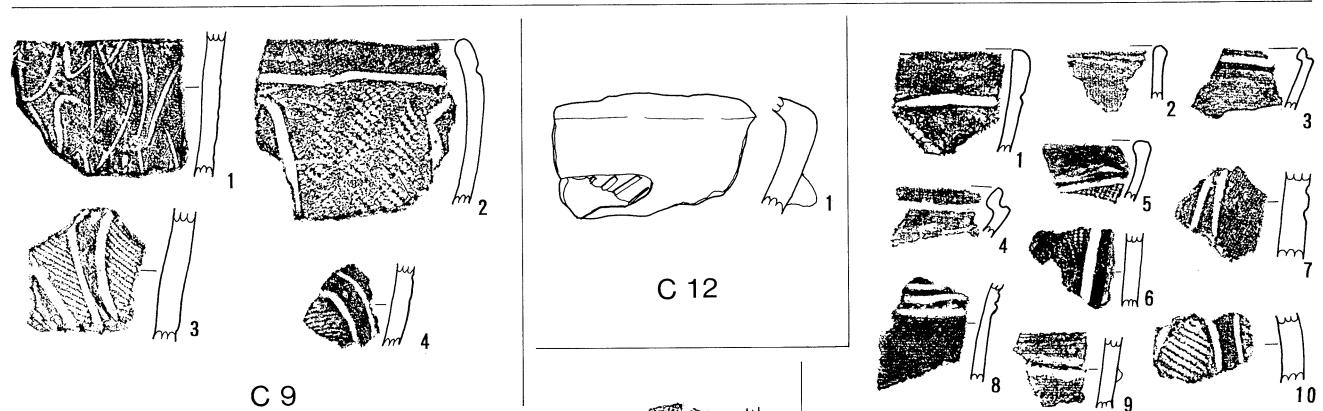
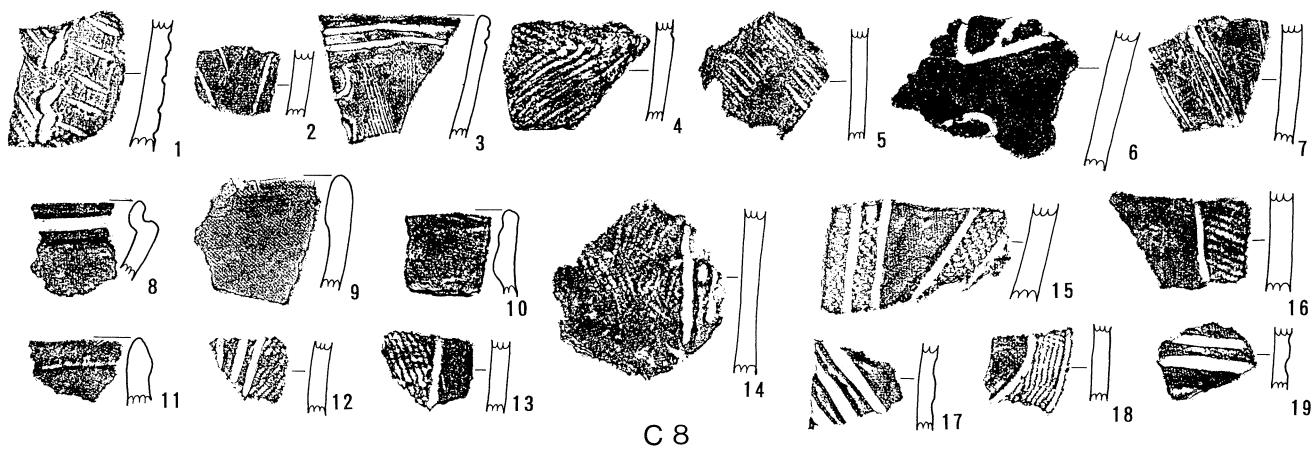


図42 I区出土土器(3)

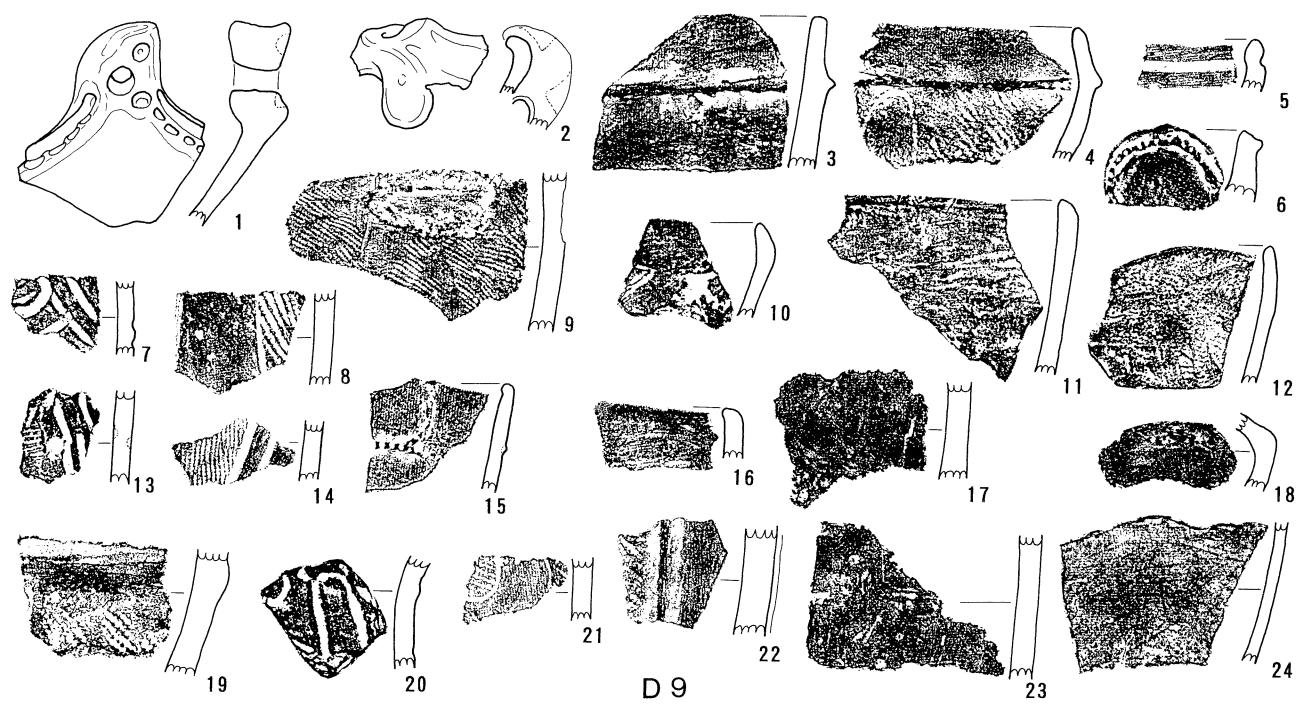
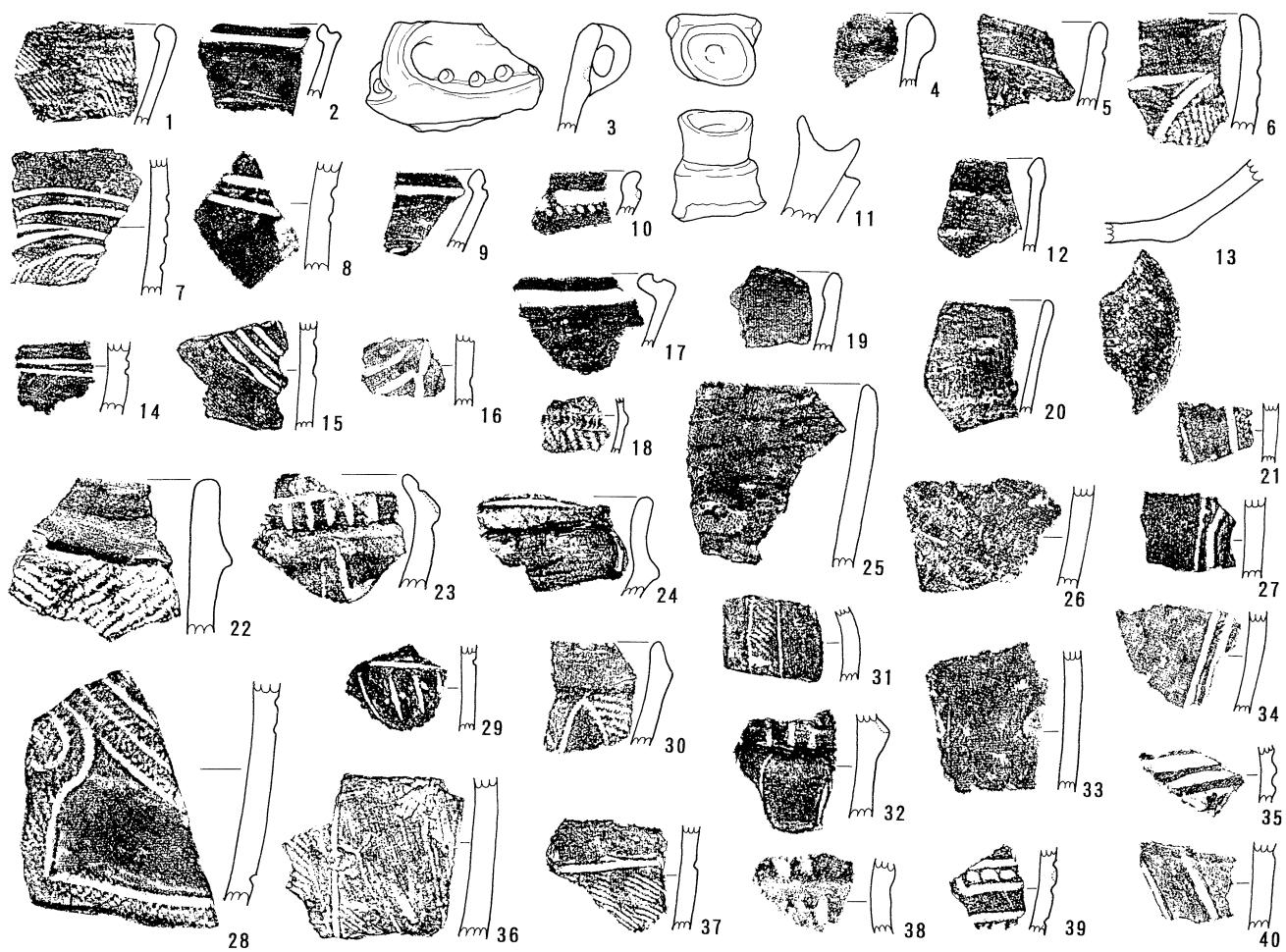
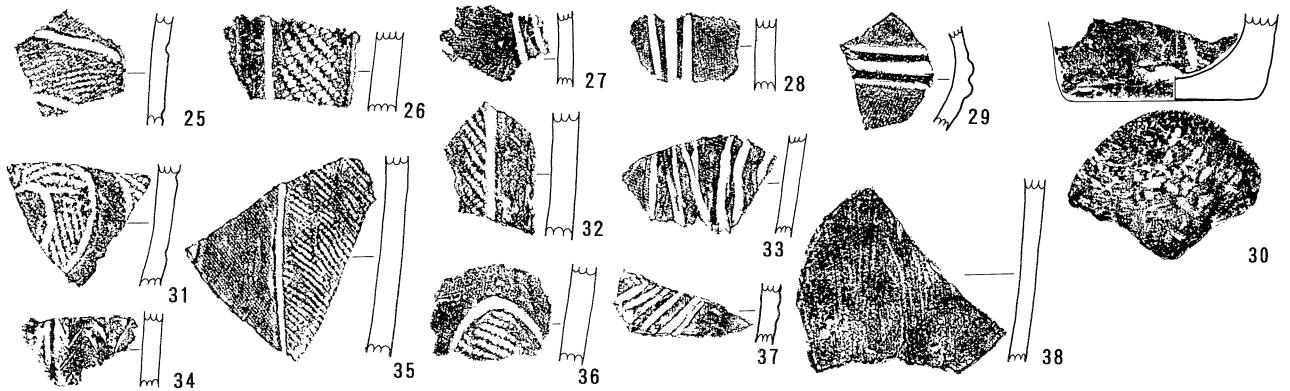
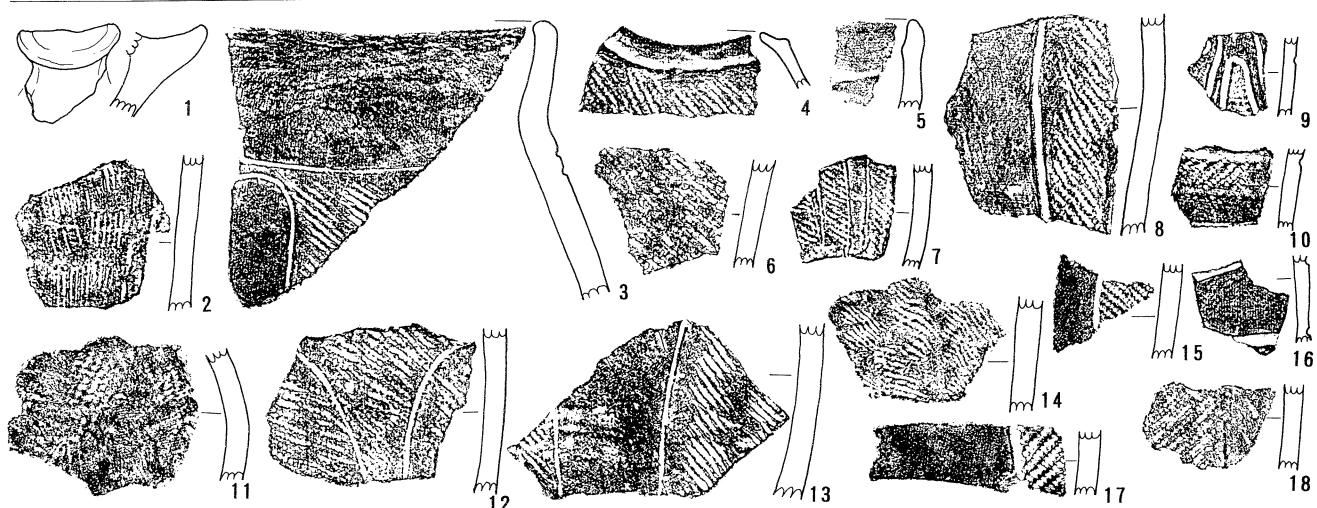


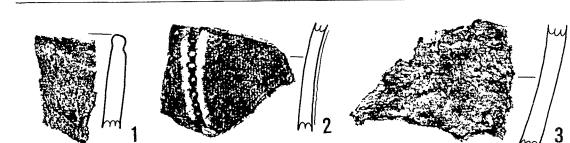
図43 I 区出土土器(4)



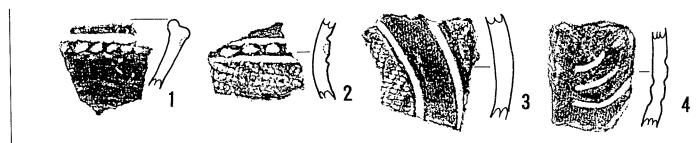
D 9



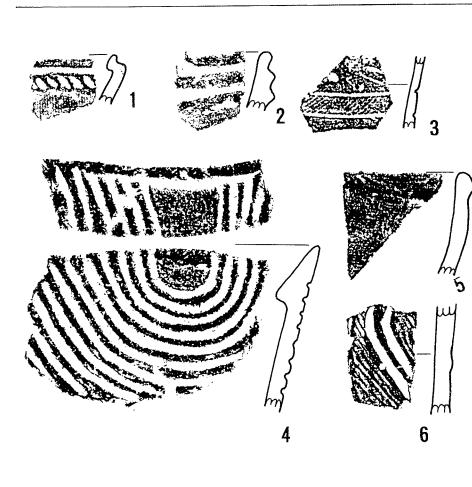
D 10



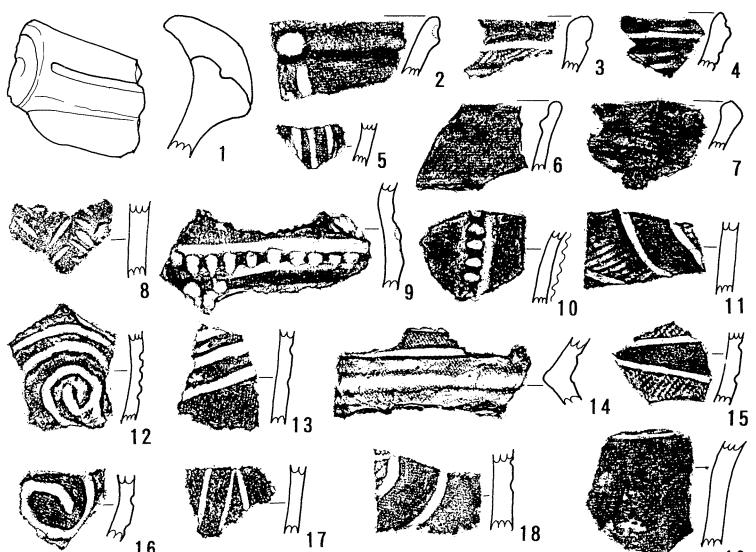
D 11



E 7



D 12



E 8

0 5 10cm

図44 I 区出土土器(5)

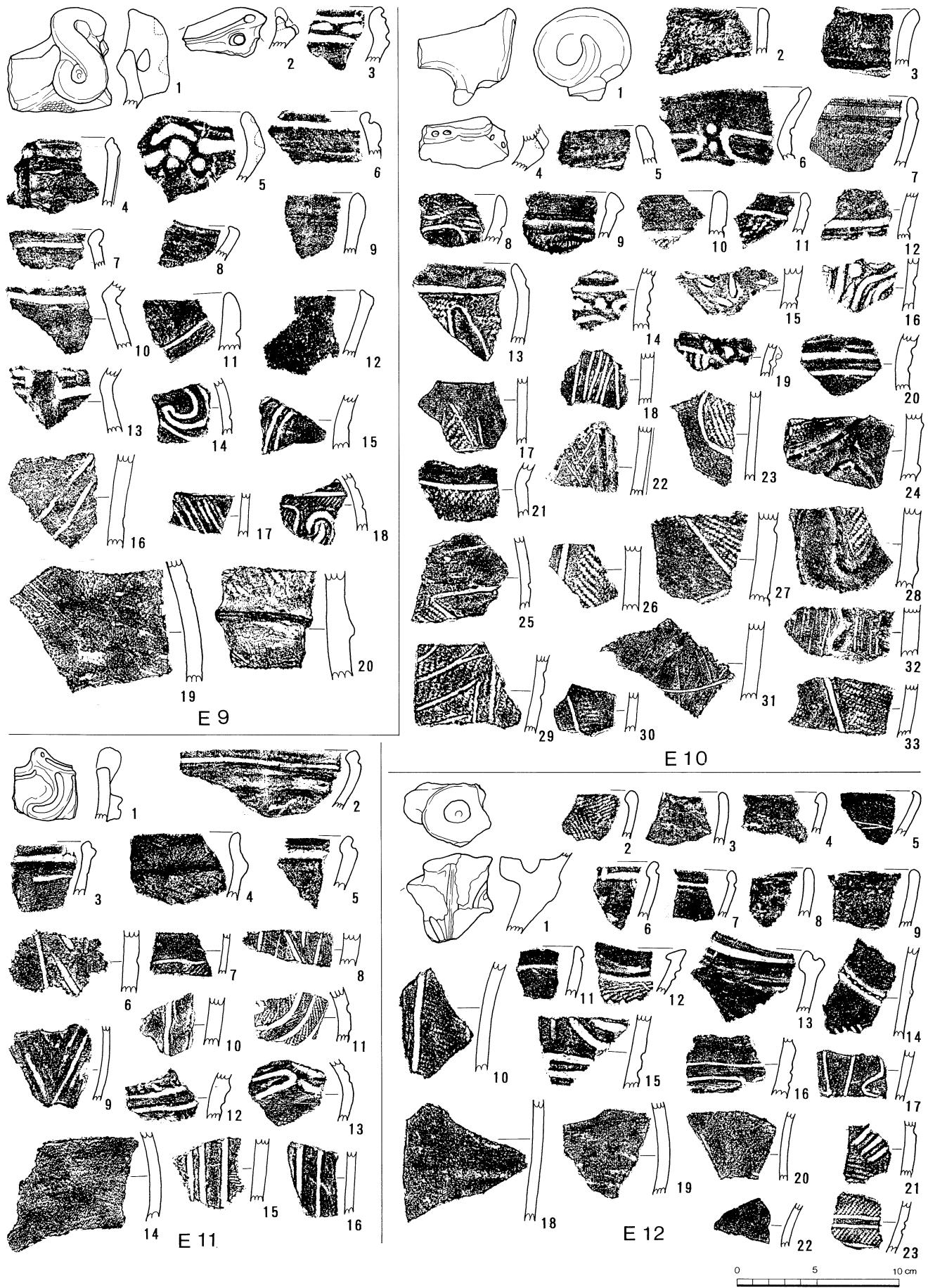
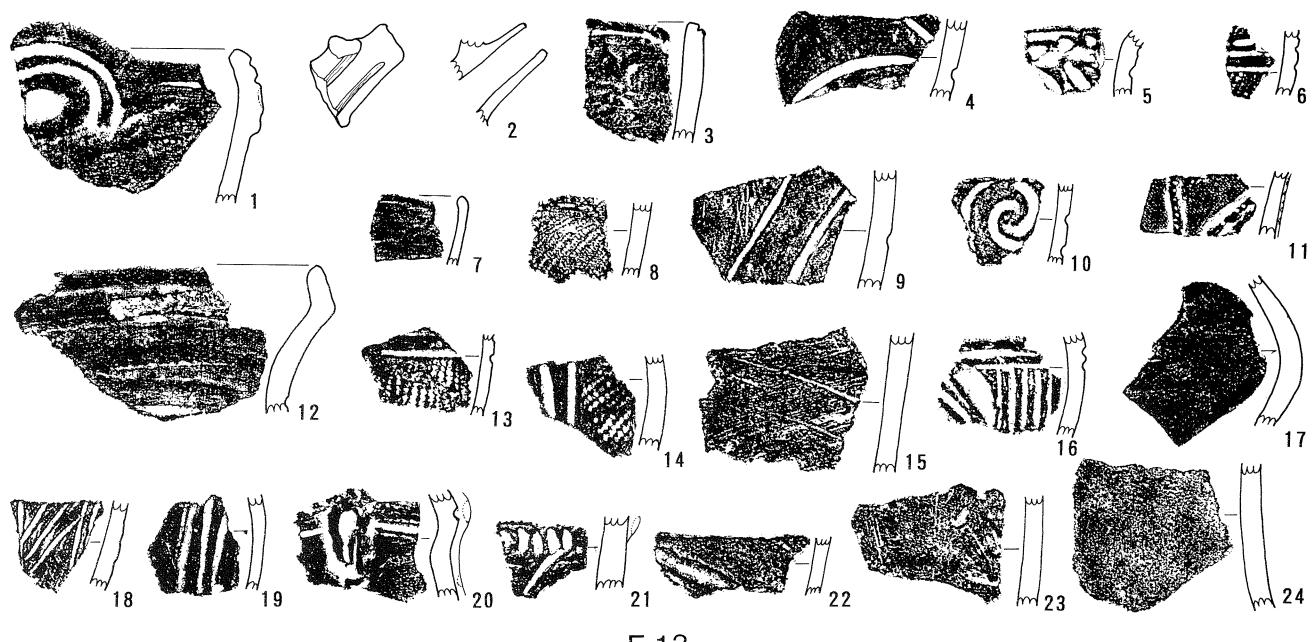
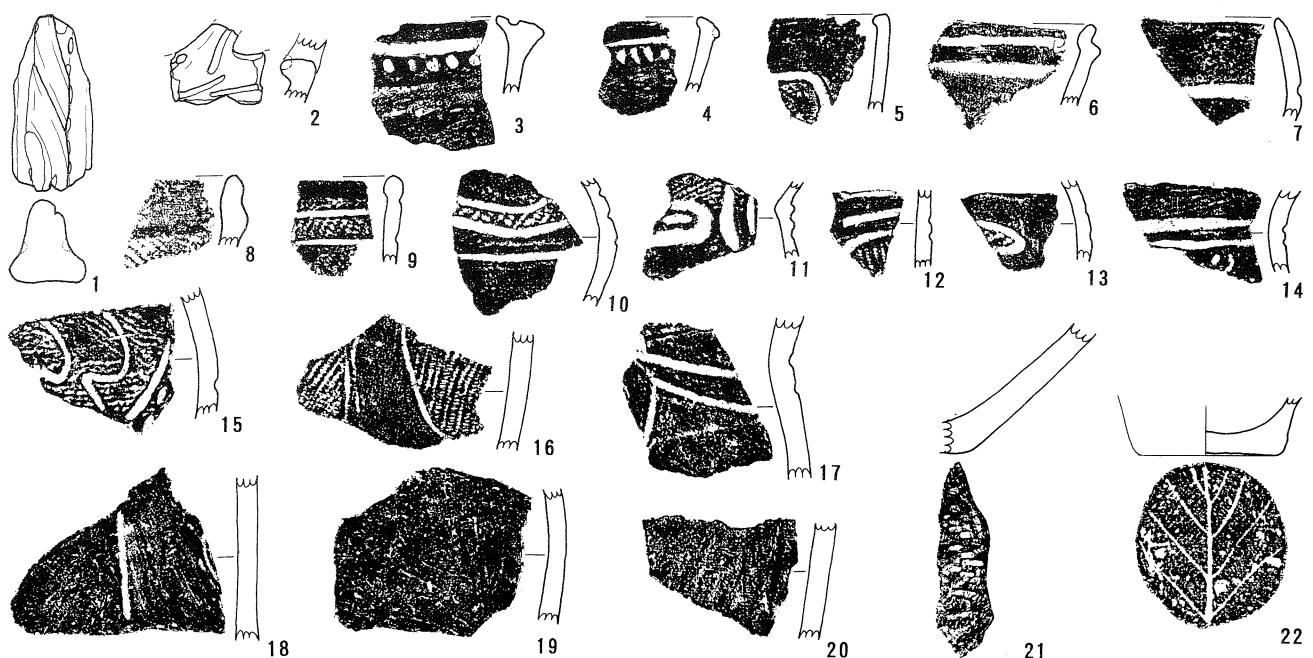


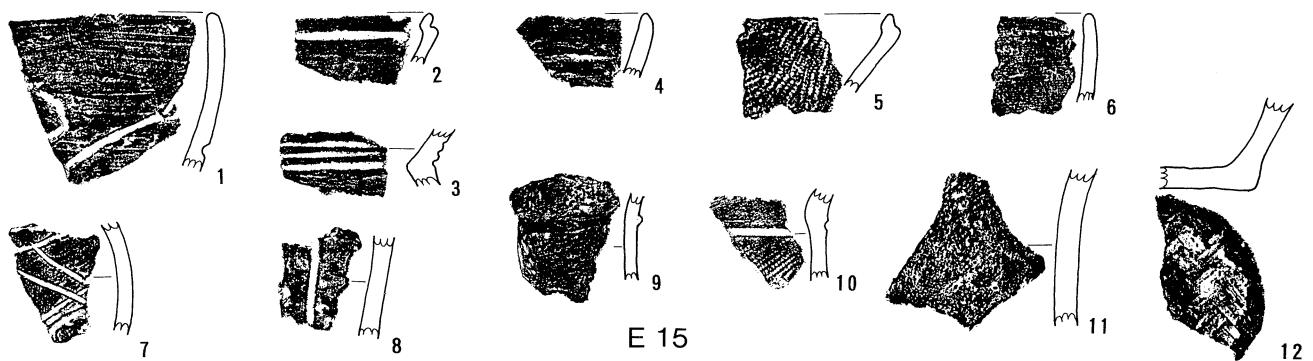
図45 I区出土土器(6)



E 13



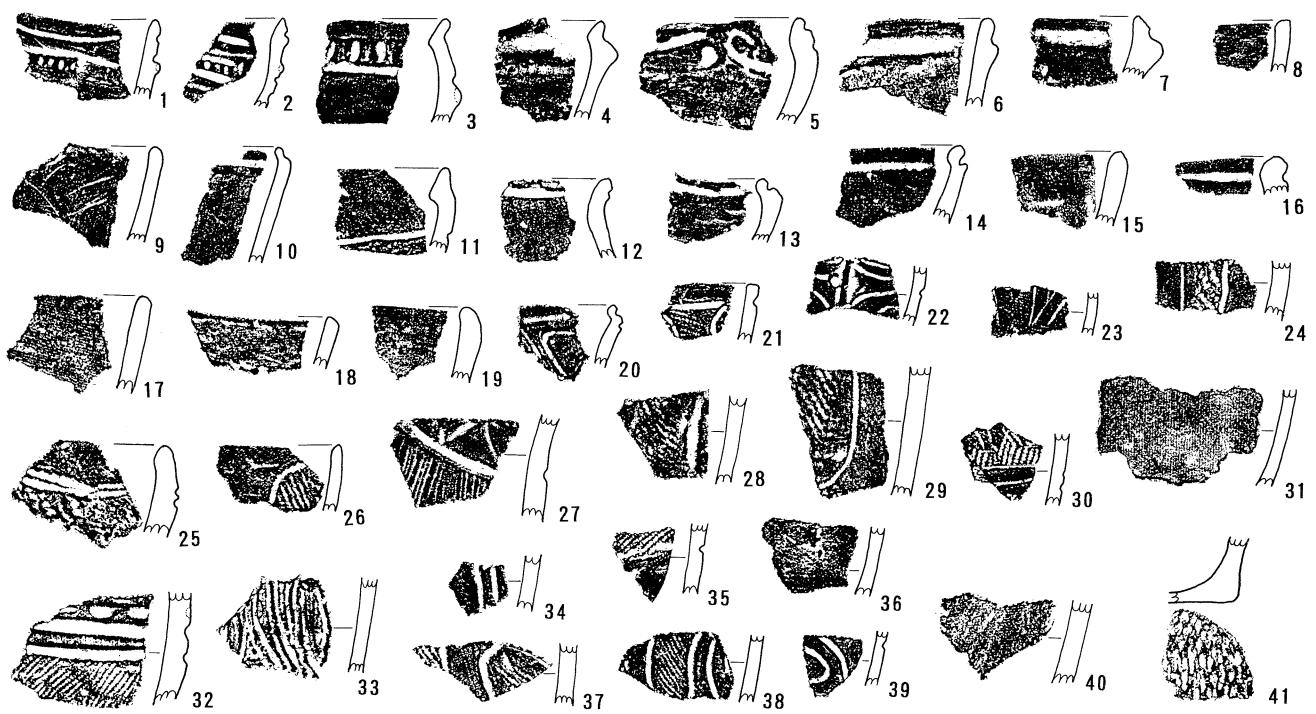
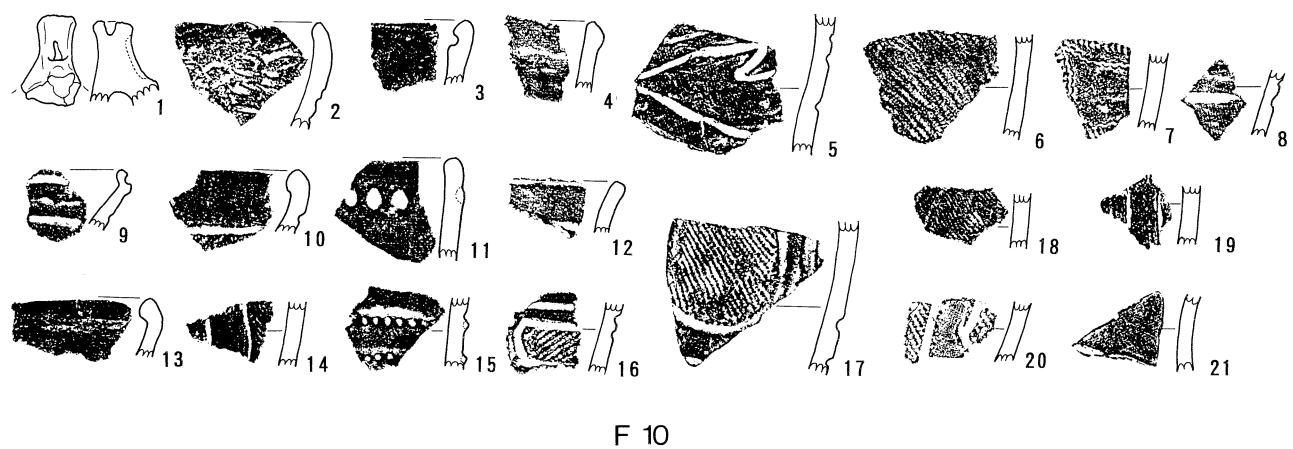
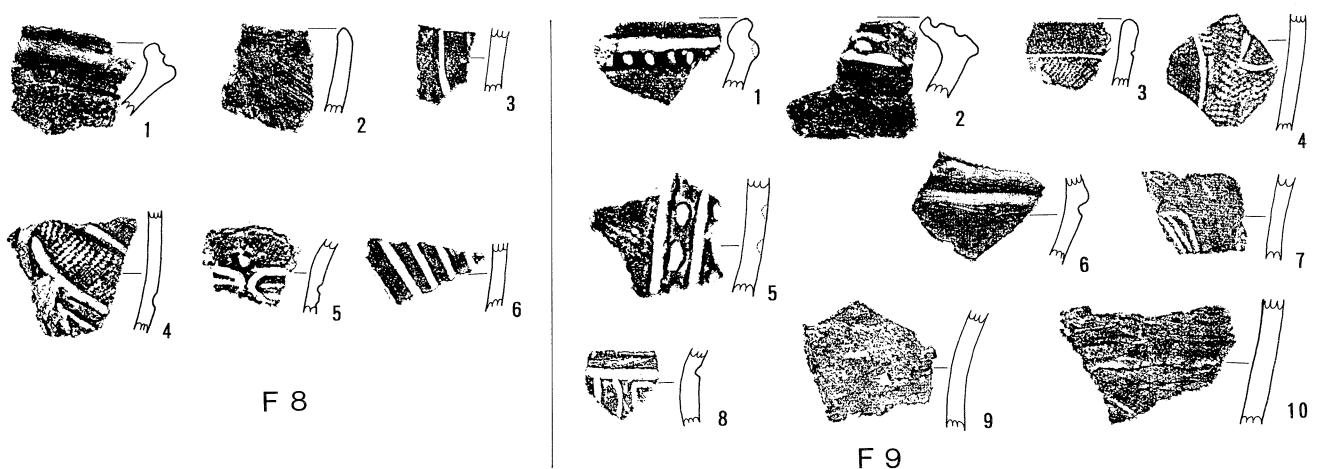
E 14



E 15

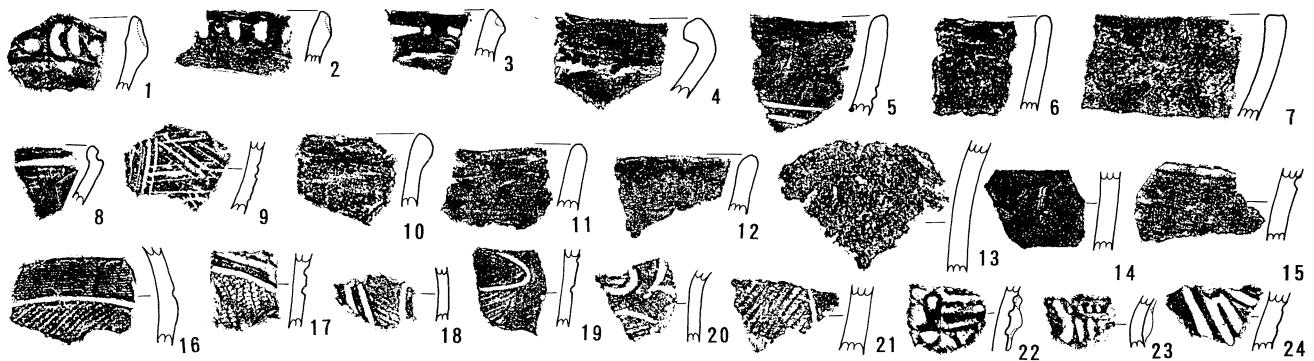
0 5 10 cm

図46 I 区出土土器(7)



0 5 10cm

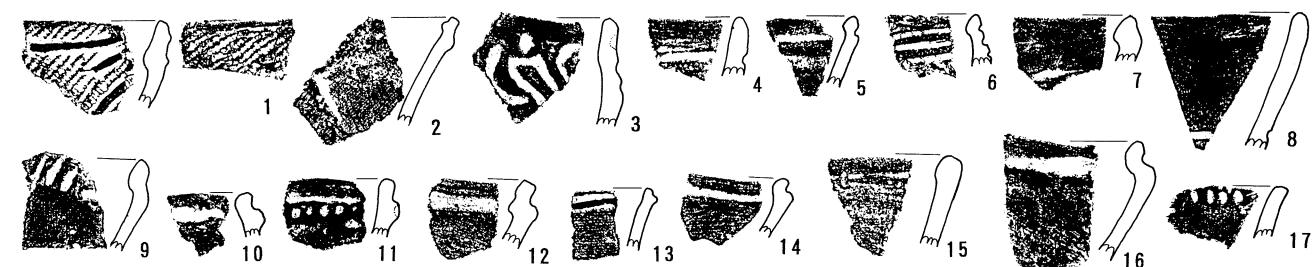
図47 I 区出土土器(8)



F 12



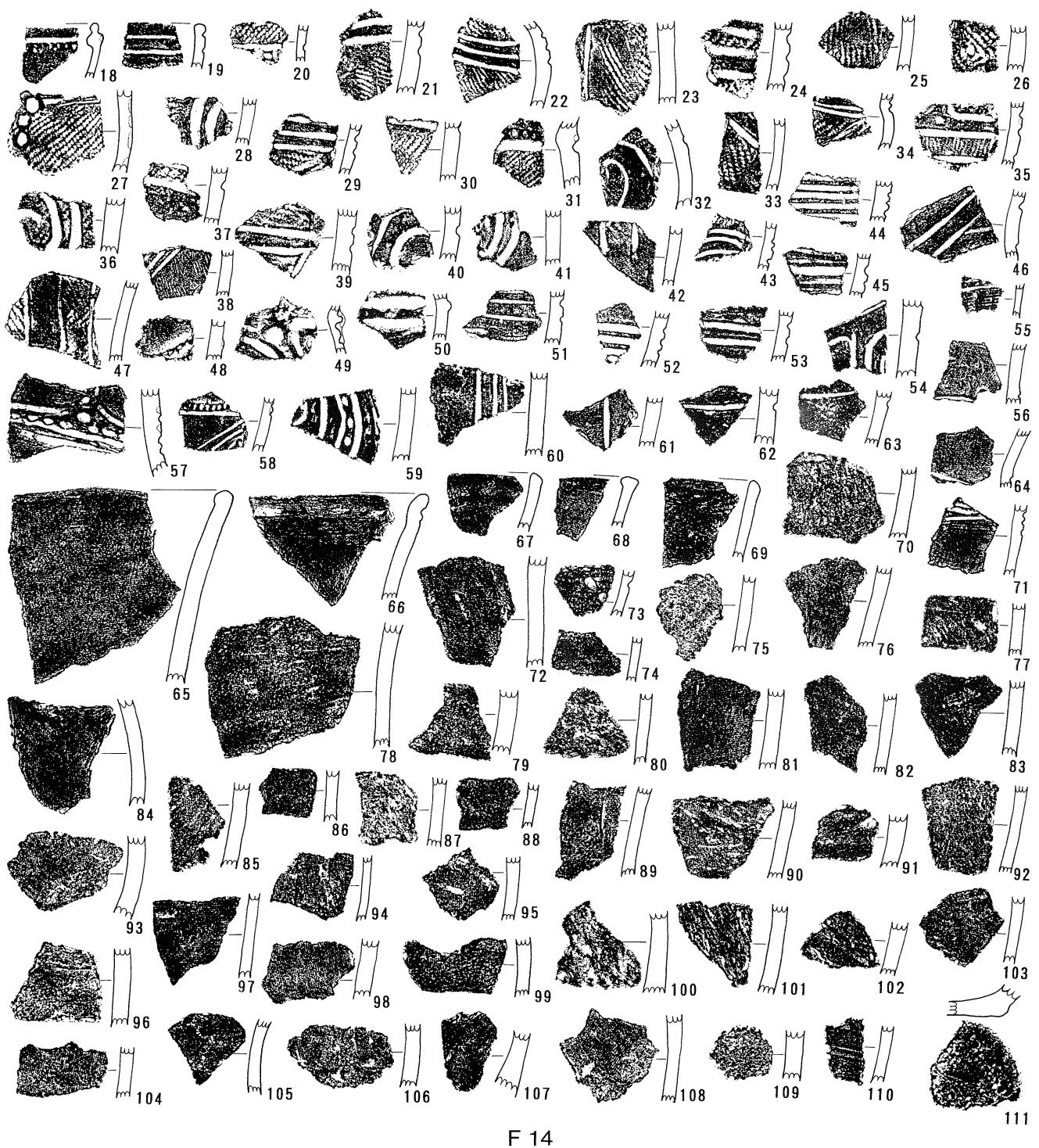
F 13



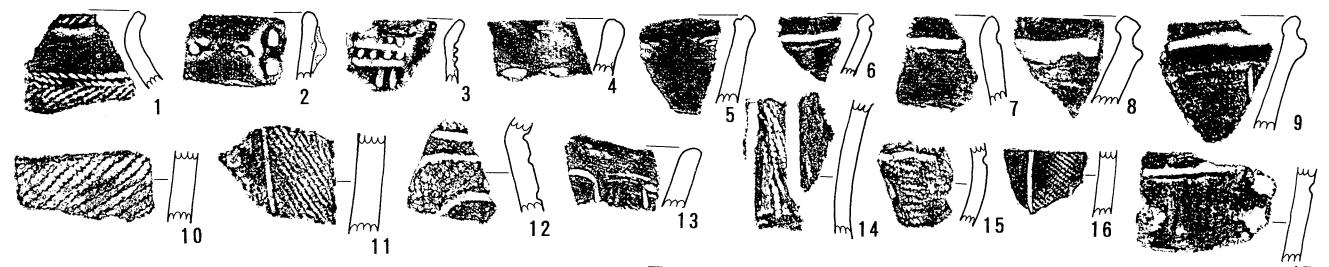
F 14

0 5 10cm

図48 I 区出土土器(9)



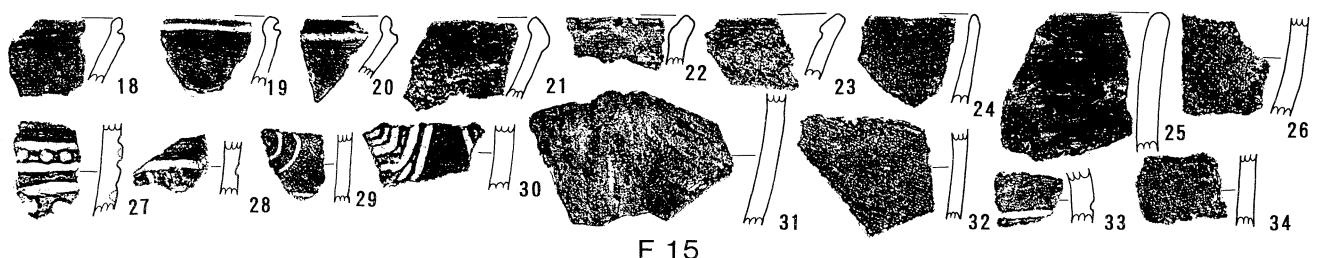
F 14



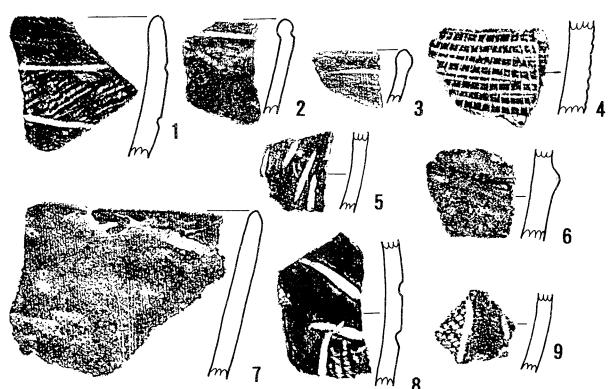
F 15

0 5 10cm

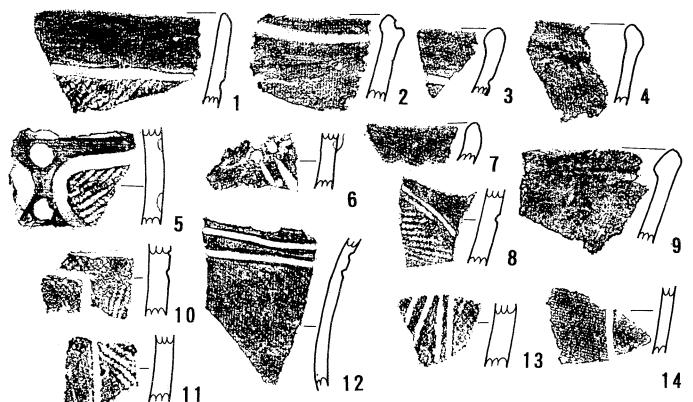
図49 I 区出土土器(10)



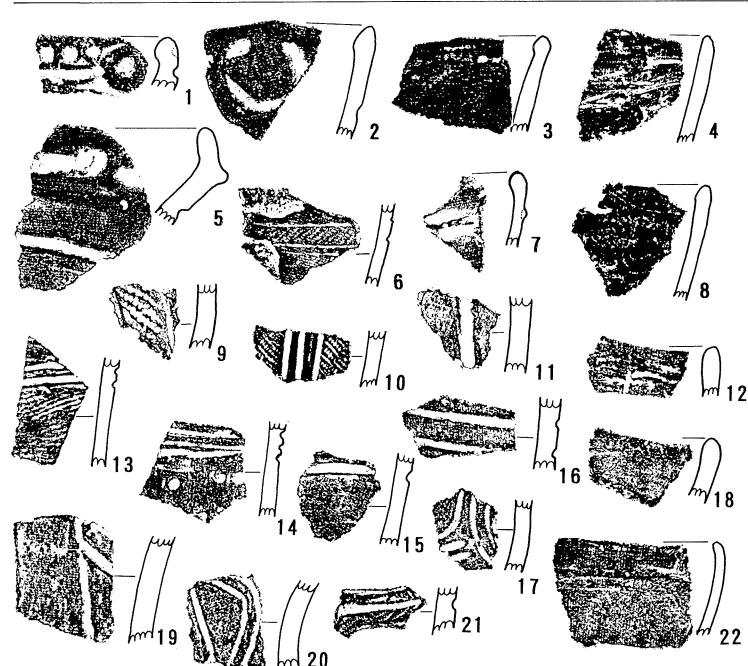
F 15



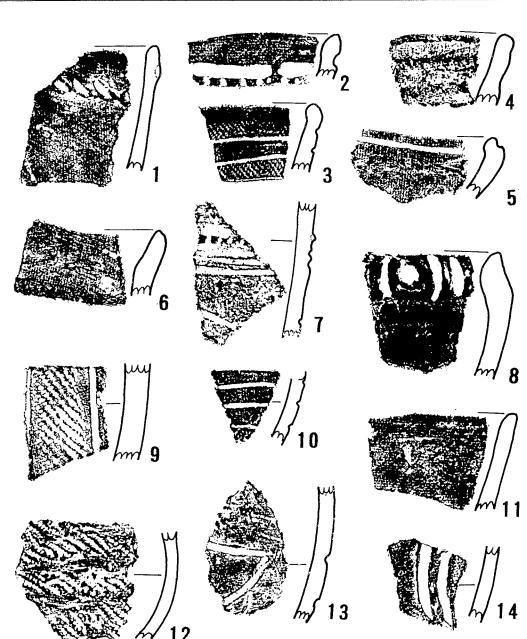
G 12



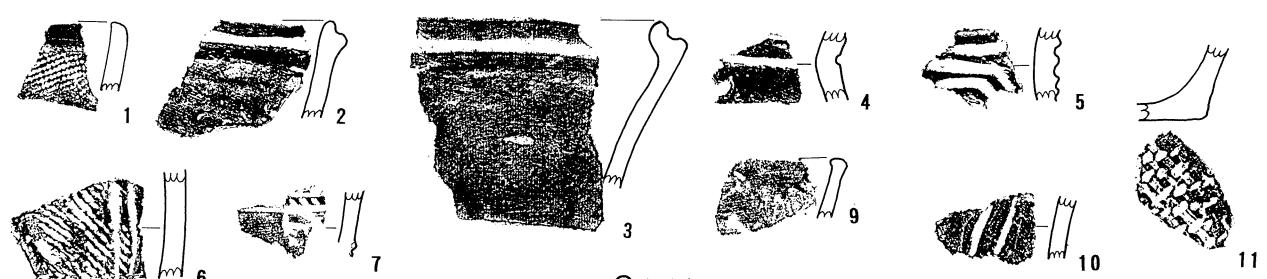
G 13



G 14



G 15



G (一括)

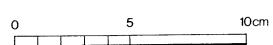
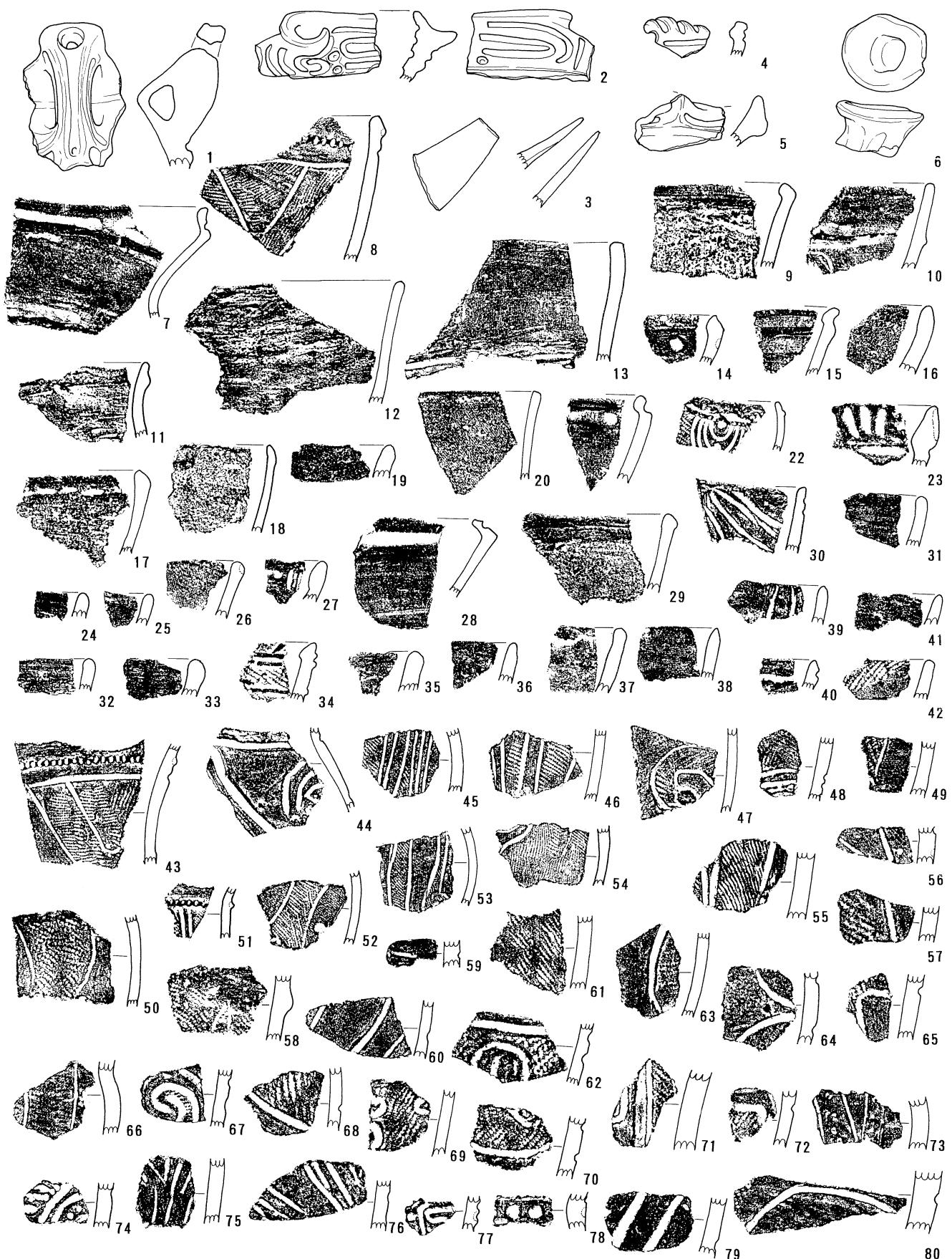


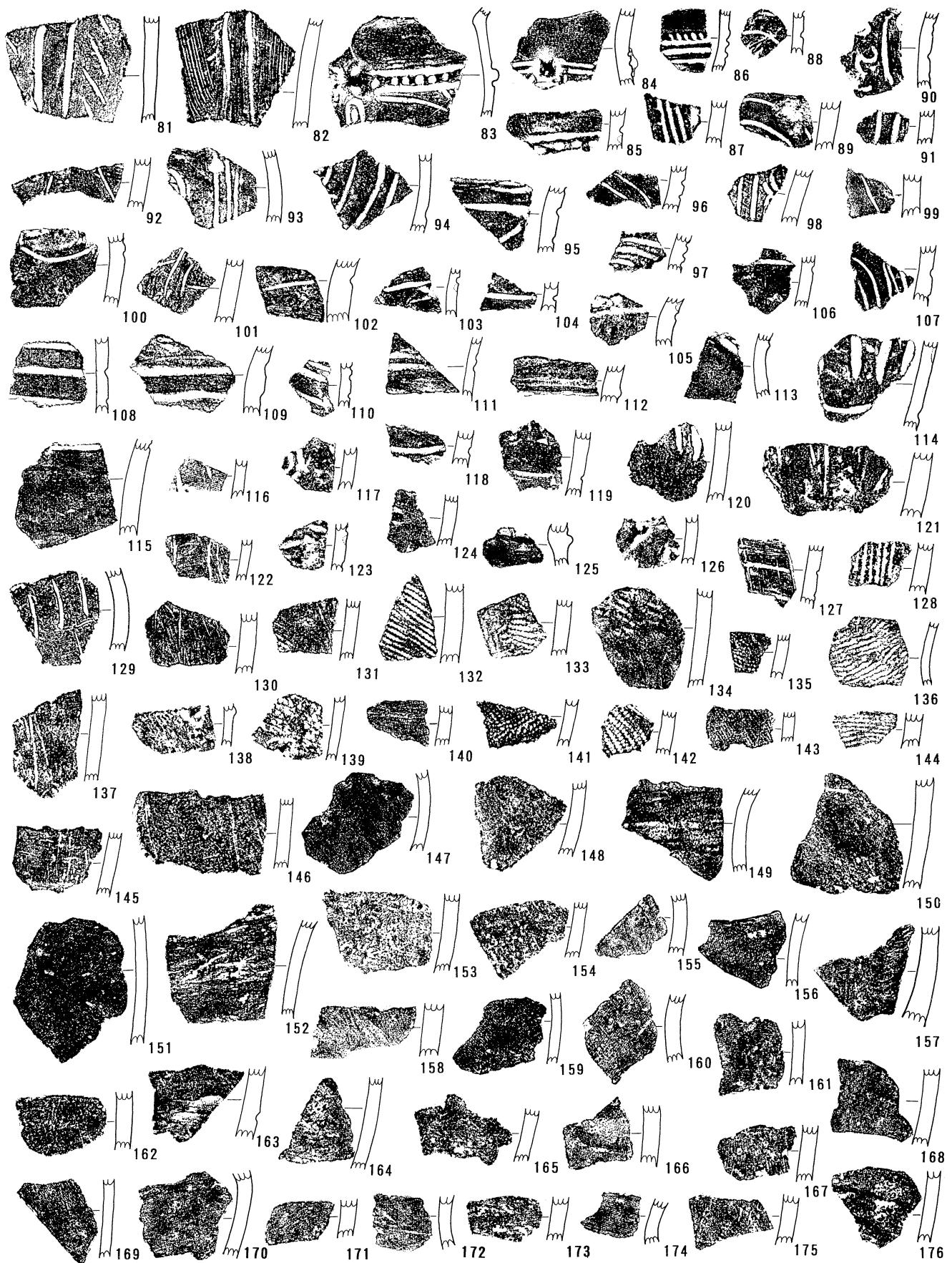
図50 I 区出土土器(11)



一括土器(1)

0 5 10cm

図51 I 区出土土器(1)



一括土器(2)

0 5 10cm

図52 I 区出土土器(13)

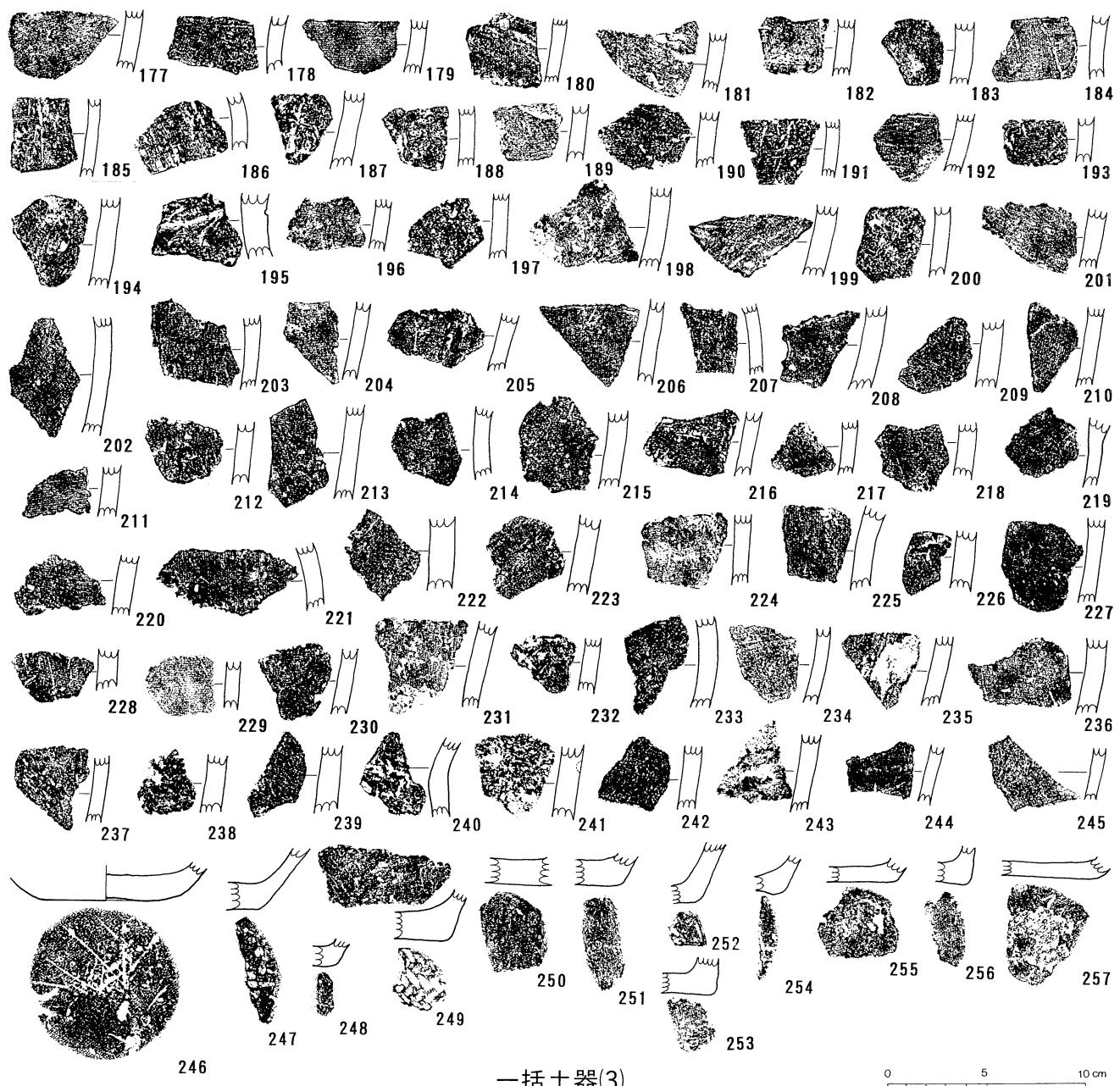


図53 I 区出土土器(14)

## 第4章 II区の調査

### 1 1号住居址（図55、58、59 図版24～27、33、34）

位置 E 3 グリッド。調査区北西部の南斜面。

形状・規模 敷石住居。長軸5.2m、短軸4.4m。南南東方向に若干の張り出しが推定される。主軸の方向はN-31°-W。住居東側のプランは明らかでない。炉付近東側と炉から張り出し部にかけて敷石が認められるが、敷石は重機による表土剥ぎの際に一部移動した可能性がある。

覆土 黒色土が薄く堆積。

炉 径70cmほどの石囲炉。炉体土器を伴う。炉内覆土にはカーボンが多く含まれる。炉体土器設置面には焼土層がある。

柱穴 不明。

遺物出土状況 炉体土器の他に炉北西側から後期前葉の深鉢、土器片が出土。

遺物：土器 図58-1は炉体土器である。沈線による口縁部文様帶、頸部から口縁にかけては刻み目隆帶があり、胴部には縄文地文に沈線による抽象文を下部で横位に連結する鉢形土器である。堀之内 1式新段階から2式古段階に位置づけられよう。図58-2はやはり頸部から口縁にかけてやや開く深鉢で、胴部下半に沈線による懸垂文とこれを斜位に連結する斜行文を組み合わせている。口縁から頸部までは無文である。

遺物：石器 不明。

推定時期 炉体土器から堀之内 1式新段階から同 2式古段階。

### 2 2号住居址（図56、60、61 図版28～31、35）

位置 F 5・F 6 グリッド。調査区西側の南南東斜面。

形状・規模 南西側に若干の張り出しを有する敷石住居。長軸7.0m、短軸6.5m。主軸の方向はN-39°-E。炉を取り囲むように直径4mほどの半円状の配石があり、その西側から南側にかけてやや大型の礫が配される。

覆土 黒色土が薄く堆積。

炉 80cm×60cmの方形石囲炉。炉体土器を伴う。炉内覆土下半には大量の焼土が含まれる。

柱穴 住居内に2基のピットがあるが柱穴なのは不明。

遺物出土状況 炉体土器の他に主として後期前葉の土器片が出土している。

遺物：土器 図60-9は炉体土器である。胴部下半には撚糸文地文に沈線による6単位の抽象文があり、それぞれ下端で横位に連結する。頸部には刻み目隆帶が施される。堀之内 1式新段階か同 2式古段階であろう。

遺物：石器 不明。

推定時期 炉体土器から堀之内 1式新段階から同 2式古段階。

### **3 1号土坑（図57）**

（位置）B 4・C 4 グリッド。（形状・規模）楕円形、たらい状。長径130cm、短径115cm、確認面からの深さ20cm。（覆土）カーボンを少量含む。（遺物）なし。（推定時期）不明。

### **4 2号土坑（図57）**

（位置）C 6・D 6 グリッド。（形状・規模）円形、たらい状。長径100cm、短径90cm、確認面からの深さ15cm。（覆土）カーボンを少量含む。（遺物）なし。（推定時期）不明。

### **5 3号土坑（図57）**

（位置）B 3 グリッド。（形状・規模）楕円形、たらい状。長径150cm、短径110cm、確認面からの深さ20cm。（覆土）ローム粒子を少量含む。（遺物）なし。（推定時期）不明。

### **6 4号土坑（図57 図版32）**

（位置）C 3 グリッド。（形状・規模）円形、たらい状、長径80cm、短径75cm、確認面からの深さ15cm。（覆土）不明。（遺物）人骨、古銭（ともに詳細不明）。（推定時期）中世または近世の墓であろう。

### **7 遺構外出土遺物（図62～86 図版36、37）**

本報告において土器片全てを図示することはできず、口縁部および有文のものを主に抽出した。無文の胴部片についてはおよそ半数を図示した。II区はI区に比較して土器出土量が多く、大きい土器片も目立つ。

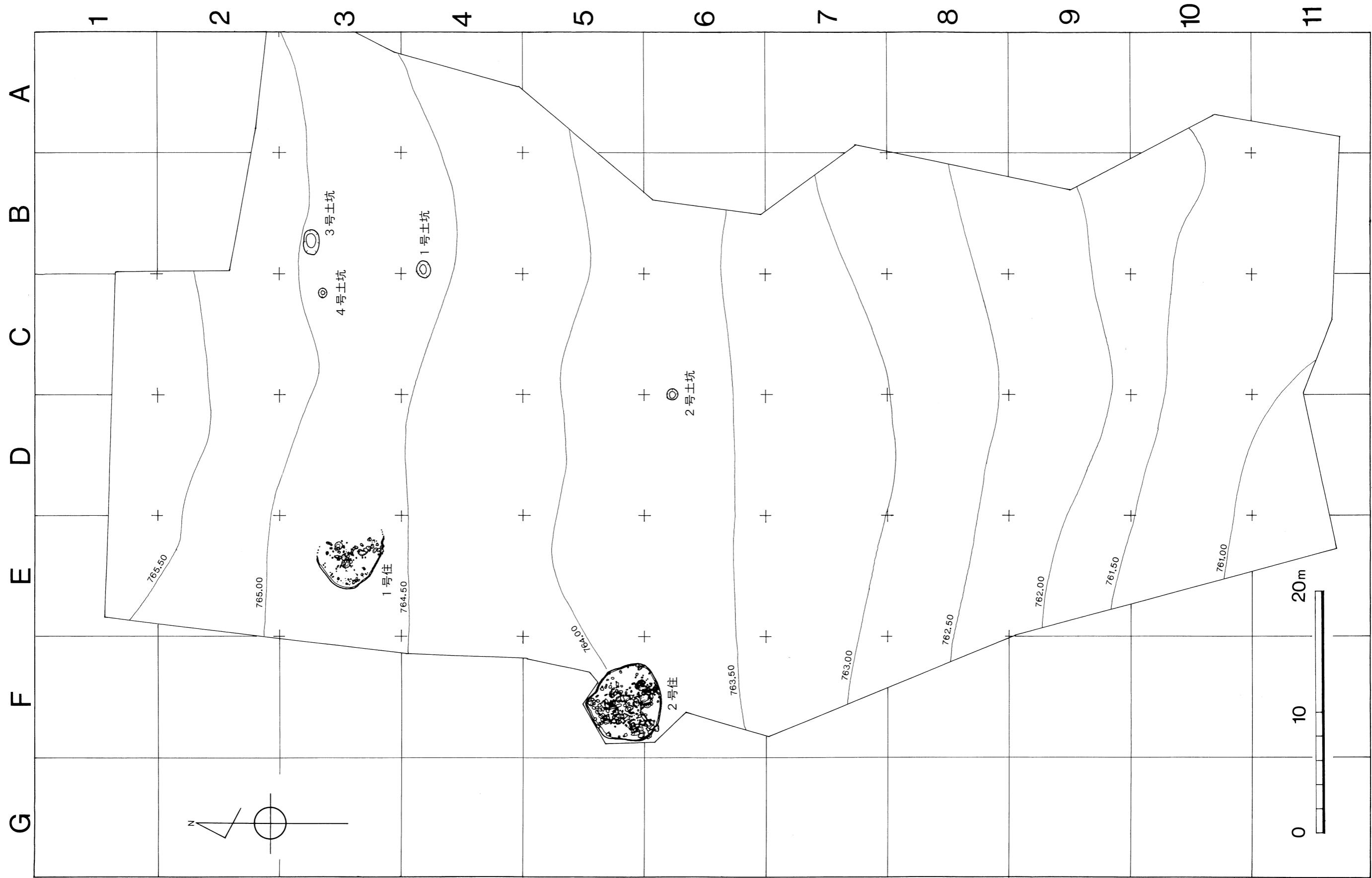


図54 別当西遺跡II区全体図

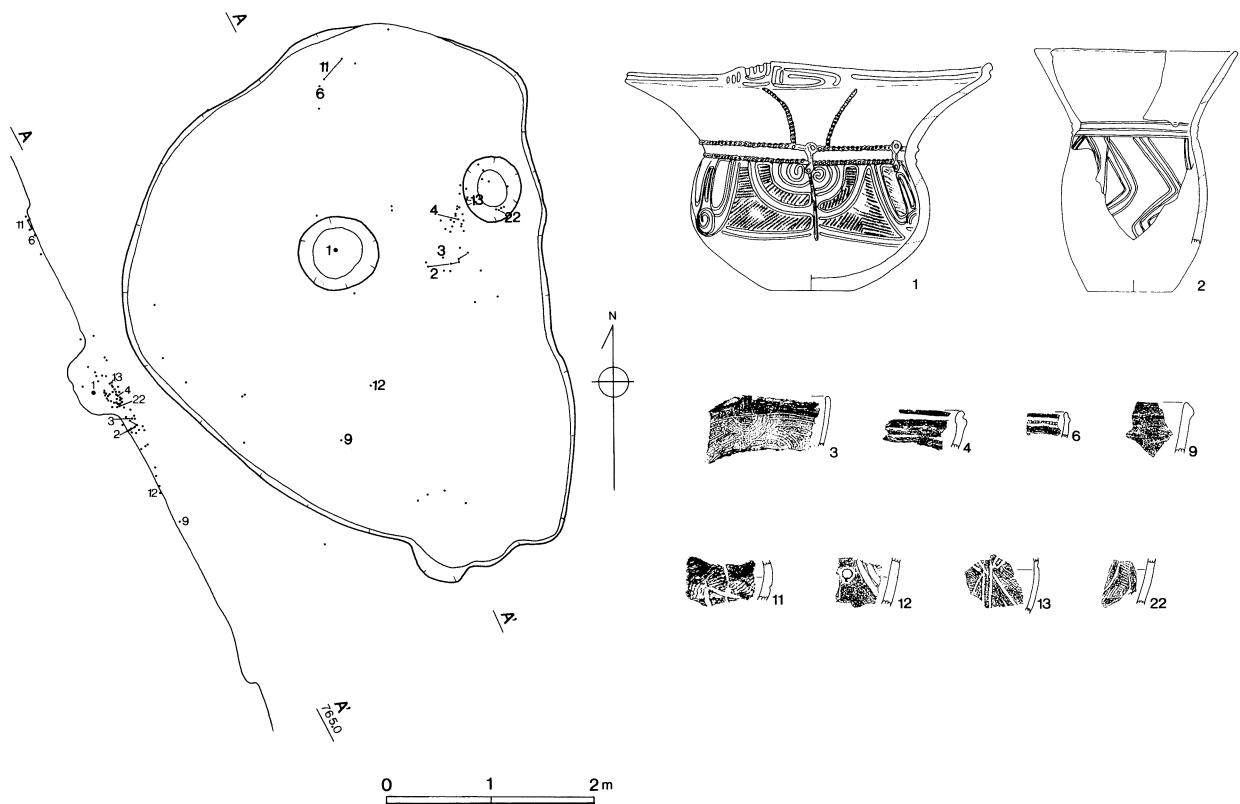
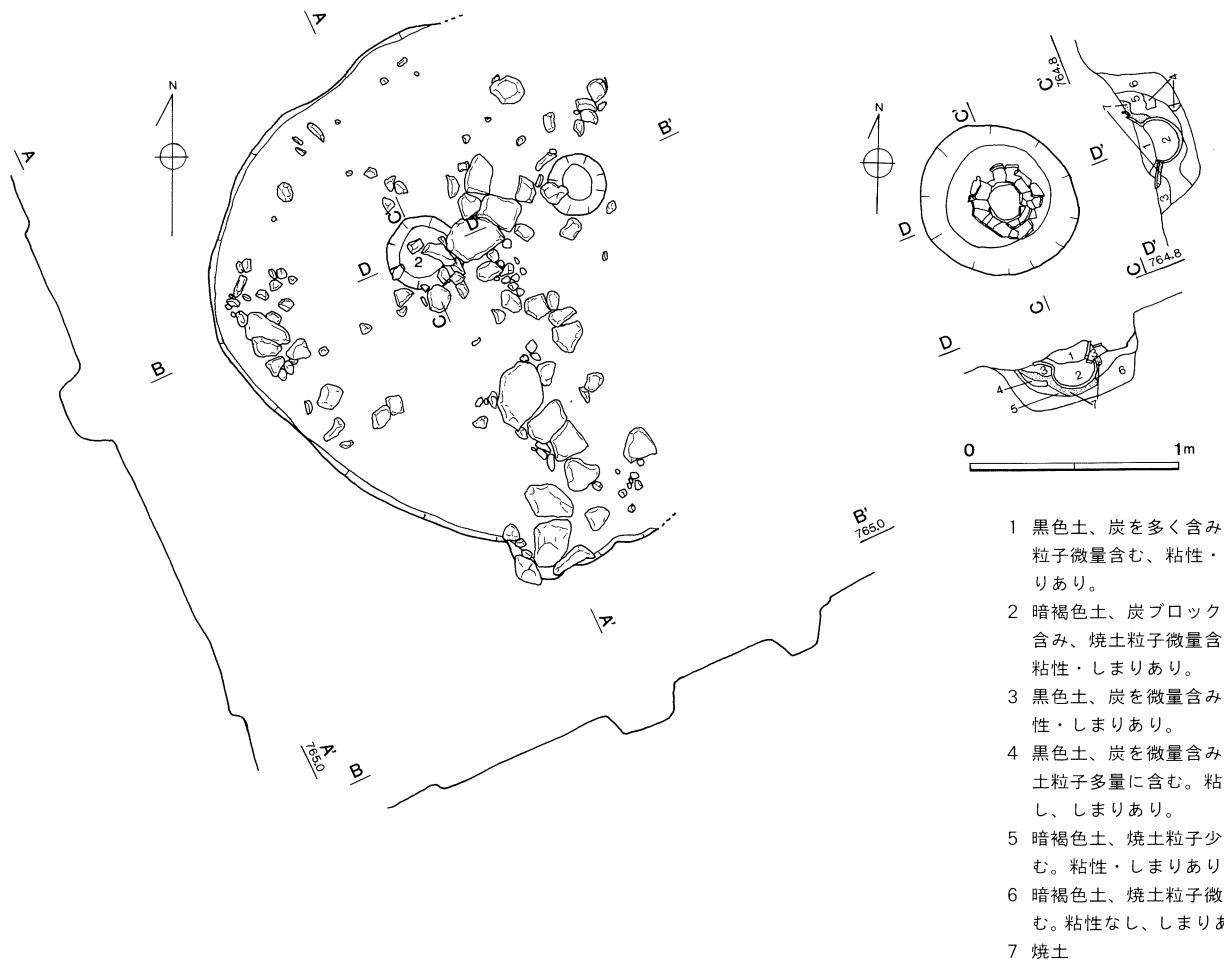


図55 II区1号住居実測図／土器分布図

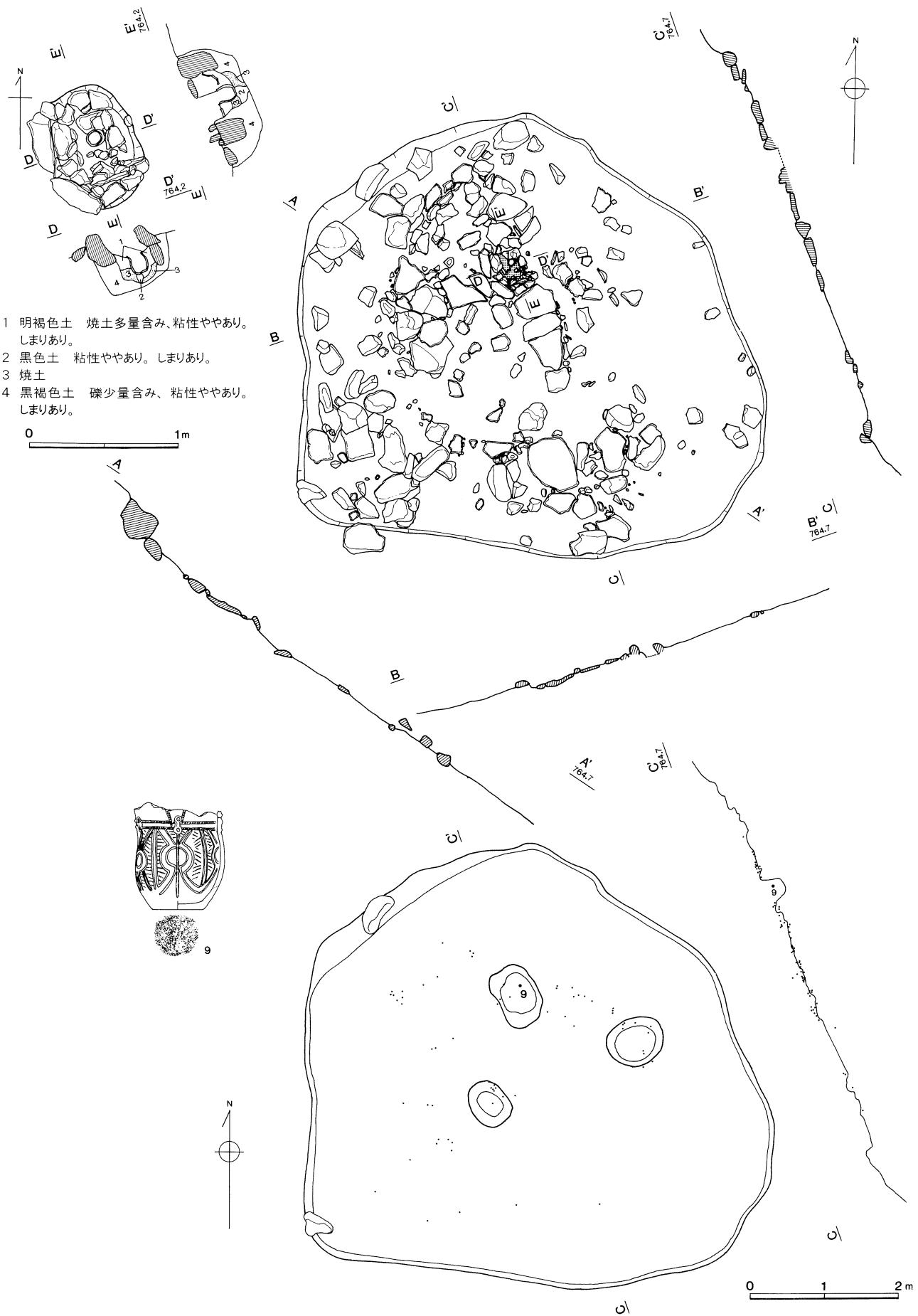
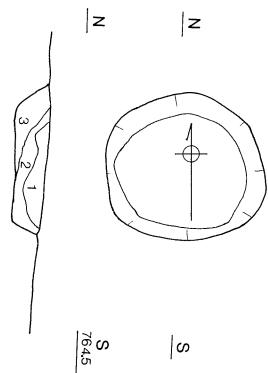
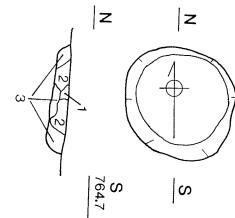


図56 II区2号居住実測図／土器分布図



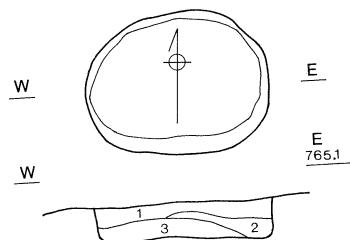
### 1号土坑

- 1 黒色土 粘性強く、しまりなし。礫若干含む。
- 2 暗褐色土 黒色土、褐色土、炭化物が混在。粘性強く、しまりも強い。
- 3 黑褐色土 2層より褐色土が少ない。粘性、しまりとも強い。



### 2号土坑

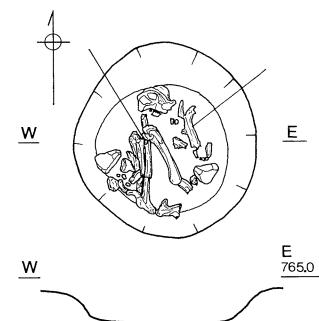
- 1 黒褐色土 炭化物若干、焼土微量含む。粘性、しまりとも弱い。
- 2 淡黄褐色土 焼土多量に含む。粘性弱く、しまりは強い。
- 3 黑色土 焼土少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。



### 3号土坑

- 1 褐色土 粘性弱く、しまりなし。砂質。
- 2 黑褐色土 ローム少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
- 3 褐色土 ロームやや多量に含む。粘性なく、しまりもなし。砂質。

0 1 2m

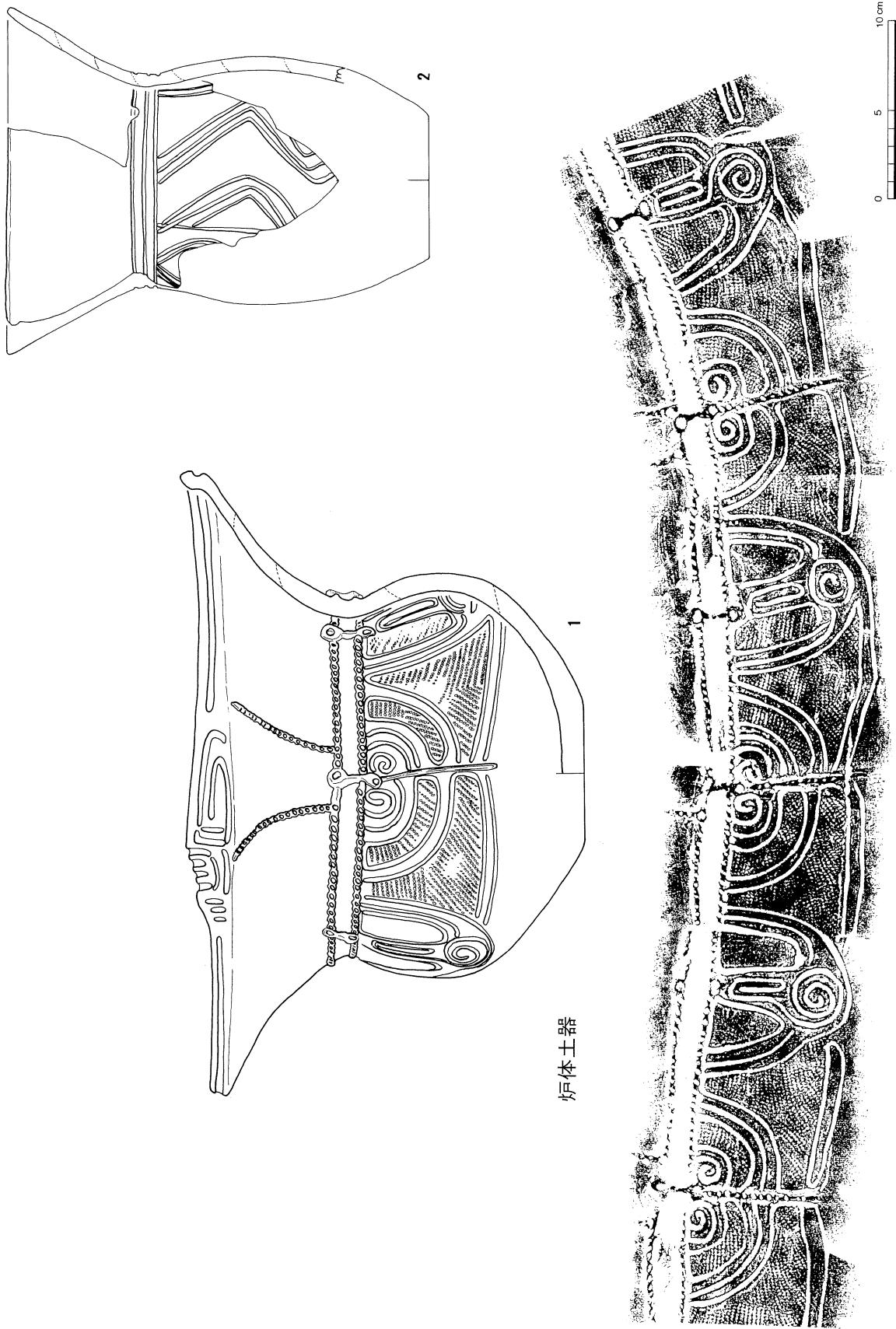


### 4号土坑

0 1m

図57 II区土坑実測図

図58 II区1号住出土土器(1)



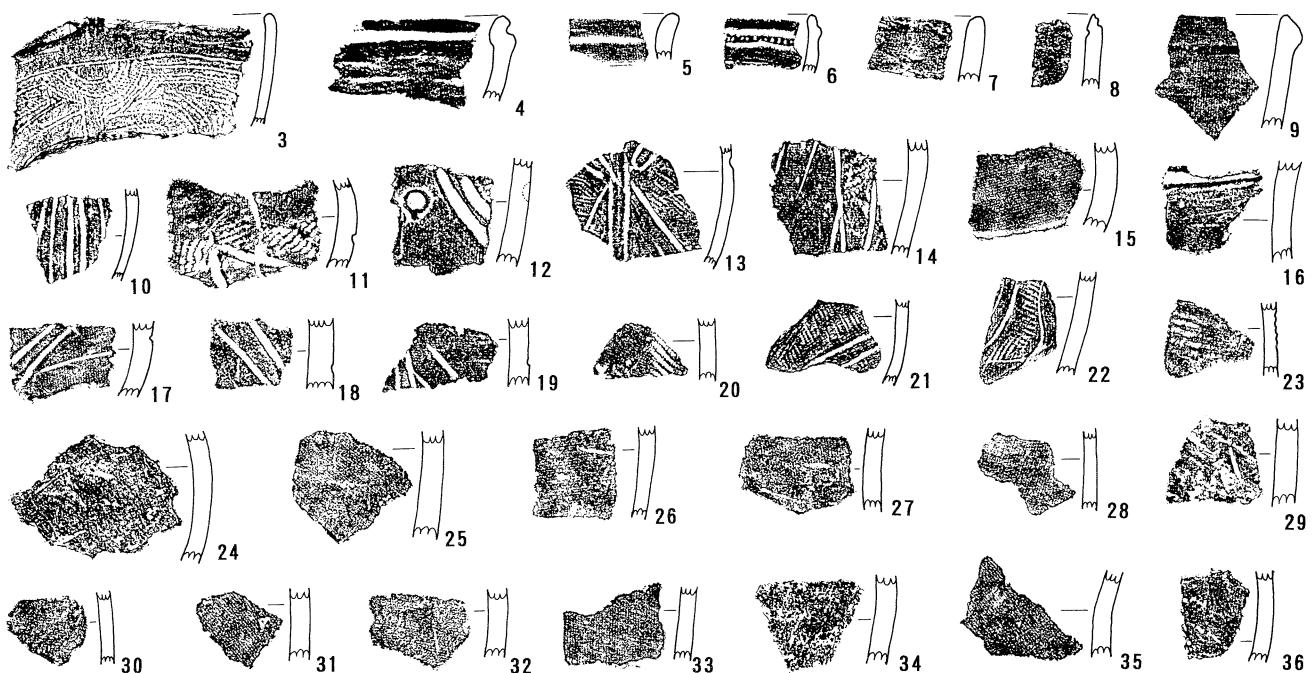


図59 II区1号住出土土器(2)

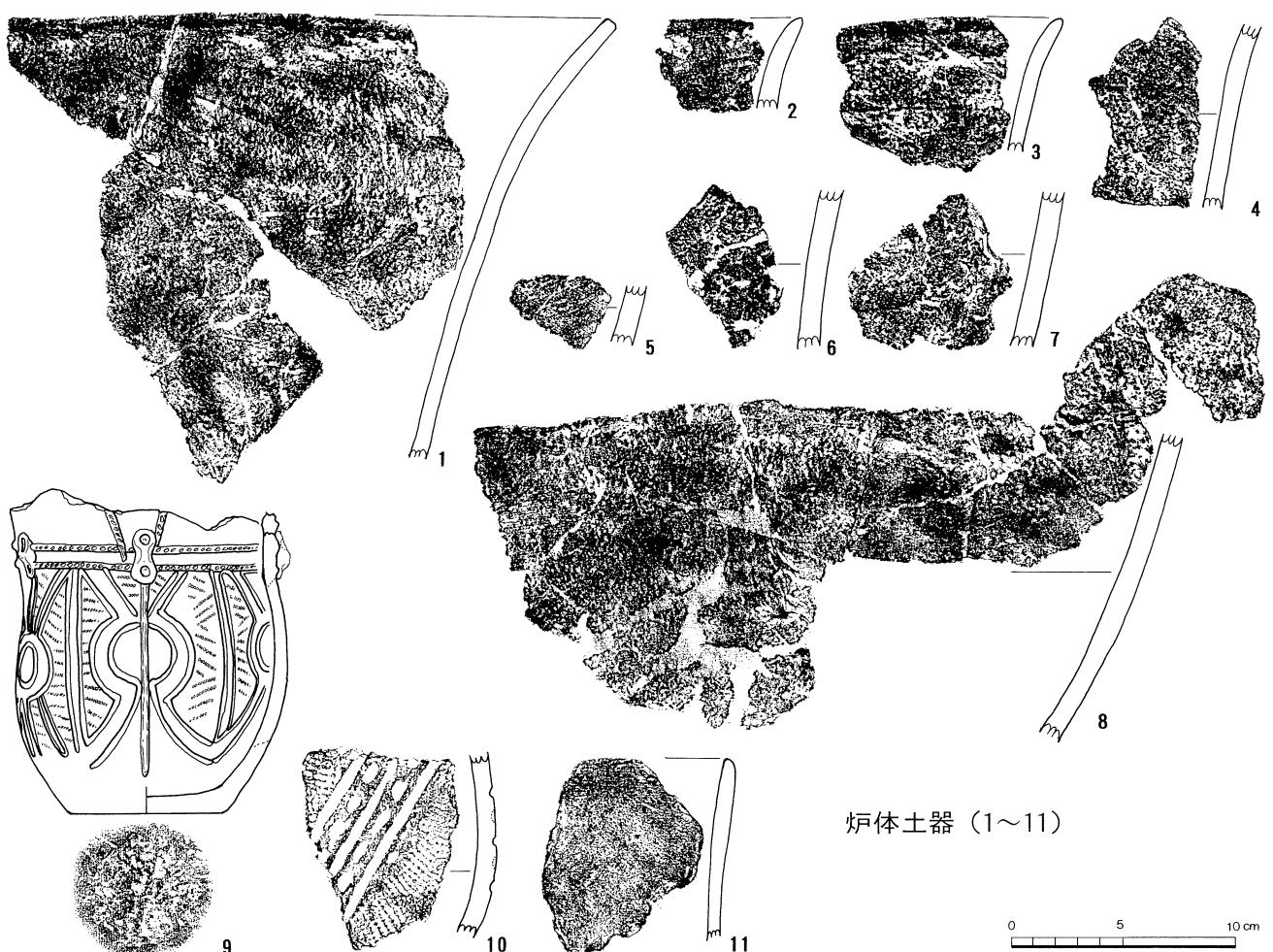


図60 II区2号住出土土器(1)

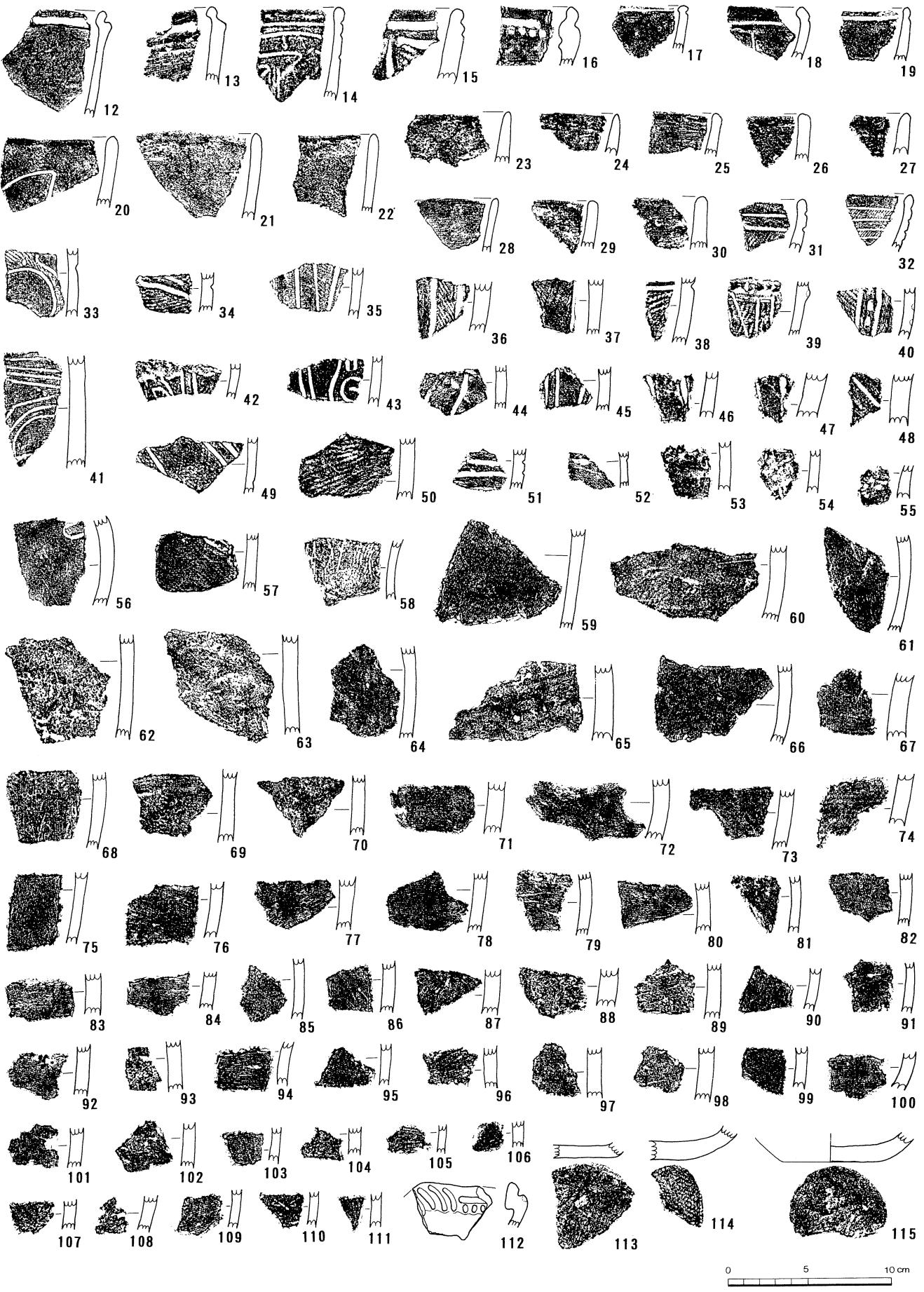
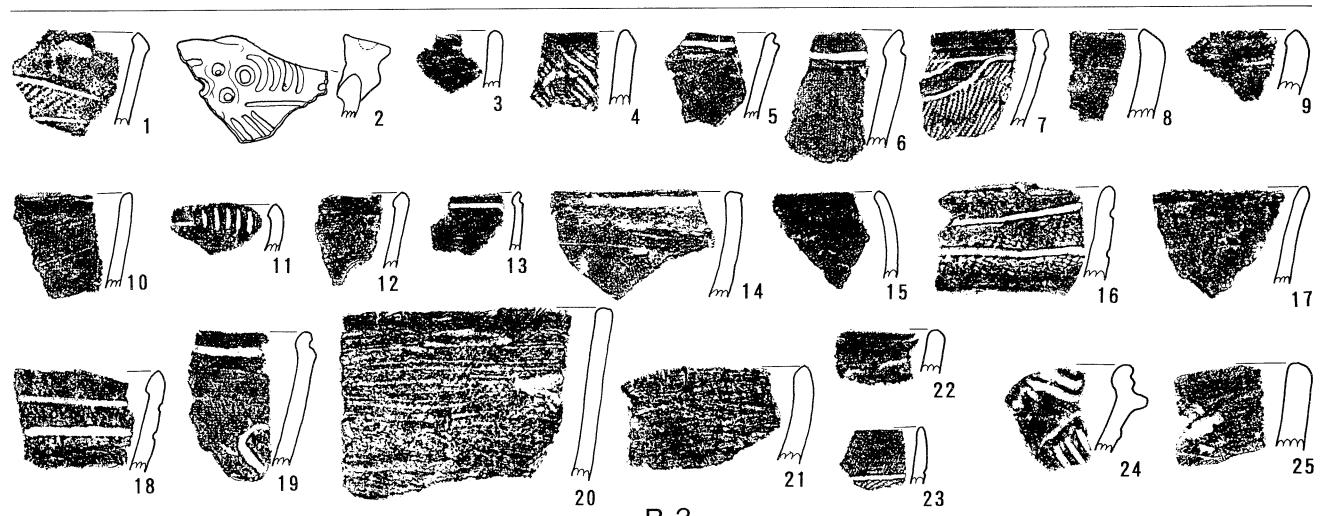
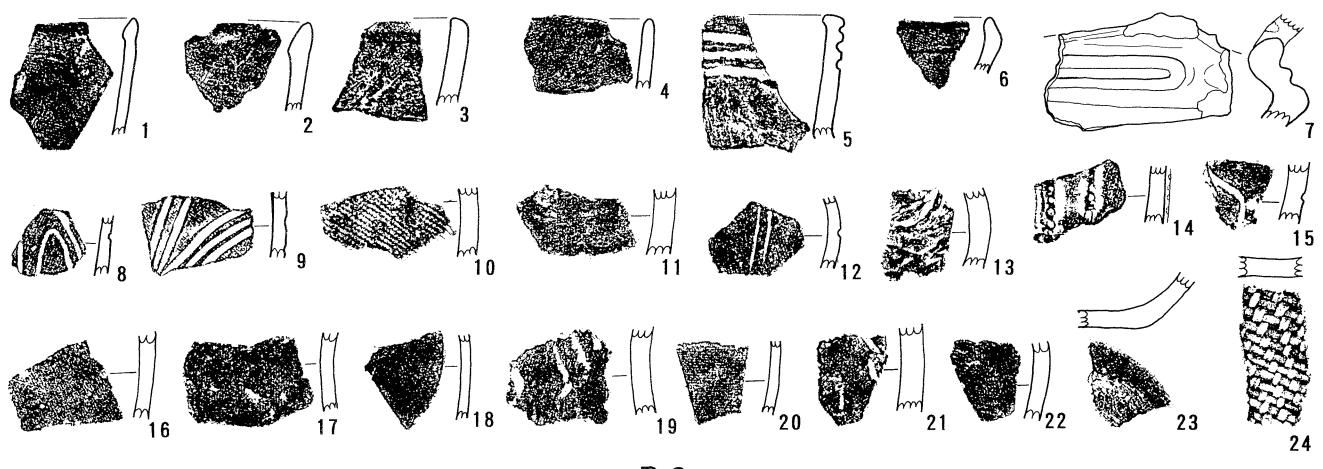
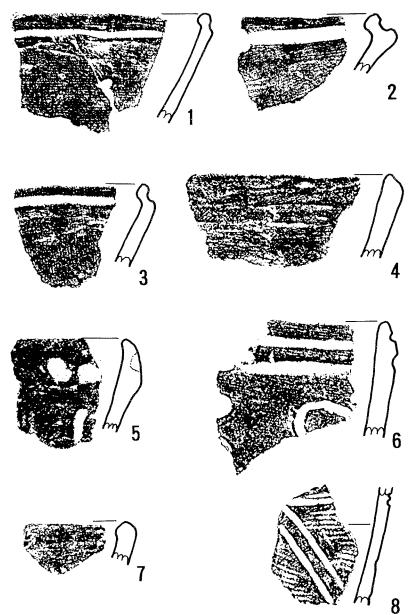
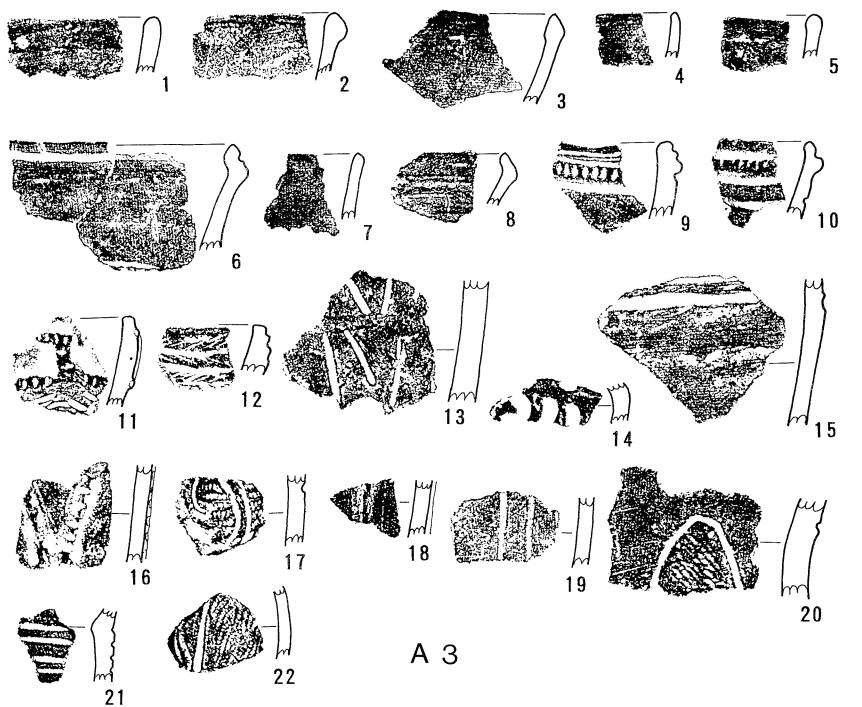


図61 II区2号住出土土器(2)



0 5 10cm

図62 II区出土土器(1)

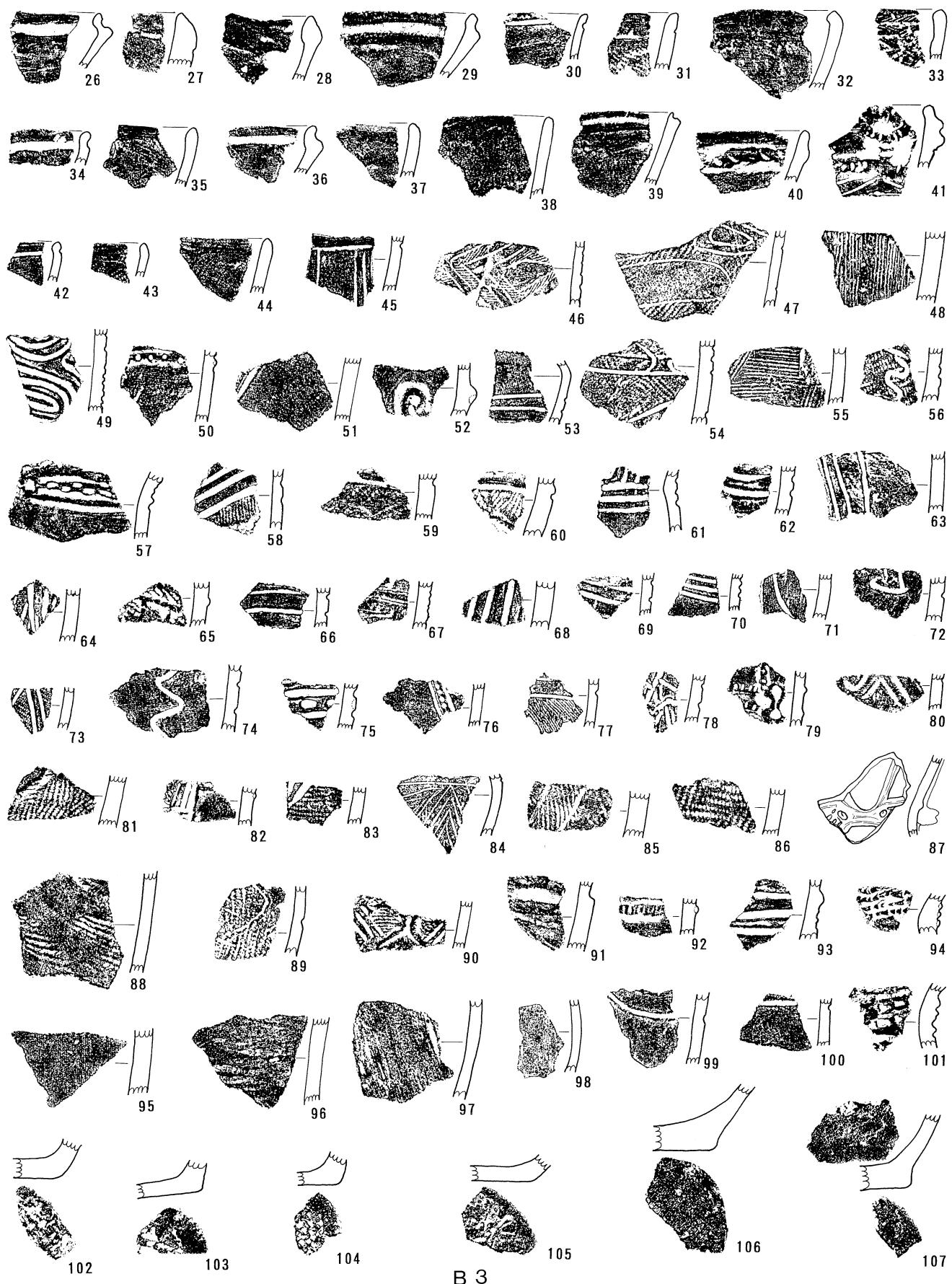
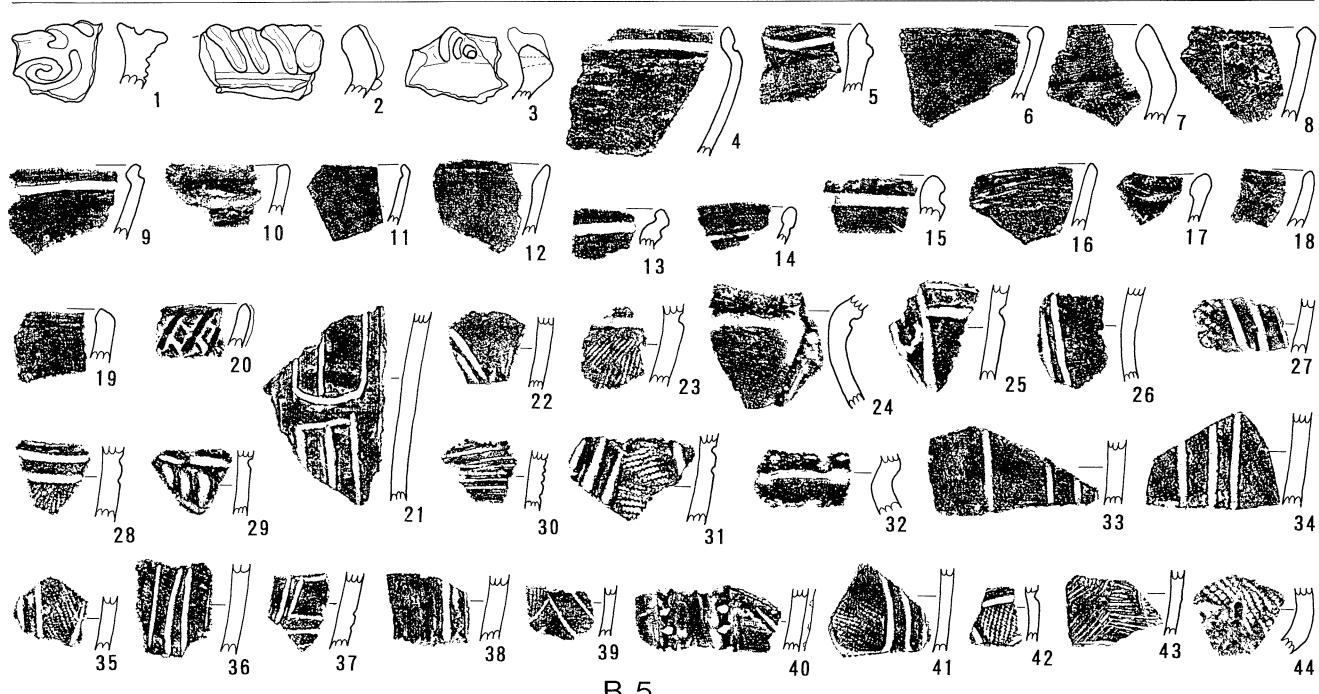
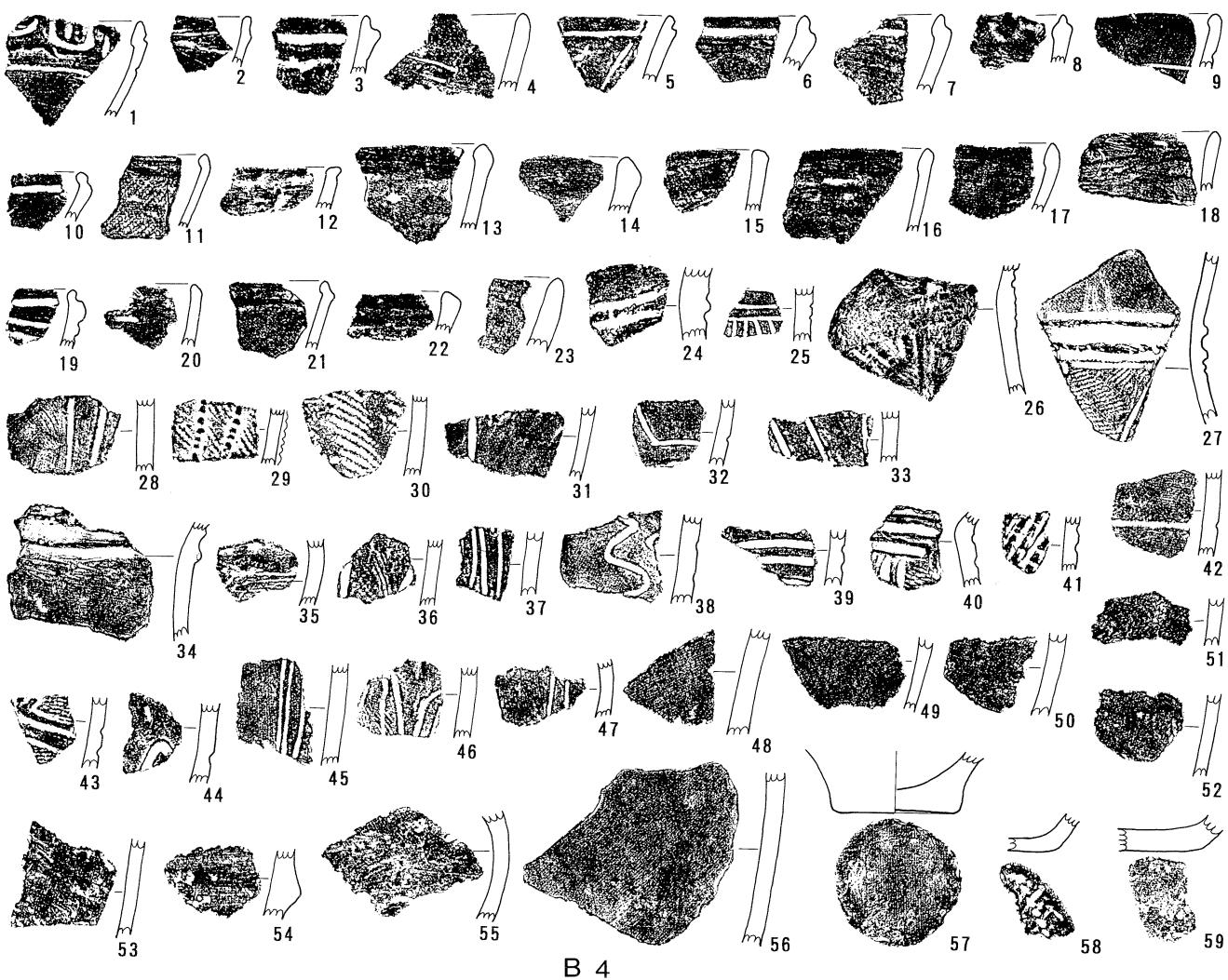


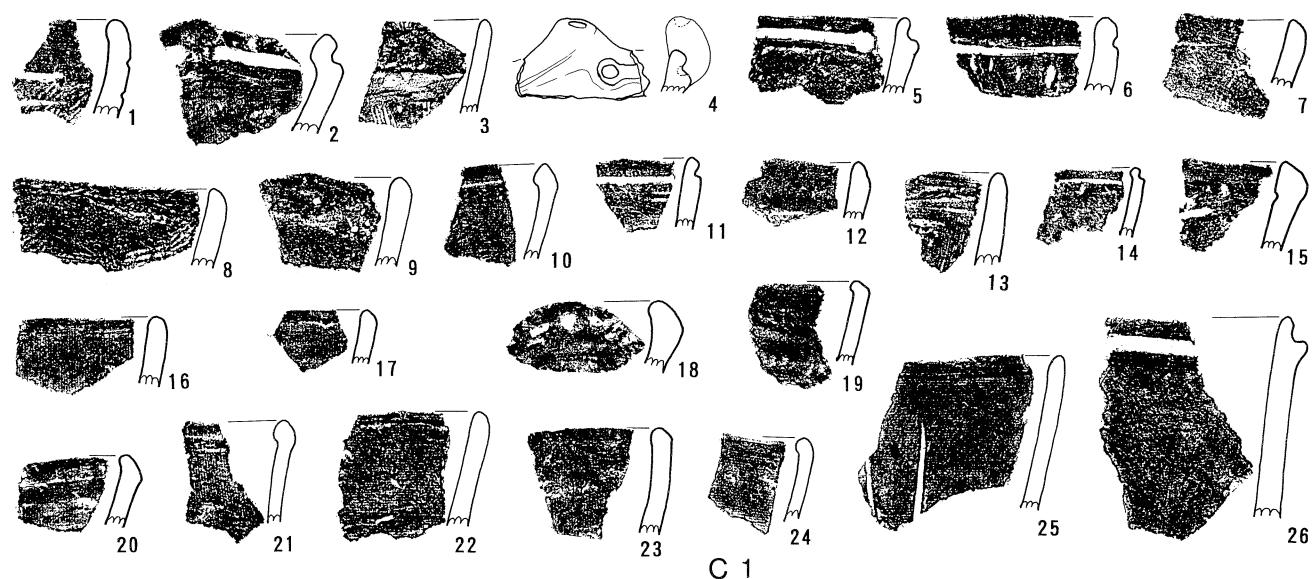
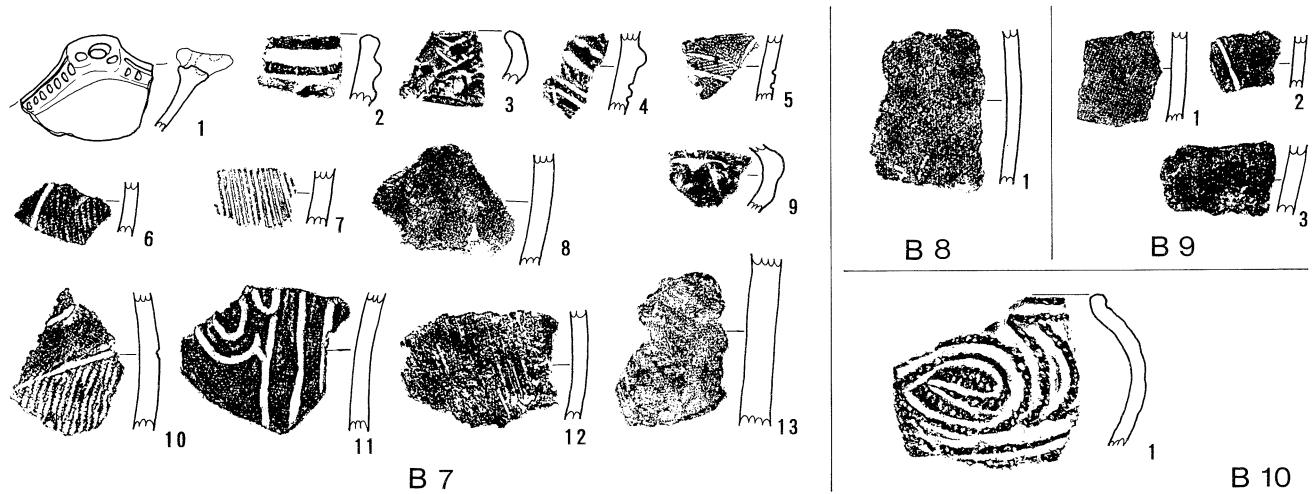
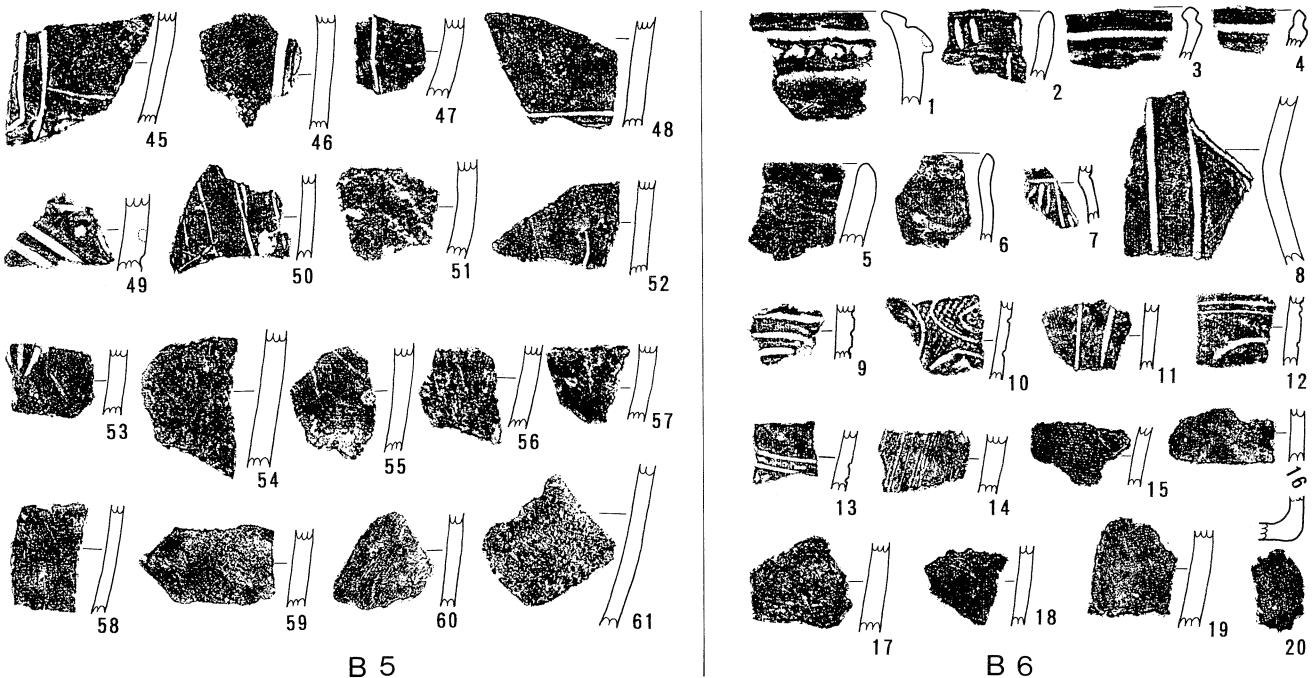
図63 II区出土土器(2)

B 3



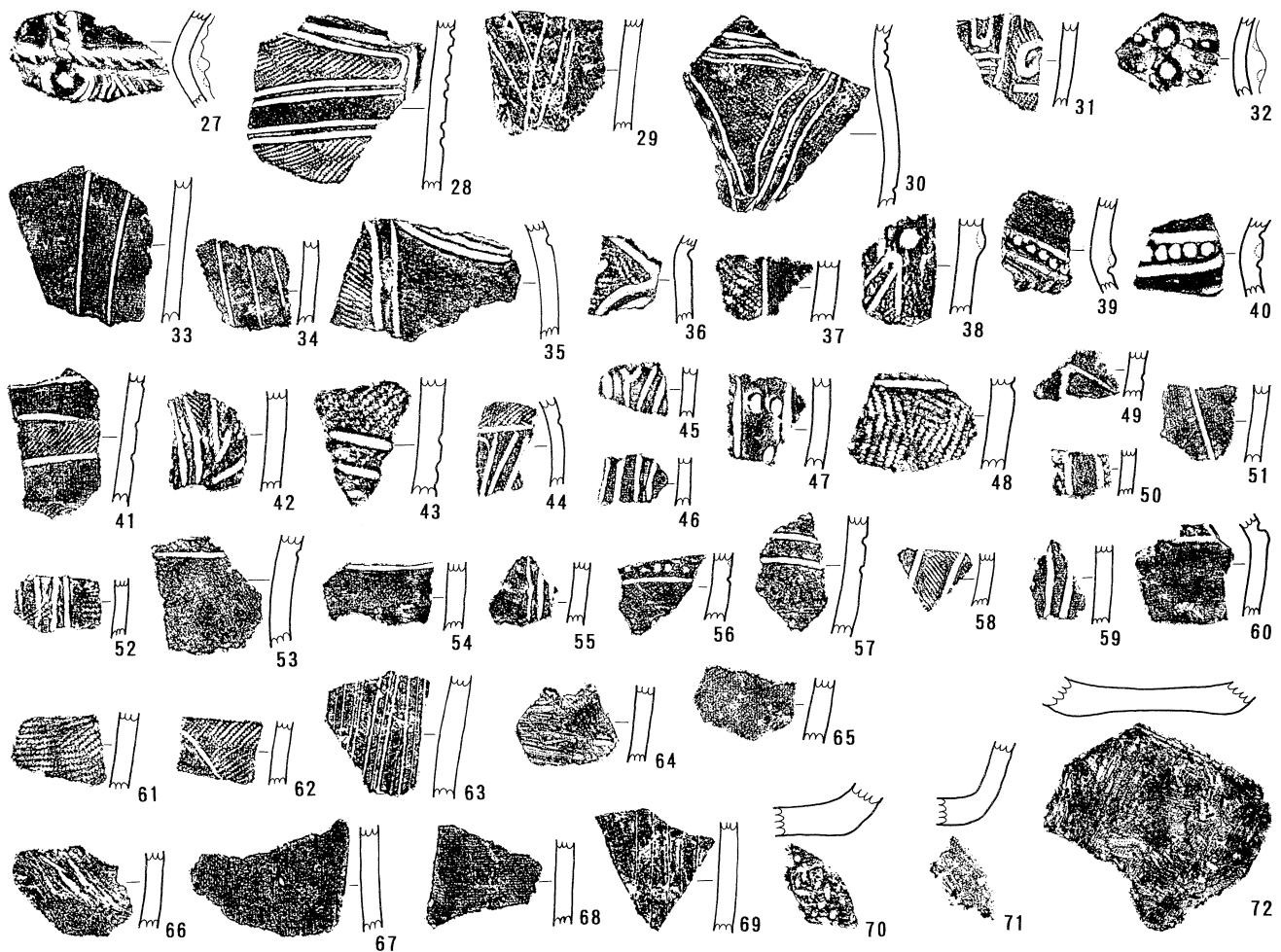
0 5 10cm

図64 II区出土土器(3)

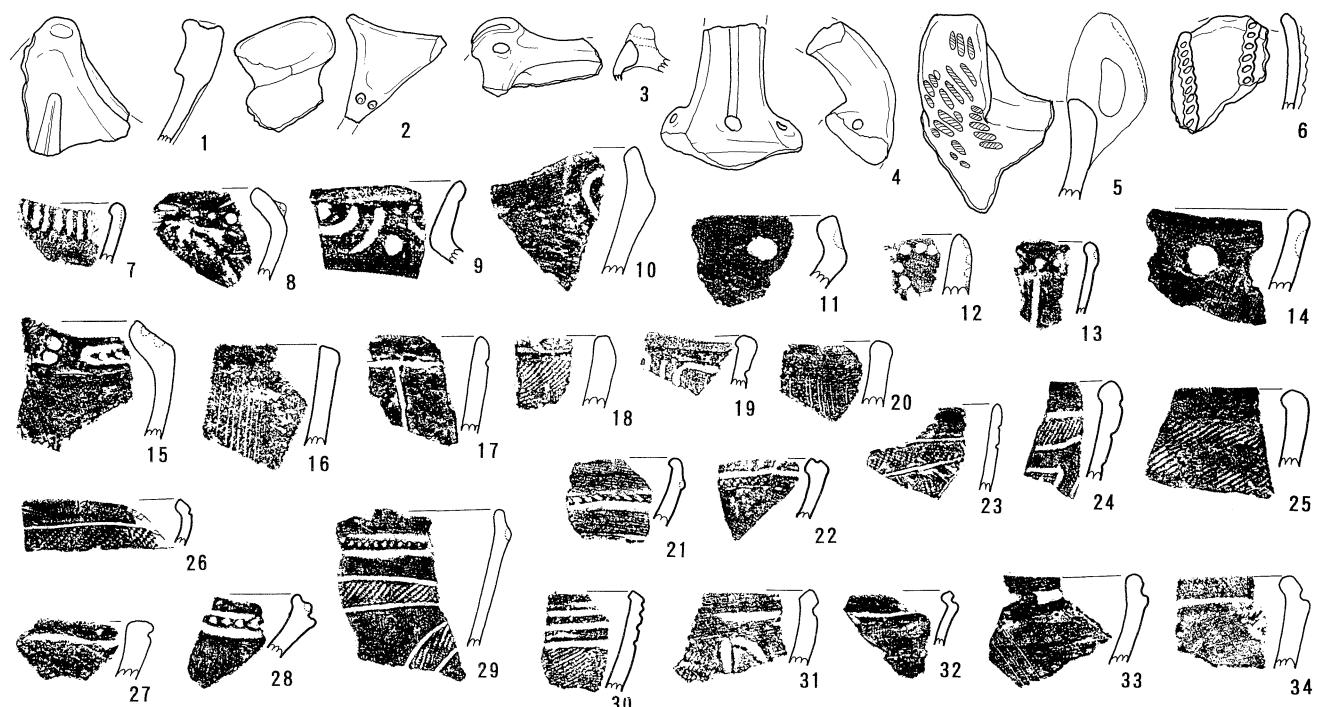


0 5 10 cm

図65 II区出土土器(4)



C 1



C 2

0 5 10 cm

図66 II区出土土器(5)

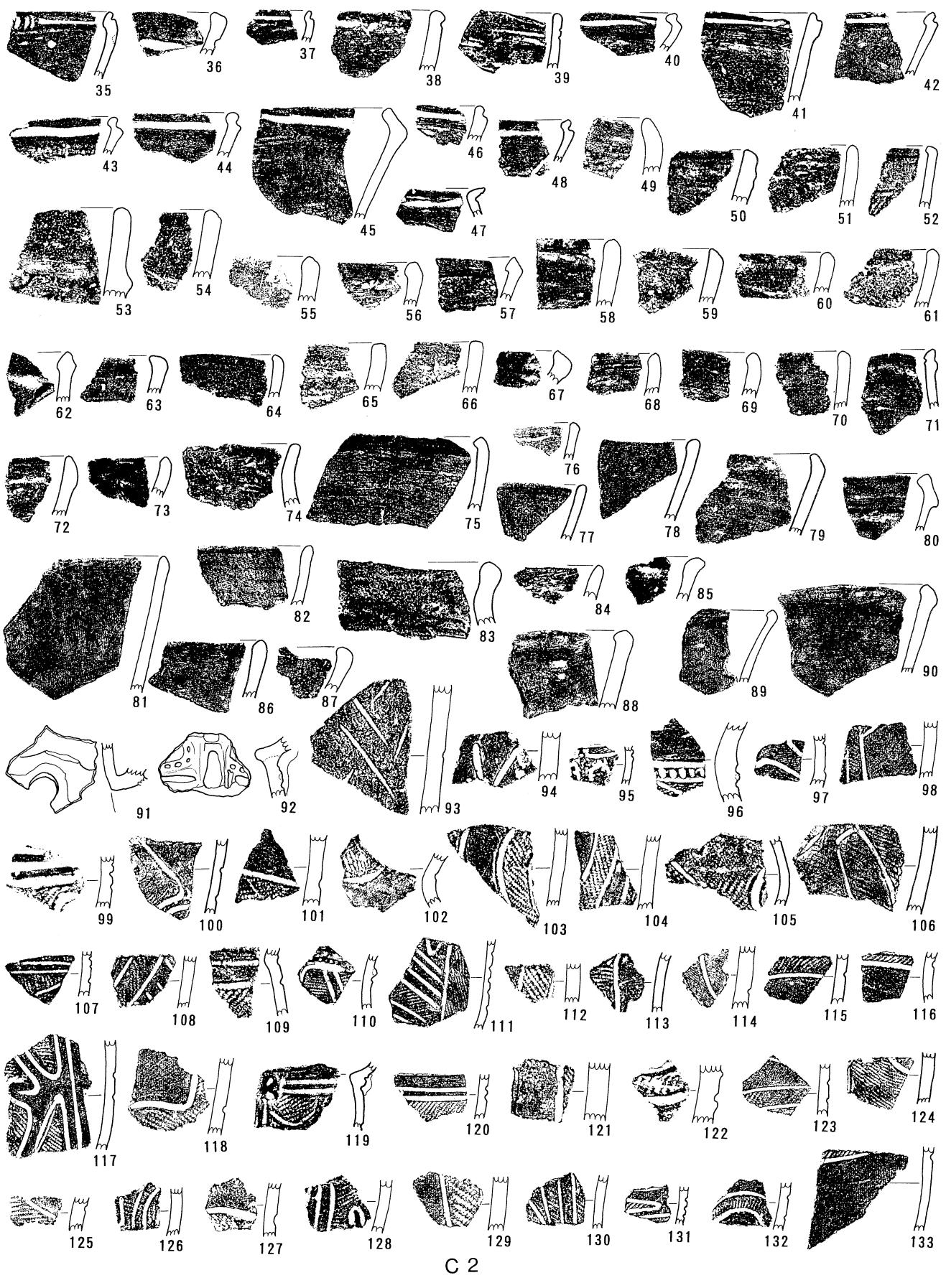


図67 II区出土土器(6)

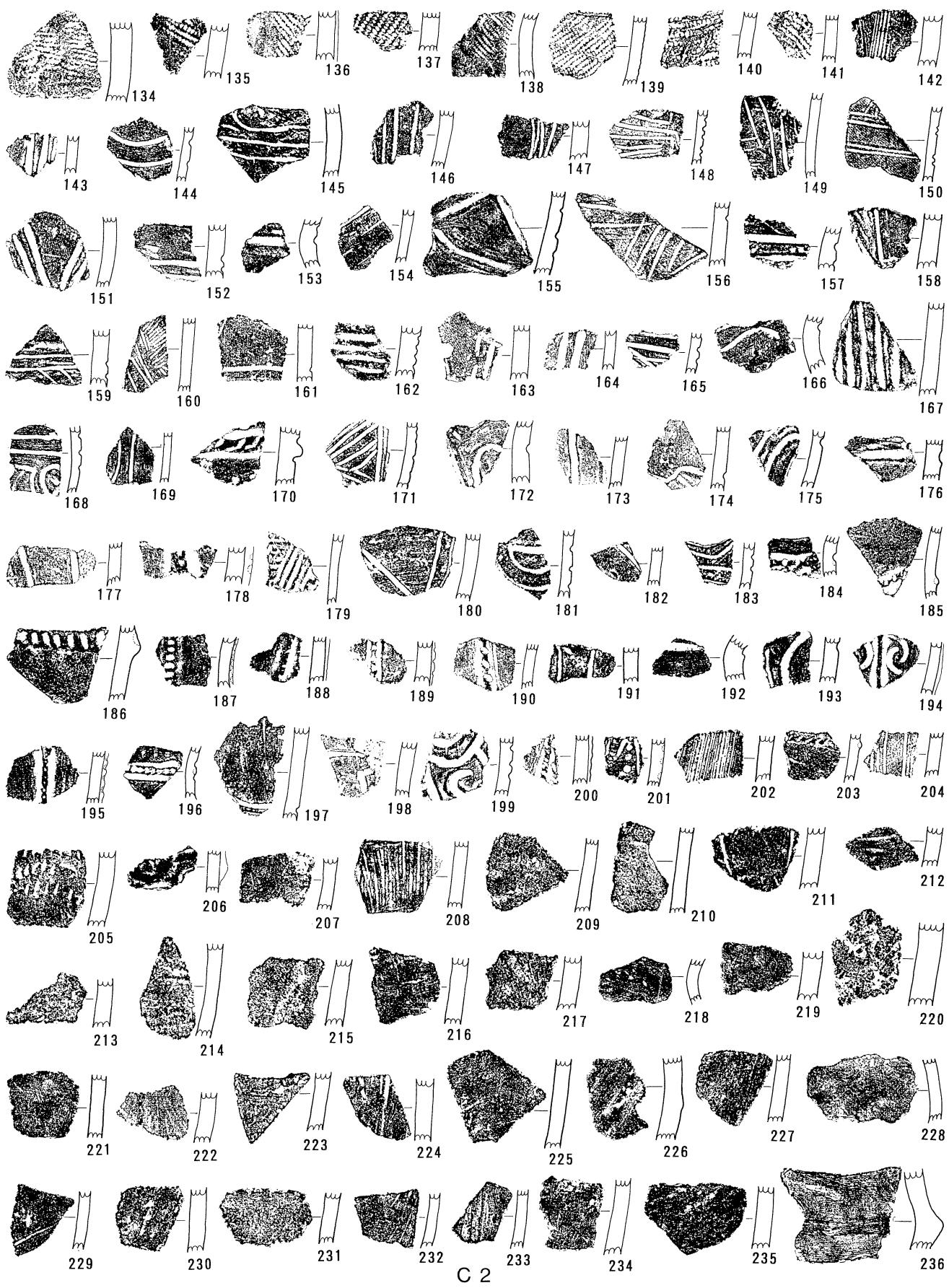
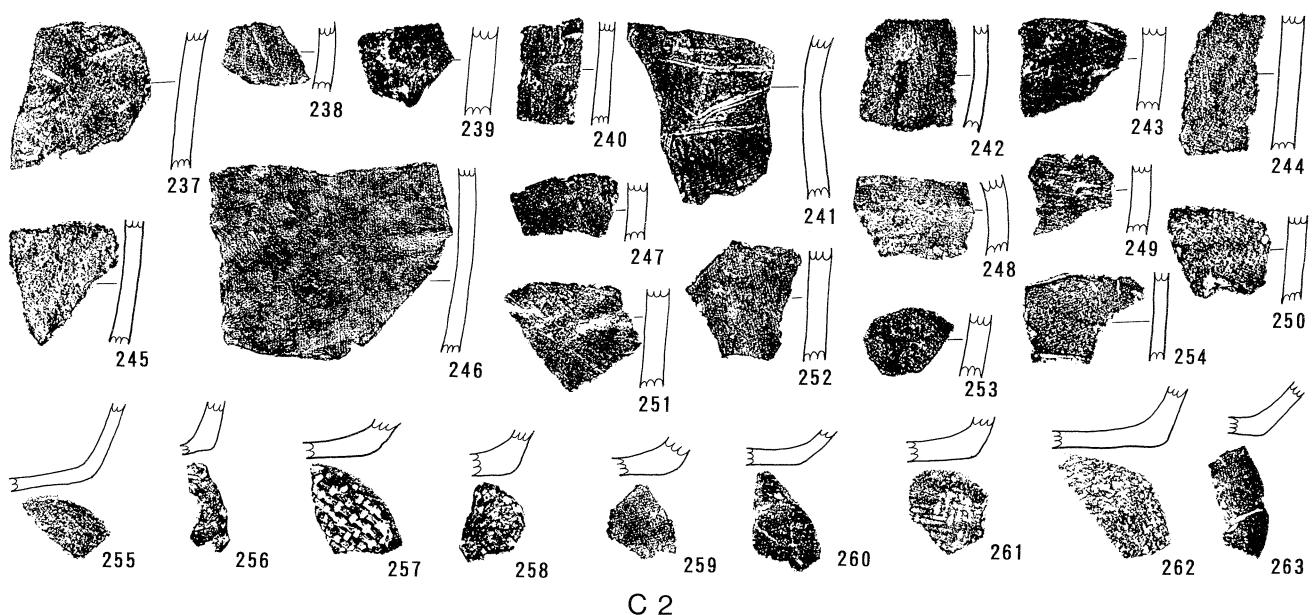
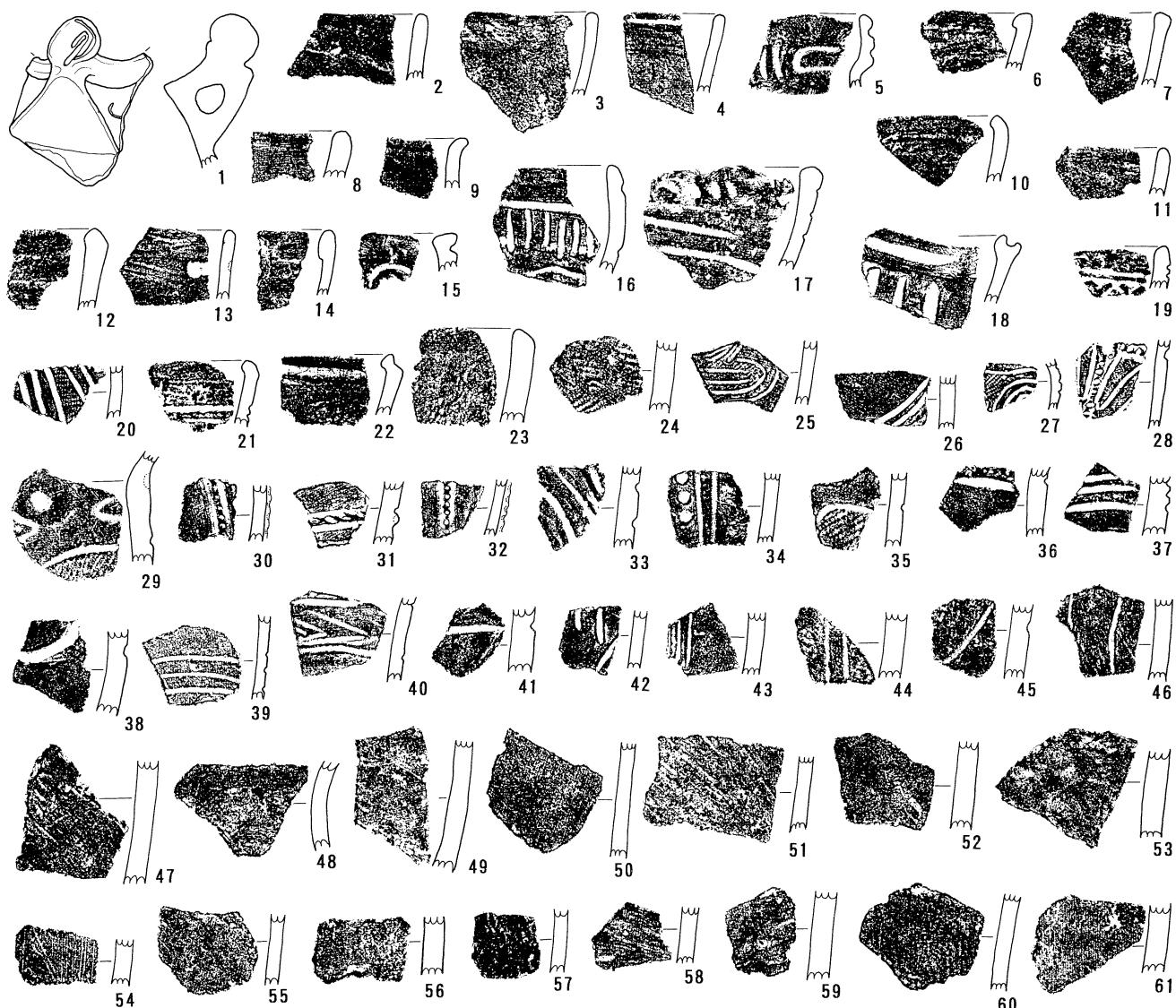


図68 II区出土土器(7)



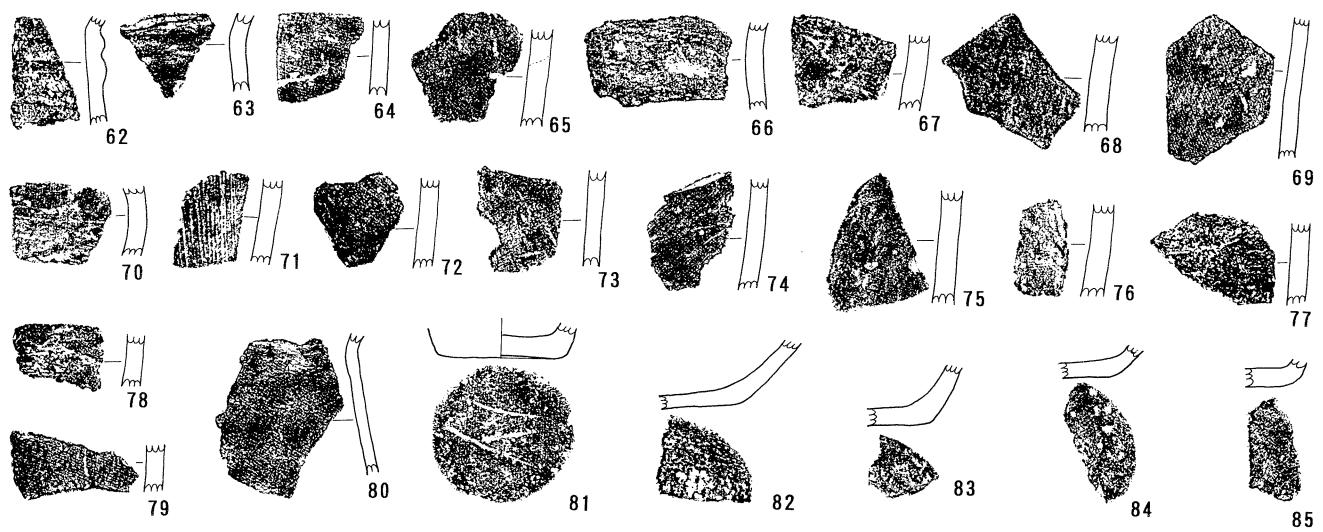
C 2



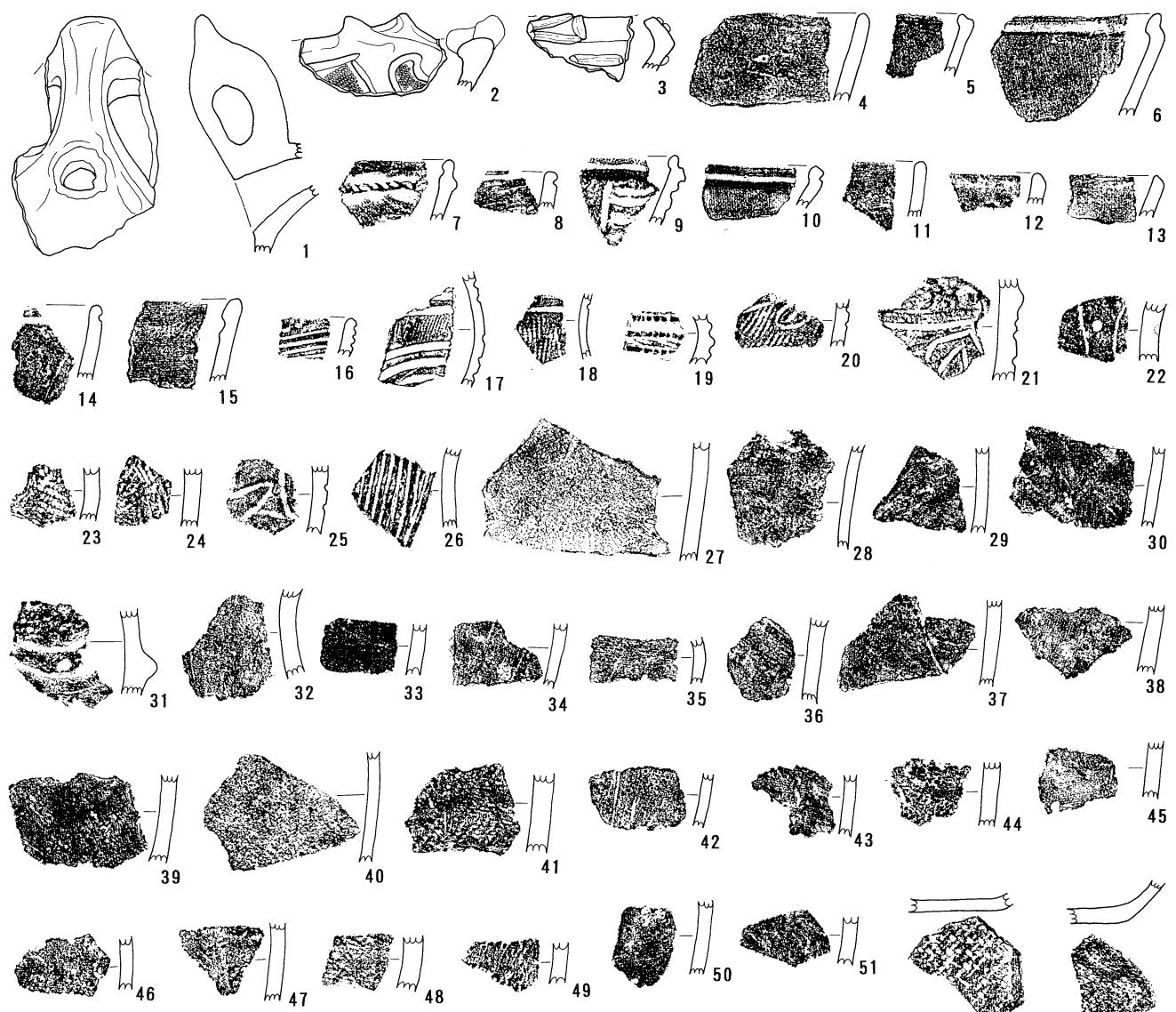
C 3

0 5 10cm

図69 II区出土土器(8)



C 3



C 4

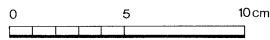
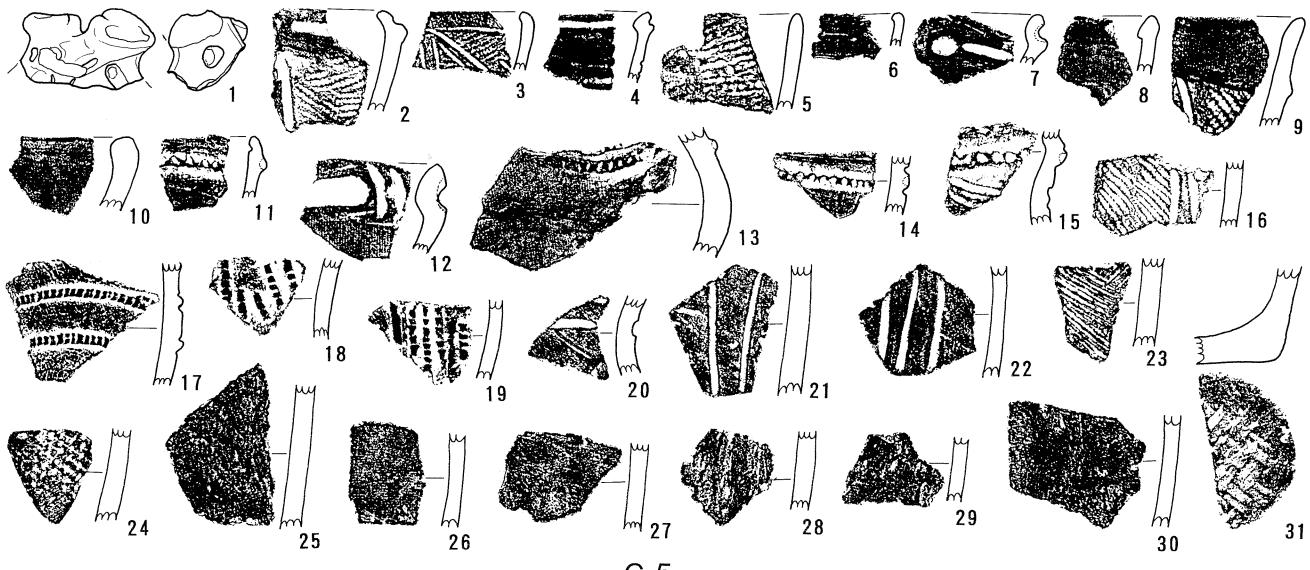


図70 II区出土土器(9)



C 5



C 6

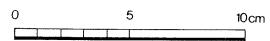
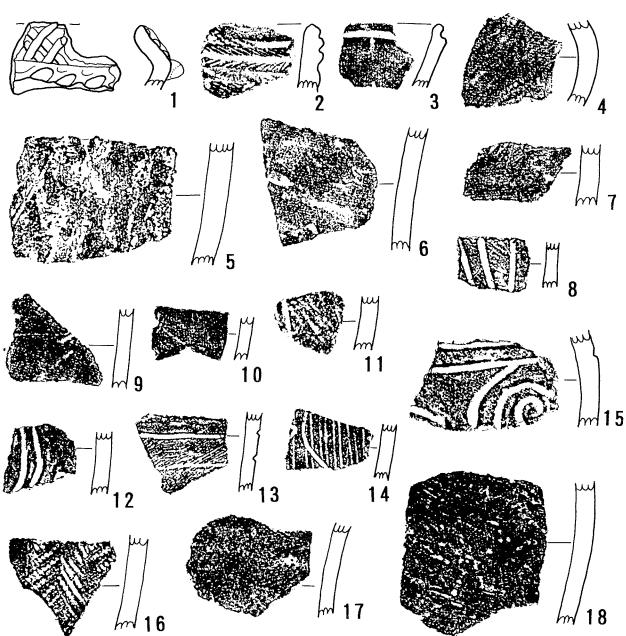
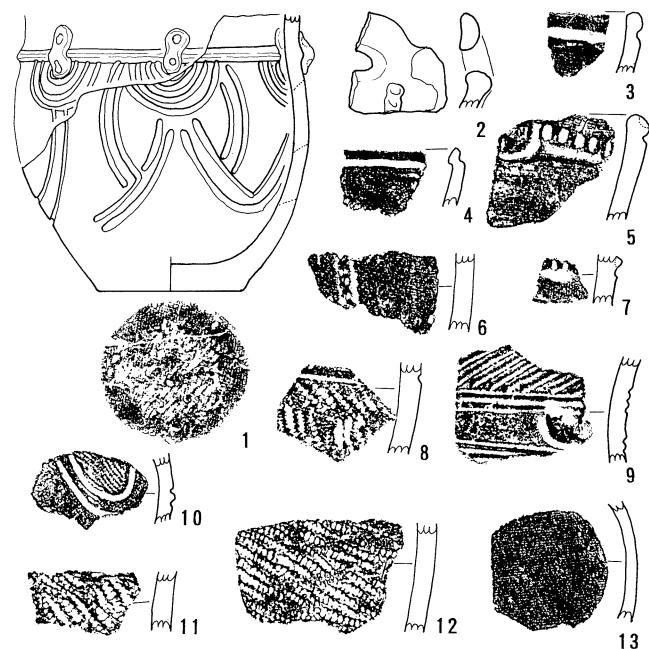


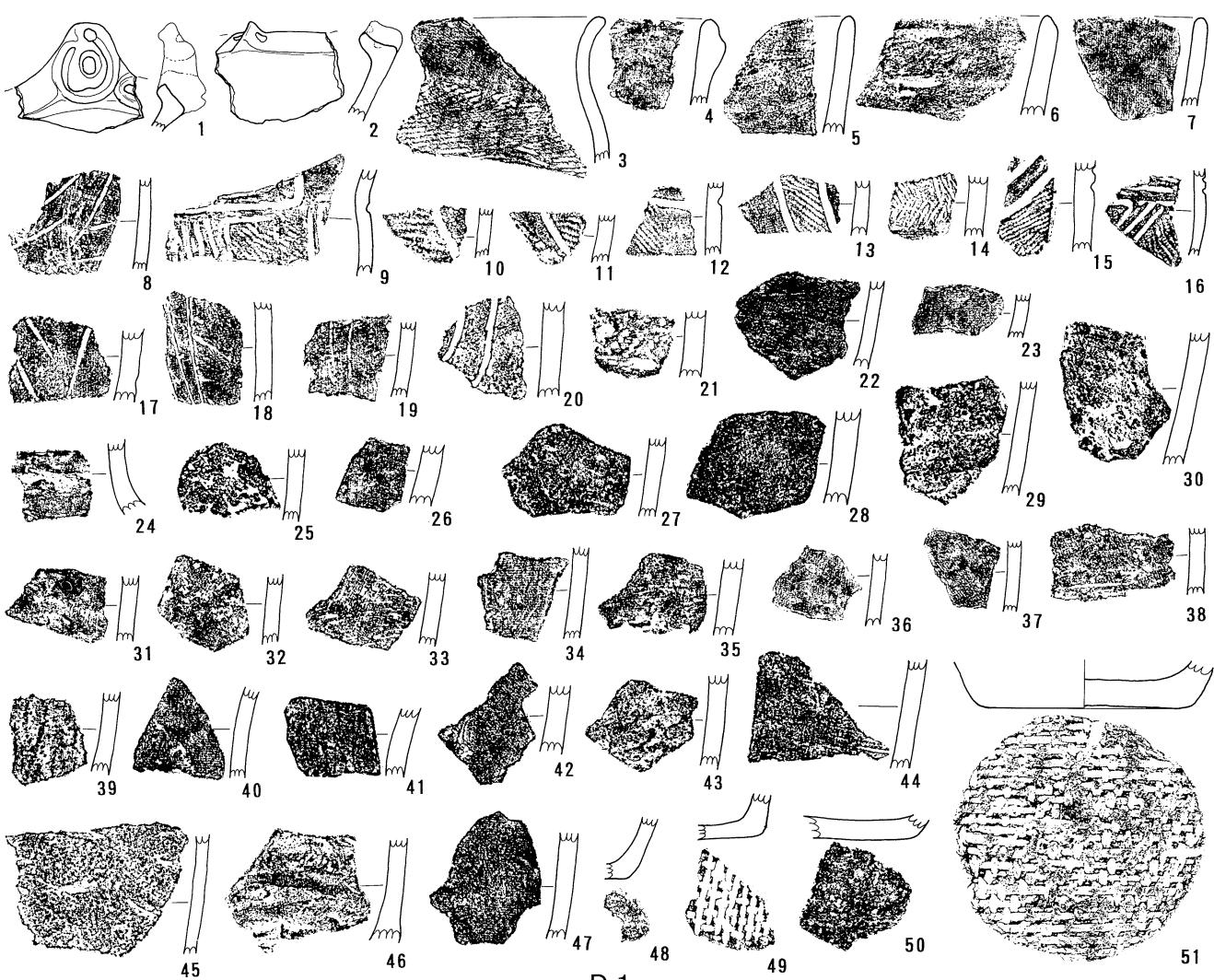
図71 II区出土土器(10)



C 7



C 8



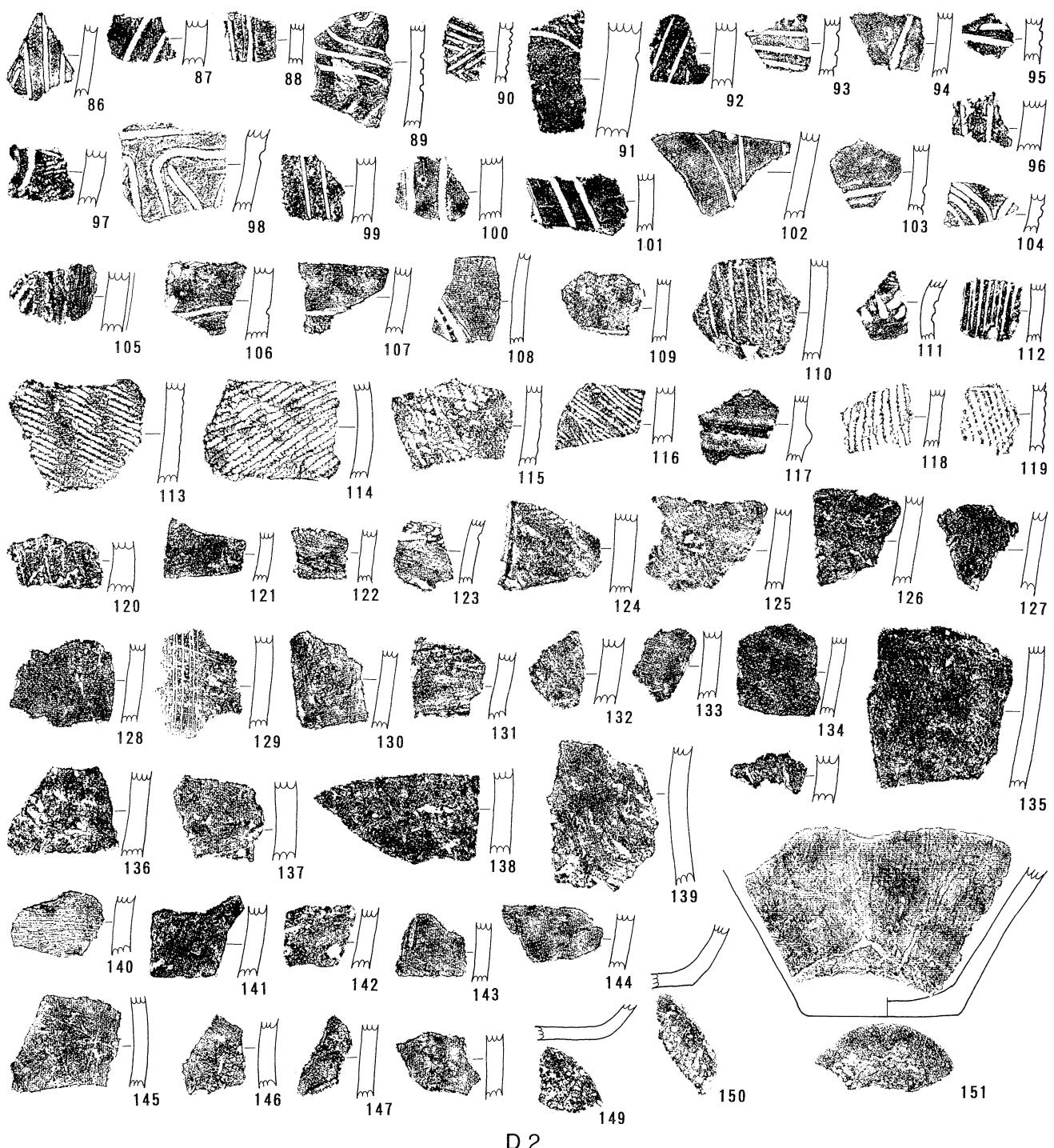
D 1

0 5 10 cm

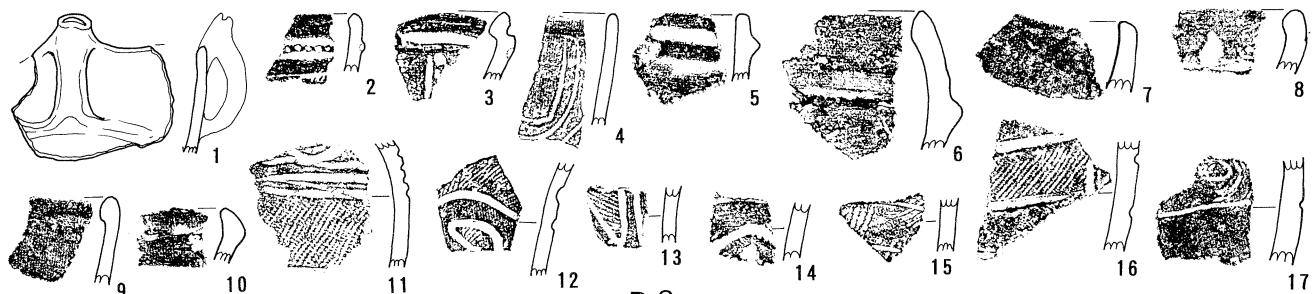
図72 II区出土土器(1)



図73 II区出土土器(12)

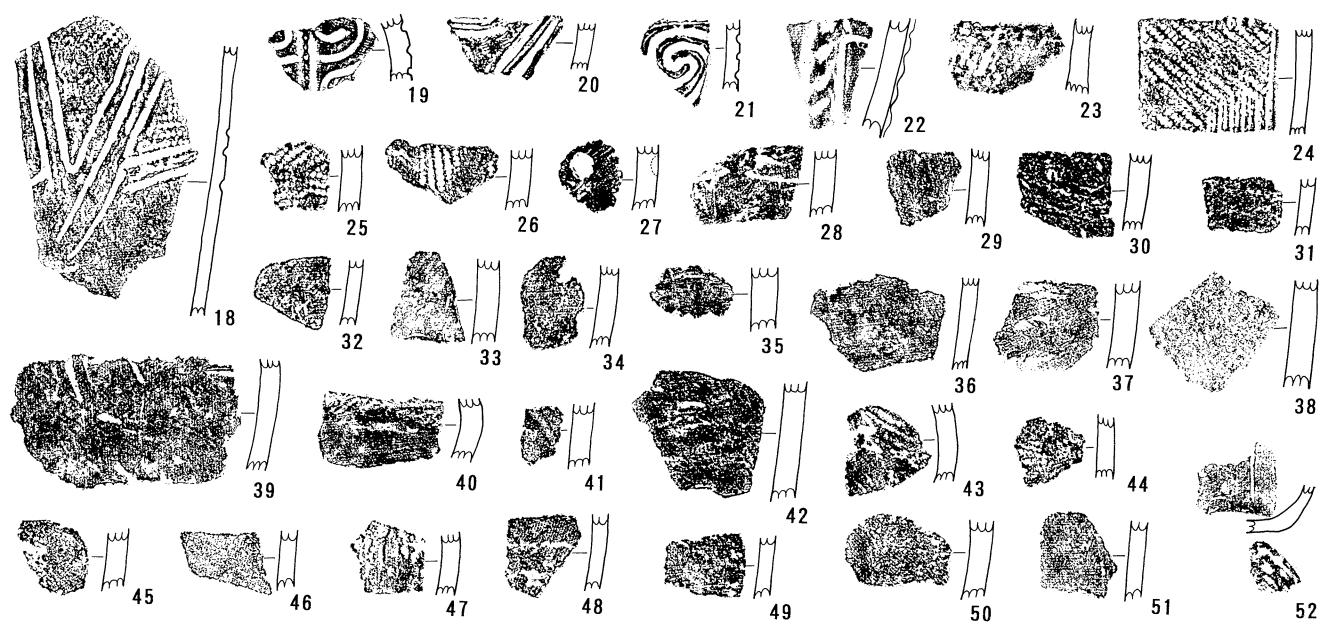


D 2

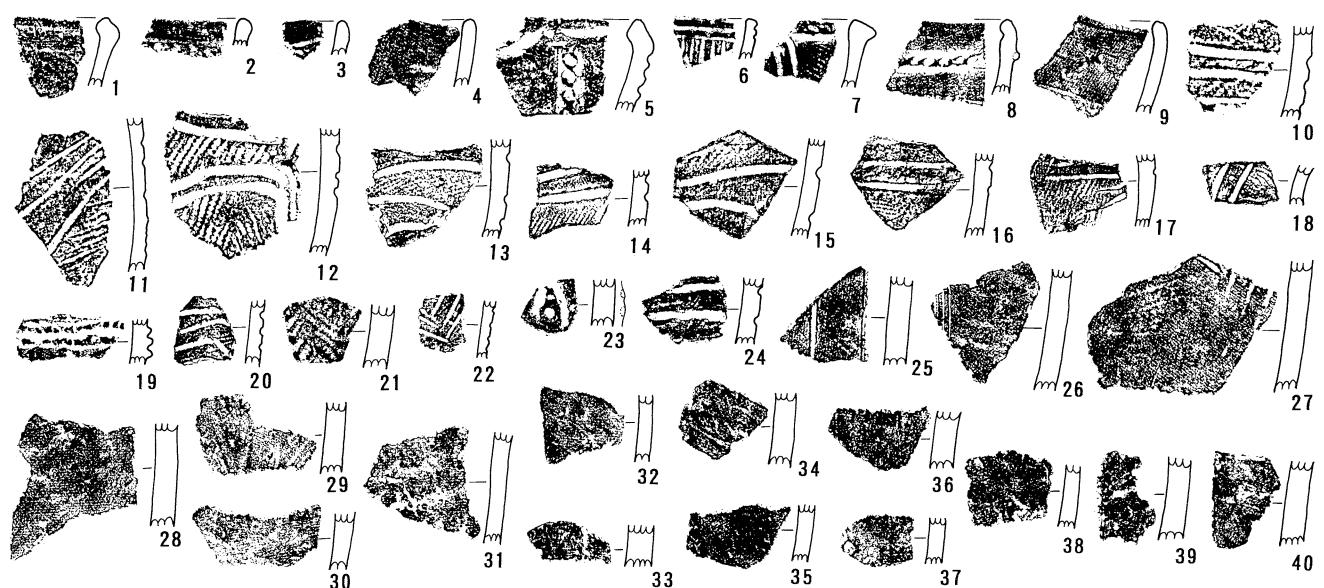


0 5 10cm

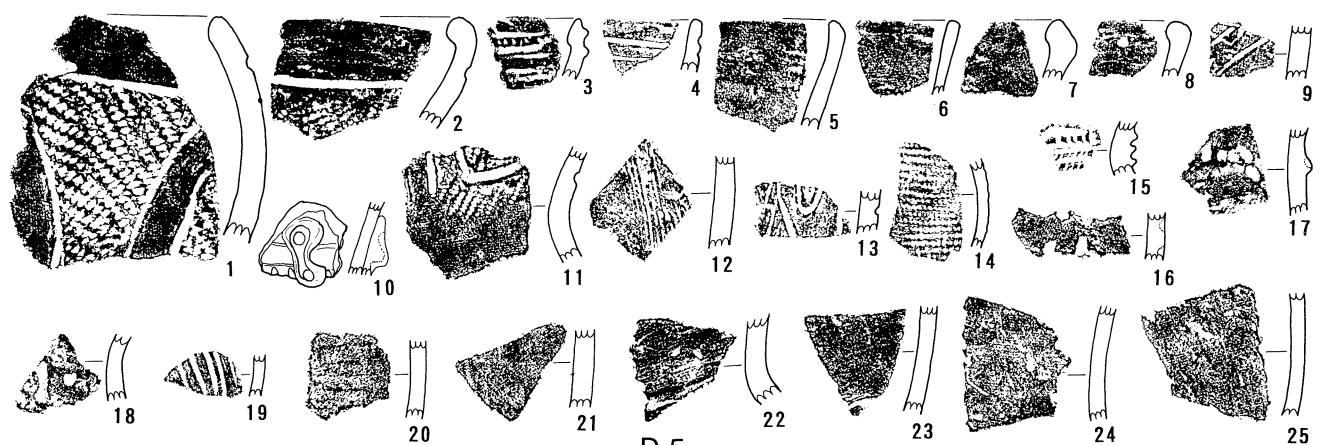
図74 II区出土土器(13)



D 3



D 4



D 5

0 5 10cm

図75 II区出土土器(14)

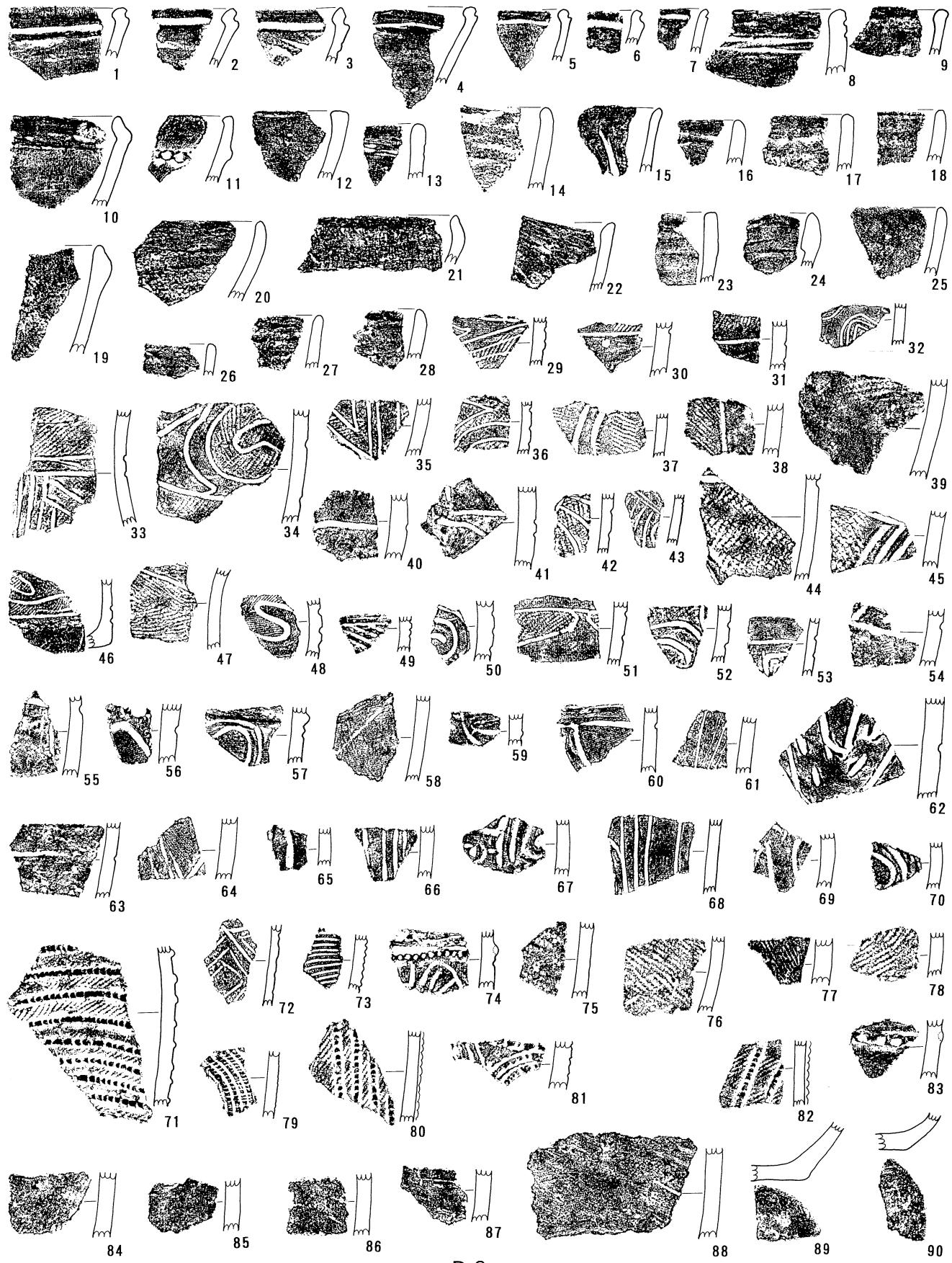
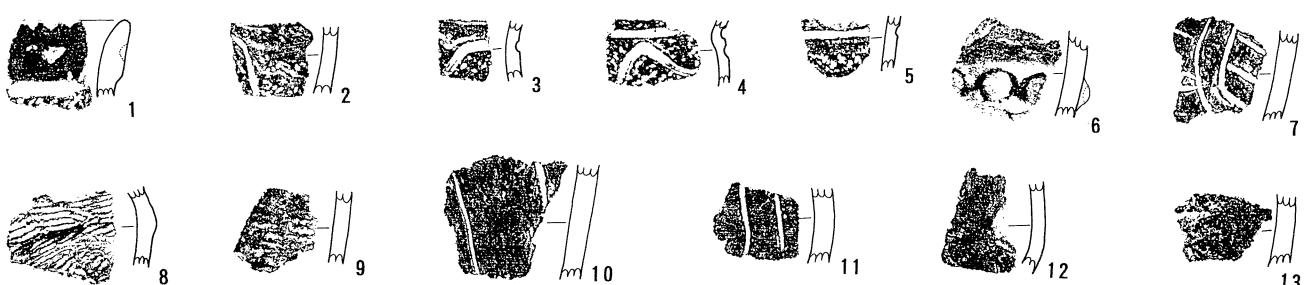
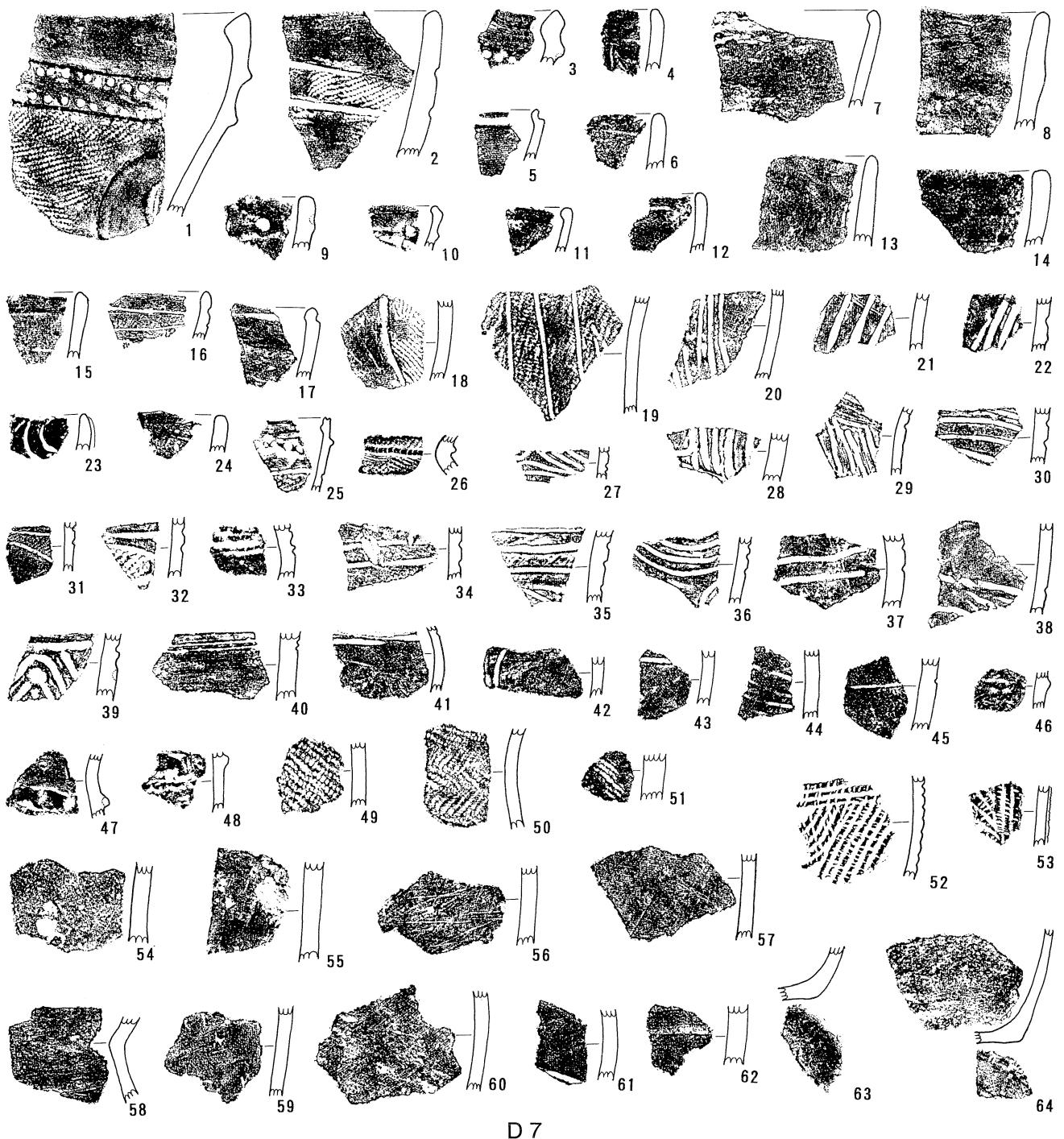
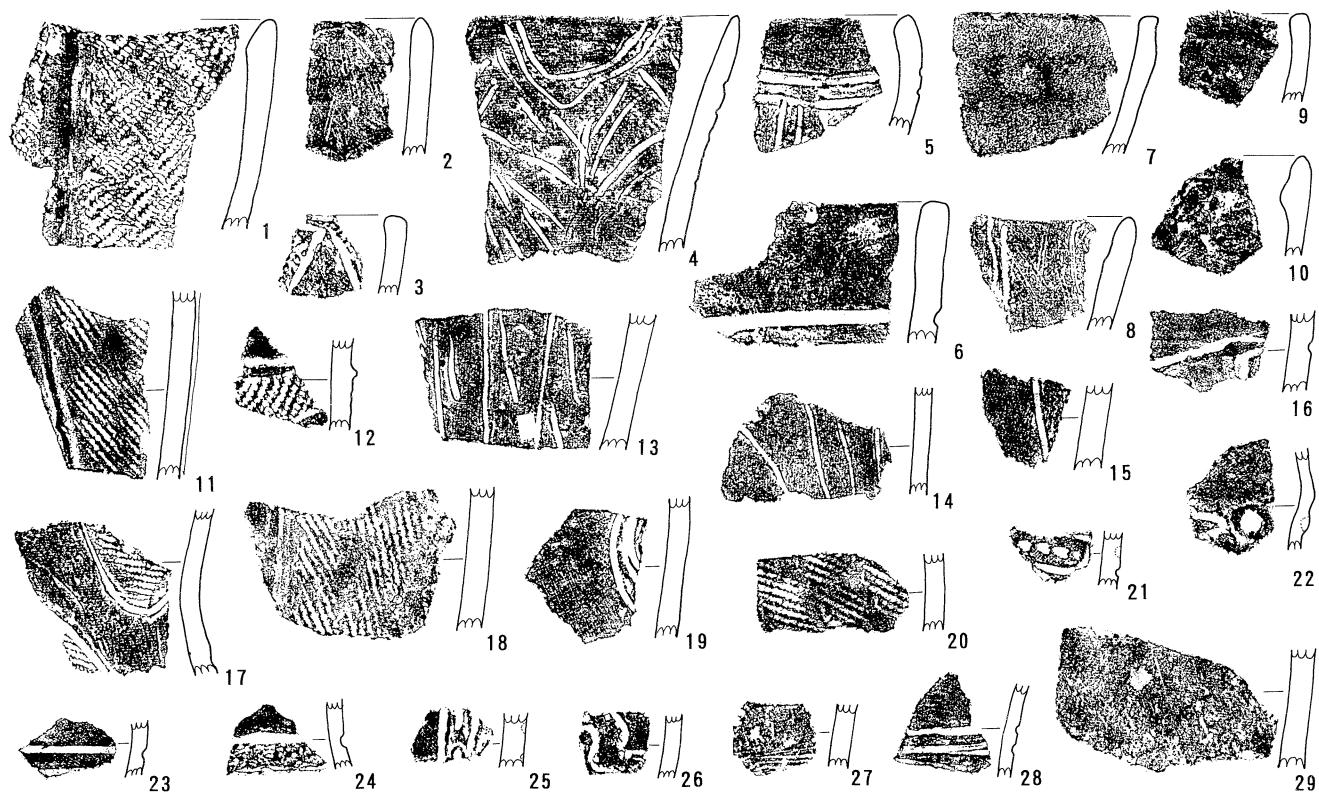


図76 II区出土土器(15)

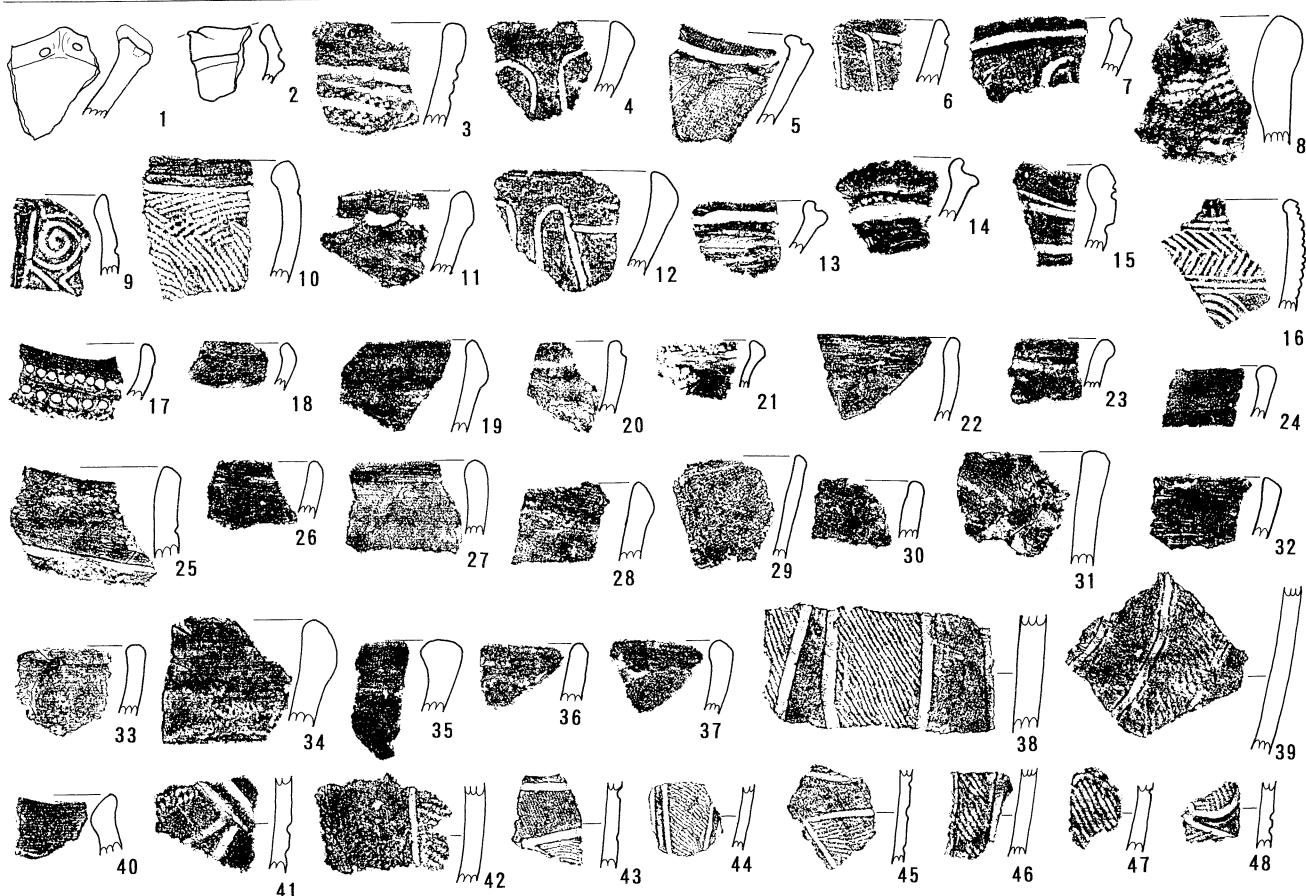


0 5 10 cm

図77 II区出土土器(16)



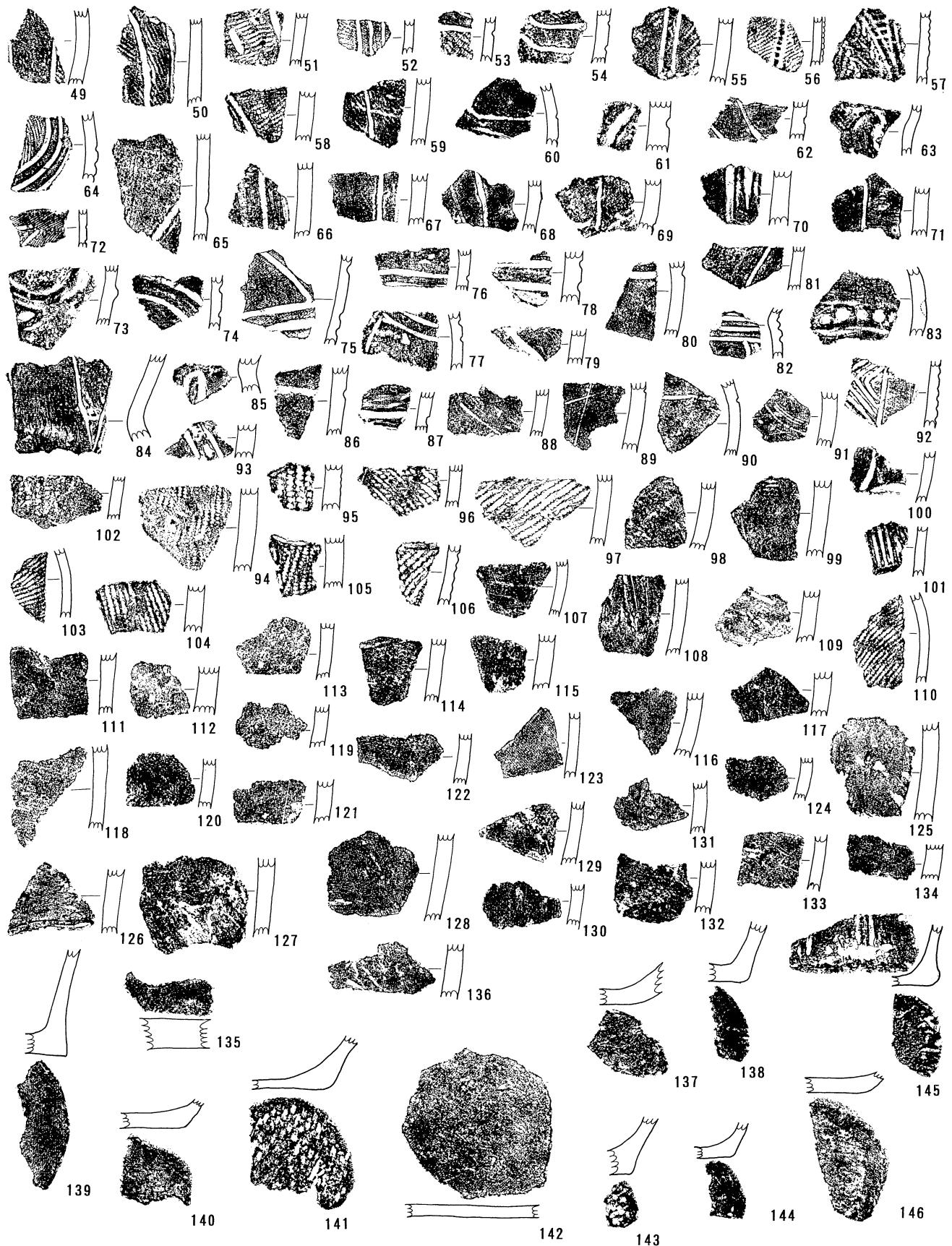
E 1



E 2

0 5 10cm

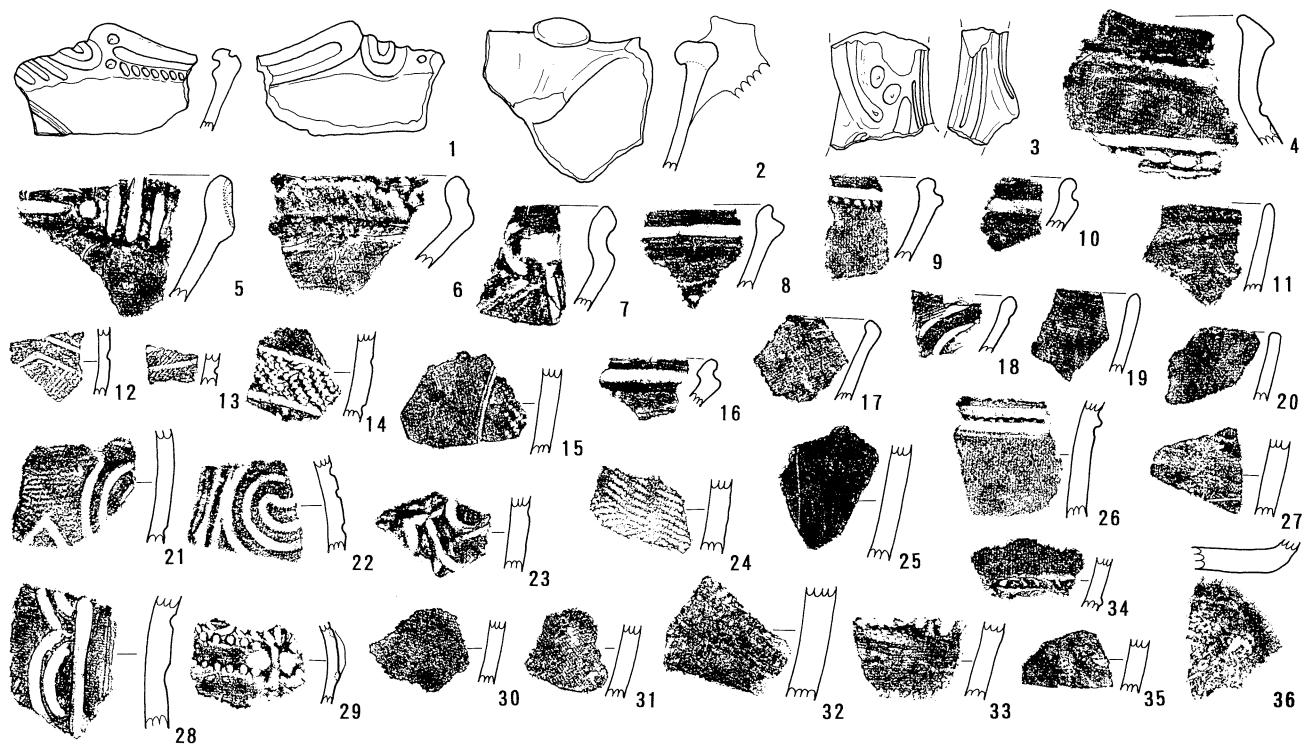
図78 II区出土土器(17)



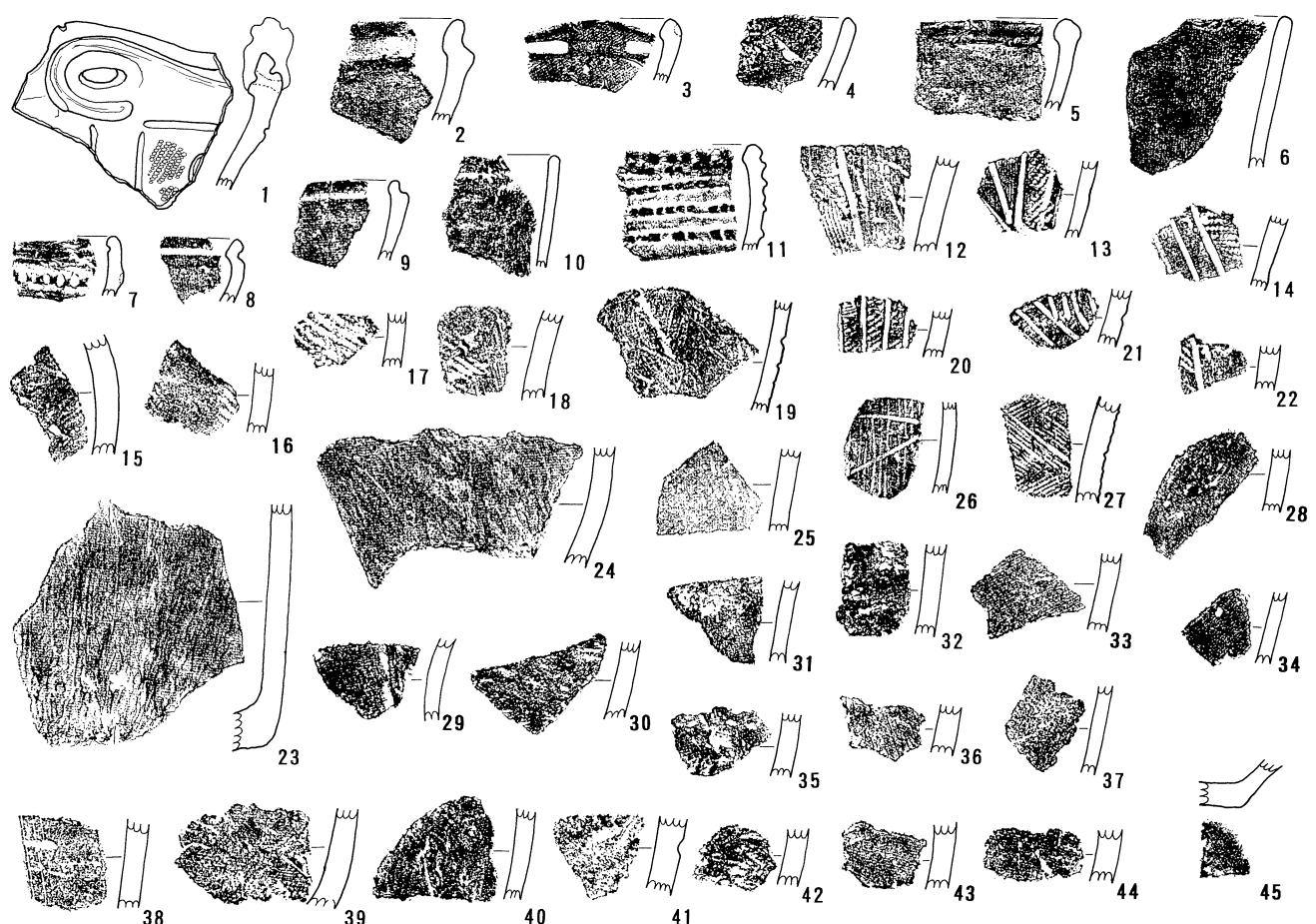
E 2

0 5 10 cm

図79 II区出土土器(18)



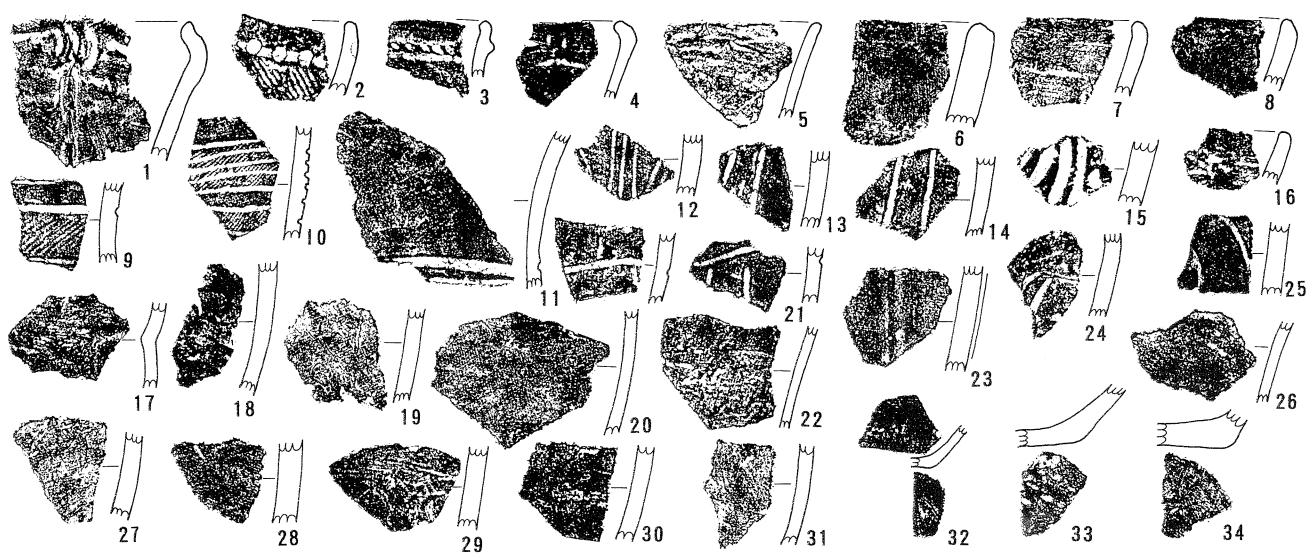
E 3



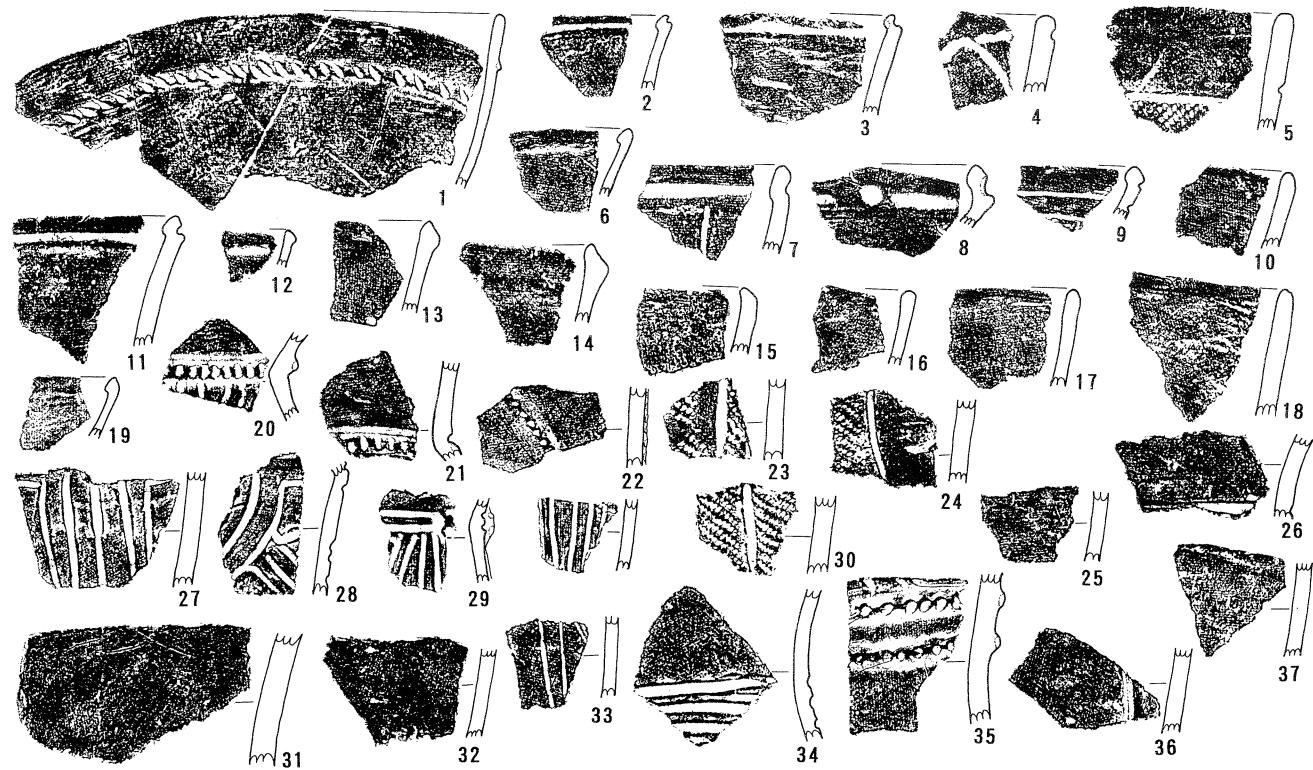
E 4

0 5 10cm

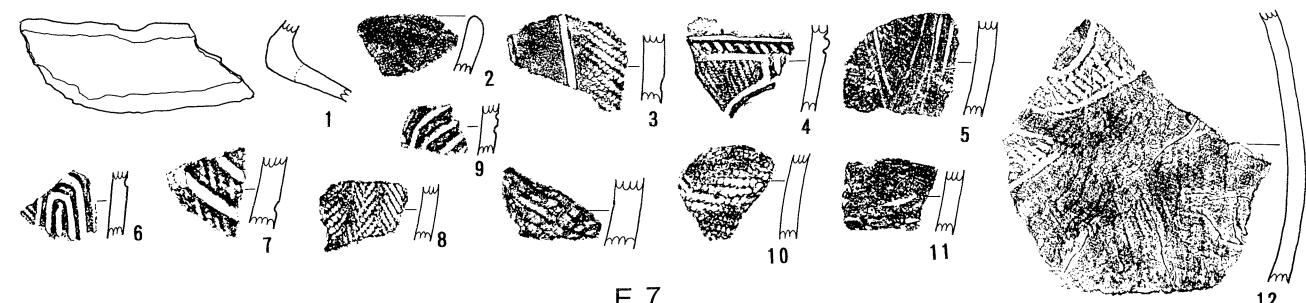
図80 II区出土土器(19)



E 5



E 6



E 7

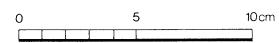
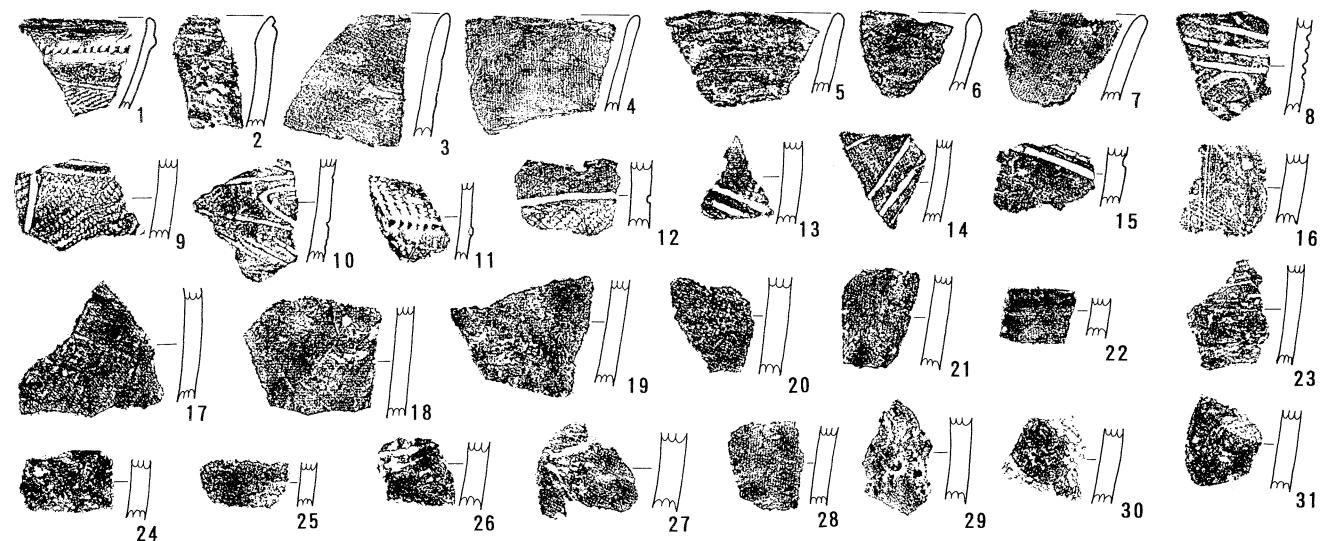
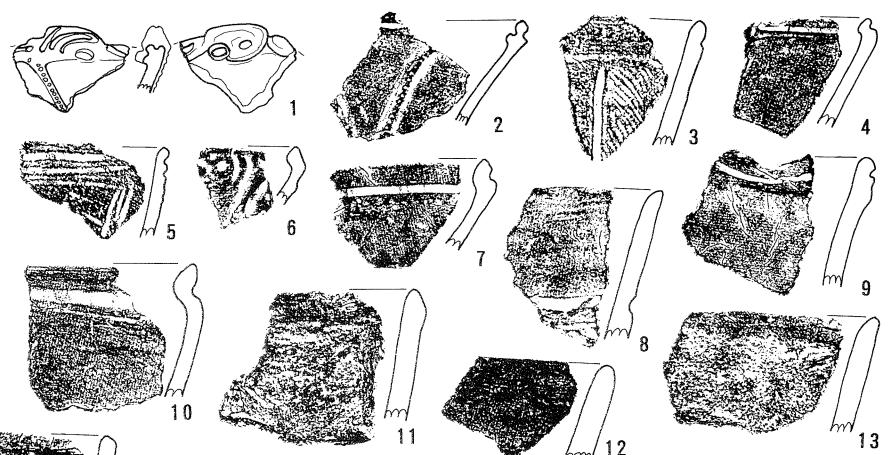
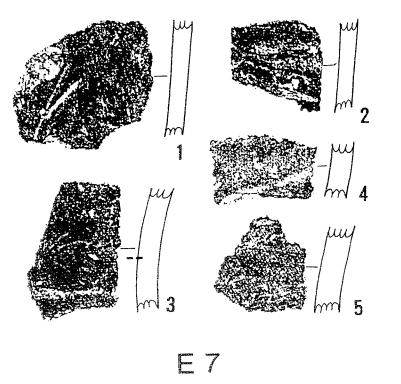
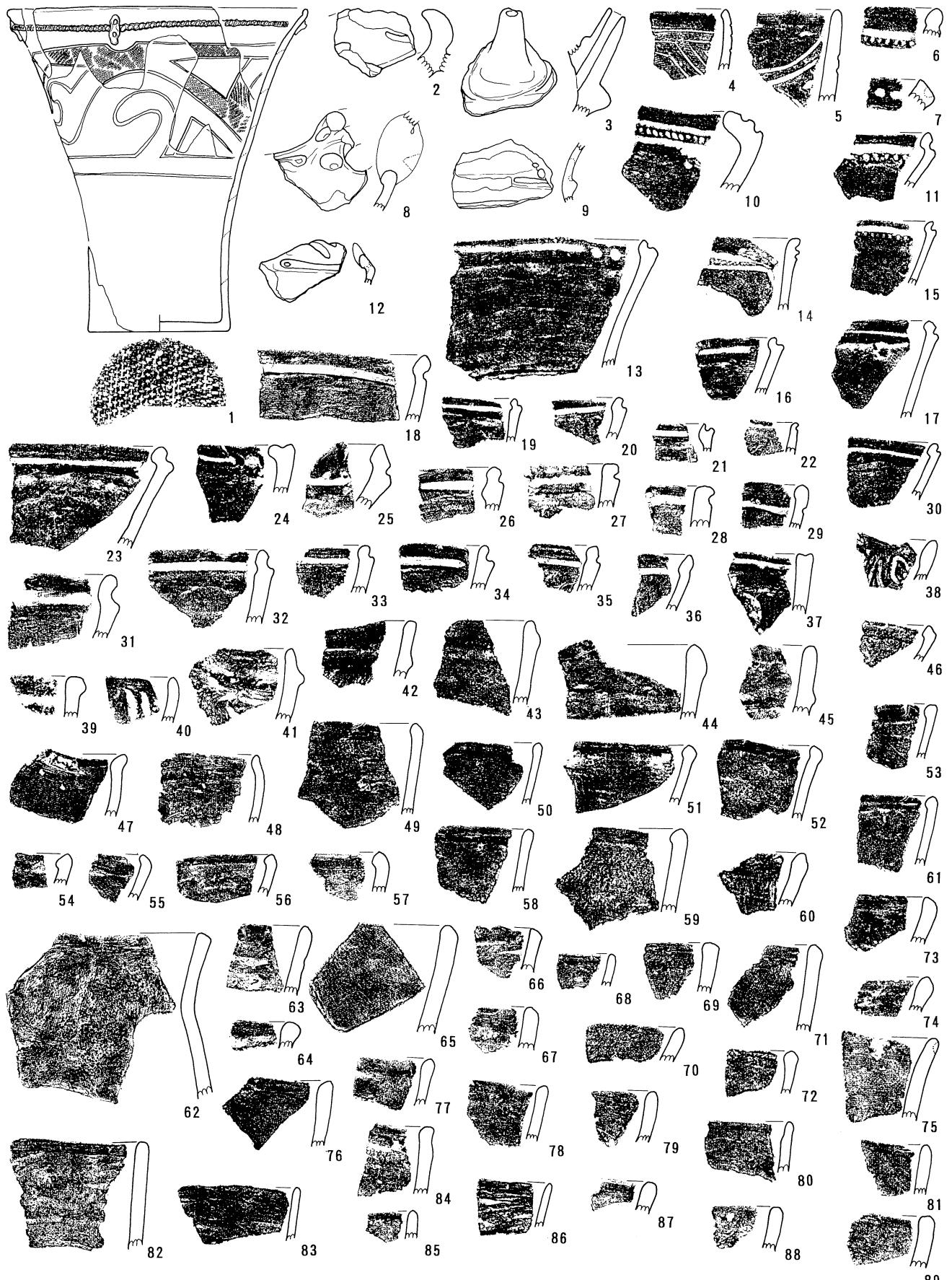


図81 II区出土土器(20)



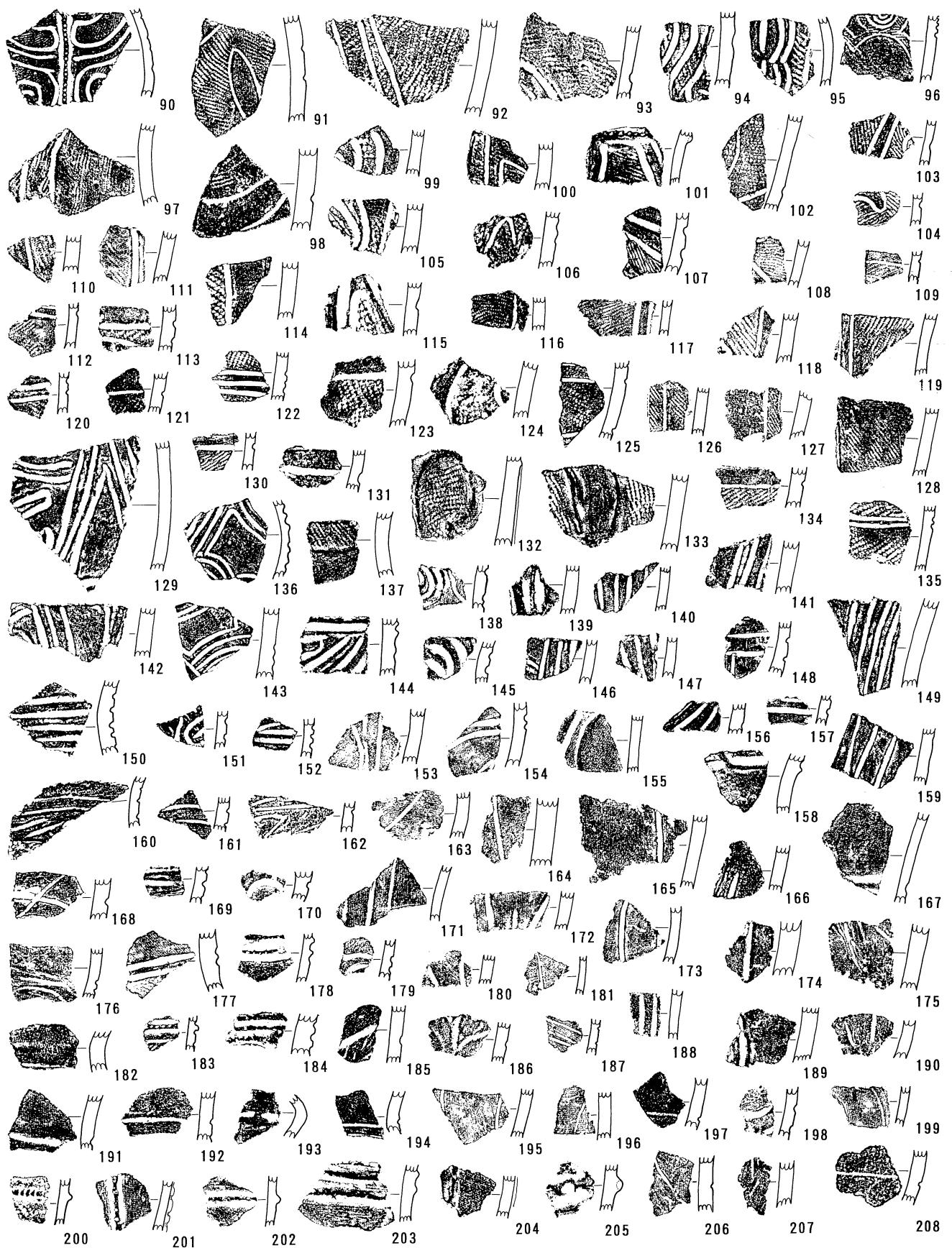
0 5 10cm

図82 II区出土土器(2)



一括土器(1)

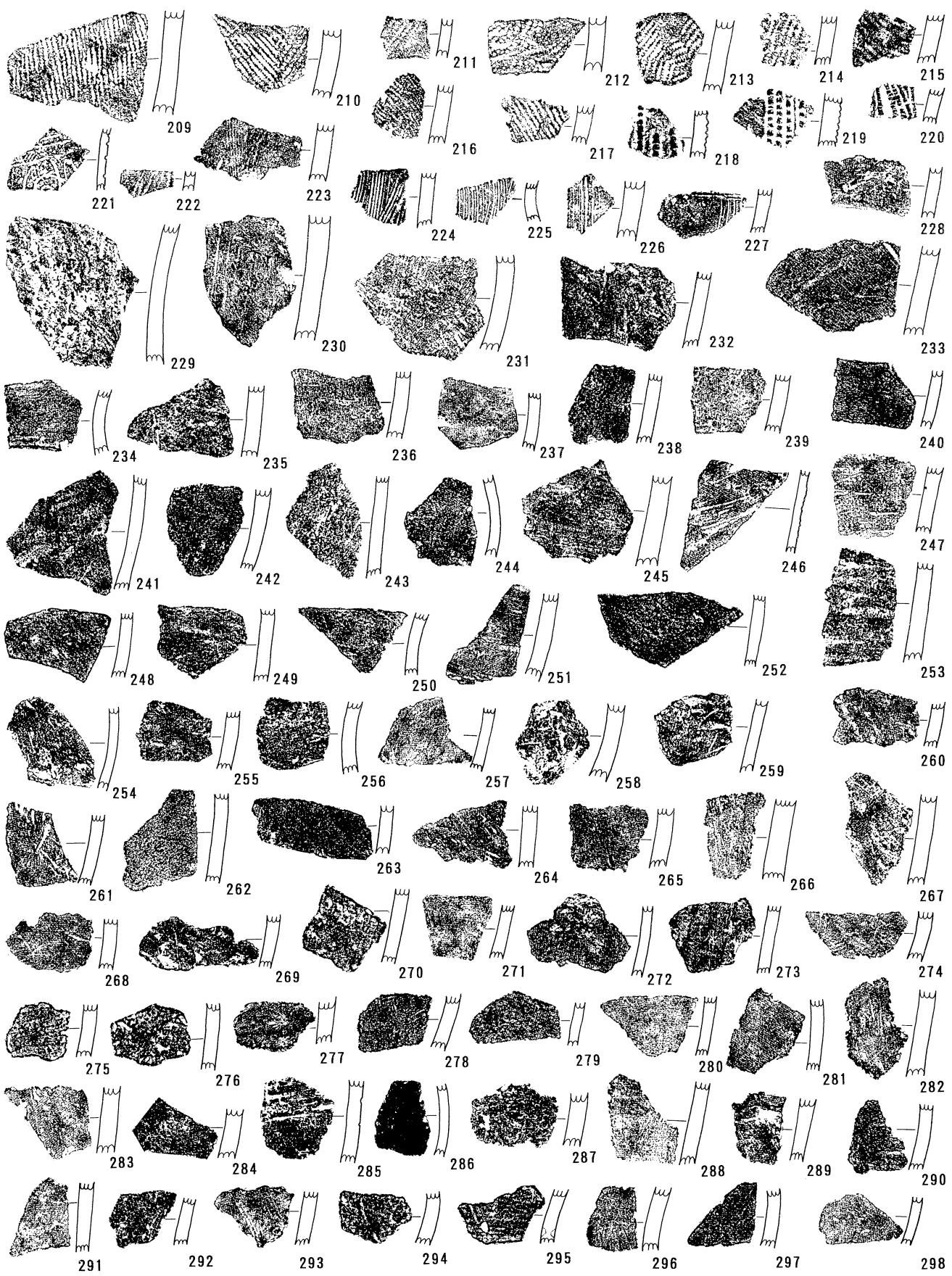
図83 II区出土土器(2)



一括土器(2)

0 5 10 cm

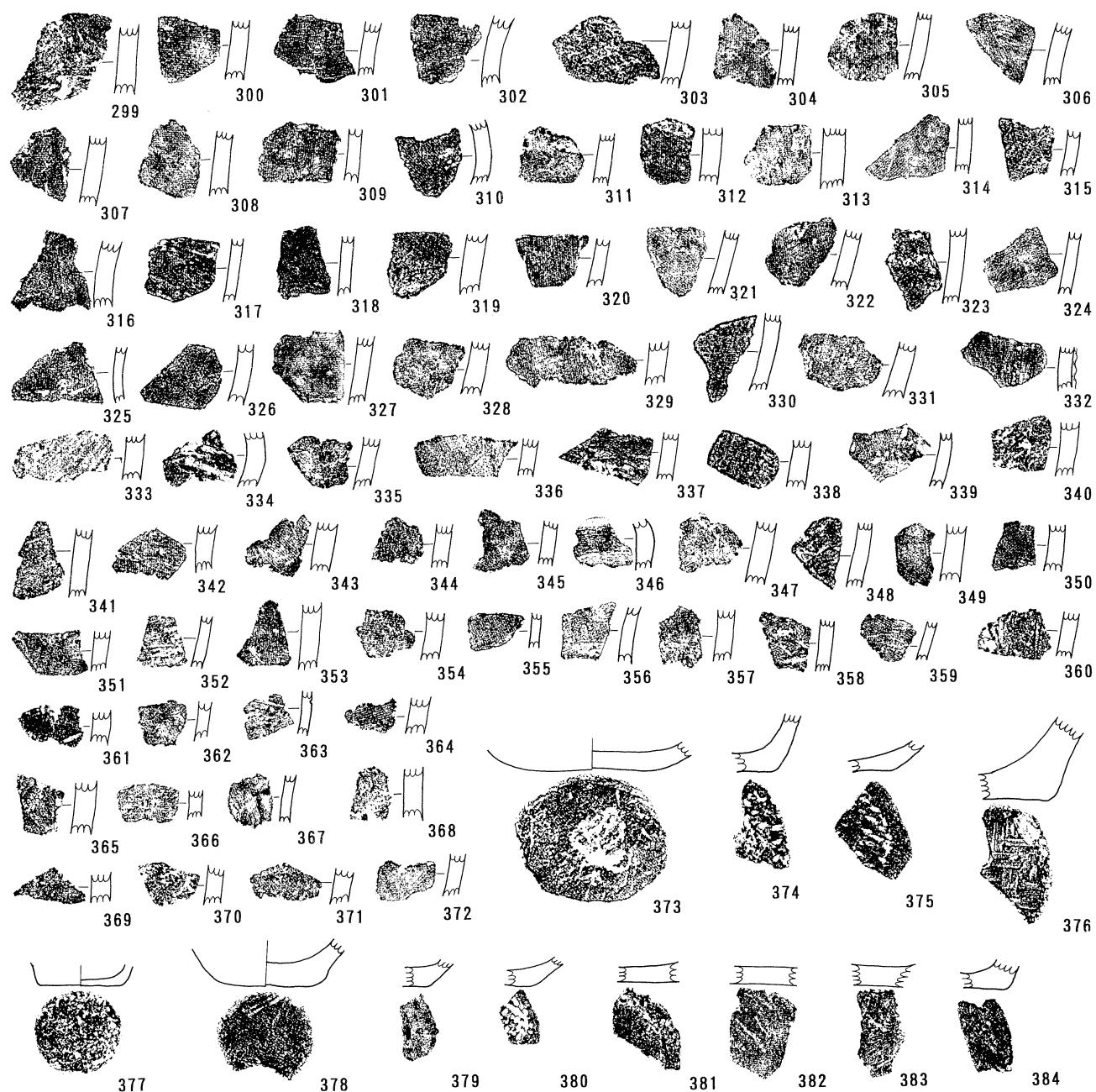
図84 II区出土土器(23)



一括土器(3)

0 5 10cm

図85 II区出土土器(24)



一括土器(4)

図86 II区出土土器(25)

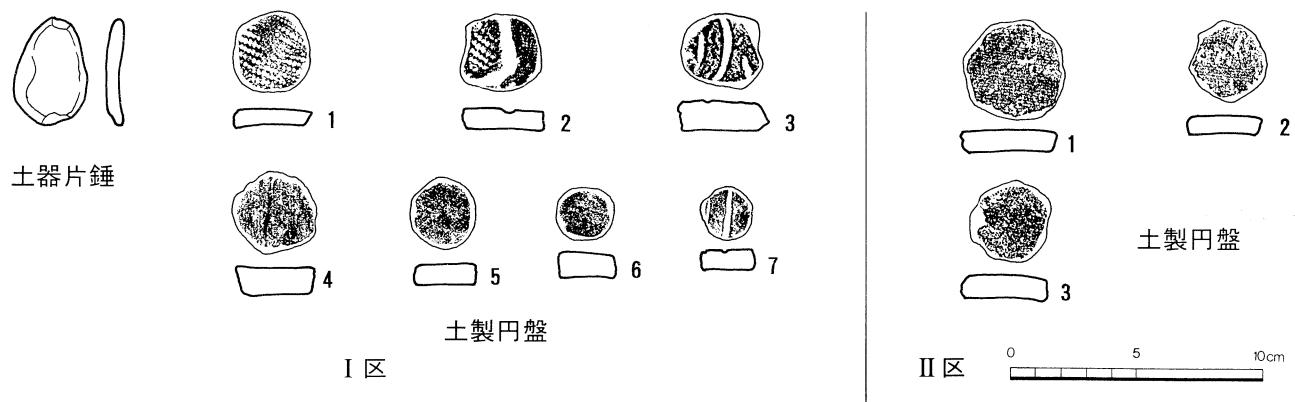


図87 I・II区土製品

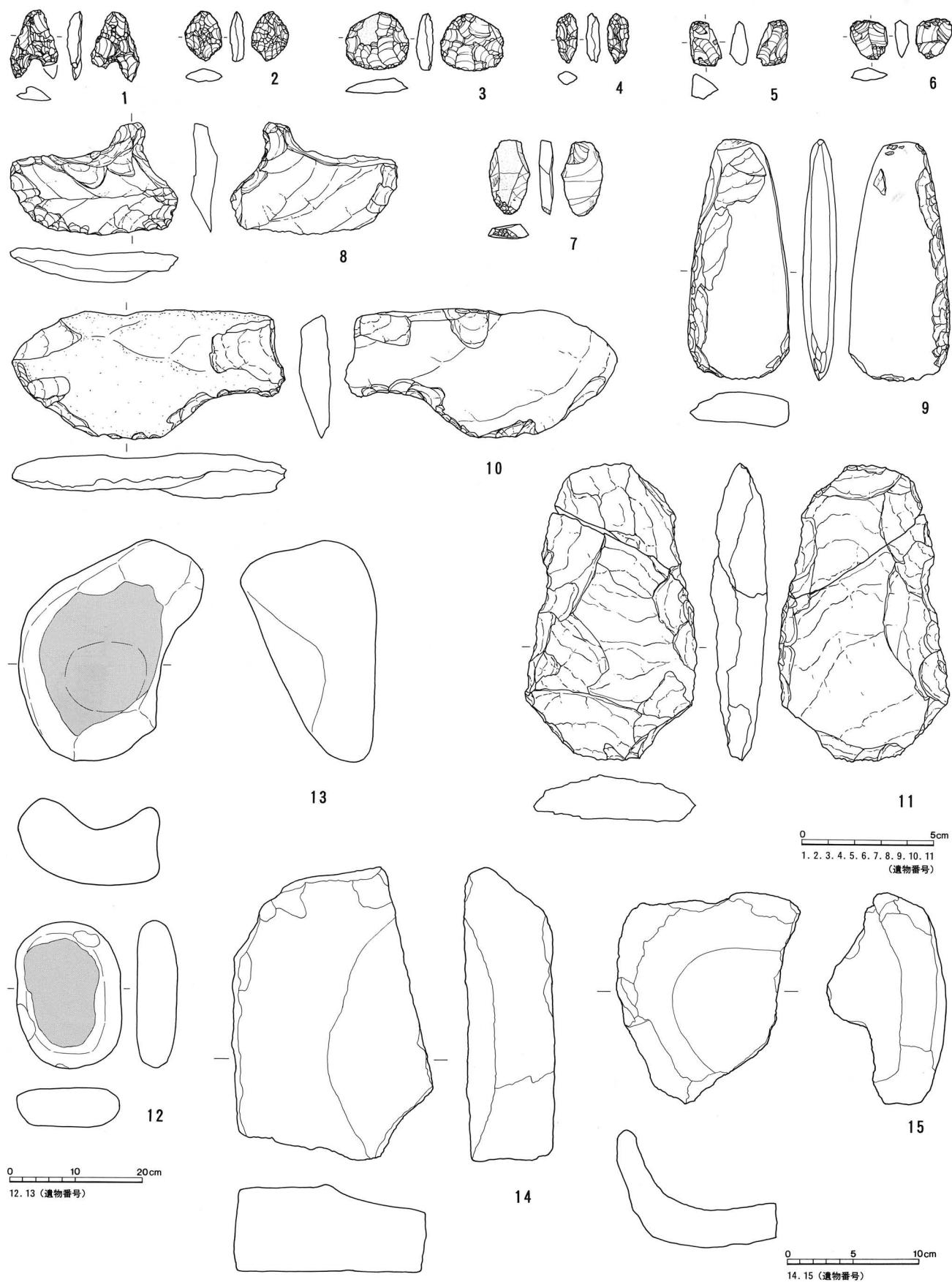


図88 I・II区出土石器

表2 別当西遺跡石器観察表

図番号	出土位置	器種	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	石材	備考
1	I 区 6 住	石 鏃	( 2.60)	1.83	0.55	( 1.6)	黒曜石	無茎凹基
2	I 区 D-8	"	1.89	1.41	0.53	1.2	"	有茎凸基
3	I 区 表採	スクレイパー	2.20	2.40	0.63	3.0	"	
4	I 区 E-13	石 錐	1.90	0.80	0.53	0.7	"	棒状
5	I 区 E-4	ピエス・エスキュー	1.70	1.20	0.89	1.4	"	
6	II 区 C-2	"	1.50	1.39	0.60	0.9	"	
7	I 区 D-10	スクレイパー	2.83	1.53	0.55	2.2	チヤート	
8	I 区 遺構外	石 匙	4.27	6.28	1.32	23.5	ホルンフェルス	横型
9	I 区 6 住	磨製石斧	( 9.07)	( 3.82)	1.28	( 61.0)	"	定角式
10	I 区 5 住	大型粗製石匙	4.90	10.30	1.75	86.3	"	縦型
11	I 区 5 住	打製石斧	11.21	6.43	2.13	162.0	"	撥型
12	I 区 4 住	石 盆	22.30	16.00	5.90	3.75kg	安山岩	作業面は平坦
13	I 区 2 住	"	33.50	27.70	20.80	13.00kg	"	
14	I 区 4 住	"	(22.10)	(15.20)	( 6.90)	( 3.55kg)	"	
15	I 区 6 住	"	(16.00)	(13.90)	( 9.10)	( 1.25kg)	"	作業面に磨痕は見られない

# 第5章 調査のまとめ

## 1 堀之内式土器について

別当西遺跡から最も多く出土した遺物は縄文時代後期前葉の堀之内式土器で、とくに鉢形土器を中心にして復元資料が何点か得られた。

本遺跡の位置する八ヶ岳南麓を中心に、山梨県北西部の北巨摩地域においては、1980年代以降に圃場整備や農道建設などの開発にともない、縄文時代後期に関連した発掘調査が急増した。この時期の遺跡に限ってみれば県内で最も調査事例が多い地域でもある。後期前葉の土器群については、これまでに末木健・伊藤恒彦両氏が長坂町西下屋敷、新津健氏が大泉村金生遺跡でそれぞれまとめている他に（末木・伊藤1976、新津1992）、最近では櫛原功一氏が高根町社口遺跡で堀之内2式を新旧二段階程度に分類している（櫛原1997）。しかしながら一部の概報を除き、北巨摩地域の高根町青木遺跡や石堂B遺跡、須玉町上ノ原遺跡、明野村屋敷添遺跡といった後期を中心とした大規模調査の報告書が未刊行なこともあり、本格的な当地域の堀之内式土器に関する編年研究は将来的な課題にとどまっている。

北巨摩地域とは甲府盆地をはさんでやや隔たるが、県東部の都留市中谷遺跡や富士吉田市池之元遺跡の資料は、長沢宏昌氏や阿部芳郎氏による報告・分類がある（長沢1996、阿部1997）。長沢氏は堀之内1式を三段階に分類し、とくに鉢形土器の変遷に関して「J字やその変形である単純な渦巻きなどが施文される」段階から、「文様の起点に弧線や渦巻を置き、その両側に懸垂文や斜行文を配する」段階、さらに文様の「起点部分の弧線や渦巻きの崩れ」る段階をそれぞれ予測した。

一方、地理的に北巨摩と隣接する長野県地域の堀之内式資料は、平林彰氏が文様構成を中心とした変遷過程を（平林1986・1993）、綿田弘実氏が鉢形土器を中心にして1式と2式それぞれ二ないし三段階程度の細分案を提示し、関東地方とは異なる地域特性の把握を試みている（綿田1990・1997）。しかし綿田氏が編年の機軸にした鉢形土器にしても、石井寛氏が指摘するように（石井1982・1984・1993）、器形と文様構成の変遷過程はやはり漸移的で、1式と2式の境界設定についても全器種にわたって明確な一線を引くことが困難な様子がうかがえる。

ここでは、隣接する長野県地域の堀之内1式と2式について、綿田氏が「両者の境界は明確でない」としながらも堀之内式鉢形土器の変遷の指標とする、「口縁部文様帶は堀之内1式期には一般的に見られ、2式期には消失していく」こと、また胴部文様が「数本単位の集合沈線」のものは「おおむね堀之内1式の新しい部分」、「沈線間隔が均等な磨消縄文による文様表現」のものは2式前半とする指摘（綿田1997）を基礎にした。その上で、前記したように資料的にも未報告遺跡が多く時期尚早だが、別当西遺跡および北巨摩地域の堀之内式土器を簡単に眺めておきたい。第89図は北巨摩地域の既報告資料であり、鉢形と深鉢形土器は主に上段、いわゆる朝顔形深鉢は10を除いて、主に下段に集成した。

1は比較的大きな4単位の突起や口縁部貼付文の様相から、2はJ字文や渦巻文が強調される点などから、堀之内1式でも古い段階と思われる。

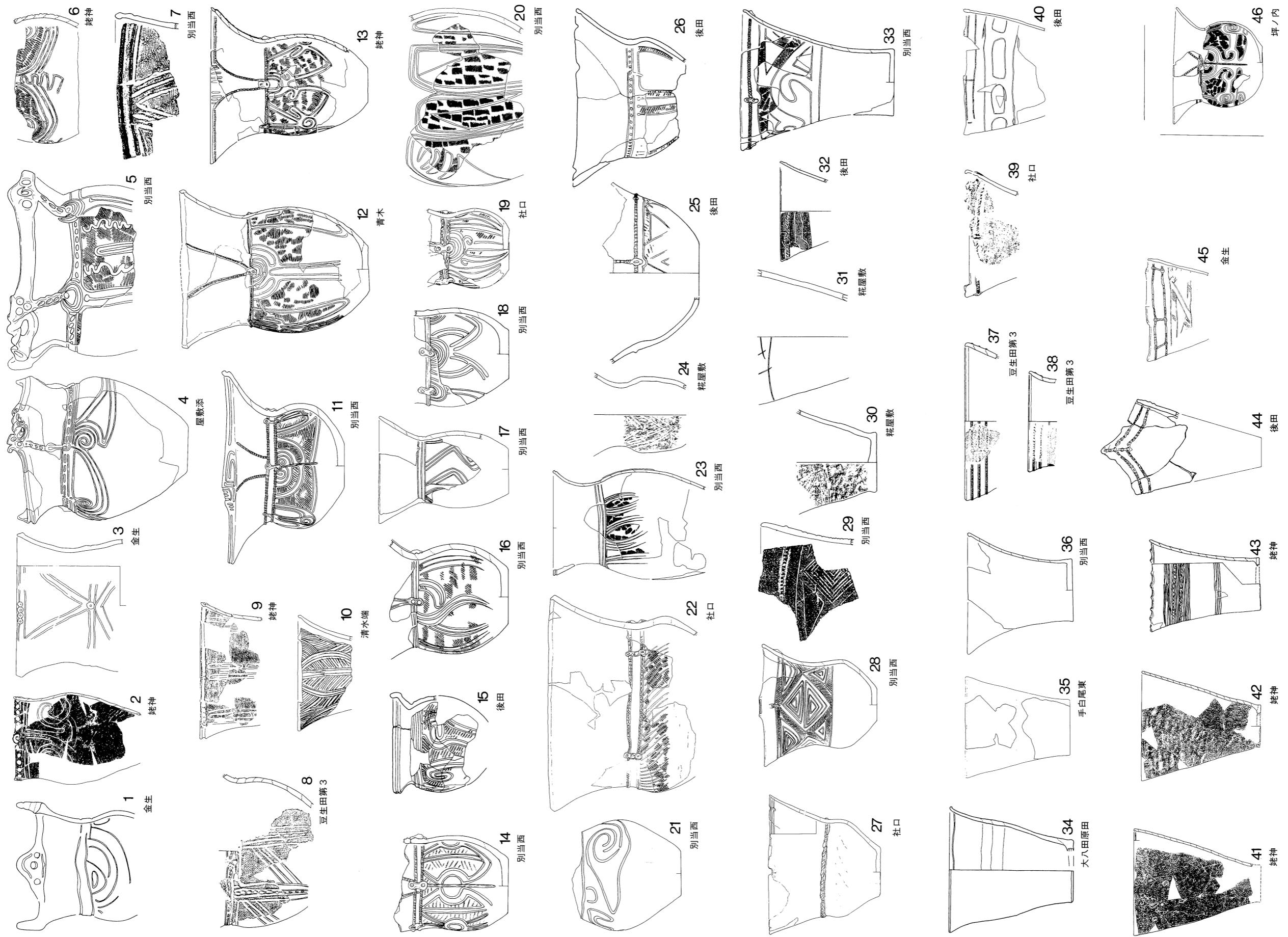


図89 山梨県北西部北巨摩地域の堀之内式土器 [46を除く・出典は文末に掲載] (縮尺不同)

5はI区5号住からの出土で、6と同様に胴部の蛇行文が特徴的で、東関東との繋がりも考えられる。口縁部文様も立体的であり4に近い。9は西関東の「下北原式」系列のなかでは新しく、7と近い段階が予想される。7は5と共に伴している。強いていうならばこれらは1式中段階から新段階に位置する。21も堀之内1式であろう。

11はII区1号住から出土し、概報（長坂町教育委員会1987）では堀之内1式と報告されてきたものである。2種類の抽象文からなり、一つは頭部であろう渦巻文と腕か翼のような沈線表現、中心の「脊椎」部分が刻み目隆線で描かれている。もう一つは中心に渦巻文で「山」の字状の沈線表現からなる。各文様単位は下端で沈線により連絡し、胴部下半は無文である。頸部には刻み目隆線、口縁部文様は若干の突起の他は沈線で描かれる。文様モチーフからすれば、前掲の綿田氏の分類によるA3群、すなわち「下端開放の懸垂文を描く」グループに近いものの、これは下端が開放されず連結されており、渦巻文を下端で横位に連絡する文様構成が意識されているように思われる。これは46の、長野県松本市坪ノ内遺跡10号住居埋甕の胴部文様に近似している。さらに12や13が同様の表現をもち、14や18、19はこれらが簡略化したものだろうか。17は11と共に伴しているが、全体的な文様はわからない。11のような抽象文の出現とその後の展開については、渦巻文グループとの関わりを持つつも、その後に抽象文グループとしての形骸化を経つつ、集合沈線や弧線文モチーフを取り込まれていくことも考えられる。これらは4や5に比較すると、口縁部文様がより簡略化されたり、文様表現自体がなくなること、さらに胴部での沈線の多様などから堀之内1式末から2式前半に比定できると思われるが、さらに細分できる可能性があろう。46の坪ノ内遺跡例は口縁部文様が認められないとともに、文様単位が明らかに帶状化で表現される。11の鉢が簡略化しつつも口縁部文様を有し、文様単位に対する磨消表現が不明確という点に限れば、11よりも46の方が新しい段階として考えられるが、いずれにせよ両者は連続的に把握できる資料であろう。なお、46は平林彰氏が堀之内2式の中段階に位置づけている（平林1993）。また、19は櫛原功一氏が堀之内2式古段階としたものである（櫛原1997）。

これらの鉢形土器は22にみられる胴部の縮小化、および23のように沈線表現の形骸化を経て、25～27に変化していく。23は36と共に伴する。櫛原氏は22を堀之内2式古段階に、27を2式新段階・加曾利B1式直前段階に位置づけている（櫛原、前掲）。20はI区2号住からの出土で堀之内1式と思われるが、28と共に伴している。21はI区8号住居からの出土で、横位に連絡する渦巻文が形骸化したものであろうか。

28以降は堀之内2式の口縁が外反する深鉢で、I区2号住の28、I区6号住の29はやや古い段階に、II区表採資料の33は2式中段階のものと思われる。I区3号住のような無文土器は北巨摩地域では34・35・41・42などがある。41と42は、43と共に伴する。

別当西遺跡では、鉢形と朝顔形深鉢いずれにしても1式古段階と2式新段階に相当する資料が少なく、1式後半から2式前半に集中するようである。北巨摩地域の堀之内式編年作業は、本遺跡に比較すれば遺構・遺物ともはるかに膨大な、須玉町上ノ原遺跡と明野村屋敷添遺跡の資料化により著しく進展することが明らかであり、ここで扱った土器群に関しても両遺跡資料と比較するなかで再検討るべきであろう。

## 2 I区4号住居址出土の縄文時代後期末葉土器について

I区4号住からは、横位の羽状沈線が施された深鉢が2個体出土した（図26-1・2）。それぞれは口縁部が「く」の字状に屈曲し、この屈曲部から口唇部にかけて3条の沈線が横位に平行する。胴部は緩やかに

括れ、括れ部に2条の平行沈線があり、そこから上位に2単位の羽状沈線が施され、下位が無文になると  
いう共通点をもつ。一方、口縁屈曲部の刻目の有無と口縁瘤状突起の形状に相違が認められる。

このような口縁部が屈曲する羽状沈線文の深鉢は、口縁部文様が弧線モチーフから次第に直線的になり、  
さらに縄文帯が消失して沈線のみの表現に単純化することが、百瀬長秀氏によって指摘される(百瀬1984)。  
この点からすれば、両土器は百瀬氏の分類による第4段階になる。また1にみられる口縁部沈線が集約する  
瘤状突起の在り方は第3段階とも捉えられる。よってこれらは、百瀬氏の併行関係からは曾谷・高井東  
式から安行1・2式に併行するものと理解される。1の瘤状突起は高根町青木遺跡や米田遺跡に同様なも  
のがある(図89)。青木遺跡例は櫛原功一氏が「曾谷・安行期の在地系土器群」と位置づけたものである(櫛  
原ほか1988)。2の瘤状突起は、安行2式に特徴的な縦位の刻みが入る土器群との関連性が指摘できよう。  
新津健氏は別当西遺跡から指呼の間にある、大泉村金生遺跡の羽状沈線文土器について、(a)「口縁部文  
様帶に縄文帯があるもの」、(b)「口縁部文様帶に縄文は施されず、平行沈線が横走するもの」、(c)「縄  
文はなく、口縁部文様帶に刻目や三日月状の貼付文のみられるもの」の3種に分類し、おおむね(a)を  
曾谷式、(b)(c)を曾谷式から安行1式に併行するものとした(新津1989・1992)。これによれば1は(b)  
に、2は口縁屈曲部の刻目の捉え方が問題になるが、(b)または(c)に位置づけられるものと考えたい。

### 3 八ヶ岳南麓鳩川流域の縄文時代後期遺跡について

別当西遺跡は、八ヶ岳南麓の山腹のなかでも、ひときわ緩傾斜地に立地する。この緩斜面はおよそ南北  
2km、東西1kmに広がり、現在までにほとんどが水田化され、高冷な丘陵地の八ヶ岳南麓にあっては最大  
級の水田卓越地帯となった。地元の農家では、この一帯を地名にちなんで「大八田たんぼ」と呼び、面積  
のみならず水利と日照に恵まれた優良田とされる。一方、この水田地帯の周囲は、八ヶ岳山体崩壊時に形  
成した泥流の残丘や丘陵性の尾根が広がり、土地利用も一転して山林や畠地となっている。

第91図は別当西遺跡周辺の地形と、縄文時代に関する遺跡調査地区を示したものである。中央南北に長  
く「大八田たんぼ」が広がり、その周囲に山林や畠地、急傾斜地が展開するのが理解される。

新津健氏の指摘(新津1984)にあるように、八ヶ岳南麓の後晩期遺跡は「大八田たんぼ」のような河川  
からの比高が小さい、低尾根斜面に立地する。第91図においてこの傾向は端的に示される。1から4および  
7、8の各遺跡が「大八田たんぼ」の同一的な地形の広がりに含まれ、ほぼ水田化された低尾根に立地  
する。1(別当西)は堀之内式期と後期末葉の住居10件、2(大八田原田)は堀之内式期の住居1件、3  
(金生)は後晩期全般にわたる拠点的集落で、後晩期の住居約38件、4(豆生田第3)は堀之内2~加曾  
利B1式期の住居2件が確認された、ともに集落遺跡である。

一方、7(小和田)は洛沢・新道式期の住居が2件、8(小屋敷)は五領ヶ台式期の住居1件と中期終  
末の土壙群、3(金生)は後晩期以外に前期初頭1件、曾利式前半2件からなる。いずれにしても、当地  
域の中期にしては拠点的な規模の集落遺跡とは言いがたい。

当地域において、前期や中期の大規模遺跡は5(天神C)や6(寺所第2)、10(柳坪A・B)といった  
「大八田たんぼ」周辺の地形起伏の比較的大きい地域に立地する。いずれも確認された住居数で、5は諸  
磯b~五領ヶ台式期の住居58件、6は速報段階だが中期の住居93件、10は中期後半を中心に五領ヶ台~曾

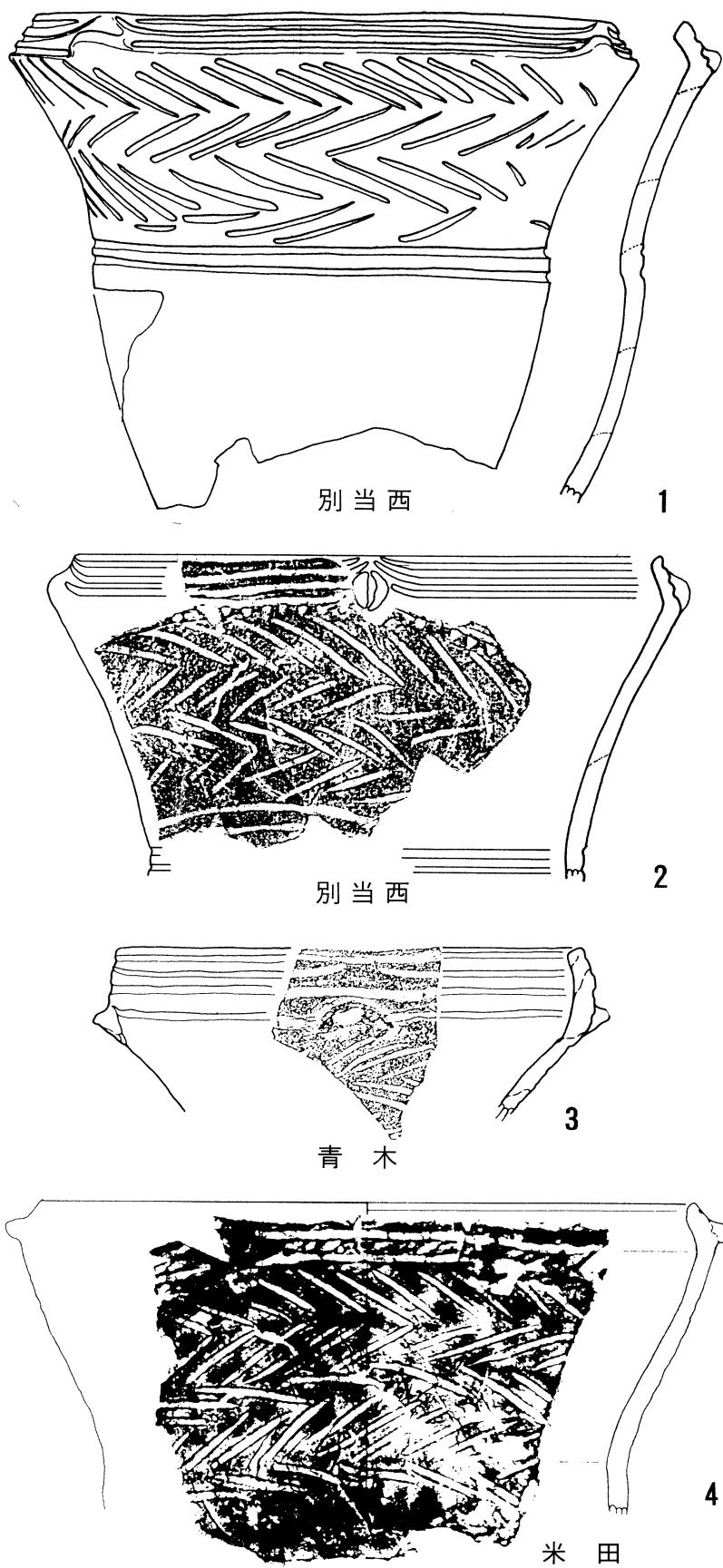


図90 八ヶ岳南麓の後期末葉羽状沈線文土器（縮尺不同）

利式期の住居31件となる。

「大八田たんぼ」内の1～4の各遺跡の分布は、半径300mの円内に収まるもので、いずれも堀之内2式期前後の住居が確認されている。別当西遺跡からは史跡公園となった金生遺跡が眺められるが、目によい人ならば金生遺跡の見学者を識別することも可能な距離である。さらに、その手前に大八田原田遺跡が立地する。もし同時存在したとすれば、同一集団による集落の広がりとして捉えることも可能であろう。8の小屋敷遺跡でも堀之内式期の土器片がある。この図の範囲内においては、このような堀之内式期の居住域の広がりが、加曽利B1式期には金生遺跡と豆生田第3遺跡に、後期末には金生遺跡と別当西遺跡に、晩期では金生遺跡のみとなる。

このような集落動向とでもいるべき視点から、あらためて別当西遺跡を眺めた場合、以下の点をまとめとして問題提起しておきたい。

- 1) 少なくとも調査区内における加曽利B式期の空白期間。
- 2) 出土遺物が土器片以外のものが少ない。とくに石棒や石剣、土偶など祭祀に関連した道具とされる遺物が皆無であること。後期末葉のI区4号住においても同様。
- 3) I区2・3号住およびII区2号住のような敷石住居址と、他の竪穴住居址の形態・構造の相違。

まず3)の問題だが、炉体土器を有さない住居の時期決定が確実にできないためにここではあまり検討する部分がない。他の周辺遺跡の報告事例の増加を待ちたい。1)については、櫛原功一氏が豆生田第3遺跡の報告のなかで、後期中葉以降に住居址数増加による集落規模の発達過程が予測される金生遺跡に対して、周辺の後期集落はこの時期に断続することから、「金生遺跡」集落への周辺集落の統合があったことを推察する(櫛原1986)。集落という単位をどのレベルで捉えるのか、その規定は極めて困難であるが、別当西遺跡も含めて第91図でみたように、少なくとも半径500m前後のエリアで居住域の統合があった可能性は高い。

同時に櫛原氏は、金生遺跡で後期中葉以降、大規模屋外配石の構築が活発になる現象と、これに対して豆生田第3遺跡においては、祭祀にともなう配石が欠如することなどから、「金生遺跡はその周辺の集落で個々の家の祭祀として行われていた各種祭祀や、集落ごとに行われていたムラの祀りを、屋外の共同祭祀として大規模に行なった集落」と位置づけ、「金生遺跡」集落への祭祀行為の統合をも指摘する(櫛原、前掲)。

この指摘に関しては2)も問題となろう。豆生田第3遺跡では土偶2点の他に加曽利B1式期の住居内の炉から丸石が出土しているが、別当西遺跡では祭祀具的な遺構・遺物は確実なものが見受けられない。「日常的な」土器や少々の石器の他に、強いてあげるならば、祭祀具かどうかは別として、土製円盤や注口土器片が数点確認されたのみである。大八田原田遺跡では堀之内式期の敷石住居1件だが、土器以外の石器や祭祀具に相当するようなものは、やはり出土していない。これに対して、堀之内式期の数件の住居址や、加曽利B式期にかけての屋外配石が確認された茅ヶ岳山麓の明野村屋敷添遺跡では、丸石や石棒類などが出土している(明野村教育委員会1993)。調査の限りではこの屋敷添遺跡と別当西遺跡は、住居址や遺物出土量のピークが堀之内式期にあるという点で共通するが、祭祀的な遺構・遺物の在り方には大きな相違があることは明らかであろう。金生遺跡周辺の「遺跡」地でも屋敷添遺跡と同様に執り行われていた祭祀行為が、「金生遺跡」への統合過程で、祭祀具などが「金生遺跡」へと運び込まれた結果、いわば日常的廃棄物としての土器のみが遺されることになったのだろうか。

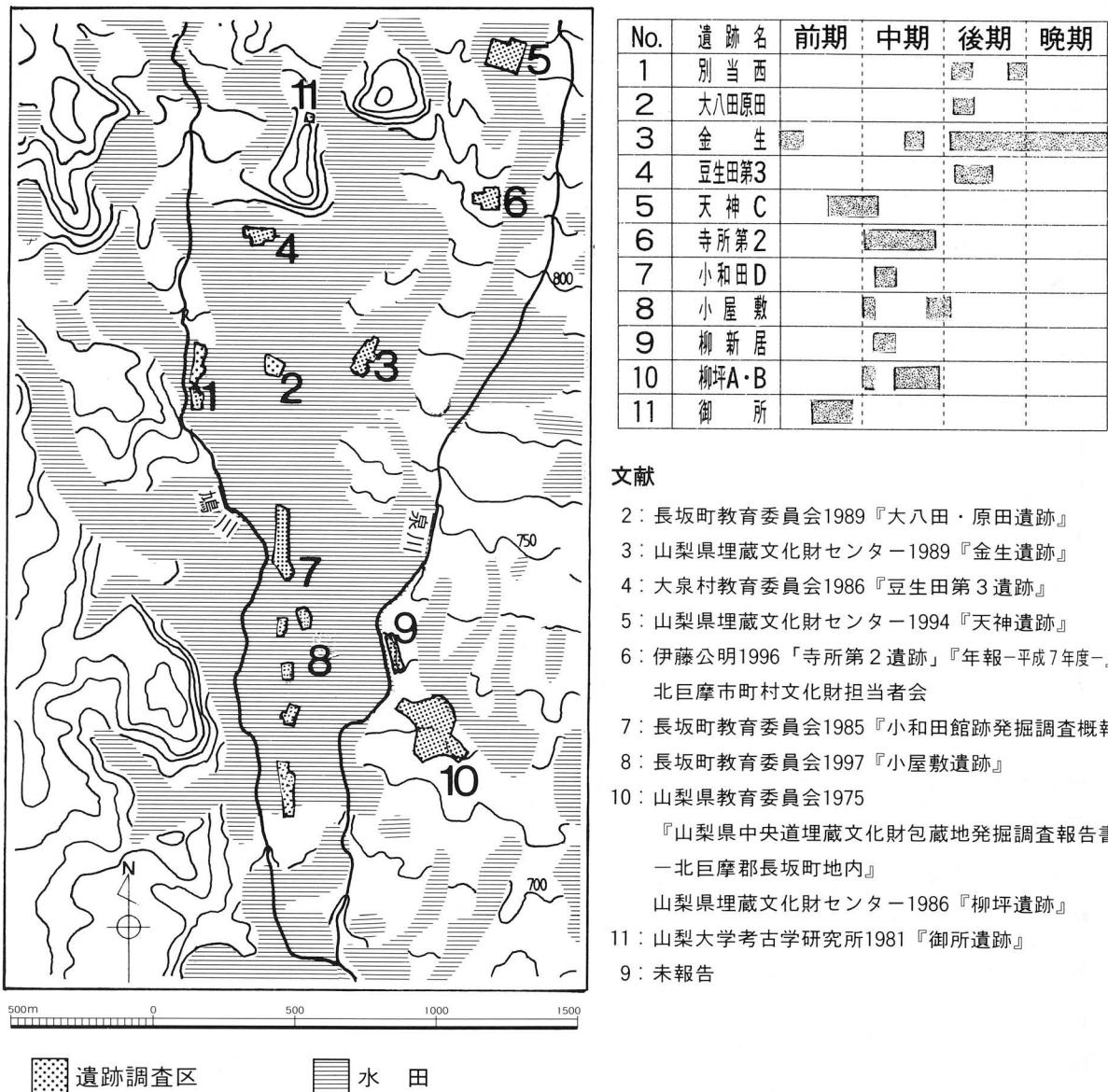


図91 主な遺跡調査区の位置（左）と遺跡の継続（右上）

しかし、それのみでは別当西遺跡で屋外配石が存在しそうもないことへの解釈にはなり得ない。後期前半に活発な祭祀行為が、多数の屋外配石の存在から予想される屋敷添遺跡にあっても、加曽利B式期を境に遺跡の継続が断絶してしまう。櫛原氏のいう統合過程には、堀之内段階と加曽利B段階という多少の質的な相違を伴った時間的ギャップも考えられよう。すなわち、別当西遺跡・大八田原田遺跡のように堀之内2式期までのいわば単純な集落遺跡が断絶する段階から、屋敷添遺跡や姥神遺跡（大泉村教育委員会1987）のようにある程度の祭祀遺構まで備えた集落遺跡がやや長い期間継続しながらも、後期中葉に至って断絶する段階を経て、祭祀行為が（極端に）集約した金生遺跡や高根町石堂B遺跡（高根町教育委員会1986・1987）、長坂町長坂上条遺跡（大山ほか1941・長坂町教育委員会1997）などが晚期前半にわたって存続していく。想像を逞しくすれば、そのようななかで、金生遺跡から数百メートル圏内の周辺遺跡は、堀之内・加曽利B1式期の段階で金生遺跡を中心に統合過程が進んだため、金生遺跡以外に後期前半段階の屋外配石が発達する余地がなかったとも思われる。一方、金生遺跡から2～3キロメートルほど離れた姥神・石堂B・青木（櫛原ほか1988）の各遺跡では、後期中葉の屋外配石が構築される。いわば、統合する側の「遺

跡」地からの距離関係によって、集落の時間的な動きや消長が説明できる側面もあるのではないだろうか。別当西遺跡 I 区 4 号住で、混入品を除けば後期末葉土器が 2、3 点出土したのみという単純な状況も、このような流れのなかで説明できないだろうか。ただし、ここで多用した統合という概念が、異なる系譜の集団間の合併と、同一の集団意識を共有する集団の分散型から集住型居住形態への生計戦略的変化とでは、意味あいが全く異なることはいうまでもなく、考古学的にどのように検証していくのかが課題である。

---

## 本文引用・参考文献

- 明野村教育委員会 1993 『屋敷添』  
阿部芳郎 1997 「堀之内 2 式の器種構成と組成率」『池之元遺跡発掘調査研究報告書』 富士吉田市史編さん室  
石井 寛 1982 「南関東西南部」『シンポジウム堀之内式土器の記録』 市立市川考古博物館  
石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究(予察)」『調査研究収録』5 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団  
石井 寛 1993 「堀之内 1 式土器群に関する問題」『華藏台南遺跡牛ヶ谷遺跡』 横浜市ふるさと歴史財団  
大泉村教育委員会 1987 『姥神遺跡』  
大山 柏ほか 1941 「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13-3 史前学会  
櫛原功一 1986 「豆生田第3遺跡と金生遺跡の関係について」『豆生田第3遺跡』 大泉村教育委員会  
櫛原功一ほか 1988 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会  
櫛原功一 1997 「遺構・遺物の分析」『社口遺跡第3次調査報告書』 高根町教育委員会  
末木 健・伊藤恒彦 1976 「山梨県長坂町西下屋敷遺跡の縄文後期土器」『信濃』28-6 信濃史学会  
高根町教育委員会 1986 『西ノ原遺跡石堂遺跡(概報)』  
高根町教育委員会 1987 『石堂B遺跡第二次調査(概報)』  
長坂町教育委員会 1987 『深草遺跡・別当十三塚遺跡・別当遺跡(第二次)・糀屋敷遺跡』  
長坂町教育委員会 1997 『長坂上条遺跡(概報)』  
長沢宏昌 1996 「堀之内 1 式土器について」『中谷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター  
新津 健 1984 「八ヶ岳南麓における縄文後・晚期の遺跡について」『甲斐考古』21-2 山梨県考古学会  
新津 健 1989 「遺物・遺構の検討」『金生遺跡 II(縄文時代編)』 山梨県埋蔵文化財センター  
新津 健 1992 「金生遺跡出土の土器 1(後期)」『研究紀要』8 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター  
平林 彰 1986 「縄文時代後期前葉土器の分類と検討」『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会  
平林 彰 1993 「縄文土器の系統と変遷」『北村遺跡』 長野県埋蔵文化財センター  
百瀬長秀 1984 「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学会誌』49 長野県考古学会  
綿田弘実 1990 「長野県の後期前葉縄文土器群」『縄文後期の諸問題』 縄文セミナーの会  
綿田弘実 1997 「長野県の称名寺式、堀之内 1・2 式土器群」『滝沢遺跡』 長野県御代田町教育委員会
- 

## 第89回資料出典文献

- No.1 : 新津 健 1992 「金生遺跡出土の土器1(後期)」『研究紀要』8 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター  
No.3・45 : 山梨県埋蔵文化財センター 1989 『金生遺跡 II(縄文時代編)』  
No.2・6・9・13・41~43 : 大泉村教育委員会 1987 『姥神遺跡』  
No.4 : 明野村教育委員会 1993 『屋敷添』  
No.8・37・38 : 大泉村教育委員会 1986 『豆生田第3遺跡』  
No.10 : 明野村教育委員会 1986 『清水端遺跡』  
No.12 : 櫛原功一ほか 1988 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2 山梨県考古学協会  
No.15・25・26・32・40・44 : 菊崎市教育委員会 1989 『後田遺跡』  
No.19・22・27・39 : 高根町教育委員会 1997 『社口遺跡第3次調査報告書』  
No.24・30・31 : 長坂町教育委員会 1987 『深草遺跡・別当十三塚遺跡・別当遺跡(第二次)・糀屋敷遺跡』  
No.34 : 長坂町教育委員会 1989 『大八田・原田遺跡』  
No.35 : 手白尾東遺跡調査団 1995 『手白尾東遺跡』  
No.46 : 松本市教育委員会 1990 『松本市坪ノ内遺跡』  
No.5・7・11・14・16・17・18・20・21・23・28・29・33・36は別当西遺跡



図版1 I区1号住居址



図版2 I区1号住居址  
遺物出土状況



図版3 I区2号住居址



図版4 I区2号住居址 炉



図版5 I区3号住居址



図版6 I区3号住居址 炉



図版7  
I区4号住居址 炉



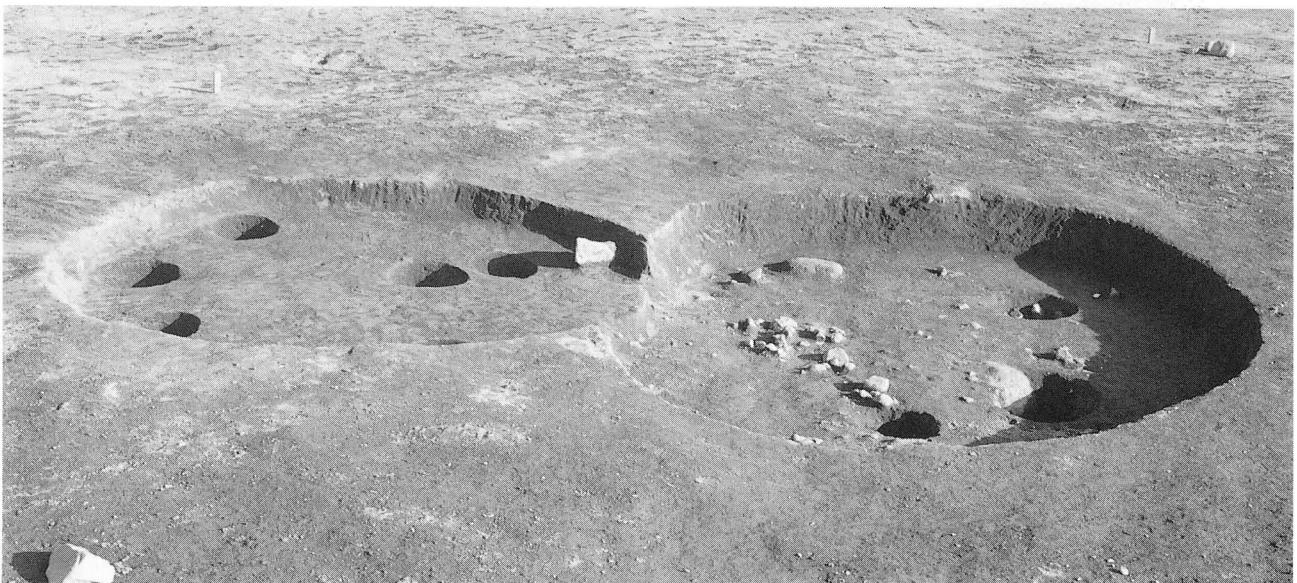
図版8 I区4号住居址



図版9 I区5号住居址



図版10 I区5号住居址遺物出土状況



図版11 I区7号(左)・8号(右)住居址



図版12 I区1号住出土土器



図版13 I区1号住出土土器



図版15 I区2号住出土土器



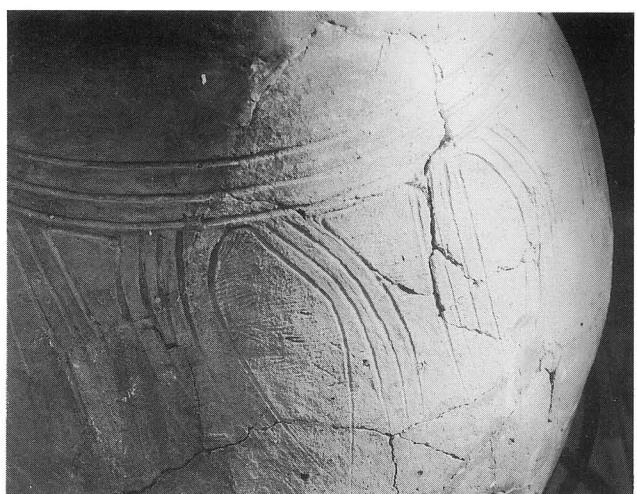
図版14 I区2号住炉体土器



図版16 I区2号住出土土器



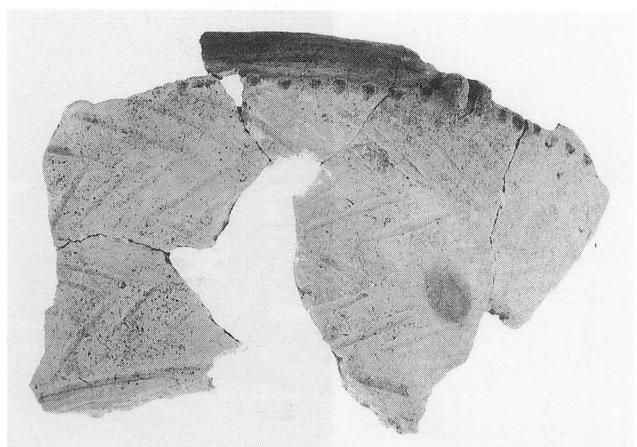
図版17 I区3号住出土土器



図版18 I区3号住出土土器（肩部）



図版19 I区4号住出土土器



図版20 I区4号住出土土器



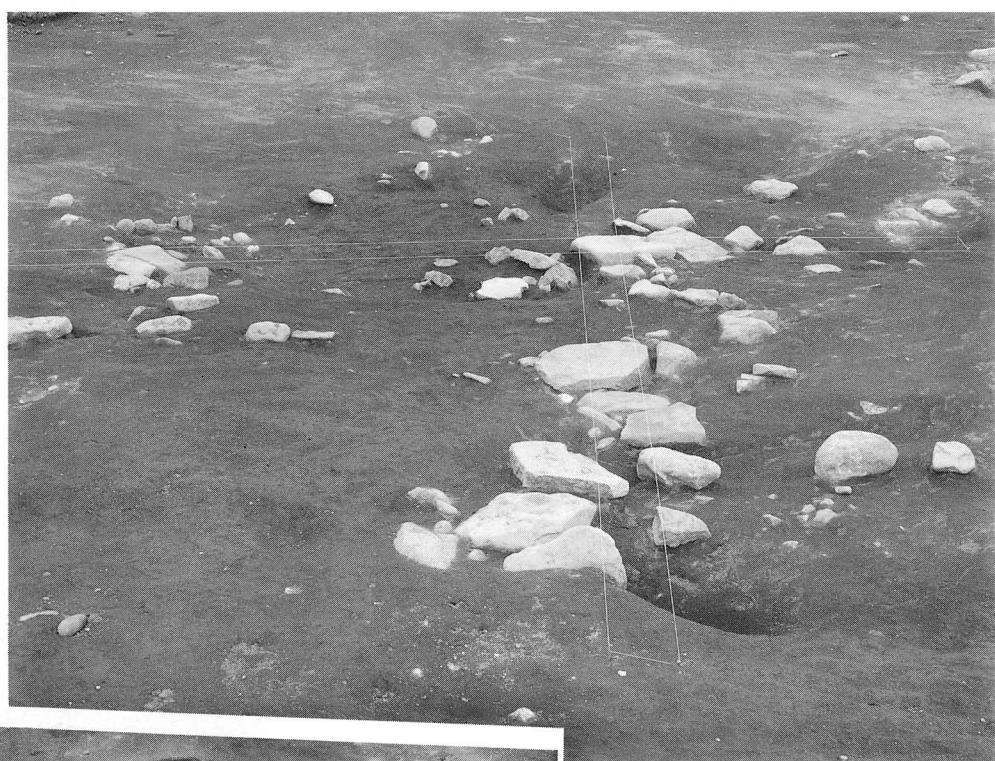
図版22 I区8号住出土土器



図版21 I区5号住出土土器



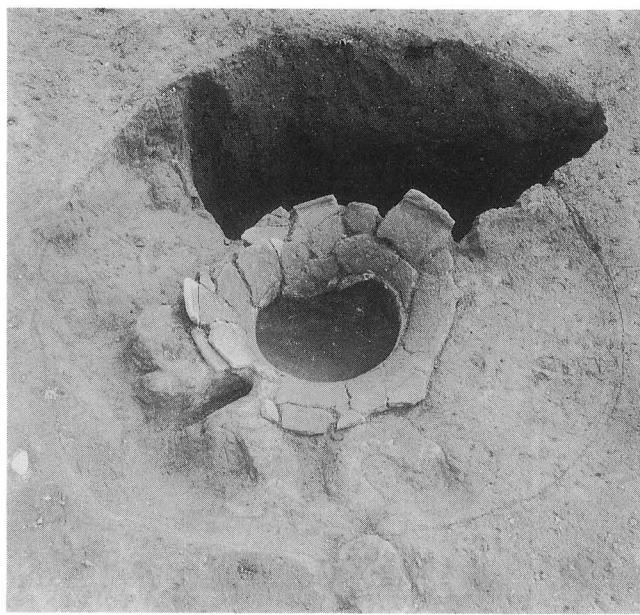
図版23 II区全景



図版24  
II区1号住居址



図版25  
II区1号住居址（完掘）



図版26 II区1号住居址 炉



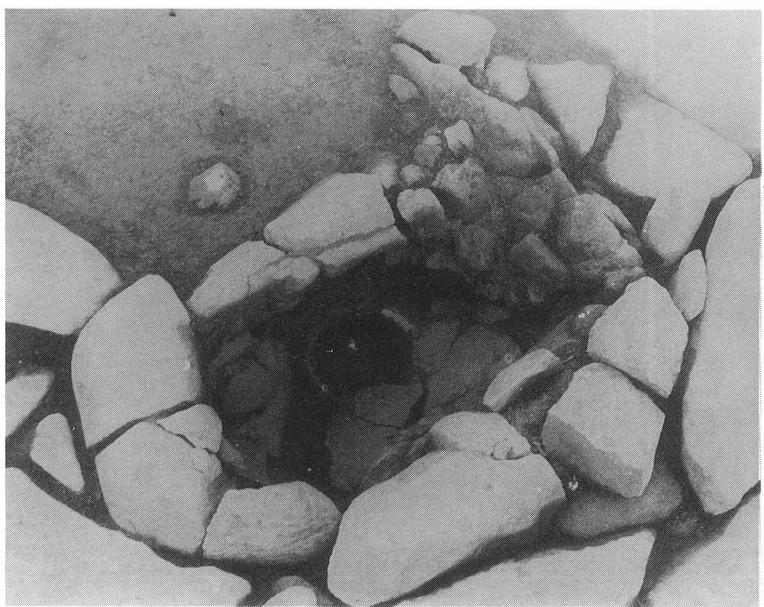
図版27 II区1号住居址 炉



図版28  
II区2号住居址



図版29  
II区2号住居址(完掘)



図版30 II区2号住居址 炉



図版31 II区2号住居址 炉



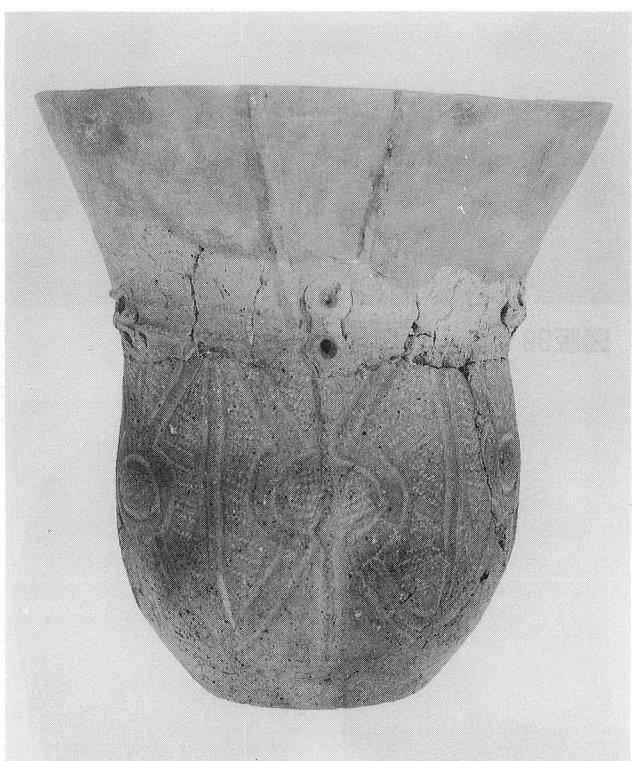
図版32 II区4号土坑



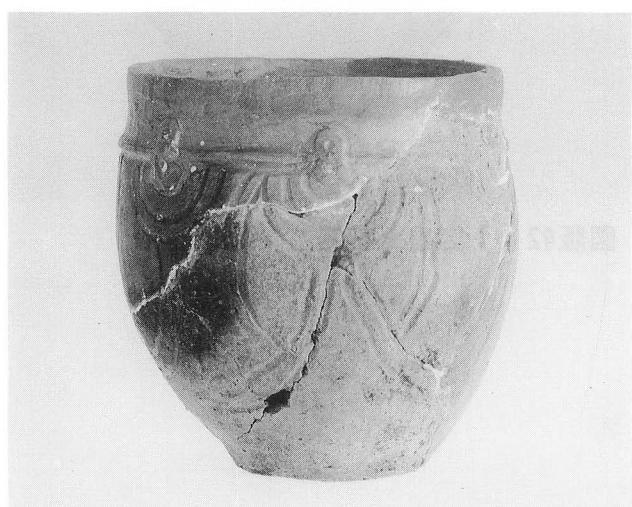
図版33  
II区1号住炉体土器



図版34 II区1号住出土土器



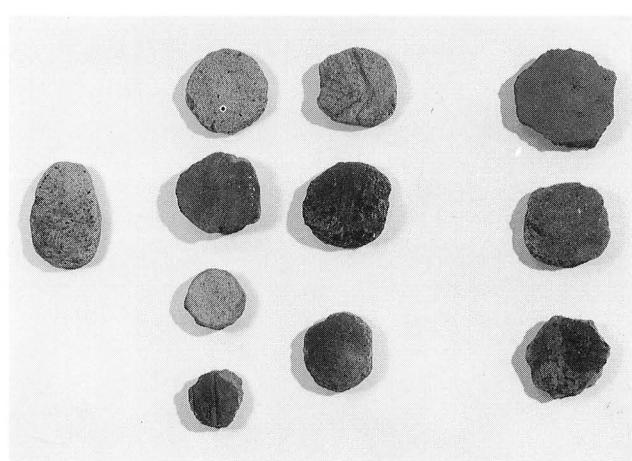
図版35 II区2号住炉体土器



図版36 II区C8グリッド出土土器



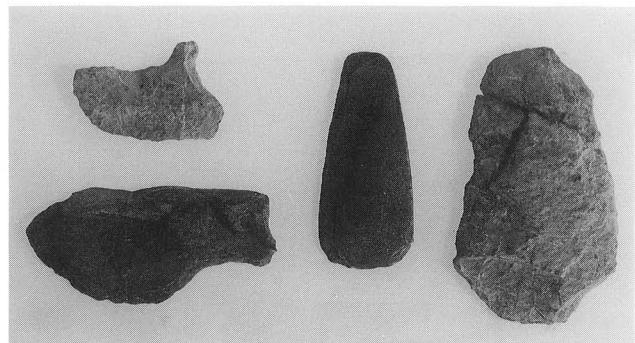
図版37 II区一括土器



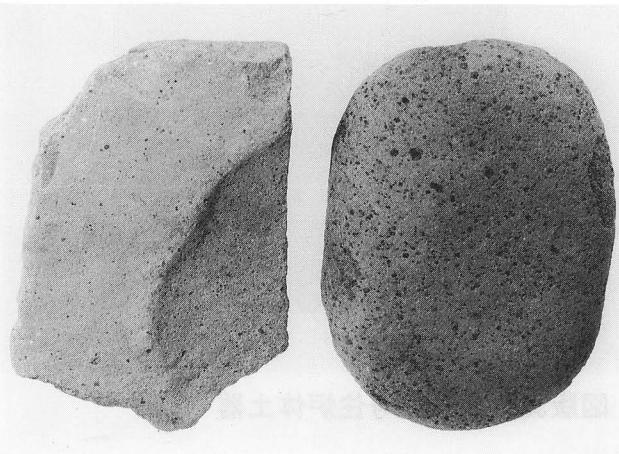
図版38 I・II区出土土製円盤 他



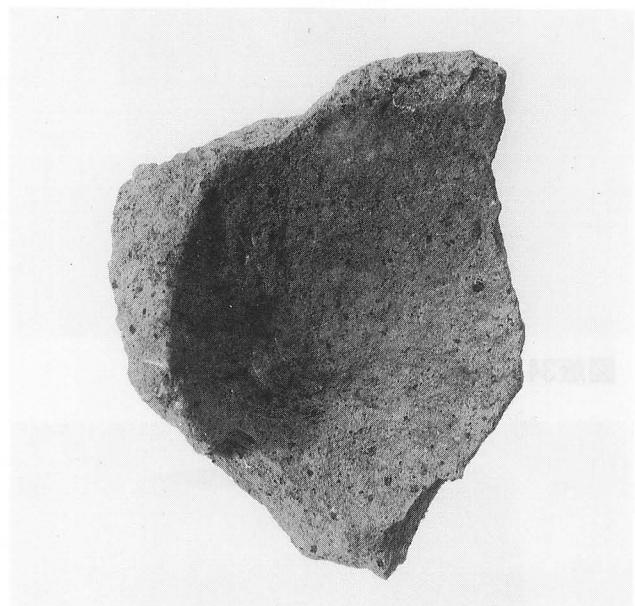
図版39 I・II区出土石器



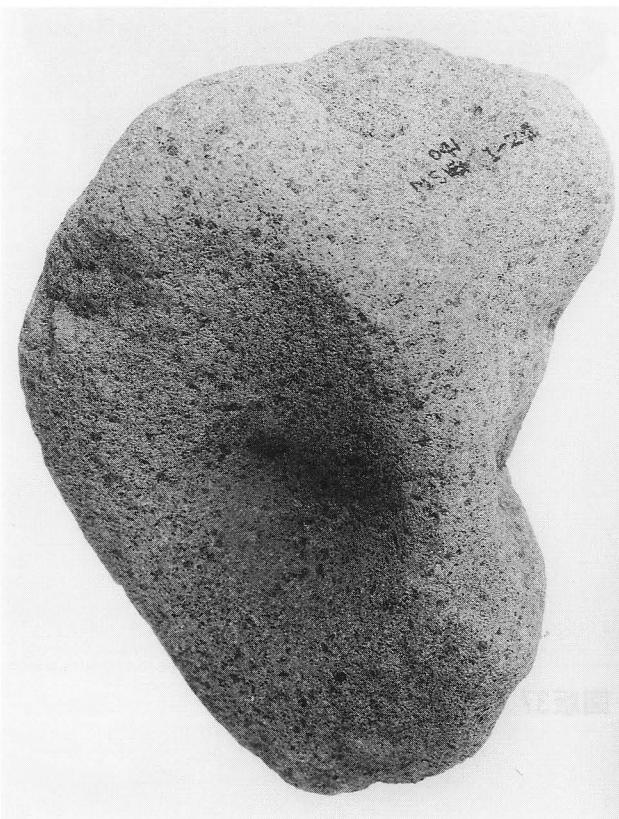
図版40 I区出土石器



図版41 I区出土石器



図版42 I区出土石器



図版43 I区出土石器

## 報告書概要

書名	別当西遺跡
副題	県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査
シリーズ	長坂町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
著者名	小宮山 隆
編集・発行機関	長坂町教育委員会
住所・電話	山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19 TEL0551-32-2111
印刷所	峡北印刷株式会社
発行日	1997年3月31日
遺跡所在地	山梨県北巨摩郡長坂町大八田2765ほか
25,000分の1地図名 位置・標高	谷戸 北緯35度50分41秒 東経138度22分58秒 770m
概要	主な時代 繩文時代中期・後期 中・近世
	主な遺構 繩文時代後期住居址10件 時代不明土坑 中近世墓
	主な遺物 堀之内1・2式土器、石器
	中世か近世の人骨1体と副葬銭
調査期間	1985年10月21日～12月13日および1986年7月1日～10月18日

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集

### 別当西遺跡

1997年3月25日 印刷

1997年3月31日 発行

編集・発行 長坂町教育委員会  
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19

TEL 0551-32-2111

印刷 峡北印刷株式会社  
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313  
TEL 0551-32-3245

L